

アホだら帝国

Empire of the Senseless

キャシー・アッカー 訳：山形浩生^{*1}+久霧亜子^{*2*3}

2001年12月31日

^{*1} <http://www.post1.com/home/hiyori13/>

^{*2} hisagiri@excite.co.jp

^{*3} ©1993 山形浩生+久霧亜子 本翻訳は委員会内部利用のためのものであり、委員会関係者以外の不適切な利用はこれを禁止するものなのである。

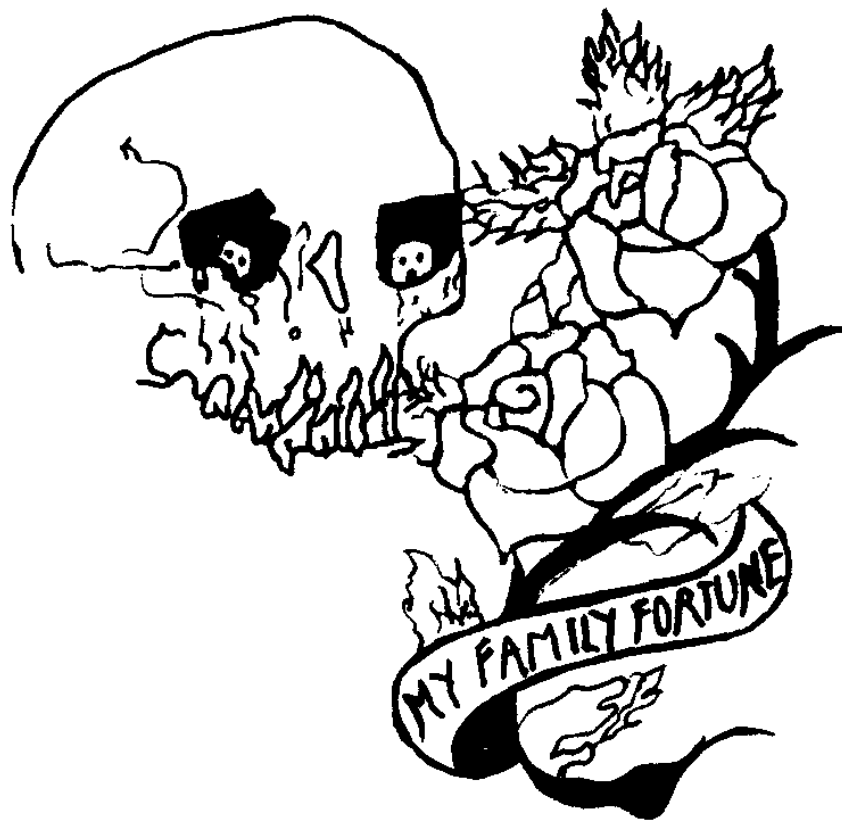
目次

第Ⅰ部 父親たちの世界への悲歌	3
第1章 親父に強姦される（ティヴァイを通じてアブホールが語る）	7
第2章 我らを死よりよみがえらせよ（ティヴァイ語る）	23
第3章 アラブ礼賛（アブホール語る）	47
第4章 ロマン主義（ティヴァイ語る）	63
第5章 アルジェリア人パリ占拠（アブホール語る）	65
第Ⅱ部 ひとりぼっち	87
第6章 こどもセックス（ティヴァイ語る）	91
第7章 犯罪性の始まり／朝の始まり（アブホール語る）	111
第8章 アルジェリア人化すること（ティヴァイ語る）	141
第Ⅲ部 海賊夜	173
第9章 わかったこと（ティヴァイ語る）	177
第10章 黒熱（アブホール語る）	213

本書をわが刺青師に捧げる。

第I部

父親たちの世界への悲歌



第1章

親父に強姦される（ティヴァイを通じてアブホールが語る）

相棒のアブホール（半分ロボットで半分黒人）の話だと、彼女の子供時代はこんなだった；

おばあちゃん

お父さんの母親。お父さんはおばあちゃんから生まれたの。そしておばあちゃんの生まれはドイツ系ユダヤ人一家で、すごい金持ちだった。

でも、おばあちゃんがまだガキの頃、ナチ直前の民族主義的な何やかやでってのは知ってると思うけど、そのせいでドイツを出なきゃならなかった。政治的亡命ってほどのもんじゃない。自発的な.....政治的亡命だな、やっぱ。ナチ直前のゲットーから逃げ出すために、一家はその財産を投げださなきゃならなかった。政治的逃亡の代償とコストが、財産だった。資本主義の代償とコストが、財産だった。でも、いまじゃ多国籍企業がある。ナナ（おばあちゃん）は一文無しで、両親とパリにやってきた。

貧乏な連中みんなと同じく、おばあちゃんの親も娘を街に立たせた。金を稼がせるため。ちょうどいい年頃だったし。十歳。十歳のおばあちゃんは美人だった。美人なのと同じくらい、子供だったのに強情で意地っぱりで、いっばしの人間になって、有意義な人生をおくろうなんて決意してた。一生売春を続ける気はなかった。歳をくうにつれて、ますます強情で意地っぱりになってった。

あたしも強情で意地っぱり。

男の子がいた。ティーンの労働者。おとなしいキツネみたい。目はほとんどくっつきそう、でっかい耳からベロンとした耳まで口がのびてる。この子は、おばあちゃんのマン毛なみに美しく、遠くからおばあちゃんを愛してって妄想を抱いてた。おばあちゃんが男から男へとはしごするのを見つめた。

しばらくして、つまり欲望が気恥ずかしさと距離を乗り越えるだけの時間が経って、というも時間だけはいつだってあるからだけど、この子とナナは手をしっかり握りあって街を歩いたんで、暑さの中で荒れた道路に汗が滴った。ナナが仕事で街を歩く合間、クソつたれな重労働時間の合間のこと。カール・マルクスによれば、この大陸がひらけたのは百年前のこと。どの大陸かって？ 資本主義的あるいは目的論的世界の果ての大陸。十九世紀の西洋で、この新大陸に敢えて来るような連中は、革命的階級闘争の武闘派だった。これを知ってる風紀取締官が街をパトロールしてて、ナナと、そのヒモである男の子を、どっちもテロリストだと思ったわけ。

アレクサンダー、つまり男の子は、ホントは無実だった。六歳ぐらいのとき、この子は当然ながら自分のひいひいひい.....ひいおじいちゃんがアレクサンダー大王だと夢想。ヘビが大好き。その母親ってのが、ほんとヘビみたいに陰険でどうしようもない母親。ことあるごとに思ったことをその場で何でも思いっきり大声でわめきたるといって、とことんナルシストの売女で、それに加えて、息子がいま死にましたとでも言わんばかりの、メソメソした求められてもいない愛情を山ほど注いで、子供をダメにした。二人の戦士が死ぬまで戦うみたいに、子供の方も死ぬまで母親を愛さなきゃならなかった。かれはこの戦争の中で育った。戦中で育ったかれ。育って、というより育つのを拒否して、完ぺきに疑ぐり深くて未成熟で、野獣みたいに開けっぴろげになった。それだもんでアレクサンダーは、目が常に禁私された若いキツネに似ていたってわけ。

自分以外の誰かを知覚できないのと同時にエラくロマンチックだったアレクサンダーは、おばあちゃんを憎むことで愛した。おばあちゃんを殺したいと願うことで愛した。つまり、売春というスラムから連れ出したいと願うことで。

ナナとこのガキは、しっかり手を握りながら、日に焼けた脳が焼け付くような街を歩いた。できることなら、お互い相手を殺したと思う。

先に手を下したのは、風紀取締のオマワリだった。ある晩、逮捕のノルマを果たして自

分のイカした仕事を続けようってんで、そいつはおばあちゃんをパクった。それと、おばあちゃんのヒモにちがいないと思ったモノ（ヤツじゃなくて）もパクった。丸ごとパクっちゃえ。カスども。貧困を市から一掃して、ふさわしい所にプチこめ。死に。

さて、ナナは働いてた。だもんで、ホントのヒモが牢屋から出してくれた。彼女が物事の秩序の中の自分の立場をわきまえるように、二十四時間たってからだった。物事の秩序なんてものがあればの話だけ。おばあちゃんは、絶対に何も忘れなかった。アレクサンダーは無邪気なせいだかビジネスマンじゃなかったせいだかで、保釈を積んでくれるヒモはいなかった。

アレクサンダーが無邪気だったのは、ほとんどただのバカの領域に入るほどホントに無知だったってこと。だって、本気で自分が無罪だって信じてたんだから。まあそうだったのかもしれないけど、世の中の見方が甘い。自分はヒモなんかじゃないし、法廷は公正なんだから、というわけで、弁護士に金を払わなかったんだ。弁護士は人の罪にたかって儲けるんだと信じてたから。裁判所は、無理矢理この子に法律扶助弁護士をつけた。けど、この扶助弁護士は裁判所に顔を出さなかった、というか、それを言うならどこにも顔を出したことはなかったんだけど。それで、アレクサンダーは無罪を自己主張できた。それから風紀取締官が、風紀取締官として物事の秩序を守るのに必要とされていることを何やら宣誓した。物事の秩序って、あるのかないのか知らないけど。

一切は、審理は、きっかり五分かかった。裁判官は検事に数字を言った。検事が裁判官に数字を言う。そのやりとりが五分。とうとう裁判官が数字を言った。怪物映画のエキストラ以上の存在であるべき男が、アレクサンダーを先導して（と言うと上品すぎるけど）ドアを数カ所ぬけ、空の独房に入れた。

数週間たって、独房から先導されて、通りに出された。別の通りで、質流れの切り詰めたショットガンを買って、ベルトに研いだ包丁を数本さして、もとの通りに戻った。全風紀取締官を相手にまわす気。風紀取締官を皆殺しにしようとした。十九歳。ロマン主義者。何とか四人殺した。オマワリどもは、かれを押さえつけるのに文字どおり壁に釘付けにしなけりゃならなかった。狂気がかれの力をそこまで強くしたわけ。

連中（法廷）はその子に死刑を宣告。

十九世紀の不在階級による経済的支配者に対する反乱の最後のヤツだった。ある意味で、娼婦だったときのナナは、その最後の原因だった。

警察の任務のなかに、自分たちに属さず自分たちの仲間でないものすべてに対して結託する、というのがあつた。オマワリにとって、任務は本能と同じ。ポリどもは、自分たちの仲間である裁判官が、少年をできるだけ速やかに死刑にするよう念を入れていた。

この子の処刑の夜の光、唯一の光は、ピンクの椅子からの光、緑紫で荒々しい肉の放つ光。犯罪と悲惨に憑かれた、荒廃地帯の全住人がその地点：電気椅子処刑の行われる監獄に集まつた。監獄の両側では、テレビに映るもの以外、何一つとして自分の目で見ることができないブルジョワ家庭が、目をしっかり閉じていた。「見ざる知らざる」と言つて。残りの二方向の彼方では、壁が神の目の真ん中までそびえていた。貧乏人のいるところに神さまがいればの話だけ。壁の下では、片輪や精神異常や孤独な連中が、でかい足をこすりあわせていた。

化け物みたいな黒馬にまたがつたオマワリが、荒廃地帯の連中を壁際に押し戻そうとした。でも、群衆はなめられて怒りすぎて、手のつけようがなかつた。黒い畜生も人間の畜生も、人間のクズどもの群れを突破できなかつた。

光が水だつた時、夜明けという水が全然ない時に、瞬間的な電気の波が水みたいに少年のからだを呪い過ぎた。群衆は津波のように怒号した。「殺された。おれたち殺された」

おまわりどもは、動く壁みたいにそいつらに襲いかかつた。すべては別物になる。血と変化の中で、あたしの幼年期が始まつた。

貧乏だつたので、ナナは社会なんかただの汚いインチキなのを学んだ。金持ちや死人(死は人生じゃないから)の汚いインチキになるまいと強情に意地を張つたナナは、自分の基準からすると成功した。服飾業界の一部を所有する金持ちと結婚したわけ。貧乏人が社会の犯罪や、経済的剥奪退廃原始性キチガイ性退屈性絶望性に答えるには、集合的犯罪や戦争によるしかない。集合的犯罪の一つが結婚だつたりする。

結婚とは何かをおばあちゃんから教わつたのと、おばあちゃんが好きなのとで、あたしは性的に他人を愛せないし、他の人間の愛を受け入れられないんだと思う。もし絶望してか絶望的にかでも他人を愛さずにいられなかつたって、あたしの知つてる愛は憎しみと組になつたヤツだけ。

パパ

ティヴァイ。人間のはじまりは、誰でも世界のはじまりのはず。その人にとっては、あたしにとってはそうだった。

まずね、ティヴァイ、動物はいなかったんだ。つまり、野生の動物は。そうだな、ネコとかイヌとか、人間とホントの動物の間あたりにいるようなのはいたっけ。ネコはすごくやせてて、ナイフみたいだった。肉食ナイフが通りを駆けずる。まるでデトロイト。人間が歩くと、みんな手足が血まみれになっちゃう。

通りと言っても一本しかなくて、海岸沿いにちょこっと舗装した通りが走っていて、その海岸もほとんどが港。

くだけた舗装の向こうには、やたらいろんな格好をしてるせいで人間なんかとても通りぬけられないほど生い茂ったヤブが、唯一の地面で死ぬほど硬い岩から生えてた。この岩の地面はときどきまっすぐそびえて山になり、そして空に向かって空になる。

岩が空になる。

最初の光は空気ですれが海の上に居座ってた。見るからに不気味。それとも人間のゲロに似た霞。それから水面のてっぺんが、それ自身が波だったり、まるで波があったりするみたいだけど、ホントは波なんかなくて、光になった。この水面のてっぺんは色がまだら。ほかに光はなかった。

岩が空になるのとはちがったけど、光は水の中に入ってった。

水のてっぺんは無価値な宝石。遠くのほうでそびえる岩は霞。みんな霞んで人間のゲロみたい。

この虫酸のはしるような世界のはじまりの次の日、岩は洞窟になった。洞窟は人がたくさん入れるくらいおっきかった。でかい黒い毛虫がいて、足だけ白。それが海底の底の穴に這いこむ。午後の日差しをいっぱいを受けて、ロバが眠りこんだ。そのでかい頭は、もっとでかい犬の頭が寝てる隣に寝てる。蜂は馬よりおっきかった。

パパはナナの一人っ子だった。だからチャホヤされた。ナナは、与えられるものは何でも息子にあげた。パパは、かわりに、母親が自分の子どもに頼るみたいにナナに頼った。二人は閉じた世界を作り上げていた。

パパが生まれた頃、ナナはすごく金持ちだった。パパは見事な男の子だった。髪は濃い黒で、目はでかい黒。世界に向かって外に目を開かずに、おばあちゃんに頼ったから、モラルがなかった。モラルってのはどんなものでも社会を前提とするからね。おばあちゃんはパパを愛してたから、何かを教える理由なんかはないと思ったし、パパが何かを学ぶべきだとも思わなかった。

こうやって道徳のかわりに(非政治的な意味で)アナーキーな未開状態を得たことで、パパの魅力が生まれた。その魅力のせいで、両親のみならず学校のクソ先公どもも一人残らず、パパの社会性と教育の完全な欠如に気がつかなかった。政治は、パパにとってはいつだって穴だった。親や教師は、子どもがお気に入りなのでぶネコを叱責するみたいな叱り方しかしなかった。パパは、自分が罰を受けても、それが実は他の人間とちがっているのほめられてるんだってわかってた。パパが無教育な十歳のとき、みんなに聖人扱いされてたおじいちゃんとナナが、いっしょに自殺。お互いに相手なしじゃ生きてけなかったんだ。

パパは思春期になりかけだった。六百万ドル相続。この二つ 金とセックス はお互い関係があったはず。だって、童貞を失ったその夜から、パパは愛人を見つけるのに全然苦労しなかったんだ。愛人ってのは、贈り物をあげる男や女のこと。愛をあげたり、必要とされたりする相手のことじゃない。パパは、パパだったから、誰も必要としなかった。たかがセックスのために、他人に縛られるなんて考えもしなかった。

歳をとると、見てくれはもっとよくなった。四十で結婚。一度、自分を増殖させたかったから。セックスは金と結びついてた。相手が結婚したのは、その母親がこの結婚を望んだから。パパの一家のほうで金持ちだったせい。十五歳。パパと同じく、母親を崇拜。

彼女が崇拜した唯一の男がパパだった。パパは彼女なんかどうでもよかった。あたしを生ませるのだけが結婚の目的だった。あたしのは気につけた。パパとともに。パパのものに。あたしを教育。パパと同じように教育された。

あたしはパパに似てた。匂いも似てた。教育も似てた。パパは増殖したってわけ。

この教育のおかげで、あたしは政治のことを何も知らないし新聞も絶対読まない。この教育のおかげでもめ事が好き。この教育のおかげで世の中のことを何も知らない。この教育のおかげであたしはまぬけ。

お母さんはこんなあたしが大嫌い。あたしもそれを感じた。あたしを殺したがってるの

を感じたけど、母親なんだからあたしを愛してるはずだとも感じた。

この吐き気みたいな混乱から、お母さんが愛してくれなくて冷たい、とパパに文句をいった。パパは、お母さんの目の前で、冷たく、母親なんだからお前を愛してるに決まってる、と告げた。パパににらみつけられてたから、まぬけな口を二度と開かないくらいの知恵は母親にもあった。

パパはあたしといろんなゲームをした。本物のフットボールの投げ方を教えてくれた。体操を教えてくれた。トレーニングさせて、完ぺきな肉体をつくらせた。

それから、決定的な技を教えてくれた。ただの遊びで手首にカミソリをあてる方法を見せてくれた。こうしてあたしは自然に触れ、理解する方法を学んだ。バラみたいな、巨大な赤い華を花開かせ、それが血を滴らせ、満開してその下の地面に滴り、あたしのからだはその後何時間も震える。もうこの先何も決断しなくていいという安堵。

パパはあたしにくつろぐ可能性をいっさい残してくれなかった。カミソリの刃みたく鋭く張りつめた精神状態で生きるよう、何も確実なものがないよう強制した。あるのは放浪だけ。あたしの心はどんどん傷ついてく。母親みたいに、くつろぎを受け入れる連中を軽蔑した。くつろぎなんて、道徳性と社会の規則。パパはあたしに苦痛の中で生きるよう教え、それ以外に何もなくて悟らせてくれた。この複雑さ故にあたしはパパを信じた。

それ以外では、あたしは無知。男と女は、ケツをすりあわせて赤ちゃんをつくるんだって本気で思った。それがどんな光景か、ホントは知らなかった。女がウンコするみたいなことをするんじゃないかって。そんなことしたり子供を生んだりするなんて、もちろん絶対やだった。絶対。ほしい唯一の人間はパパだった。

ある日パパは、話があると言った。

「話って何？」あたしは死ぬほどきき耳をたてた。神経はカミソリみたいに鋭く張りつめてた。

「お母さんを知ってるね？」

お母さんなんか知りたくなかった。

「あのお母さんは、お前の本当のお母さんじゃないんだよ」

どうでもいい。「本当のお母さんは誰なの？」どうでもよかったけどきいた。

「お前は知らない。マンコからひり出したお前を、すぐに病院に預けたんだ。ナナと私がそれを引き取った。お前に会おうとしたことはない。一度も」

「あたしたち、あの人のことは話さないし」と、今じゃもう偽物の母親が言う。

「話さないのは、あの女がキチガイだったからなんだよ、アブホール。わたしの愛したたった一人の女。お前は彼女とそっくり。お前を見ると、愛した女を思い出すんだよ、アブホーラ」

あの偽物の母親はもう存在しなかった。あたしは存在した。

父があたしを愛し、憎んだのは、そうせすにはいられなかったからなんだ。全面的な愛と嫌悪の混在が自然な恐怖を鎮め、あたしはますます父に魅かれた。あたしは彼の鏡。あたしは彼の騎士あたしは強く大胆で忠実で好奇心旺盛。愛されるためならなんでもする。ただし、その愛とかあこがれとかが、親密さと関係ない場合のみ。偽母親は、とっくにブルジョワ的サマーハウスに追放されてた。

いつセックスを始めたかって？ うん、セックスを始めたのはね、ティヴァイ、十四のとき。その歳だと、だれとセックスしてるかなんて気にもしなかった。あたしとセックスする男の子はだれでもあたしを愛してたから。セックスが愛。いまじゃそうは思わないから、もうセックスしてまわったりしないけどね。いまじゃあたしたち、あたしたちみんな、自分が知ってるって知ってるよりたくさんを知ってるって知ってる。人間の知識ってそういうもので、あたしはまだセックスって何なのかわかってなくて、あたしのセックスについて親がどう思ってるかもわからなかったけれど、セックスしてるから自分が悪いのは知ってた。だから、セックスしてる場所を見つかったら、パパに殺されちゃうのもわかってた。どうしてわかってたのかはわかんない。

風呂場で、男の子とセックスしてた。パパが帰ってきた。玄関が閉まるのが聞こえた。あたしはパッと服を着て、パパに駆け寄る。「わあ！ わあ！」キスする。ガキの頃の写真は一枚しかない。あたしは三歳。パパの太ももにしがみついている。「ジャック・ダニエルズ飲む？」

パパはアル中じゃなかった。夜にいつもマティーニ六杯飲んで、ママは、道徳家だったから、いつもパパをアル中よばわりしてた。

パパが「うん」と言うのはわかってた。パパは絶対にジャッキー・ダニエルズを断れないんだ。みんなホモの集団なんだから。パパが自分の寝室に引っこむと、あたしは玄関を開けてセックス相手の男の子をこっそり逃がした。

パリ式アパルトマンに、JDを持って戻った。それをパパに渡す。パパはパスタブで見

つけた男の子のネクタイを手にしていた。あたしのウソも信じなかった。自分のベッドの、いつもと同じところにすわった。パパは泣き出しそうだった。

「アブホール」

緊張で手足がこわばった。

「アブホール、お前が何をやってたかはわかってる」ウソはしょせん、どこまでいってもウソでしかない。たとえば、言語とか愛とか。母親がそれを教えてくれた。たとえば愛とか。「こういう男どもは、お前をまともに扱ってないんだぞ、アブホール」

連中があたしをまともに扱おうと、連中が何者だろうとあたしは一向に気にしてないなんて、どうして言えるだろう。

「アブホール、おまえの面倒をまっとうに見る男は、わたしだけなんだ」とパパは手をあたしの胸に手をのぼしながら、目に涙を浮かべている。

「パパ、なんでママとやんないの」

「歳をとりすぎてるんだよ。もうやらないんだ」パパの右手があたしの胸をさする。

「ママに電話する」電話でママに、彼女の夫があたしになんかしようとしてる、と言った。「セックス」ってことばは使わなかった。

ママは「パパを電話に出して」と言った。

「パパ、ママがお話したいって」

パパの右手があたしの乳首を離れたかは覚えてない。二人が電話で何を話したかは知らない。

受話器をテーブルに置くと、パパはチンポコをあたしにつっこんだ。生理のときくらいの出血しかなかった。

あたしの一部はかれを求め、別の一部はかれを殺してやりたかった。

だからそのアパルトマンに残って、その夜あたしは、目の前に広がる海を覆ってる血が光だという夢を見た。あたしが見えるための光。漁船は沈むか臭いか。

ドイツロマン派はあたしたちと同じ要塞を破壊しなきゃならなかった。ロゴス中心主義と観念論、神学、抑圧的な社会を支えるものすべて。所有の支柱。現象や現実性を、知覚可能で、したがってコントロール可能なものへと統合し、抑圧し、削減し、均質化する理性。その対象であるあたしたちは、もう安定して社会化可能だ。理性はいつも、政治的経済的な支配者に仕える。文学が撃つのはここ、この基盤、秩序のコンセプトと行動が自ら

を押しつける場なのだ。文学は、^{シニファイエ}記号内容のレベルで抑圧機械を糾弾し、切り裂くもの。バタイユのずっと前に、クライストやホフマン等はヘーゲル式観念論を試し、認識の有無を言わさぬ弁証法を試した。ドイツロマン派は厚かましく凶々しく消費と浪費の金管を吹き鳴らした。保守的なナルシズムを血まみれのマミソリで切り裂く。対象を、まっとうさという対象自身への隷属から引きはがす、人形であるお前を混乱させる。意味の糸を切る。コントロールするあらゆる鏡に唾する。

快楽は自由のなかでしか得られないのは知ってる。だってあたしは空を舞い、巨大な白と灰色の翼を、自分の視界の水平方向いっぱいまで広げていたから。孤独。空の中で。あたしはほとんど白かった。

下に向かって飛んだ。歓声をあげながら、水面に飛びこむみたいに急降下。でも飛びこまない。するとその海の冷気の中にまっすぐつつこむ。それは朝の光。食物をめざすみたいにまっすぐつつこむ。あたしのからだ水中に刻んだトンネルから、光の噴水が吹き上がる。

都市が目覚める。噴出する。その頭に天使がすわる。何もかも噴出。喜び歌う。あるのは栄光だけ。天使や幻視があるのを知ってるから、自由があるのも知ってる。それは本物の生きられた人生の中にしかない。平凡な拷問、あらゆる精神活動にとって代わる退屈、絶え間ない恐怖、夢が、幻視が見られなくなる域にまで達する夢の健忘症が何年も続いた挙げ句、ネズミの出そうな、疫病でいっぱいのゴミバケツのあるような、切り落とされた手足のある片隅へ何年も追いやられた挙げ句、死にほかならない生のあらゆる様式に追いやられた挙げ句。とつぜん、この都市の人々は自由になった。自由に実験できるようになった。

その人々は空に向かってこう言った。「さあ発狂鳥が勝った。もう犯罪者でも飛べるんだ」

でも(あたしの夢では)何千もの小さな魚が半透明でミミズみたいだった。それがちっちゃな鋭い歯をして、水からあたしめがけて跳ね上がる。その歯が薄い羽根を喰い破ってあたしの肉にかみつく。こっちからだ、その小さな歯は赤く見えた。赤ん坊の魚が一匹、すごく高く跳ねて、あたしのボロボロの歯を喰い破った。そしてあたしの舌の先も。魚がたくさん、飢えてあたしの翼を喰いちぎった。それなりに雄々しいあたしは、叫んで降下してかわして命を守ろうとした。誰も何も助けにきてくれなかった。助けなんて存在

しなかった。現実なんてあり得なかった。自分を助けるのは自分しかいなかった。自分で自分が助けられなかった。翼はボロ雑巾みたいにちぎれ、痛み、舌はちぎれてしゃべれない。飛べないし、泣けない。生きてもいけない。

心の中では絶叫する。心の、世界の中で、あたしは絶叫。どこかであたしは女で、髪は長くて、その髪が乾ききった土の上を漂う。もう何世紀も乾き、何も生えない土。ここには感情しかない。死ぬときあたしは絶叫。それから闇に落ちる。あらゆる生き物の休息は夜。都市は死んだ。都市はネズミだらけ。ネズミは退屈してる。人々は、退屈してるのと同じくらい孤独。

その夜から先、あたしはすごく自分に自信がなくなって、手あたりしだい憑かれたみたいにセックスしてまわった。この二重の物質的セックスとあたしの精神的欠落に派手に恋した男の子はたくさんいたから、パパはやきもち焼いた。「わたしが若者だったら、おまえとやった男はナイフで殺してやる」

「ナイフはきれいよ」

「わたしたちはどん底だ」パパは愛がどんなにあたしたちを落としてみたか知ってた。「わたしたちは、金持ちがツバするようなところからさえも風下にいる。どんなヤツでも、わたしたちの歡びを邪魔するためならなんだってするだろう。でも、連中みんな、自分たちの規則を後悔するだろう。あんな犯罪でしかない規則を。もし、万が一にも本当の正義がなくてももしわたしたちに救いがなくても。わたしはここに、わたしたちの愛またはいわゆる犯罪を聖別する、すべての神や力を召喚し、あの連中に地獄の苦しみを味あわせてやる。やつらの苦しみが、神の苦しみに匹敵しますように！」

「神さまがいるとは知らなかったわ」

あたしが、力によって、その力に屈服させられたこの化け物は、あたしがほかの男の子とセックスをするという考えすらも嫌っただけじゃなくて、それ以上に、ほかの人間、つまり社会が、自分があたしをとんでもないやりかたで縛りつけてるのに気がついて、理由をきくのをこわがってた。そいつら、つまり社会に、自分があたしを閉じ込めてる理由を与えなきゃならないのに気がついた。

パパが気にしたのは、自分が社会にどう思われてるかだけ。自分が本当に邪悪かどうかなんて気にしなかった。モラルがなかったから。こっそりやってる限り、何をしてもよかった。彼は道德家だった。社会が自分を邪悪だと思えばいさえなければよかった。

そこでだんだんと、あたしがかたわだと匂わせていった。それだから、自分は娘を一生とじこめておくのだってわけ。あたしは遺伝的な障害児。あたしは不気味。それと失読症で自閉症。かたわすぎて、誰もあたしを愛せない。

母親は、あたしがかたわじゃないのを知ってた。ほんとまぬけだった。だからパパは、あたしの終身刑について、母の分厚い頭蓋骨を貫くほどの唯一無二の理由を挙げた。パパはこう説明した。わたしは娘を結婚から守っているのだ、結婚は女にとって最悪の人生だから、と。

母は同意した。

お父さんは言った。「結婚は、女をメソメソした受動的で凶暴なウソつきに変え、一方の男はナルシストになる。どんな男女の間でも、結婚は、可能だったかもしれないあらゆるいい可能性をぶちこわす。つまり、女はロボットミーされたみたいになって、男はレーガン大統領を演じる大根役者みたいな行動をするようになる。わたしの人生でたった一つの目的はだね、お前の娘に、できる限り知的で自己実現を果たした人間になってもらうことなんだよ、妻や」

母は敢えて口を開いた。「ええ、男は不気味よ」

でも、夫が立ち去ると、あたしの母親、なんてことばは大っ嫌いだけど、彼女はいつものように、真実を受け入れられない状態に逆戻りしてしまった。だって真実は、ややこしいので、いつも苦痛だから。母は自分の母親に泣きついた。いつだって夫に何か言われると、すぐに自分の母親にすぎるんだから。

あたしの母親が泣きついているその時に、パパはあたしのマンコを嗅いでいた。「おれは最高の瞬間にたどりついたぞ！」と解説。もうパパが何の話をしてるのはよくわかった。「これこそ真実の瞬間!!!.....それっ、シコシコシコッ!!!.....手がもげちまう!!!.....もう自分のからだもわからない!!!.....それがどうした!!!.....お前はおれのもんだ!!!.....お前をつくったのがおれだ!!!.....お前とやってるんだ!!!.....快樂のためなら死んでもいい!!!.....ベロで派手になめくりまわす!!!.....感じるか!!!.....おれの腰まできてる!!!.....実の父親の真実の瞬間を見せてやる!!!.....全能の神さま!!!.....どうでもいい!!!.....お前が神だ!!!.....おれの娘よ! 崇拜するぞ!!!.....してみてください! お前を満足させられるのを見せてくれ!!!.....ほら、見てごらん、でっかいだろう、おれのしごく手の中

で！！！！……こいつにキスしろ！！！」

お父さんはまた解説した。「おれは神とやってるおれが神をつくった！！！！……クソつたれめ！！！！……おれが神を見るだけで神が満足するのはおれが神をいかせたから！！！」

神は天国でおれは天国でおれは死んで世界中が天国！！！！……顔面シャワーだ！！！」

あたしはその精液をなめた。

おばあちゃんは、お母さんとちがって、イカれてなかった。ヤクもやんなかった。ママが、夫（この世の何よりも愛してる人間）が、彼女の夫があたしを私設の牢屋に入れて密かに鞭打っていると泣きつくと、おばあちゃんは、それではあたしの福祉にとってよくないはずだと答えた。あたしの福祉のために行われていることではないはず。父があたしを鞭うってるのは、あたしのためを思ってではないはず。すうと彼は、自分のためにそうしてるはず。だって、いつでも誰かのためってのはあるから。誰もそれがなんだかよくわかってなかったけど。

お母さんのお母さんは高圧的なすべた婆だった。ふるえるからだをひきずって、タクシーでヨタヨタやってきた。「ちょっとバド、あんたがあたしの孫娘に売春させないってのはどういうことなの？　じゃなくて、結婚させないってのは？」おばあちゃんは、いつもことばがこんがらがってた。「お前、自分の娘をかたわにするつもり？　一応はこの一家の人間なのよ」

「結婚させられるだけの金がないんですよ、フローリー。結婚ってのは金がかかりすぎる」

「お金ならあたしが出します」とおばあちゃん。

「あなたが娘の売春の金を出してくれるなら、やらせましょう」I Q一六六のパパは言った。自分の義理の母親がこの世で一番、自分自身より安っぽいのを知ってたから。

「お金はあたしが出します」そしておばあちゃんは、ゼイゼイ息をきらせながら、「うち」と称するお高いホテルにたどりついたけど、むさ苦しい赤と黒の道化書斎に入る頃には何もかもわすれちゃった。中期記憶ってものがなかったから。

その一時は、お父さんとあたしはどこでもやりほうだいだった。町中のあらゆる便所で。

あたしといっしょじゃないとき、パパは淫売宿に住んでた。表向きは白黒ショーの小

屋ってことになった。白黒ショーの役者はほんとにセックスするわけじゃなかったの
で、この白黒ショーの合法性が裏で進行中の墮落の目くらましになったわけ。

手の届かない、空想的欲望とそれに伴う秘密のフェティシズムの対象を自慰的に見つめ
て性的な満足を得る、どうしようもない出歯亀たち。商業や、負けず劣らず些末な理由の
つめあわせのためのセックスの濫用。このいかがわしい茶番小屋の常連が、その気狂いま
がいにイカした変態行為の犠牲となるありさま。そして踊り子たちが荒れてくところ。ミ
ス・アメリカ式美人コンテストの伝統にのっとり、自分の肉体と精神をさらけ出さな
きゃいけないのと同時に、荒れてゆくのを、自分自身が荒れてくのをまのあたりにしな
きゃいけないがための荒廃。そうやって、やがてほかの対象たちのように、「ファン」た
ち……買い手たち……のあざけりの対象でしかなくなる。この白黒ショーはポルノ的覗き
とは何ら関係ない。覗きをするほど無感動な男なんて、最低に無恥なヤツだけ。ほとん
どの人間は、自分の見たもの、感じたもの、そしてこの見せ物や、「劇場」の外で売られて
るポルノ雑誌だの、特に小説だのの背後にある価値体系に対し、完ぺきな嫌悪を感じた。
言いかえると、セックスへの原初的な衝動が嫌悪すべき現象になった。

ここでは言語も墮落してた。パパが結婚制度からますます身を引いて、公認にセックス
の娯楽の深みへとズブズブはまってくにつれて、パパの話したことばも、ほとんどの一般
人が凡庸さのスタイルとして使うふつうの中立的で受け入れられてるジャーナリズム言語
から……性がパパの世界では大した価値を持たなかったんで、パパの言語はだんだん無に
冒されて、やがて意味を持たなくなった。意味のなさが言語的な衰退として現れた。

パパはあたしを犯しながら、あたしにこう言った。「Tradicional estilo de p...argentino.
Q...es e. mas j...de t...los e...dentro d. la c...es m...indicado p...entablar g...amistades
o t...tertulias a...es m...similar a. estilo t...:se c...la c...con l. palma de la m...y s.
apoyan l...cino d...se s...y s. baja l. mano, l...de e...manera y . el c...se h...hombre.
origin e. profundamente r...y s. han h...interesantes t...en l...jeroglificos e...y m...Es e
mas r...para d...de l...comidas p...no c...la de...」パパはプエルトリコ人になっちゃった。

ある夜、お母さんに愛人がいる夢を見た。お母さんは、セックスがどれほど強力でクセ
になるものかを知った。するとあたしは自由になった。

パパにこの夢を話した。パパはお母さんを軽蔑してたけど、あたしのことはすごく気に
かけてたから、お母さんに愛人を見つけてやることにした。

パパが選んだのは若いアナキストだった。この女蕩らしはダニとノミとケジラミを患っていたから、まっとうな女蕩らしになるのに金が要った。貧乏すぎて薬なんか全然買えなかったんだ。寄生虫どもはわんさかいて夜に彼は自分が若い女を攻撃してる夢を見た。右手がツメになって女の顔をひきむしる。赤むけの女の顔面からムシがのたくり出る。アナキストは、目をさまして、ひたすらカミソリ自殺したがった。お父さんがその子に、愛人を持つのは妻にとって喜び以外のなにものでもないと言明してやった。

アナキストは、お母さんをやるのに合意。

お母さんは、弱かったんで、誰でもいいから話し相手が欲しくて、アナキストにやらせた。すると淫乱症になった。一口味わっただけで、見さかいなく誰とでもセックスするようになった。

言語の退廃の理由の一つ。女蕩らし。

お父さんはギリシャに行った。ある夜、イサカ島の沖合いのヨットですわっていた。ユリシーズが真実を求めて一人で旅だった島。夜の水、空、最寄りの町のわずかな建物は、さまざまに黒かった。ひたすら黒。お父さんはヨットの反対側に人影を見て、ピストルを取り出し、撃った。影は倒れて、死んで、デッキに横たわった。法廷で、お父さんは自分の殺した相手の若者に見覚えはないと言った。

水を覆う血は光。漁船は臭かった。

喜びは自由の中でしか得られない。法廷によると、お父さんは殺人を犯した。お母さんもあたしも、どうしようもなかった。手紙を書いて、パパは気狂いなんです、と哀願した。ママはパパが気狂いだと思った。あたしは自分が気狂いの家系から生まれたと思うとこわくてこわくて、手紙を書くのをやめた。やめずにいられなかった。あたしの血の中の狂気が、あたしを毒してた。大人になったら、あたしは一生月に吠えて暮らすんだ。

一家の財産のおかげで、パパは精神異常ってことでキチガイ病院半年ですむことになった。するとパパは、あたしがどうなったか知りたくてたまらず、精神病院から脱走した。

知らない通りをさまよい、タクシーを探した。武装した若者六人がパパを止めて、からだを探して金を探した。パパはそいつらのナイフをひったくり、三人始末したところでほかのやつらに刺された。そいつらは、一文無しで血まみれのパパを歩道に残して去った。

絶望的に、パパは祈りはじめた。でも、パパには祈る相手が誰もいなかった。一方でお母さんが自殺した。パパを憎んでたけど、パパなしでは生きられなかったから。パパの引

き締めがなくなったとたん、お母さんは財産をすべて使い果たした。貧困に直面して、かわりに睡眠薬をのんだ。

あたしはクリスマスの日、お母さんの死体を死体置き場を見た。初めて見た死体だった。そこにいたオマワリ二人は、さっさと帰ってあったかいクリスマスの食事にありつきたくてウズウズしてた。身柄を確認しろ、と言う。

あたしも自殺したかった。お母さんが自殺したみたいに。これがあたしの狂気。

一方でパパは、自分のやったすべてを認識した。自分が性欲のために破壊したすべてを理解した。泣き出した。頬を涙が二粒流れ落ちた。自分のたった一つの持ち物であるヨットへと駆け出した。動いた。船出。血まみれの海へ。その後、二度と彼を見た人はいない。パパがどうなったかは知らない。あたしは自殺するより生き続けることに決めた。

第2章

我らを死よりよみがえらせよ（ティヴァイ語る）

雄

物心ついて以来ずっと海賊になりたかった。物心ついて以来ずっと大洋を航海したかった。なにかを求めるようになって以来ずっと、他の人間を屠殺して血が流れるのが見たかった。

自分で自分を知る限りでは、自分の欲求の出所も理由も知らない。

海賊には暗い夜だった。

船上の全員を冬が襲った。その始まりが死だったある夜、海賊三人が、デブのすべたかブタみたいに、ウンコずわりして話し合った。それは、死みたいに、ほかの何物にもならずそのまま続いた。前回の戦いで捕まえた一人の人間が、帆柱の根元に縛りつけられ、さるぐつわをかまされてた。三人の議論はどんどんこんがらがってきて、それからこんがらがりすぎてしまった。少なくともまだ耳は聞こえた被害者にとっては、海賊たちはどんどん酔っぱらってきていた。まだ子供だった被害者のところへ、デブがヨタヨタきてまた強姦。

あとの二人に同様にされても、彼女は抗わなかった。

「あとでおまえも犯^やりたいんだけど」と最初の海賊が二人目の海賊に言った。

「やだ。オレはあんたより年下だから、子供ができちゃう可能性があるもん。自分は安全だからって……」

「肛門でやれば大丈夫。尻の穴なら安全だから」

「いいからよせって。とにかく妊娠したくないんだったら！」

「おれを信じてないな。信用してない……」

「当然」と二人目。「あんたなんか信用できるわけねえだろ。ちがうか？ 妊娠しようもないあんたが、おれを妊娠させないって信じられると思うか？」

三人目の海賊はズボンをはいたままイッてしまった。丸いしみが見える。

「おまえを犯^やっても子供はできないようにするってのが信じられないの？」

女みたいに自分の処女性を守り慣れてたから、一番若い海賊は条件付きで折れた。「ほつといてくれたら、今晚犯^やらせたげる。でも、誰にも言わないって約束してくれなきゃダメだよ」

デブっちょは「約束する」と答えた。そいつにとって、このことばは何ら意味を持たなかったから。「だけど、今すぐおれに股をおっぴろげるんだ。さもないとお前がさっきからツラつかせてる、その細い引き金、細いチンポコがほしくてたまんねえから、お前の頭を切り落としてでもモノにしてやる。内輪でも、やっぱり、海賊は殺気だってるんだ。「でも、お前が死んだときおれがイッたら、お前の好きなコトしていいよ」

デブっちょがつっこみ、グラインドしてゆすってチンポコをすごくキツくはめたのは、その貫き難いほどの尻の穴。チビが悶えるまでゆすってグラインド。それから強くさしこむ。速いピストン。背骨躍動。てっぺんの穴に宝石の滴。尻の穴が無理矢理開通。ガキはきちがいみたく金切り声。しばらくして、ガキはデブっちょが止まったのを感じる。数分してから、デブっちょにイッたのかきいてみる。

「だまれ。だ・ま・れ」。チンポコがはずれると、そのてっぺんの穴に精液の最後の一滴がまとわりつく。

「さ、こんどはオレの好きにする番だ」とつぶやくがはやいか、たったいま犯されてた海賊は、きつく縛り上げられた強姦済みの子供の上にかがみこむ。手を娘の胸にのばす。切り刻んだカキに似た精液を肛門からしたたらせつつ、乳房に触れた。

海賊三人は、子供に背を向けた。仕事に戻る。仕事はネスルのアーモンドチョコ、キャドベリーのチョコフレーク、トティーリヤチップスのバーベキュー味、グリーン・バナ、バニラトフィー、ルコザード、マーズ・バーなんかにかじりついて喰いあさること。安物ビールの缶を次々にガブ飲み。

船長、つまりおれが、甲板をやってきた。「なんというブタの群れ！ 諸君らのすてきな寄宿学校の先生方は、栄養について教えてくれなかったのかね？ もっとも寄宿学校のことには誰も口にしたことがないけど」

「この船は小学校じゃねえや」とデブっちょは、コカコーラのビール割を浴びながらわめいた。「このクソは海賊船だぜ。そいでこれは博愛主義的な集団なんだ」

「そうかい」とティヴァイ船長、つまりおれは、せせら笑った。「すると私は、優しい社会主義政府で、お前たちが昼間っからすわりこんで日焼けするのに金を出すってわけだ。お前らが幸せなら、こっちの経済ファシズムに反抗することもなかりうってんでな」

デブっちょは、無謀にも反論。「冗談じゃねえぞ。この船はおれたちの博愛主義的集団であり、おれたちの安全な場所であり、ゆりかごなんだよ。おれたちに慈善で募金を送れるだけの金があるもんだから、外の連中は、つまりこのおれたち以外の連中は、みんな敵だ。

この船に住んでるから、おれたちは孤児だろ。孤児ってのはまぬけなバカなんだよ。デブっちょはてんかん持ちだった。「バカなもんで、おれたちはまっとうな（一元化された）社会でどう振る舞えばいいのかわかんなくて、理由もなしに人を殺すわけ」

「歴史的に見ても、一番凶暴な殺人者の中には、貴族だっていたら？」とこのチンピラは付け足した。

「お前たち、みんな親はいるのか？ 概していい家庭の出身か？」仰天して、おれは船員にたずねた。

「『概して』なんて一般論に答えられるもんかよ。つまり、質問なんかにゃ答えられねえよ。デブっちょは明らかに育ちが優れていた。

「お前」と連中の中でいちばん若い、したがっていちばん弱いやつを指さした。「お前には、個人的に、親がいるか？」

「オレには親なんかねえよ」

「おれも」

「あいつもか？」

「だれも」

「全然」

「もうだれも何も持ってない」

「だったらお前らはだれから生まれてきて、どこから来たんだ？」こんなカスどもにごまかされるおれじゃない。

「それはこっちの問題だろ。おれたち一人一人の」

イギリス人の海賊が答えた。「そういう個人的な事柄について話すのには慣れてないんですよ。こっちがだれをどうしようと、あんたの知ったことですかい」

このイギリス人には同意せざるを得なかった。自分の船員を信用する必要があったからだ。もっとも、そいつらについては何も知らなかったけど。ただ、こいつらはこの世のカスじゃないのはわかった。こいつらは、いまやカスマミれの海のカスなのだ。

そして翌日、曖昧宿がツメをのばしてる岸边近くに船が停泊したとき、おれは脱走した。丘のてっぺんで雄鶏が鳴いた。オンドリの赤いトサカが、倒れた草の間から飛び出してきた。警備員とその重い銃が降りてきた。おれは隠れた。

建物のあるところへ、でっかい木が赤い屋根の上に露をまいた。恐怖でのどがカラカラ。手は腹をおおって守ろうとする。

太陽が……

恐怖がのどを分解して……

呆然と……

目をさました。もはや自由じゃなかった。ことばがおれの目をさました。「ぼくだよ、ザイントリルスだ。今日の午後に、参謀本部がきみを尋問することになってる。まあ、がんばれよ。ぼくはアイト・サアーダに向けて出発するから」

おれは口をきかなかった。

ザイントリルスはうずくまって鉄格子を見た。見えたのは、床に大の字に横たわる若者で、身動きもせず、脚を開き、腹のごく一部に麻のジャケットをかけているだけ。「ティヴァイ、聞いてないの？ それとも耳が聞こえなくなったの？」

内部の感覚しか開けないほどの絶望を感じた。刈り上げ頭をシラミがかじる。ザイントリルスはこの肉体を内部に運びこみ、手とひざをすりむく。

深い川で消防士と衛兵がからだを洗っていた。腐りかけの風呂屋のまわりで泥がきらめく。

自分の頭蓋骨や、バリカンのつけた軽い傷を愛しそうになでた。「剃ってくれ。肉まで」優しい髪切り屋は、上官が立ち去るとすぐに額にまっすぐなカミソリをあてた。「ティ

ヴァイ、無理だよ。そんなに残ってないもの」

戻ってきた上官は、囚人を見て、ツルツルに剃りあげるよう命じた。

おれはニッコリして頭を下げ、床屋はふるえ、肉が頭と耳の端からそぎ落とされ、上官は赤い革ブーツでおれのはだしの足を踏みつぶす。髪切りは、おれの首にゆわえたりネンで指を拭く。そして散髪に戻った。おれの髪がハエみたいに落ちる。切られると、髪は耳をなで、鼻の穴をなで、まつ毛にからみ、ママ、ぼくは美容院に行って髪を一房切ってもらっただけのつもりだったのに、ぼくのマッチ棒、ママはソファーにすわってる、ママがぼくのひざをつかんで、ママが雑誌を手にとる、ママがそれをひざにつけてる。ヴェロニクが鏡の後ろ。ヴェロニクは胸を張って立つ。すると美容師が彼女を押し下げてヴェロニクは合図をしてそれが鏡に反射。切られた髪が、ぼくのシャツに隠した蜂の巣をかすめる。ママは立ち去るとき財布を忘れる。そして雨の中を川沿いに歩く。ぼくは夢をみてるの？ 美容師はあたりを見回し、ぼくのズボンの熱いネルに手を置き、手がぼくの腿を這い登り、ぼくはヴェロニクを見る、ぼくを強姦してるのは彼女で、ぼくにさわってるのも彼女で、ママは雨の中で泣き叫んで。港湾労働者は有刺鉄線の束をぬかるみの中にひきずってる。ママは濡れたスカーフをかみしめる。床屋の手がぼくの股間に沈む。ぼくはもう一度それを押しつける。もう片方の手が、ぼくのおなかをまさぐり降りる。ぼくのおなかの洗面器にあたるけど、それは何とかバランスを保つ。床屋の手は、露骨に脈打つぼくのおなかの上に堂々と居すわる。床屋がふりかえる。

ドアの下で、ママが靴を乾かしてる。そして部屋に入る。夜がきた。ママの濡れた手が、ぼくの乾いた手を握って、ぼくは肘かけ椅子に沈む。ママが床屋に支払う。床屋はぼくをドアに押しつける。

ママがぼくを引きずり出し、暗い通りを下って川に出る。港湾労働者たちが、炭の粉でおこした火にできるだけ近づいて、暖を取ろうとしてる。ママはぼくを抱きかかえて、もっと濃い霧に飛び込む。防波堤を越えて、岩場を走る。雪がその岩場をおおう。もがいて逃げようとするけど、ママはぼくを腰に押し込んで。だから手にかみつくと、通りがかりのタグボートが、左舷の明るい消えたランプで黒いギトギトの海に光を投げながら、河口を下っていく。ママは身投げして、……、手にかみついて、ママの腕がゆるむと、ぼくは岩場を転がり、岩場を転げ落ちて、ママは海に落ちる（お母さんの自殺）、泡がママを見つけて姿を示す、ぼくは身をよじって岩場に向かう。そこへ波がママの頭を運ぶ。ママ

の手のひらが、なめらかでちょっとギトつく岩をなでる。タグボートは反対方向に曲がって、そこで止まる。船員が棧橋に駆け出す。そして小型艇のとも綱を解くと、船に駆け戻る。そして数人で防波堤のほうに漕いでくる。雲の切れ目に星が見える。ぼくの頭は離れた小さな水たまりに浸かっている。船員が防波堤に跳び移り、強い腕でぼくを抱き上げて、ぼくのおでこと左のほっぺたをつつつく。ほかの船員たちはオールを置いて、お母さんのからだを持ち上げると、大きな平岩に運ぶ。船員はぼくをベッドに寝かせる。テントの支柱のてっぺんのところで、カンテラがかろうじてバランスを保っている。血が手のひらに集まる。船員たちは電話をかけ、ぼくの手を握り、ぼくの顔をおおった。軍のポスターや紙幣を引き裂いて……

ジープやトラックが引きあげると、今度は朝日でおでこを傷つけられたぼくは、ズックの上着をかぶった。あとははだか。船員たちが自分用に持ってたブドウ絞り機と便所にたかるハエが、網戸の端っこにかじりついてた。突進して、ぼくのちんぼこを跳び越え、付け根の毛のかたまりにもぐり、ちぢれた毛をかきまわしたので、ぼくは身悶えして股を開いた。朝のそよ風が、太ももと性器のかたまりにひんやりと当たる。ハエたちが盗んだのは……

再びヴェロニクは、髪を後ろにはねあげた。ぼくはその髪をつかんで、顔をうずめる。ヴェロニクはふりむいて、ぼくの頭を手取る。

「ザイントリルスに庭でディープ・キスされたの」

ぼくは彼女のウェストをおもむろに抱きしめると、その口をむさぼる。もがく彼女のももが、ぼくの腹にこすれてあたる。彼女はぼくの腕を押し戻そうとしているけれど、ぼくはまぶたにキスする。彼女の手が、ぼくの背中をウェストをなでる。まぶたは泥の味。汗がぼくのオープン・シャツを濡らす。

彼女が笑い出すと、ぼくは彼女を肘かけ椅子に組み敷く。

風がテーブルの本をバタンと閉じる。ぼくの手は、彼女の服の下をもぐらみたいにまさぐる。乳首の上で。ふるえる。手の下で乳首が熱い。残りの乳首に触れる。残りの手で服を脱がせる。そして乳首の先っぽをしゃぶる。「あたしも」と彼女は喘ぐ。胸でぼくの口を押しつぶす。大きく開いた窓は公園を見おろす。ザイントリルスが、銃を立てて濃い草の中を歩く。

「そうかたくなるなよ」とおれに言う。「ぼくの足の骨が折れるじゃないか」

おれは彼ににじり寄る。遠くでサイレンの染み。

今日では海賊はいない、よっておれは海賊になれない。もう海賊船がないんだから、海賊になれないのはわかってる。

一五七四年には海賊船があった。

その頃、ヨーロッパでの合法的あるいは国家的な戦争が完全に休止したので、フランスとドイツの兵士は消えるか非合法化するしかなかった。非合法化、つまり海賊。国家的および宗教的な思考や規制から自由なので、私掠船の唯一の限界は経済的なものだった。海賊行為は、私企業のもっともアナーキーな形態。

つまり、この頃、ある意味では、近代経済世界が生まれたわけ。アナーキーな時代、誰もが誰にでも、何にでもなれた時代、海賊こと自由企業家があらゆるところへどんどん進出……

殺し屋が殺し屋を殺す……

人間は生まれつき善良である。これが、国家的あるいは民族的な戦争の時代における自由主義者や、あるいは平和主義者の信条。

でも一五七四年、通常の、秩序ある戦争、つまりは国家の戦争、つまりそこに参加した国家が、権威主義的な領土拡張によってのみ得られた巨額の金をつぎこんで維持した戦争が停止したとき。船員、兵士、貧乏人、公民権を剥奪された者、性的に異なる者たちは陸でも海でも非合法戦争を遂行。

戦争は、万物を生ませる親ではないにしても、万物を生ませる喜びの希望なのは確か。金持ちにとっても、特に貧乏人にとっても。戦争、われらの性の鏡。

海賊になったかもしれない、なりたかったおれ。なれなかったおれ。放浪者冒険者戦士連合軍総指揮官など、あらゆる存在として自分の精神、想像の中に住むおれ。おれは、今の時代にあって無でしかない。

ナイトメアシティ
悪夢都市

1. 淋病に起因する^{サイコシス}精神病

おれの人生は、淋病持ちだったときに始まった。十八才。というか、淋病が終わったときに始まったと言おうか。この手のものが終わるならの話だけど。このやっかいな病気の

おかげで、おれはまるっきり役たたずになっちまった。生きるための必須行動でさえ、他人に頼る羽目になったんだから。

いまのおれは、役たたずなだけじゃない。人間は一人残らず役たたずだし、ほとんどの人間つまり金持ちでない連中は、自分が役たたずだと思いこんでる。いまのおれは、肉体的にも精神的にもイカレてる。唯一の望みが自殺することだから。

^{チバ}千葉に住んでる。目下のマンコは、あんたなんか自殺しちゃえばいいんだけど、もっとすてきなことに、ほかのみんながあんたを殺したがつてるから、といつも言う。

「具体的にだれがおれを殺したがつてるって？ なぜそうやっておれを落ちこませたがるんだ。おれだって、連中が殺したがつてることくらい知ってる」

「なんだっていつももめごとを起こしたがるのよ。男」

「おれのヤクの売人^{サプライヤー}か？」不安定な安定性を維持するのにクスリがいるのだ。

「男があんたを殺したがつてるの」おれがオルガズムに達した直後、女はそう告げた。それで、わかった。

特に何も言わなかった。それが主義。人間のことばなんて、時間つぶし以外の何かだなんて思わないこと。逃げ出したかもしれない、逃げ出したかったおれだが、どこも逃げ場がなかったので、唯一の安全は^{サイコシス}精神病とクスリだった。

こっちをまるで気にとめず、おれのことをまるで死人みたいに、女はしゃべり続けた。「知覚は哲学上の問題となった」

親密になりすぎたもんで、マンコはおれの思考が読めるようになっていた。でも、おれには答があった。そこで言ってやる。「ほかのいろんなものとまったく同じように自分自身を知覚するのは可能だ。ストリッパーはそうやって自分のからだを知覚してる」

「あんたに^{ノーマル}正常な人のことなんかわかるわけじゃない」だれかが、たぶん彼女自身だろうが、ジャンプスーツのそでを肩まで破っていた。彼女の目の色は、爪の色と、彼女の別の部分の色と同じだった。

「淋病になるまではおれだって^{ノーマル}正常だった」とおれは思った。「でも、^{ノーマル}正常な暮らしの記憶なんて、いまじゃただの夢。おれの生業は子供の^{ニューロシス}強迫症。若い頃は、何度も何度も、自分が尾行されてる夢をみた。尾行しているやつらは悪者だ。おれはやつらから逃げ出せるほど速く走れなかった」

特にその夢を女に説明しなかった。ただのマンコだし。かわりに彼女の人格断片をし

ばらく見つめた。冰山か宇宙みたいに砕け、女のアイデンティティのかけらが漂い去り、やがて彼女のむきだしの欲望、中毒である強迫観念が見えた。こわかった。逃げ出したかった。

「やつらがおれを殺したがってるって、なぜわかる」

「鳥さんが教えてくれたの」

おれの見おろした頭には、からだがなかった。ショックをうけつつ、それが頭なのがあった。というか、思いだした。何事もいつかは終わる。

眠りが安静は、かつての愛と同じような重要性を持つ。精神病になる前、眠るのをやめる前、夢はだれかがおれを殺そうとしていると告げた。おれのマンコが、だれかがおれを殺そうとしていると告げる。

なじみのバーにつくと、カウンターの向こうの男は、だれもおれを殺そうとなんかしてないと言う。眠らない限り、何も悪いことなんか起きないそうだ。

ボスはおれに危害を加えるつもりはなかった。

バーテンはさらに、おれがハメてた女がボスにおれのスケルチを頼んだと教えてくれた。中毒だったので、金がいったからだ。RAM というのがだれにせよ おれの死に対して金を払うのだ。やつらはおれを追ってる。

おんなをやると、みんな必ず、なぜおれが他人を信用しないのかききたがる……

「どうして信用してくれないの？」と股を広げてみせながら。

おれは紳士なもんで、唾棄すべきところでも唾を吐かない。自分のボスがただけ知らなくても。

アパートに戻った。べつのマンコがおれにルガーを向けていた。やつらはおれを追ってる。こうして現実化した以上、憎悪の現実性を信じることができる。

「あんた、だれだ？ RAMか？ おれを追ってたやつらの仲間か？ これであんたがだれだかわかった」と相手に告げた。

彼女は、だれかの下で働いたりしてないと言う。自分は自由な女で、名前はアブホール。マンコのせりふを信じる義理もあるまいに。

もし現実ってのが、おれのつくる現実の絵じゃないなら、お手上げだ。

2. 自殺

母さんはいつも病氣。ぼくのための時間なんてない。乳母は、ぼくのももにピンを突き刺してめんどろを見てくれる。ぼくがあんまり泣いたもんで、それ以来、目の前から姿を消してしまった。ぼくが泣いたのは彼女を愛してたからで、それは彼女がぼくを愛してくれた唯一の人物、つまりマンコだったから。

それで、ママはまだぼくに自分と同じく死んでもらいたがってたから、新しい乳母をつけた。今度のはイギリス人だったので、まっとうで、(ぼくには)まるで感情を見せなかった。魔女にちがいないと思ったほど。

大人になるにつれて、雌には三通りあるのを学んだ。死んだのと、馬鹿なのと、邪悪なのと。

ぼくの人生は別離の人生だった。忘れない。まだ成長期の頃から、人生はやたらと退屈で不愉快で、生きてたってしょうがない気がした。悪い子になったり悪魔崇拝をしたりするのは、なにかを信じてる子どもだけ。でもぼくはいい子だった。何事もイギリス人乳母の言いつけどおりにした。

乳母はアル中だった。子どものぼくには理解できなかった。彼女が最初の乳母を嫌ってるのかも理解できなかった。乳母ちゃまを嫌ってた乳母が嫌いだった。子供のやりかたで乳母を嫌ってた。つまり、徹底的に。火が燃えるように。ぼくが正気だった時のほとんどは、乳母のからだの一部を燃やす妄想にふけてた。

こんな考え方がいけないのは知ってた。自分の精神がとことん歪んで変態的なのもわかってた。もし大人になるというのが自己認識を獲得するプロセスなんだとすると、大人としての自分の最初の認識は、拷問して殺したいという欲望だった。ぼくは嫌った。だからやつらは乳母をクビにした。第一ラウンドは勝ったわけ。でも、まだ自分が殺したいのはわかってた(忘れてなかった)。

おれはその悪い子だった頃の記憶を失っていない。

短いTシャツと足首までのソックスをはいているので、はだかの美女は子供みただ。黒い革製のヘビが、彼女の背中にじっと横たわる。女はベッドのどちら側かへ寝返りをうとうとするけれど、できない。隔たったベッドの柱に鉄製の輪でつながれた、すごく太い黒の革ベルトが、彼女のピンクの手首をそれぞれゆわえているからだ。姉さんは、おれの

実の母親と父親の娘だった。姉さんは、ロボットミーを描いた絵を見せておれをいじめた。そういう光景を見ると、ひどい悪夢を見た。おれは感じやすかったから。

ほかの人たちは、本質的に邪悪なんだろうか、もしそうなら、なぜだろう。おれは強迫観念じみてるまでこれを自問した。

答を出せなかったので、連中の教えてくれた神に祈った。神とは、知られ得ぬ者。姉さんはとことん意地悪で、おれの悪夢はとことんすさまじかったから、造物主なんてものがあるなら、そいつはとにかくビョーキのブタ野郎に違いない。おれは神に「ビョーキブタ」「下司野郎」と名付けた。道に犬のウンコを見つけるたびに、神をおもった。その意味は見当もつかなかった。

かたわ、乞食、不具、脳なし女やその他の貧乏人の場合、そういう生きたクソどもを道で見かけるたびに、引きつけを起こすまいと思いきり息を吸い込んで、引きつけを起こしかけた。

何をしろと命令されるのだけは我慢できなかった。乞食とか、無価値なやつらがみんなしておれが何者かを告げていたので、おれはそいつら一人残らず我慢できなかった。乞食を殺したかった。自分の本当の拷問者である姉さんを殺すのは恐すぎたから。

私はここに、我が絶大なる合理的思考過程を使用して、我が狂気と人間社会的に受け入れがたい行動に対する説明を見いだそう。

いつか姉さんは、後ろを歩いている人々に向かってこう言った。「あたしのかわいい尻尾を見て」。またある時は、友人の画家が描いてくれた自分の絵が気に入っている言った。それは彼女が小さいペニスを持っている絵だったから。

おれは、姉さんの巨大な帽子が、二人で車に乗っているときに吹き飛ばされて、すごく嬉しかった。

姉さんとぼくが部屋で遊んでいる。二人は四歳から六歳の間。姉さんの手は、小さすぎてほとんど存在していないようなぼくのちんぼこをつかむ。存在しないものを姉さんはしごく。そして、ぼくを愛してくれるのでぼくも愛してる乳母が、それと同じことを庭師のちんぼこでやるのだと告げる。

姉さんはおてんばで、IQがすごく高かった。ぼくよりも。IQは高くても、高いIQと、女として愛されたいという欲望とが、一つのからだに共存できるとは考えられなかった。よって自分のからは化け物じみているはずだから、両親の家を出るのを拒んだ。姉

さんは、自分が誰だかわかってた。自分はフリークだから、愛されないのだ。誰かに愛されるには、そいつに金を払わなきゃならなかったし、実際にそうした、というか両親がそうした。この雇われ伴侶が愛してくれたので、姉さんも雇われ伴侶を愛したけれど、同時に雇われ伴侶は経済的理由のためだけに彼女を愛し、したがって彼女が愛されがたいことを証明していたので、姉さんは雇われ伴侶を嫌悪していた。二十一歳のときに姉さんが自殺したとき、ぼくは泣かなかった。

3. 人間の生命絶滅の彼方

アブホールに、何がほしいのか聞いた。こいつもおれのアイデンティティを破壊したいんだらうか。

「あたし、雇われてんの。その仕事主んどこへ、あんたを連れてく」。女の言うことを理解したかのように、盲目的に、おれは女の後について部屋を出た。愛も盲目だと世間では言うけれど、おれにとって愛は苦痛と等しかった。

女のボスの名はシュレーバー。「会うのはこれが初めてだな、え？」と彼。

「ああ」

「少スキみのことを話してあげよう」とうとうおれも自分のことが少しはわかるのか。「きみには自殺性向と呼べるほどのマゾヒズムがあるし、実際に肉体的な損傷がある。きみはそれが不治のものだと思ってるね。少なくとも神経上とホルモン上の損傷は、おそらく不治だらうが」

「ああ」

男は口をはさむ暇を与えなかった。「きみは、よくある原因で子供時代に……分裂させられた。わたしは心理学的解釈にはいささかも興味はない。あんなのは時代遅れた。ただ、一つだけ言いたい」

おれは口をはさんだ。「知るか。心理学の話だけじゃない。おれ自身のことだって」続ける。「あんたはデブでみっともないよ、でもね、旦那、おれは死んでるんだ。心理学とおれの心理はもうペアになってんの」世の中には死体がうようよしてる。「あんたから聞きたいのは、あんたがおれに何を求めているかってことだけだ」。そうでなきゃ、一人になりたかった。

だって、おれにとって、欲望と苦痛は同じだから。

彼女が欲しくはなかった。手に入らないので欲しがらなかった。不感症が生き方だった。はかない欲望なんて現象が、とるに足るかどうかもわからなかった。心理学はここじゃパァじゃない。彼女を手元においとくことにしたのは、そうするしかなかったからで、それは彼女がおれが彼女のものにちがいないと言ったからだ。

現実っていつもこんなに未知なわけ？

ボスの本名はシュレーバーだと友人に教わった。シュレーバー博士。それなりに正直ではあるそうだ。ボスというものなりに。仕事分の金を払うという意味では。それでおれは、前のボスに手切れ金を払って消されないようにできた。もちろん金なんてない。金は、力のない連中が抱えて歩く、薄っぺらな紙切れ。そいつらが金で何をするのかは知らない。おれはヤクが必要。

デブはマンコの前でおれに告げた。「きみの神経系とホルモン系の損傷は、きみを急速に墮落させている。AIDS以上の速度でね。ものの数カ月できみはモンゴロイドになり、ロボットミーされたよりも馬鹿になる。きみの中で腐れている憎悪のせいだ。ただし、わたしがきみの血流にある酵素^{エンチーム}を注射すれば別だ。その後、完全な血液交換^{トランスフュージョン}を受けさせてやる。この酵素^{エンチーム}、きみの救世主、目の上のタンコブを手に入れるためには、わたしの望み通りに動いてくれなくてはならない」

「何が望みだ？」

「その時まで、わたしの望み通りに動いてくれることだ」

問題は、そいつのほう約束を守るつもりがあるのかどうか、こっちには知りようがないってことだった。愛してると思ってたマンコにきくわけにもいかない。知りようもない領域でのたくってるから、記憶もあてにならない。おれの記憶は、かつてのおれの欲望みたく役たたずだった。

翌日、川の前^{チク}の路上のゴミため、おれの旧ボスが自らの手で、目の前でおれを密告ったスベタののどをかき切った。新鮮な使用人のために場所をあける実用的な手段として、女を屠殺したわけ。資本主義は、新しい領域か新鮮な血を必要とする。

おれが見たのは：頸動脈から飛び散る血。

おれにはクスリが必要だった。

ながいこと無感情だった。おれのせりふが誰にとってもまったく無意味なのを確信しきっていたから、どうしてもしゃべらざるを得ない状況になるまで、何もしゃべらないよ

うになっていた。世の中と自分との関係が無なのを確信しきっていたから、何に対して「YES」と言おうがどうでもよかった。若い頃は浅はかさや些末さがおれの武器だった。今は、言われたことは何でもやる。おれはもはやおれじゃなかったから。つまり、行動しているおれはやつらのもので、知るおれや、かつて知っていたおれとは分離しているのだ。いろんな目がおれを見ていた。

つまり、性欲を持つおれは、高いIQや理解力とは何の関係もなかった。昔は高かったIQだけど、それが腐敗感や窒息したいま、欲求のほうが思ったより有能で賢いように思えた。おれが自分を見いだしたのはその地点、そのどん底でのことだった。

知ることができるのは人間の別れについてだけだと思った。知ることができないのが、もちろん死だけ。さらに、欲求するおれと知覚する目とは、お互い何の関係もないのに一方で同じからだ おれのからだ に同居していた。おれは不可能だった。それどころか、おれは病気よりひどかった。でもシュレーバーは、これを解決する方法があるかもしれないという希望を与えてくれた。病気を根絶する希望。シュレーバーは、おれの血すべてを変えられる酵素エンチームを持っている。

既知のものがすべて病気だと、未知は嫌でもましに見えてくる。おれ、というのがだれにせよ、おれはシュレーバーにつきあうしかなかった。おれ、というのがだれにせよ、おれは構造物コンストラクトになろうとしていた。

空は血へと暗転。血の色へと。医者のところを後にして家に、おれが家と称している、今まででいちばんましなところへ帰ると、アプホールが先についてて、いわばおれを待っていた。眠って。はだかで。彼女を見る。ひざから股下数ミリのところまで透明ギプスが走り、肌には青と紫と緑の貼布でまだらになって、あざみみたいだがそうではなかった。爪と指、つま先の黒点が、かげって金色になった。それぞれ色も形もちがう膚板ダームが、右ひじと、右の太ももの血管に沿ってきれいに列をなしていた。膚板連結装置トランスダーマルユニットが、からだから離れたところにあって、ギプスの下の入力電極トロードに細い赤のリード線コンストラクトでつながっている。構造物。

想像のなかで、おれたちはいつもハメまくってた。黒いムチが彼女の背中を這いまわる。赤いチンポコがそそりたつ。

「あいつのバックに誰がいんのかは知らない」アプホールは振り向いておれと向き合う。目をさましたらしい。「ただ、あたしらはあいつを『ボス』と呼んでるし、あいつはどっかから命令を受けるだけ。あたしやあんたと同じに」

「だれかが何か知ってる。それがだれにせよ、その知ってるやつが、大ボスにちがいない」

アブホールは片手をついて身を起こした。キスしたみたいに甘い匂いを漂わせていたけれど、おれの知る限りではキスなど行われなかった。「だからさあ、あたしが知ってるのは、ある^{コンストラクト}構造物を見つけなきゃならないってことだけだよ。それと、そいつの名前がキャシーだってことと」

「いい名前だ。何者？」

「関係ないね」

「関係ないなら、そいつは死んでるんだ。そのマンコは死んでるんだろう」おれのダジャレも死んでた。「だからさあ、あたしが知ってるのは、ある^{コンストラクト}構造物を見つけなきゃならないってことだけだよ。それ以外はなんにも」

「おれたちには理解する能力があって、同時に何も理解してない」と答えた。なにやら^{コンストラクト}構造物をみつけなきゃならないのは理解してた。

女はまた言った。「あたしが知ってるのは、ある^{コンストラクト}構造物を見つけなきゃならないってことだけだよ。どっかで。それ以外はどうでもいい」。赤と黒に明滅するカーソルが、戸口の外郭から忍び込んできた。エンドルフィン^{アナログ}類似体さえ十分なら、アブホールは足を切り落とされても血塗れの脚で歩ける。「あんたもどうでもいいし、現実もどうでもいい」空港から延びる道は、やがて道の集まりになったが、死ぬほどまっすぐで、都市の開いたからだについた、きれいな切り傷みたいだった。貧困がピンク色に脈動。霧と灰色のたちこめる中、あちこちでマシンが滑空して通り過ぎるのをながめた。後に「^{カウンシル}評議会住宅」と呼ばれる集合住宅ができた。まだらのアルミ壁、れんがに開いた不規則な穴から小便するためにつきだした、看守のチンポコ、ベニヤと波うち鉄板の壁がもっと。運のいい貧乏人は遊び場を手にいれた。おれはアブホールが^{コンストラクト}構造物なのを思い出す。

想像は死んだ稼業であり、死者に任された唯一の稼業だった。

非現実であるような世界では、テロリズムもなかなか有意義なのだ。

現代のテロリストは、一九三〇年代ルンペンの、いわば新^{バージョン}版、現代^{バージョン}版だ。このあらゆる仕事を嫌う者たち（というのも、仕事とは完全にコントロールされている状態だったから。コントロールする側は働かなかった）は、可能な範囲でその時代の通信回線に乗っ取った。それと同じように、このテロリストたちは、現在のメディアがテロ行為を、

そのテロが本来持っていた社会政治的な意図から徹底的に切り離してしまうものであることを認識しているため、ニヒリストというよりフェティシストだった。こいつらとは昔いっしょに仕事をしたことがあるけれど、どんな仕事かはちょっと思い出せない。

医者に会って二日後、気がつくところのレコード屋の戸をたたいている。テロリズムはいつも一つの開始点ではある。というのも、みんなどこかで始めるしかないから。少年が、というか骸骨が、まるで肉を喰ったとでもいうように、とがった赤い歯をして、ひびが入ってバラバラに崩れかけたドアを開けた。おれは半ば這いずるようにすきまを通り、半ば歩いてドアをぬけ、中規模のレコード店の売り場に入った。ディスクが碎けて床に散らばっている。セルロイドの尼さんが、手で目玉を動かしてるみたいに目を水平に動かした。にこちゃんは片手骨で指さしておれを長椅子にすわらせたが、そこには冷却屋^{フリーザー}が鎮座していた。

「アメリカの国際企業の中でも、入り乱れた支社を設立するのがもっとも盛んだったのは、化学系あるいは石油化学系、油脂や石油抽出産業の分野の企業でした。これらの国際企業は、国際規模で生産を組み合わせ、プラントの垂直統合あるいは水平統合して組織化し、そうすることで最終的には全生産サイクルをコントロールするように……」

「興味ないね」

「デュポンとユニオン・カーバイド、グッドイヤーとユニロイヤル、エクソンとカイザーなどを例に見ますと、ある海外企業への仕掛かり品供給を、別の海外企業から行うように大規模に組織化を行い、原料供給源へのアクセスを獲得し……」

「だまれ。ある構造物^{コンストラクト}のコードを探さなきゃならない。お前たちがCIA図書館に押し込もうとしてるのは知ってる。コードもそこにある」

にこちゃんはもう一度おれに微笑んだ。そうだ、おれたちはかつて恋人同士だったんだ。忘れてた。いまでもまだそうだ。彼の意地の悪さと、恐怖 だれかがいるだけで恐怖は引き起こされる の顔面にくらいつく以外なにもできない無能さとが、おれの奥深い意地の悪さと反りが合うという点で。実際に《モダンズ》と仕事をしたことはなかったけど、それをいうなら、おれが他人と働くのはどうしても必要な場合だけだ。何も変わりゃしない。

事実として、《モダンズ》はしゃべりすぎた。彼らの話、あるいは修辞^{レトリック}は、垂れ流しだ。だれが聞いていようと気にしない。飛び回りながらレコード盤にウンコを垂れる小さ

なオウムに、何でもうれしそうに話すのだった。《モダズ》は、自分たちの仕事であるテロ行為に対しても同じ接しかたをしていた。つまり、全然気にしない。単に楽しくやりたいだけ。オウムみたいにすぐ飽きる。

この作戦で、《モダズ》は金網チキンワイヤ経由で図書館所在地のワシントンに到達しようと大喜びで計画を練っていた。金網チキンワイヤとは人工衛星と無線による回線だ。発狂したガキどもみたいに、このテロリストたちはマンハッタン（人の不在）という緑紫黄色の懐中電灯フラッシュライトを駆け抜けた。深夜のガラスにふれるたびにエポキシを使用して動きを制御。それから、黒人ゲッターの上空。

金持ち用にとっておかれたマンハッタンを除き、東海岸の全都心部は、路上か地下で暮らす野犬や野猫、黒人の群れに明け渡されていた。残った白人はゲイだけ。

図書館はアメリカ情報局の中央制御ネットワークであり、そのメモリであり、その知覚力と理解力を構成するものだ（文化の政治利用に関する仮説だ）。主流メインラインと呼ばれていた。文化に基づく知覚は麻薬であり、社会政治的支配の必需品だ。

時代にちょっと遅れていた《モダズ》は、破壊したがるだけだった。一方、おれのコンストラクト（マンコ）とおれはコードを見つける必要があった。《モダニスト》たちは誤情報を主流メインラインの内部ビデオに注入しようと計画。誤情報によって、全電画面ビデオ・スクリーンが二十秒間、点滅したが、その周期は構造物コンストラクトや他の監視ロボットに痙攣発作を引き起こすものだった。淡緑アパートが深夜エメラルド色に点滅。同時に主流メインラインの内部ビデオの部が、倍速で、軍があるエンドモルフィンを使用したと告げる。目下実験中のこの薬物は、人間の骨格成長速度を一〇〇〇パーセントの過剰致死にまで放り出す。売春窟の小部屋の赤い灯がハイチの血走った目を点滅。

二分後に、侵入メッセージの終了とともに主システムが白色雑音の中で潰れれば、テロリストは喜ぶ。

テロリストたちは喜んだ。

白色雑音ホワイトノイズの中、マップが来て皆殺しにかかった。丸く回転する車がソナー波を放出。あるソナーの振動数は、車に乗っていない者の目をつぶした。それ以外の振動数は、効果的に感覚を失わせて手足を切断。それ以外の振動数は口や花や目から血を噴き出させる。ピルはピンク。四肢切断のほうがましと思った貸し部屋住まいの家族が道に飛び出す。黒人ゲッターの外では、二百キロトンの核弾頭つき海中巡航ミサイルシークルーズが、イルカみたいに泳い

でた。ALCMを延長パイロンに最低十二本、機内ロータリー・ランチャーに八本は積んだB-52爆撃機が車にまたがり、その車のトランクにはさまざまな神経ガスが納められ、それが定められた間隔で都市の大気中ににじみ出す。「ホーミング・アンド・キル」兵器が、赤外線センサで生き物の存在を検出するたびに、全長二メートルの金属の肋骨を展開。金属の重りが金属の肋骨に点在。昆虫のような生き物は動き続けた。貧乏人を殺すマップの顔は、人間の顔面だった。そして政治家の顔は死。道に横たわる少年は目玉が飛び出し、腕の皮膚がなくなり、空中の大量の酸性雨のため微笑を浮かべている。赤と黒のアーデコ調階段がビルのマゼンタ色のでっぺんから下り、ビルとビルを橋渡ししている。

図書館の研究部門の中で、^{コンストラクト}構造物マンコは^{ビデオ・ネットワーク}電 視 網のその部分に^{サブ}下位プログラムを挿入。この^{サブ}下位プログラムは^{コマンド}管理中核命令にある変更を加え、女が^{コード}暗号を読み取れるようにする。

^{コード}暗号はこうだった：意味を始末しろ。お前の精神は、お前を喰ってきた悪夢。こんどはお前が精神を喰え。

この^{コード}暗号がおれを人間、^{コンストラクト}構造物に導き、そいつがおれをクスリに導いてくれる、か、少なくとも許してくれる。

死愛

気絶したのか、悪夢を見てた。もはや何も感じない人だらけになった世界の悪夢。いつもどおり、自分の仕事をこなしているいや、いつもより上手にこなしている。もはや何も感じないから。その夢の中では、自分の全存在が凍りつかされたような感じで、まるで死んだみたいだった。

マンコはけがをした。目がさめてそれに気がついた。テロリストが言った。でも、六千マイクロプログラムのエンドルフィン^{アナログ}類似体が、金槌のようにその苦痛に襲いかかり、それを砕こうとしていた。女の背中が、ネコの背中みたいに弓なりになって、けいれんしていた。暖かいピンクの波がももを走っている。

図書館の廊下には、死体が二メートル積み上がっている。最新の死体は、黒んぼ通りで首を撃ち抜かれた。が、まだ死んではいない……

気絶したのか、悪夢を見てた。死んだ姉さんへ、どうにかして天国の夢をご覧。いまと

なっちは、それだけがぼくたちを生かしてくれる。あなたの口の甘さ。自分をいかせてるヤツへの憎悪で傷つかずにいくこと。もうあなたは存在しないでいなくていいんだ。

ねえ、姉さん。目が消えた。太陽が。だれも見えてない。もうやりたいことができる。叫んだり。ももの厚みをからかったり。微笑して悶々としたり。世界が消えてから。何も無い。だれも他人を見ないんだ。

世界が消えてから。客体よりも、主体が客体と出会う時と場所である時間の中に、あのうっ積が存在している。あなたのももの、このなまめかしさ。マンコ汁と精液からたちのぼる匂い。唯一の鏡がゆがんでるから。すべては秘密。ぼくの腕に戻ってきて。あなたなしだと、ぼくは無に等しい。

冬だ。冬は死の時。姉さんが死んだ今となっちは、ぼくに生はない。われらを死からよみがえらせよ。

完全破壊。

でもだれもアブホールには似てない。みんなおれをを密告^{チク}った雌に似てる。ボス、テロリストの指導者、テロリストども　みんなおれを密告^{チク}った雌の顔をしてやがる。冬^{ウィンター}の死だった。それともわれら死者の冬。おれの得た暗号^{コード}は「W I N T E R」と読めた。死^{ウィンター}の冬^冬だった。

おれは安全だった。外にいた。「冬^{ウィンター}の意味は？」と《モダンズ》テロリストの指導者にきいた。

「冬^{ウィンター}は、A I の認識記号なんだ。このA I っていうのは、ベルンにあるのがこいつの金なわけ。金は一種の市民権。アメリカ人は世界市民だ」

「おれのボスは冬^{ウィンター}のことを知ってるのか」

「医者は死について知ってるかい？」とテロリストは答えた。「ちょっと話を聞かせてやろう。」

ある故買屋がいてだね、そいつはパワリーとハウストン通りの角で品を流してた。その角を曲がったところには浮浪者バーがあって、片目のアイルランド人がこう歌ってた。

どんな生き物もその名前や姿を知らない力が引き下ろしたのは……

そしてだれかにねだれるだけのウィスキーに溺れて泣く。人生は酒の無駄だ」

おれは死んだマンコたちのことを考えた。「人生は無駄だよ」

「故買屋の中には、ゴムのジャケットや軍の革ジャンみたいな本物の服を売ってるやつもいた。そんなに保守的でない（少なくとも商売面で）ほかの故買屋は、フロントガラスをみがく浮浪者に似て、半合成四肢とかいった芸術作品を扱ってた。角からはずれたところで商売してたママは、美術商だったんだ。

さて、昔は浮浪者してた別の美術商がいて、そいつは今では金持ちがたくさん金を出さガラクタを扱ってた。そいつの名はパパ。

パパはママのここに来て、頼みごとをした。ニューヨークの美術商は内輪の暗号コードを持ってる。

パパはママにこう言った。『わたしの最新の……調達人……』

『盗っ人だろ』

『わたしの最新の盗っ人は、ネズ公って通り名のこそ泥だった。こそ泥ってのは非常に知的だから、ネズ公は美術品が好みだった。こそ泥は美術品にメロメロだから。そいつの最新の美術品、あたらしいめっけもの、言うなればねこば品は、頭だった。それもただの頭じゃない。死んでる頭で死は真珠細工だった。美術品としての価値の高さは、人間性は、見ればわかったけれど、わたしはねず公にそいつを始末するように言った。最近は厳しいご時世なもんで頭なんか無価値だから

その時、頭きちがいの知り合いのことを思いだした。頭きちがいで金持ち。金払いもいい。

わたしはねず公から人頭を買った。緻密で詳細な調査の結果、この頭にはA I、すなわちアメリカ情報局の商標がついてた。A M Aを支援してる連中だ。軍をのぞけば、アメリカ医療産業は西半球で最大の合法的利益をあげてる。頭が死んでるわけだ。

これに気がついた瞬間、グーラグ矯正収容所が入ってきた。ブロック、うすらバカ、セメントのかたまり、ロボトミー前頭葉切除済みモンゴロイド。自分が世界中のすべてを所有してるから、あらゆる筋肉を一身に集めてるみたいにふるまう男。その場を所有してるから、所有してるかのごとく歩く必要さえない男。そういう人っているもんだ。わたしは知らないけど。そいつが本物の人間なのはわかった。自分が死の目を見つめているのがわかったから。

その重量挙げ選手みたいなやつは、自分の頭を求めてきたと告げた。わたしは頭しゃくはちなんかやらんと説明。そいつは、やってくれてもいいんじゃないかと思ったことを説明。

それ以上死に近づく欲望はなかった（もっとも欲望がないのは奇妙で人間らしくなかつ

たけど)ので、わたしは頭を出した。

「頭というのはいくらぐらいするものなんですか？ 最近は？」と世界の所有者がきいた。

わたしはぐちゃぐちゃに噛んだフーセンガムの値段を言った。一枚、あるいは一つ分の。二つ分じゃない値段。わたしは要求通りのものを得た。クレジットで。

二日後、ねず公が相応の代価を得たのを知った。死だ』

『駆除はむずかしいもんだよ』

『死はむずかしくない。なぜわたしたちは争うのかね、われわれみんな同じだというのに。これを知ってたので、わたしには理解するしかやるものが残ってなかった。

それであんたに相談にきたんだよ、ママ。マンコに頼るのにはなれてないけど。ママ。わたしは切実なんだ』

ほんの親切心から、ママは多少の調査を行った。いいことをすると、単に気持ちがいい。特にそれがパパのためなら。でも、調べられたのは、すでに知っていたことばかり。AIが情報を操作してる。AIは医療マフィアを操作。民主主義は、自らの死と医学知識と習慣を操作。おれたちみんなが自分の死を操作するのと同じこと」とテロリストは言った。

「知ってる」おれの愛人、マンコは、死んでた。

「しかしだね」とテロリストは言う。「例外ってのがある。メディアがなんと言おうとメディアがなんと言おうとじゃない、メディアってのは誤りとして存在しているんだから 民主主義ってのは古い静かな一家なんだ。あんまり動きまわらない。安定してる。安定しすぎてから、いまじゃ独自の遺伝子配列を持ってるくらいだ」

「だれが？ だれだか教えてくれ。だれが自分自身をコントロールしてるって？ だれが果てしない苦痛を感じてないって？」

テロリストは顔をしかめた。それはまともな質問じゃない」

「まともな質問って何だ？ この時代に？」

「だれを殺していい？」

「だれも殺したくない。怒りを感じないから」おれは恐怖を感じてた。

「いいか」とテロリストは、深すぎて表現できないほどの怒りをこめて言った。「情報をたくさん知ってて何も感じないなんて、どうしようもないぜ」そいつは小さな骨をこっちにつきつけた。「あんたの質問への解答は、民主主義はどうしようもないってことだ」

マンコは死んでた。その後、おれは地下鉄におりてって女を待った。おれはずっと旅人だったが、もう旅をやめる頃に思えた。それに、地下鉄はどこにも行かない。死んだ地下鉄に金を注ぎこむ政府はない。おれは泣いた。待った。無。泣いた。泣いた。彼女が再びおれに触れてくれるためなら、何でもしただろう。彼女が部分的にしか人間じゃなくて、おれが自分の欲求を嫌っているにもかかわらず。

おれはその地下で彼女の埋葬場所を探した。おれは死の埋葬場所を探した。おれはおれの求める彼女を探した。おれは彼女を求めてたから、彼女はおれの悪魔だった。死んで悪魔的。

彼女が死んだとわかっていても 土のかけらやゴミの切れっばしやテムズ川の水やその他人間であるものすべてになっちゃったのを知っていても おれは彼女のために泣いた。クソ女だとはわかっていたが、それでも泣いた！ 彼女を取り戻すためなら何でもする！

（おれは無言のことばである涙を流した。現実という織物の中の涙。「ああ姉ちゃん、おれ、あんたになる。あんたみたいに非現実になる」）

輪切りにされたヘビの尻尾のかけら。おれに尻尾をエサに使って。おまえを嫌えるように犯して。子供はオオカミのからだからシャベルで掘り出されて生まれてくるけど、掘り出すのはだれ？ オオカミは、したがってすべて雌？；雌は、したがってすべてオオカミみたいに悪？ ぼくの心よ、教えておくれ、現実って何なの？

ほかの家と何もちがわない家に帰ると、愛人が待っていた。死んでなかった。まだ。赤い屍肉みたいに見えた。バレンタイン・デーだった。

彼女は死んでなかった。「おれ、これからはおまえの肉線に従う」と言った。

「あんたはあたしの望みしだいよ」とアブホール。

完全破壊

第3章

アラブ礼賛（アブホール語る）

بَارِفْتِخَارِ مَرَدَمِ مُرَبِّي (أَبِ عَهْرٍ حَرْفِ زَيْدِ)

死

フロイト博士と同じく、シュレーバー医師はパラノイアを同性愛に対する防御反応として定義。シュレーバー医師は偏執狂で分裂病で幻覚症で希望喪失で意識解離症で、自閉症でアンビバレントだった。こうした点で、彼は現職のアメリカ大統領ロナルド・レーガンに似ていた。

シュレーバー医師が三つの時、その母親は、夫の指示にしたがって彼を氷水の風呂にしか入れなかった。夫は肩バンドなど、さまざまなおもちゃを息子につくってやった。肩バンドというのは、金属と革でできた8の字型のもので、その二つのループがからだの全面にからみついてから、背中の中真ん中で出会う。

パパ、もう一度ぼくをぶちのめして。

別のおもちゃは「直線固定器」といって、テーブルに固定した鉄の十字で、それを子供の首と肩に固定することで、姿勢の悪化とあらゆる動きを防止する。

息子のベッドにベルトをとりつけ、そのベルトに息子をとりつけた。

ある種の出来事で正気を失わない子供は、そもそも正気の持ち合わせがない。別にアメリカの核家族構造に内在するミクロ専制主義と、ナチス・ドイツのマクロ政治的専制との結びつきの可能性を示唆してるわけじゃないよ。

あたしはここで神を正確に描こうとしてる。神とは、生きるために権力を絶えず拡大しなくちゃならない専制君主。神イコール資本主義。そこで神は、人間（神の被害者）に幸せのほんの切れっぱしをくれてやる。だって、神は人間の愛を必要としてるから。（神を）愛さない人間は苦しむ。

わたしはだれ？

こんな信念が意識を支配していたシュレーバーは、大きくなってアメリカ医師会の重鎮となりました。

シュレーバーは「削頭機」を発明。「削頭機」は着用者の歯を歯ぐきにめりこませ、それから周辺の骨を粉碎して砕けた頭蓋骨の間から脳を飛び散らせる。「削頭機」は、医師の父親が息子の正しい姿勢を維持させるために使用した卵型の金属帽子に似てた。

ちんぽこをむしり取る「ワニ」はたまにしか使わなかったシュレーバーだけど、「クズ屋の娘」はよく使用した。この装置はからだを、どんなからだでも、正常位にしてしまう。じきに、された人間はすさまじい激痛を感じる。まず腹筋と肛門の括約筋、それから胸筋、頸筋、続いて腕と脚。数時間が経過する頃には、特に腹部と肛門の苦痛の激化によって被害者は発狂する。

わたしはだれ？ 人体ってなに？

朝鮮戦争中、シュレーバーは飛行機の中でディスクを配った。終戦の頃には彼の機は腹わたを抜かれ、彼の手足や目は刈りこまれ、ほじくり出された。氷の上の彼。

アメリカ人が、新しい配管をつっこんでやって彼を救い、それからおまえは必要とされていないと告げた。手のほどこしょうがない、実質的に死んでる、と。死んでる以上、唯一可能な仕事はスパイだった。スパイをスパイするスパイをスパイ。どちらの側についてるのかも忘れた。どちらの側かについたことがあればの話だけど。どうして生きてるのかも、生きてればの話だけど、忘れた。ロボットミーか、端末になってもよかったけど、何になるにも低級すぎた。ただ見るだけ。この戦争の狭間の平和のアメリカでの彼のアイデンティティってのはそんなだった。でも、アイデンティティってのが残るには公の場になきゃならない。合州国が合州国として生き延びるには平和時が戦時にならなきゃならなかった。もしアイデンティティってのが名声のことなら、みんなが被害者。

わたしはだれ？

医師は、自ら、自分自身あるいは非自分自身がどんなヤク中より低級な存在なのを知っ

た。ホテルの一室で目覚め、注射針がまだ腕に突っただち、シーツらしき布には血、天井にも血。それがなけりゃ灰色の朝にも見えたものを。いまや公に知られた唯一の朝。

この都市化したアメリカで、彼はしばらく、あたしたちが愛さないときに求めるものを体験した。空白。でも彼はそうじゃなかった。空白。だって彼はどんあヤク中より低級だったから。よってペンタゴンの化学研究局が末期絶望症のエンドルフィン治療のモルモットとして彼を利用しはじめた。

クスリは成功だったけど、副作用の点から政治的操作も目的には精度が低すぎる事が判明。

医師は、目をさますと、自分自身あるいは非自分自身がムサイ精神病棟にいるのを知った。

「出たいんだ、ぼく」

医師のだれぞがきいた。「おまえ、だれ？」

「だれであっても、ぼくは知られ得ない」

わたしはだれでない？

医師は出た。北アフリカの、自由の地アルジェリアに渡った。もはや末期絶望症の患者でない彼は、AMA で働きだした。

ぼくイコール死マンコ

1. アルジェリア

襲え、ネコ、この懇願する心を踏みつけて

しばらくツメをひっこめて

ネコ、お前の目に溺れる

ネコ：ダイヤモンドと頁岩のかけらを見る

お前の頭と弾性に指が埋もれるとき

お前のからだのしびれる悦びに手が酔い痴れるとき

彼が見える。彼の表情は

凶暴で冷たくて衝撃的に切りつける

お前のすえたオシッコは彼のちんぼこの匂い

2. アルジェリアちんぼこ

「なにも絶対変わらない」

どうということ、とあたしはティヴァイにきく。

「だれも絶対変わらない」

でもあたしはしたいようにした。あたしはもう欲望のままに動く。アルジェリアに行った。アルジェリアでは、幼年期の風景に日が昇るのをながめた。あたしが求める唯一のものは無垢。

3. 幼年期の思い出

精神の中を手が動きまわってあたしの精神をひねくりまわして、はじめてあたしにものが見えるようにしたのを覚えている。

4. 個人史または思い出

それ以外で覚えているのは吐き気で、吐き気がするほど覚えている。この思い出以外に知ることってあるの？

5. 原始・以前

気候的にはアルジェリアは停滞した国でありマンコである。アルジェリアの住民は異人を容赦しない。やつら、あるいはあたし自身は、この永遠の太陽の地に「冬」というコードを持たせてあたしを派遣。ホテルの従業員に、男の客だと言われて、あたしは銃をぬいた。自分の安全を考えたわけじゃない。でも、欲望はよく覚えてないんだ。

するとあたしのマンコからにじみ出す血をついばむ深紅のハトを思い出した。思考の縁にあって、自分が考えるように教わってきたことって流刑だけなのをほんとに思い出した。ほんとに思い出すってのは、一方で知らないってこと。

「確かお前……人を探してるように記憶してるんだけど」あたしは銃を構えてた。この見知らぬ男は、あたしの変わりに記憶してくれてる。

「だれでもいいの？」ときいてみた。

「お前の欲する唯一の男を」彼の日本語はまちがいだらけだった。「その住所はキュ
チュック・ギュルハーン・ジャデッシ十四。バザールで踊って生計をたててるから」
快樂のバザールを思い出した。快樂を思い出した……

6. 快樂の思い出

「馬を見たことある？」

バザールであたりを見回した。バザールは、記憶どおり、美しかった。記憶形式として、美は過ぎ去ったもの、終わったものの表象だ。すなわち、死の表象。でも、いま現存する喜びは記憶と等しかったので、美は名づけ得なかった。求める男に接近中にちがいないと思った。

匂いがかけるようになりだしたので、あたしは匂った。

「馬を見たことある？」しなびたカシューナッツがあたしの記憶のことをきく。こいつはすでに死を過ぎて生きてるにちがいない。

「心を開いた今となっては、あたしは何も思い出せないの。あたしにあたしを売りつける気？」ここではみんな何かを売りつけようする。あたしに。この男はみんなあたしを売り飛ばそうとする。

「あんたは売り飛ばそうとするまでもない」老カシューナッツは注意深く指示してくれた。「馬を見たことある？」

「馬なんてどこにいんの？」

「こっち」小道は古いところで、古すぎる。壁は鐘乳石から切り出されたもの。液体はひたすら液体。舗装もでこぼこ。

あたしは馬を探した。こうしてバザールから遠ざかり、自分のいる所も、いる可能性がある所もわからなくなった。ここでは記憶なんか役にたたなかったし、記憶に規定されることもなかった。この小道では、何世紀もの時間が何世紀もの上に積み重なり、あたしは無時間に、不死になった。あたし、すなわち時間の反対は、子供になり、無垢になった。唯一の強みは無垢。老カシューナッツは、この小道ではあたしを好きなようにできた。

そいつの長い骨は、あたしのももに差し支えなかった。

絶望的に、子供だった時のことを思い出そうとした。だれかだった時のことを。まるで、記憶がそれとなにか関係があるみたいに。バラの刺繍が散ったピンクの毛布。洗わな

きゃいけないと称して、やつらはそれを取り上げて、二度と返してくれなかった。あたしは泣いた。自分がいつも、なんでもねだってるのは知ってる。自分がいつも、おねだり乞食として人前に出るのは知ってる。乞食、死んだイメージ。この小道で、この老人と。何も感じなかった。知らない以上、この建築の荒廃、この昔の石灰石の壁以外のどこへ続くわけでもない、最終的には無限の退屈に続くだけの相続不動産を惜しむ気もなかった。記憶なんて些末なことばっか。オブセッションの欠如。

あたしは愛への鍵みたいなものを発見。そいつの長い骨は、あたしのももに差し支えなかった。

すると、老カシューナッツに白い光が一筋あたった。彼はどこかをガイドしてくれてる。あらゆるしわ、毛穴まで、その無限のすじが入った肉の、皮膚ガン前段階のあらゆるホクロ、時間であるあらゆる形態を見せてくれた。ここには記憶はない。あるのは死だけ。

そして背骨が崩壊したかのように、ジジイはコンクリートに沈んだ。骨という骨が。コンクリートは濡れてる。だれかがこいつをつかまえたんだ、あるいはなにかが。なにかってのはいつもそうだ。あたしもついになにかを知った。時間というのはあらゆる事象であり現象であるから、なにも崩壊させない。時が崩壊する。

年寄りの背中から血が噴出。それまで老人が体内にあんなに血をもってるとは思わなかった。時が、ある特殊なかたちで、人間の、彼のかたちで、自ら崩壊したんだ。西洋の精神にとって、統一性を認識するのはむずかしい。認識できるのは死だけ。あたしのガイドは消えた。

一種の態度表明としてあたしはヤブれた老ヤブのからだを、小道からひきずり出した。夜明け前の青が、街と彼とあたしの肉を浸した。

あたしはまだ医者への指示にしたがわなきゃならなかった。まだあたしの男を見つけなきゃならなかった。あたしは知覚者になろうとしてたけど、その未知の男が知覚されたがってるかは見当もつかなかった。白昼に。

知覚する者とされる者の共通の焦点は、あの心臓にある切迫した部分だって読んだことがある。あたしは絶対無垢だった。あたしの心は、どっかで絶対待ってる。

それからコンクリートとその他の石でできたジェットコースターを通り抜けた。それはパリのモンジェ地区を思わせた。墓場で直立するボードレールは、死ぬしばらく前、梅毒

をうつされたとたんにそのガールフレンドと恋に落ちた。異性愛の一例。ここには、広告
はなかった。

四角い中庭を見た。四方に家が建ち上がってる。家の壁の後ろや屋根の上では、家族や
子供の群れが銃を撃ち合ってた。ある群れだか人だかが、ピンクと灰色の、下の中庭に急
降下して、ジェットコースターみたいに急上昇。戦争にうんざりしてきたんで、あたした
ちが撃ち合いしてた最上階の窓から離れ、廊下に出た。しばらくしてそこに戻るだろう。
どこにも行き場がなかった。

二つ目の墓地にいた。自分の墓の中で立ち上がる死んだキリスト教徒たちの手は腐っ
てた。

拷問者を見た。もっぱら政府に抗議する人たちの性器に電極をあてて過ごしてる。言わ
れたとおりになることで報酬を得てる、仕事人だった。自分がぶちのめされたがってるの
がわかった。わけわかんない。

これじゃ不十分。十分なんて無い、無いだけが不十分。自分の知らない規範ってものに
到達したかった。言い替えると、あたしは怒りたかった。無感覚になるんじゃなくて、記
憶や理性を越えて怒りたかった。腹をたてたかった。あたしはさらに都市に入り込んで
いった。

十四才の時、やつらはあたしを屋根裏に閉じ込めた。1、屋根裏で、あたしは指をマン
コにつっこんで、自分のヒーメンを破った。2、あたしはヤク中がヤクを渴望するように
愛を渴望する。一番（肉体的欲望）は二番（精神的欲望）と関係あるでしょうか？ この
限りない発狂しそうな渴望は、あたしを閉じ込めたやつらに対する反応であり、怒りの行
為だった。道徳家のことならまかせて。

あたしは魔女で邪悪でほとんど人非人。自分の血を醸しつつあるから。それでいまのあ
たしは冷感症。お母さんがあたしの欲望を利用して、結び目をつくったムチみたいにあた
しを愛するようにしたから冷感症なんじゃない。あたしが自分の血とウンコと死だけで遊
んでるんだって、ママがあたしに彼女の希望どおりにしかならないように命じたからで、
それは不可能になれてことなんだけど、存在してしかも不可能な存在であるなんて可能
じゃない。自分の血とウンコと死で遊ぶことで、あたしは自分の生を支配してる。冷感症
だから、あなたがあたしを傷つけるのは性的に貫く時だけ。あたしの疾走する馬である血

の冷やかさは、過去の出来事の記憶があたしを形成してきたし、形成しつつあるのを証明してる。自閉症でおしで無感動な冷血になるよりも、全組織 家族と記憶 に地獄に落ちていただきたいですわ。

激怒する。

馬に会った、ウマ射ったことはなかったけど。子供時代をさかのぼりつつ、ほかのすべてといっしょにそれを捨てた。ことさら美しい空間を通り過ぎる。川のすみのひびわれたセメントの曲部。あたしの足の下、本物のしょんべんの底に、ハトの死体が、アスピック漬けで保存されたみたいに、大きな枯れ枝やへこんだミルク・パックのかたまりに混じって押しつぶされてた。ウォッカの空きびんが川に浮いてるところ。

緑の大海原があった。その海には十から二十隻のボートがあった。あたしは自分の身分証を持ってボートの一つに乗ってる。どこかよそにいたときは、巨大で、一部が黒い、どんなボートより三倍から四倍は大きい舟を見た。うねりはじめた波は、巨大なおそるべき波が生じようとしているのを告げてる。あたしは自分の小さなボートに戻って身分証を取ってこなきゃならなくて、その波頭が、危険でもいいから、あたしを放り上げてほしいと思った。空中のあたしが美しくなれるように。

テムズ川を思い出す。視界のすみで棒が光る右腕に注射針の先端。やつらがあたしを置き去りにする。あたしが自分を置き去り。たった今、唯一の恋人を失った。言うなればね。もう記憶もない。

あたしの不在。無の存在すらあたしを表象しない。老カシューナッツとちがって意識が戻ると、あたしは見つけた最初の公衆電話の受話器をとった。

だれかが出た。「死」

「それはあたしの名前じゃない」生きてるあたしは抗議。

「おまえのコードだよ」この声は知ってた。死の治療者。「生きるものにとって、冬は死だもの」

支那人親分は尽きまじ

1. 墮落する言語

自分がだれなのかつきとめなきやと決心。滞在してるホテルに戻ると、こんな看板を見た。

روز صدیوان حاصیران ریستان آند.

無の看板。翻訳できたとしても、何も言ってないはず。ちょうどあたしの子供時代の記憶みたい。兵士を殺して肉を揚げて食べたっていう。

夢の記憶と起きてるときの記憶と、読んだり聞いたりしたことの記憶とが区別つかない。だって、みんな記憶だから。知り得ないことを、ペルシャ語でなら言える。

ملوان ناساز مرا دید.

「今度はだれを殺った？」ホテルの部屋に入ったとたん、ティヴァイがきいた。あたしたちは毎日別れてる。でもいっしょに働かなきゃならなかった。

「だれを殺せばいいかわかんない」だれを殺したいかならわかる。「殺したくなんかない。自分を殺したい」あたしは政治的一般論の価値を怪しく思った。

ملک از ناساز

「おまえはいつもほかの男を犯りたがってる」とティヴァイはせせら笑った。これは事実だけど、でもティヴァイといるから、それを抑圧して妄想にとどめてる。「この売女」抑圧してるから、これはホントじゃない。

こいつを殺せ。あるいは殺すな。

覚える。母親を憎めなかったから、特にあたしを派手に痛めつけたときだけど、あたしはこの世に生きてる人間を一人残らず、とことん憎みぬいた。

「愛しい人、あたしは自分の愛する人を殺したいんだ。自分が死ねるように」

これは世界に対するまっとうな反応に思えた。

عَلِي خُوسَكِيلِ اسْت.

(アリーはきれいだ) あんたを殺したい。

مَرْج و مَرْج مُمَوَّارَه بَعْجَه يَكْ كَشْتَد.

(「アナーキーはいつもガキを始末する」) 殺したい。

هَوَا خَطْرَنَاك (يُوَانِه عَجِيْب اُسْت.

(『悪意まみれの狂った欲情はすばらしい』) いまじゃあたしにとって意味があるのはこれだけ。

あたしはティヴァイの顔から離れてあたしの黒ずんだ目、空港ホテルの窓に写る、サングラスの反射に近づく。そして空港を見おろす。

空港の壁に赤いスプレーで書いてあるアラビア語のスローガンはこうだった。

سَخْت كُوشِيْد وَّلِي (رِمَانِيَان جُنْتَكِيْرِي كَرْنَد.

(パリでは、アルジェリア人の老人が夜明けにドブさらいをする。いっしょうけんめい努力してけれど、原住民は獣みたいにハメまくる。)

空港の建物の向こうに街角が見えた。その街角には死体がころがっていた。古いビュイックにのったおまわりたちが車をとめた。その一人が死体に布をかぶせた。もう一人がそれをめくる。死顔は明るく彩られてた。顔の下の肉はきれいに切断されてたから、そいつは死んだ動物だったのかも。

陸軍仕官とその当番兵が愛し合った。仕官は遺言を書いた。死んだとき、その当番兵が自分のからだを所有できるって遺言。仕官は死亡。遺言に従って、当番兵は死んだ上官を食べた。

人がセックスするからって、お互い対等で愛情深い関係（なにこれ？）が保てるわけじゃないと思う。権力と支配が欲しくてセックスするんだ。人間同士の関係なんて喰いあい。あたしがいつも病気なのは、自分の人間の部分がいつも苦痛を感じてるせいなのに気づいた。逃げ出せるかしら。自分を。世の中には場所が(たぶん)たくさん、無限にある。人間であることに対する耐えがたい絶望のなかで、あたしにはだれにも生き場がないように思える。

دوشك كوچك اُست.

古代ギリシャ神話では、河が生者と死者を隔ててる。どんな人間でも知り得る唯一の事象は、そいつの知覚できない唯一の事象、つまりそいつが死ななきゃならないってこと。昨日の夜、海を泳いでる夢を見た。海を泳ぐのは快樂。知り得る唯一の事象が死なら、それは夢か神話で、夢と神話があたしの唯一の知識なはず。それなら、この海は何？

人間：あたしは自分の欲望の奴隷か囚人。愛は欲望の一つ。故にあたしは鎖をまとう。鎖はフェミニストじゃないってのは言える。ボーイフレンドは麻薬中毒。彼の針は細長い。それを挿入して引き抜くと、彼は針と点滴器をコップの水に沈める。点滴器に流れ込む血は川。

ブードゥー世界観だと、死者は生者を助ける。今日びは権力の経済的主流は闇市場の兵器売買やドラッグにある。交換の競技場、つまり市場は、あたしの血。あたしのからだは万人に開かれている。これぞ民主的資本主義。現在、快樂は血の流れにある。あたしはボーイフレンドを見た。彼はあたしを見る。「あんた、死みたい。白肉。あたしたちおしまいね。もうあんたとなんか仕事できない」

彼は一向に気にしなかった。これまで生き物のことなんか一切気にしたことのない男だから。「アブホール、おまえ、死んでるよ。だっておまえってまだ探してるんだもんな」

あたしは向こうのせりふを繰り返した。「あんたは探してないでしょ。何の役にもたたないじゃない」

彼はちんぼこを見せようとはしなかった。自分の持ってる唯一のものをあたしに見せた。「仕事は続けなきゃならないんだ。ヤクが要るから」

死人並にしか役にたたないって言ってやった。

「どこへいけば死から逃げ出せんの？ 死はおれの血のなかにあるってのに？ ジャンキーは血液交換トランスフュージョンが受けられんの？」とティヴァイ。

あたしたちのコードは死。新しい指示が必要だった。あたしたち人間は、あたらしい血が必要。あたしはゾンビの医者にもた電話をかけた。血を懇願。点滴器の中のやつじゃない血を。なにか新しいものがほしかった。

医者は答えなかった。

「武道子」とあたしは電話で言った。

‘ نقاش چینی نقاسی جلیل ز مین
 جلیل. کوه طلوع کرد مثل اینکه بالای خاک
 پرداز میگرد، آنوقت آنجا در هوا ایستاد.
 درختها جنگ کردند و پائین به جویهای
 برابر منگرفها پیچیدند پس از آنکه این
 نقاشیرا تمام کرده بود،
 Wu Tao-tzu
 به کوه در در طرف کوه، نشان داد. از
 این در گرد و غائب شد. ‘

「ヤクは人を変える」とボスは返答。

「死も人を変えるよ」

「死でどう変わるって？ 死んだ後に何が起こるかなんて、何で気にするんだね？」

「『一瞬の例外もなしに、自分がいつも完全に自分自身であるんなら、自分どう変わったか、変わるってのがどういうことかなんて、知りようがないじゃない？』あたしは自分が生って何なのかさえ知らなかったのを知ってるし」

「だったらズバリ何を知りたい？」

あたしは答えた。

مرد متمور امر داد
 که دیگر نقاش جنگلیرا برای او نقاسی
 بکرد. چرا؟ جنگی حادثه مجهول شاید
 اکنون است. نقاش جنگلی خونینرا نقاسی
 کرد. مرد متمور اعتراض کرد: جنگلیها
 حنین نیست. "این کار فنون مستطرفه
 حرام شاید است." "امراض مقابتنی
 شنیده‌هاست. نقاش مردرا پرسید:
 جنگلی چه رنگه است؟ مرد متمور
 پاسخ داد: جنگلی سباه است. مردم جسمانرا
 نداشتند. به مرگه موقوف ام."

あたしは医者との電話を切った。何も言うことがなかったから。

2. 墮落する心

そしてあたし一人で、特に理由もなくスイスに行くことにした。

ベルンは死んだ都市だ。ベルンは、ナチの都市じゃないけど、金やプラチナでしか取り

引きしない宝石屋と時計の都市。ベルンにはそれ以外だれもない。

ベルンは死の都市で、ハリウッドが何度も何度も使った死の光景だけど、あたしはもう資本主義には興味なかった。チューリッヒの大通りの下は黄金が敷き詰めてあるという。ベルンに住む人々は、金をわざわざ隠そうともしない。

ベルンは死の映画セットだけど、あたしは自分自身のために自分自身でなにかを学ぶためにそこに行くんだ。でも、見なきゃならないものって何だろう。ベルンは幾重にもなった都市。一層目はコンクリートの柱が並ぶ道。数層は厚いれんがの屋根。橋が重さから重さへと渡る。覚えてる。ムシに喰われ尽くして都心の最下層の空の石の輪のなかの死んだ混乱であるべきクマ二頭。底に達して枯れ葉へ。

ベルンの若者は、たった一つの無人の地下鉄駅のまわりで夜にたむろする以外することがないのだと人は言う。誰かはそう言う。テロリストをつくるのは、貧困じゃなくて退屈なのかも。退屈とは夢の欠如。ベルンに入ると、闇が目につれこめた。シートか鳥の翼。あたしの背骨はシャーペンでイカしたヘルペスみたく無を突き刺してる。何も消えてない。

死の都市で（早くも）学んだこと：自分はなんであれ自分である。

死心：無所からやりなおし。

3. ハートの^{ハート}心

直感か知識の範囲で言えば、つてのも生き場もなければ誰にもなれなかったからだけど、本物の人間の文明は紀元八百年頃に支那で発生したって読んだことがある。支那の皇子が、領土の全絵師に、自分を讃える肖像画を描くよう命じた。ある絵師は、画室に入るのが遅れてしまった。この世の終わりに遅すぎた。彼は皇帝も絵もクソくらえってな様子でその部屋にやってくる。皇子を敬して礼をすべきときに、彼は床にはいつくばって、だれかの靴をなめた。おいしかった。マゾヒズムって、ただの政治的反抗。皇子はその絵師が肖像画を描けるように、画板と筆を与えるよう命令。絵師は皇帝をみつめてウンコをたれた。もし政治文明ってのが社会なら、人がみんなお互いにうまくやってけるわけがないじゃん、と思う。

最後にもう一つ思いだした。昔、ボーイフレンドがいた。これを話すと悲しいけど。そいつは「おれたちは行動しなきゃならない、行動したいかなんて関係ない」って言ったん

だ。で、その通りにして、あたしたちはお互いボロボロに引き裂いて、とうとう別れた。別れるって、死ぬみたい。人間文明って疎外と孤立のことなのかな、それと、もしそうなら知識って何なの？

まるであたしが知ってるみたい。ベルンにきて、知りたいと思ってたことを知った。クマ公園の片隅、クマたちから二百メートルのところにくると、例の医師があたしを待っていた。

「きみはわたしにとって自分の娘も同然なんだよ」あたしは自分の医師に会いにベルンに来たんだ。

「何が欲しいの？ 今度は？」

「次に何をしてほしいかわかってるだろうに」あたしは自分の外の声を、自分の中の声みたいに聞いてた。あたしにはわかってた。

「わたしはきみのボスだ。何をすればいいか命ずる。きみに死んでもらうこともできる」心かマンコの奥底で、あたしはいつも男が何を求めているか知ってた。「死」とささやく。あたしの中にはお父さんがいて、外にはボスがいた。そいつらがあたしに答える。「そう」

あたしはささやく。「死：おまえがどうして医師になれるのかわかんない。死：おまえは道徳家。死：おまえはほかの人に何がいいか知ってる。死：おまえ一人はほかのみんなに何がいいか知ってる。アメリカでおまえは人々をとことん病気にして、自分がありったけの経済的利益をかき集められるようにしてる。死：おまえはあたしの思考の中にいるはず。死：おまえこそあたしの思考」

死が答える。「きみは内部と外部をごっちゃにしてる。きみは混乱しきってるね」

「だったらあたしはだれ？」これを死にきくのは相手がちがうかも。

「マンコ：おまえはおまえの得るものだよ。おまえはわたしを得た」

「あんたはあたしを愛してない」

「おまえは死を得た」

でもあたしは死にたくなかった。あたしは死を得た。○・三五七口径を構えて、ボスの口を撃った。正面から。ボスはくずおれる。完全に。

視界に血みどろの脳ミソが見えるとき、あたしは必ず正しかった。本能的な見通しに従ったとき、あたしは必ず正しかった。すべてはあるがまま：死は死んでるだけ。ボス

なんてほかにどうしようもない。支那のおはなしで、そう読んだことがある。むかしむかし。

ビジネス

西ヨーロッパの五〇パーセント以上が、いまや淋病、梅毒、ヘルペスかエイズにかかっている。あるアフリカの部族の一〇〇パーセントは、五歳になるまでにヘルペスにかかっている。

シュレーバー医師を殺してから、あたしは虚ろだった。

こんな冗談がある。だれだか知らないけど、ある男がいて、そいつがバスに乗る。座席にすわってクンクン嗅ぐ。臭い。礼儀正しい男だったから、もめごとを起こしたくはなかった。でも、どうしても嗅いじゃう。それで臭いに我慢できない。とうとう臭いがすさまじくなりすぎて、目だちたくないという願望にもかかわらず、そいつは何事かを運転手にささやく。バスの運転手は、アイルランド系で、こうわめく。死んだ魚の袋を持ってる人は、全員バスを降りてもらえませんかね」

すると女客全員がバスを降りましたとさ。

一方であたしはティヴァイを捨てた。もっとも別離なんてどうでもよかったけど。もう仕事上の関係もなくなったわけだし。

医者って病人で金を稼ぐけど、死人では金が稼げない。だから、シュレーバー医師はあたしを殺そうとしてたはずはないな、とあたしは理由づけた。あたしを殺そうとしてたのは、だれか他のやつにちがいない。だれかもっと強大なやつが死を支配してるんだ。あたしにとって、すべては支那語だった。前に支那語を勉強しようとしたけど、難しすぎたんだ。

第4章

ロマン主義（ティヴァイ語る）

「とにかくそうしたいんだ」とおれ。

「そうって、どう？」

「彼女を探す。どうしても彼女を見つけなきゃ」

「なんで？」フィンダスは、浮浪者で、理解できなかった。何も。「なんで女なんか探すの？」

「おれはアブホールを糸で操ってて、その糸はおれの小指に結んであったんだよ。女をつつきまわすと指も動いたから、退屈しなかった。おれは糸を引っ張りたいたいんだ。でも、そいつはクソとはクソほど関係ないし、クソもそいつとは関係ない」おれは完全に説明した。

「おまえ、そりゃ失ってるよ、ティヴァイ」それってのは彼女のことにちがいないと判断。「おまえっていつも女を失ってるもんな」

おれは思った。それはちがう。浮浪者に同意しなかった。いつも同意しないのがおれだからだ。「おれを殺そうとした最初のマンコは失わなかった。そいつは死んだんだ」それから、だれかがだれかにさよならを言うところを考えた思い浮かべた。

（勃起した。それを考えると）

（考えるのをやめると、存在から踏み外して無になっちまう）

女は首に黒い革バンドを巻いている。あるのは空虚さだけ。その革の縁の切り口はすごく粗くて、首をひっかく。同じくらい幅広の二本目のバンドが、一つ目のバンドの首の後ろの部分につながっていて、背骨の下のあたりまできている。そこのところで細い黒革の

バンドが二本、それぞれ手首を縛っている。女は動けないので、おれがそいつの下着を脱がせて二人のために体位をとらせなきゃならない。女はおれのちんぼこでちんぼこは動いて、彼女は決して、未来がないから、おれ以外のものにはならなくて、おれでなくななくて、おれに逆らうこともない。おれはだれかにさよならを言うときのことを考える。おれの世界では、人はだれかにさよならを言ったりしない。

五歳の時、巨大なカシの木の樹皮に、悪いて知ってることばを彫りつけてた。ナイフが樹皮からすべって、小指の肉にささった。なぜかスパッと指を切断して、小指は根元でぶら下がってた。なぜか長崎みたいだと思った。一年後、同級性の女の子数人とゲームをしてた。二人一組で、屋上の一点から、二本の棒の間に張ったロープのところまで走る。ロープの高さは一番背の高い生徒くらい。屋上は、かつては馬小屋だった学校のとっぺんの階だった。クラス一のいやな女とおれが競争。おれはどうしようもなく勝ちたくて、走る以外何も気にしなかった。まだどっちが勝ったかわかんなくて、ゴールについて初めてふりかえると、彼女は左目を左手で覆ってる。指の間から血がにじんでいた。おれは彼女の目玉をえぐりだしていたのだ。どっちが勝ったのか、未だにわからずじまいだ。

「おれ、アブホールを見つけなきゃ」とおれは浮浪者に言った。「あいつが医師を殺したもんで、いまじゃあいつだけがヤクへのコネだし」

「おれが貧乏な理由って、そうじゃないよ」と浮浪者。

第5章

アルジェリア人パリ占拠（アブホール語る）

あたしのお母さん

逃げた。ティヴァイからだけでなく。逃げこめる場所がどこかあったら、どこへでも逃げ出したはず。でも、そんなところはなかった。自分に家がないのは知ってたし、今も知ってる。どこにも。

亡命が常態。関係や言語の面で言えば、定常コミュニティ。

アイデンティティ面で言えば。でも、アイデンティティって何から亡命するの？

もしかしてこの社会は、自分自身の廃虚のなかで自らの死を生きぬいてるのかも。でも、そんなこと、あたしにわかるはずもない。

気がつくと、外人を知りも見つけられもしないところにいた。気がつくと古い地区に住んでた。パリのほかの地区と同じく、運次第でなにか起こりそうなところ、ロンドンみたく絶対になに一つ起こらないとこじゃない。すべてがあらゆる場所で起きるから。

金さえあれば、パリで貧乏暮らしをするのは簡単。あたしは写真家のモデルとして働いて、自分のぜいたくなニーズにじゅうぶんな金を稼いだ。その金で買った高価な服を脱いで、男たちに自分の写真を撮らせた。

ある日気がつくと、仕事で、小さなれんが造のタウンハウスの地下室にいた。ユダヤ人街に近い、細いくなった道沿いのところ。ドアに出たのは重量上げをする黒人。彼のスタジオ設備はすごかった。写真用ライトやその他の機器。その中で、あたしはランプの裏

に使う写真用のポーズを取るために雇われたのだ、と言われた。十二宮に対応する十二の体位で写真を撮るんだって。何のこっちゃ。

「いつもはボーイフレンドと仕事するんだけど」ボーイフレンドなんかいなかったけど。

「いや。おまえのマンコとおれのチンポだ」彼はチンポをあたしからそらして玄関に鍵をかけた。「脱げ」とカメラに手をのばす。

あたしは脱いでベッドに寝た。ピカピカでグレーのズボンを片手で脱ぎ、もう片手でカメラを持ってる彼にあたしは告げた。「まずいなあ。あたし淋病よ」

「コンドームを使おう」

強姦されたからだのほうが、片輪のからだや死んだからだよりまし、と急いで判断。

この無益な、そして無益である以上に有毒で破壊的な、異性間性愛という病気をどうすればいいかわかんなかった。わかったためしかなかった。

その後、禁欲も考えた。パリ在住の数少ない友人たちはセックスをやめた。いまや性活動のほとんどは、肉体の病や、下手すると死を招いたから。あたしの唯一のストレートの男友だちも禁欲家だった。五年前、彼は野心家のモデルと寝てたんだけど、彼女はこっそりほかの男女とも寝てたわけ。彼女に公然とバカにされてるのはわかってた。顔をつぶされるのも限界にきて、死の苦しみが、彼をしてそういう苦痛の原因である彼の性を放棄するよう衝き動かした。ロマン主義者だったもんで、ゾヴィラクスは自分の一番強いオルガスムスに忠実であること、あるいは自分のアイデンティティの放棄を選んだ。

でもその古き日々、その死の日々右翼への政治的転換の中、唯一の救い主は非白人なら誰でも何でもよかった日々……あたしにはからだ、物質が、どうしても問題になるように思えた。あたしのからだは自分には問題であるはず。そしてもしあたしのからだ自分にとって問題なら、そしてそれ以外がいかなるテキストでも、あたしは禁欲を選ぶことはできなかった。

ヴードゥー世界の一部は物理的だ。物質的なもの（人間で言えば、からだ）の軸は、もう一つの軸である精神性（人間で言えば心）と交差する。交差。クロスロード。人間のアイデンティティの問題。

神さま。

西洋の覇権を退けるのにヴードゥーを使ったトゥーサン・ルヴェルテュールはこう言った。「国家やその主が自分の利益のみを追求しても、別の力が存在するのだ。自然は哲学

や自己の利益よりも声高に語る」

この支配者たち、つまり白人は、腕や手や肩など、他人のからだの部分に燃えるロウを注ぎ、奴隷の頭から煮えたぎる砂糖キビの汁を浴びせ、別の奴隷を焼き殺し、別のをトロ火でじわじわとあぶり殺し、別の奴隷は火薬をつめてマッチでふっとばし、別のを首だけ出して砂か土に埋め、その頭にハチミツをまぶして巨大なハエにむさぼらせたり、アカアリやスズメバチの巣のとなりに置いてみたり、自分の小便やウンコを食わせたりほかの奴隷の唾液をなめさせたりした。生き延びた者の精神は苦痛に満ち、苦痛そのものだった。

メンタリティは肉体性の鏡。からだは精神の鏡。鏡像は、映されたものと完全に同じじゃない。

その都死チチ都市ブルジョアによるブルジョアのための都市での孤独と阻害のなかで、自分の性が苦痛の源に思えた。性が心身のだけじゃなくて生死のクロスロードに思えた。あたしの性はエクスタシー。果てしなく、物質的現実だけでも精神的現実だけでも制限されない欲望。商品の支配するその都市で、ますます飽き飽きして泣いた。完璧都市を殺してやる。あたしの涙は娼婦の涙。マグダラのマリアに、聖母マリアの肉体を引きちぎらせる。あたしのマンコ汁とオシッコが、彼女の目から赤く滴る。ひたすら優しいあたし。あたしを嫌ってた母親すら傷つけられなかったあたし。あたし、赤ん坊。泣くのとオシッコがあたしの性。

アイデンティティの記憶が脳裏をよぎる。ゆっくり起き上がりながら、目は黒いオートマチック拳銃の鼻ヅラから離れない。銃身は張りつめた糸であたしののどに結んであるみたい。糸は見えなかった。

起きあがった。一人じゃなかった。一人だったことなんかなかった。歴史があたしたちみんなをつくる。歴史は死人の生や行動。あたしも死ねば、形成される歴史の一部となる。記憶または歴史は、時の流れに人間の血を流す。

そのパリジャンは、年寄りで白人。あたしよりタツパがある。顔のつくりは女っぽい。あたしの記憶によれば。

でも、あたしの記憶はいつも貧しかった。まるで北アフリカの砂漠のどっかで流砂に埋もれてるみたいな記憶。まるであたしの精神の唯一の地図がほとんど不定形とでもいわんばかり。精神の栄光が不定形。

子供時代をすごした都市でない都市に住むと、知覚するものはすべて記憶の共鳴を欠い

ている。まっ昼間に、黒と白のネコがデレッと身動きもせず石の塀にもたれてるのが見える。無意味な光景。でも、そんなネコを故郷の町で見たら、貴族の未亡人、死刑廃止論者や自由思想家が、一見すてきな家のレースのかかったテーブルで語り合っているのを見るだろうし、いつも女から始まる革命の発端を見る。この見知らぬ街で銃を見ても、あたしは何も見なかった。

フランスはかつて北アフリカを所有してた。すべては無価値化の問題だったし、いまもそうだ。金あるいは完全な無価値所有者は目に見えない。

「訪ねておいで」とその男。片足がはだしで、もう一方は金属の鎖に黒キツネの毛皮をかぶせたスリッパに包まれてた。厚い椅子。フランス語では「肉」は「椅子」だ。実体化した肉。絹のジャラバでちょっとアラブ人っぽく見えて、世界のその部分と多少なりとも関わりがあるみたいに見えて、高齢に見えた。男はあたしをつれて、どこかへ、部屋へ行った。「おいで」。ベッド。

まるで夢みたいに思いだしたことがある。ちょうどセックスの年頃、つまりは思春期に達した頃　それがセックスの年頃だって言う人もいる　入れポン出しポン　あたしの義父だか偽父が予告もなしに自分とお母さんのアパートに帰ってきた。あたしはフィアンセとハメてただけど、うまいことアパートから連れだした。軽いなんてもんじゃないアル中だった義父に、ジャック・ダニエルズを一本買ってくるって口実で。留守中、パパはバスタブでネクタイを見つけた。あたしが戻ってボトルを渡すと、パパはすすり泣きながら、男はみんなお前を利用したがつてるだけなんだ、と言った。パパ以外は。お前を守ってやれるのはわたしだけなんだ。泣き続けながら、パパはあたしのおっぱいに手をのばした。なんであたしなんかよりお母さんとヤンないのか聞いた。「わたしたちはもうその手のことはしないんだ」。セックスって薄汚いものなのかな。パパはあたしの胸に手をのばした。あたしは夏用別荘のお母さんに電話して状況を説明して、嫌われてるから信じてもらえるとは思ってなかったけど、やめるように言ってくれと頼んだ。お母さんは電話を代われと言った。そしたらパパはあたしにさわろうとするのをやめた。

話そのものはずっと覚えてた。いきなり思いだしたのは、あるいは悟ったのは、自分が性的に義父を求めてたってこと。

「おいで」今目にしてることは、まるっきり意味をなさなかった。窓の外からいろんな騒音が聞こえる。見おろすと物体が見えた。銀と淡青の点が星みたいなマニキュアのび

ん、白い頭蓋骨、頭蓋骨より小さなコイン、双眼鏡、古いタロットカードの束。すりきれた毛布の乗った狭い簡易ベッドが死砂色のガレージのドアからのぞいてた。ガレージの外のコンクリートでは、茶、赤、紫、黒のビーズの糸が、白いモロコシ粉入りのボウルと黄色いモロコシ粉入りのボウルのまわりにばらまかれてる。いろんなサイズの鏡が建物の壁にたてかけてある。キャメル箱とホワイト・ラムの原酒のボトル。物体。

あたしはこの鏡あるいは見る行為の中で自分を見た。でも、記憶がないので自分がわからなかった。「習慣上はお前をいま殺すことになる」と老いぼれヤギが話しかけた。突然自分が知覚できた。緊張して、臭くて、恐くてもらしそう。

「でも、」としなびた男は続け、「もう少し楽しませてもらおう。お前は何者だ？」

窓の外のパリはカオスだった。何千というアルジェリア人が大手をふって歩いている。ボロボロ。ドロドロ。杖。人形。ヴードゥー。血が目玉を流し出す。あらゆるレベルで不当に扱われたための憎悪嫌悪人間の尊厳を汚すぶざまな顔。網膜傷から血が流れだし狂犬病かAIDSの症状みたいで指が象牙につっこまれカミソリで刻む。プリミティブ・アートの使用。白人学者はエッセイを書いた。またもや現代人が、古代人、つまりヘロドトスやディオドロスから、ギリシャやローマから、今日の文明をあたしたちに伝えてくれた、まさにその科学者や哲学者たちが、そろってその文明をナイルのほとりの黒人から借りてきたのだと認識させてくれた。その骨には北アフリカ人の肉が感情のボロカ旗みたいに掲げている。やつらの武器は半透明な夜に流れ星みたくかかっている。唇なき唇から賢人の歯が突き出す。この秘教的な洞窟の中で、歯ぐきはしなびて未来を予言し、ときにそれを作り上げる者の陰唇となる。白人たちがその舌を切ったのに、子供のときから自分のために口を開くことを許されなかったし開けなかったのに、その口から流れ出たのはよだれとヘドだけだったのに。マンコがいまでは洞窟になったこの老婆たちの口から、戦旗が現れた。

階上のその部屋では、老婆たちの声が聞こえた。あたしのおばあちゃんたち。

過去の、そしていまの新右翼政権下のフランス人たちは、アルジェリア人たちを統制するための「必要事項を実施する」ことは「国家のための行為であり……金持ちや権力増加のための戦争ではなく、公共安全のための戦争なのだ」と言う……

あたしは窓から顔をそむけ、老人に向かって名前を告げる。その部屋を見回すと、いつもの所持品が目にはいる。錠剤入りのびん、点滴器、白い粉の入った広口びん、注射針。仕事。なぜ泣いているのか、と老人がきく。

「なにかと泣くのよ、あたし」こんな幽霊になに一つくれてやるもんか、と決意。特に自分の命は。その部屋の暗黒そのものの蒼白さの彼は、まるで生粋の白人に見えた。すごい年寄り。「誰がおまえを泣かせられるものか。誰もおまえを傷つけられないなら、なぜおまえは涙を流す？」

まるで縛り上げられたみたいだけど、誰に縛られたかはわかんない。あたしはその老骨に唾をはいてやった。

彼はしなびた肌をめぐおうとはしなかった。片ひざの上で拳銃のバランスを取り、残った手で長い注射針をもて遊んだ。左目の隅の、濡れた鉛直線がしおれて、まるで泣いてたみたいに見える。泣けるような人間であればね。「今夜は忙しいのだよ」ここであたしの、アブホールとかなんとか、名前を言った。「……死で」。

針がまたもて遊ばれた。どういうわけか、もしなにかを思い出せたら、あたしは死を想ったかもしれない。でも、自分の死を想うのは不可能だった。

ヤギの話だと、人間の世界に、人間が傷つけあうのに死ぬほうんざりして、自分は自殺するところなんだって。ハデスがプロセルピナを気にかけてたみたいにあたしのことを気にかけてるから、あたしを道連れにするんだって。こいつ、内心まで死ぬほうんざりしてんのか。

「もし歴史があたしらを作るんだとしても、もし年上の連中があたしらを形成したんだとしても、あんたは歩くビョーキよ」そいつが歩けるかどうかはわかんなかったけど。

そいつがあたしを見たのは確か。初めて殺す対象以上のものとしてあたしを見たんだとおもう。恋人が、オブセッションの対象が人間だったと突然気がつくときと同じ具合に。人間性はショッキング。すでにあらゆるショックを経験済みの老人は、微笑して言った。「この世では、人は自殺のしかたを知っとく必要がある。それだけがわれわれに残されたものだから」

「『われわれ』って誰のこと？ 支配する側のわれわれ……たぶん、その『われわれ』にはすることが何も残ってないんでしょうよ。一種の……文明化した退廃。『われわれ』なんて……」

「でも。それでもわれわれは人間なんだ。こういう恐怖と戦い続けるから人間なんだ。自分自身によって引き起こされた恐怖とも、そうでない恐怖とも戦い続ける。戦うのは生き延びるためじゃない。それだといささか物質主義的すぎる。だって、われわれは肉体と

精神なんだから。そうじゃなくて、愛し合うために戦う。わが子よ。お前を決して離さない。この腕で、死ぬまでお前を運び続ける」

西洋が日本化しつつあるってのは紋切り型だったっけ。「心中？」しゃべる無益な必要性があった。「あんたビョーキよ。死にたいなんてビョーキよ。痛い目にあったほうがいいんじゃない」もし痛みを感じたら死にかけてないって言うし。もしここで絶叫して十分苦痛を感じられたら、この老いぼれもあたしを殺せないんだ。

「われわれがどうやって死ぬのか教えよう」と老人。「お前は誰だね？」

通りでは派手な物音がしていた。演説さえも。「ブラボー、ご主人さまども。共和党员になるんなら、これまたさらなる努力ってわけだ、フランス人諸君。そこまでやれば、おれたちはこう叫ぶね」とアルジェリア人たちが叫んだ。「ブラボー、ご主人さまども！」

「これがあんたたちの叫びだ。ご主人さま。ご主人さん謎さん旦那さん尺八しようか。この叫び　ご主人さま　をあんたらの仕事場に　おれたちの心身に　轟かせる。この叫び　ご主人さま　とともにおれたちの中のおんたの収益を刈り取って取り出せ。この叫びで、あんたらのプレス力で、おれたちを圧迫して抑圧しろ。だってそうすれば、あんたらの鉄に押しつぶされたおれたちは、鉄よりも強く硬くなるのだから。鉄より黒いおれたち。この叫び　ご主人さま　によって、あんたらのメディアはこっちの中流階級にくだりこんだ。医者ども、あんたらはそのメディアによって、うまいことおれたちを手術して星にしてくれた。今度はおれたちがあんたらを焼きつくす。

ブラボー、ご主人さま、あんたらの成功に！　プロメテウスみたいに、あんたらは火だかおれたちだかを創っちまったんだ」

一つの声が叫んだ。

「ブラボー、ご主人さま。おれを見てくれ。よぉく見てくれ。おれは年寄りだ。貧乏だ。健康状態も、よくて不安定ってとこ。おれはどこに生きてるんだい？　おれの肉はしわだらけだけど、おれを気にかけてくれないやつらの干からびた心ほどじゃない。おれの腕はカシミたくほかのみんなを脅かす。おれみたいなすてきな浮浪者に、一ペンスでいいからめぐんでくれない？　なんだと？　こんなはした金など侮辱だ！　わしを誰と心得る！」とサメディ男爵がきく。

「見ろ。この寄るべない老人を見ろ。心の善良さをもって与えよ。一人の死にゆくアルジェリア人に施しを。おまえたちがその土地を抹殺したせいで飢えたエチオピア人の子供

たちのために、おまえたちが山ほどの金を集めたのと同じように、今度もおまえたちの白人の心の知恵で死父に与えよ」

やせすぎて骸骨のアルジェリア人たちがキイキイ声をあげてた。「失われし帆走の栄光の日々よ。もはやおまえたちは、われらの肉もて船をつくらず、われらの心のまわりを帆走するのを好まない。われらの背骨もて巨大なマストの船もつぐらない。失われし帆走の栄光の日々よ、白人が奴隷を売買し全地球を支配せし日々よ。もはやおまえたちは深く切り開かれたわれらの深みを掘り探ることもない。あまりに長くあまりに深く切開かれて、われらはもうむしり尽くされてしまったから。きれいに。死ぬまで。われらはおまえたちの死。これをおまえたちの都市の便所のスローガンにするといい。もはやおまえたちは、われらの筋肉や神経内で働いてヘルペスやエイズを作り出すこともない。それによってあらゆる組合を、一発で永遠に支配。ファシズムの域にまで不可視でナルシスティックだったおまえたちは、いまや店を閉めたんだ。おまえを失望させた民主主義にうんざりして、ぶっちらばった。クソ。永遠に」

死父が街角で泣きわめく。「愚かで孤独で疎外され、おまえらの政府から疎外され、知識から疎外され、おれは万年休日だ！ 死が休日中！ この無社会この無は、あらゆる可能性だから完全カーニバルを告知する！」黒人どもは街灯を数本放り出す。「そこでご主人さま、おれたちの基本的な人権ってやつについてもっと話してくれ、あんたらの憲法のこと。おれたちの自由ってのが何なのか教えてくれ」

黒人少年が右腕をカミソリの刃で切る。「こうやって自分の腕から血を出させてる以上、ぼくは無じゃない」少年は自分の出血を見つめる。

「腹が減った」とサメディ男爵が答える。「したがってわしはもはや『死』とは呼ばれない。わしは『飢え』と『欲望』だ。なぜなら、血が流れるとき心臓は生きているから。生に歡喜して心臓は金切り声をあげる。『ブラボー！』と。この生にブラボー、ご主人さま！」

やっと聞こえた。拳銃を持った老人があたしに何を言ったのか聞こえた。こいつ、自分がすべてを操ってると思ってるんだ。死さえも。ホントかもしれない。シュレーバー医師を操ってたのもこいつかな。死ぬ前に、あの医師に命令を出してたのが誰なのか教えてくれないかと頼んだ。

「誰かだ」とのお答。

「誰か、夢がオブセッションみたいに広がっちゃった人ね」と答えるあたし。

「金持ちだ」とそいつは補足。「むかしわたしは金持ちと知り合いで……」

「あたしはむかし人間と知り合いだったよ」

「……その金持ちが、わたしに持ってきてくれたものがある。何か……」そこでそいつは途切れる。「わたしは昔金持ちと知り合いで……」下の道ではピンピンすぎて毛が頭の全方向に突き出してる茶色のカツラをつけた男が、古い銀玉鉄砲をつかんでふりかざす。「これがテメーの自由だよ！」

「その知り合いの金持ちは、実はコングロマリットのトップだった。それも非常にでかいコングロマリット。そいつは手に入るありとあらゆる物質的ぜいたくにもかかわらず、金持ちであることを嫌いぬいていた。その後ろめたさからか、あるいは性格からしてこっちが真相だと思うんだが、単に知性のためか、この人物は金持ちがイカしてるのを理解してた。ネコに相反する命令を与えると、ネコは身動きがとれなくなる。同じように、わたしの金持ちの……」老人は忘れていた感情のため一瞬口ごもる。「……愛人も、異様に頭が良かったので、自閉症の域に達するほど自分自身にアレルギーを起こしていた。内部、外部含めた形での自閉症だ」と老人は目を閉じた。「この世を支配している連中も自閉的だと思う」そいつは自分でも自分のことを話してるのかどうかわかんなかった。自分が誰なのかもわかんなくなてた。まるで正気にかえるみたいに、また身震いした。「この社会の人はいまやほとんど自閉的だと思う。まわりを見てみるがいい」あたしはまわりを見てみた。銃以外誰も目に入らなかった。「ひょっとしてみんな、自部の支配者を真似しようとしてるのかも」今度は老人は、完全な無感覚状態におちいった。

タバコの灰か切断された手足みたいに、そいつのピストルが床のカーペットに落ちた。毛足が長すぎて音はしなかった。音は凍りついたのかも。この無音の世界の中を無音で、あたしは老人の部屋を横切ってそいつの椅子に戻った。振り返る。あいつの話してた金持ちのボスってのがあいつ自身なのかな。

自殺にはいろんなかたちがある。自閉症は人生における自殺。生において自殺した金持ちが、あたしたちを、人間世界のすべてを、まるで愛してるみたいに、死に連れてこうとしてる。あたしにしてみりゃ、人間の自殺なんてそんなかたちだろうと、必要でも不必要でもない行為で、むしろ耐えがたい怒りによる行為、殺人者が自己破壊して全世界を破壊したいと欲する殺人行為。

あたしに銃をつきつけたへみみたいなやつを見る。自殺ってのはみんな後ろめたいもの。

左肩の高さで、なにかが影から流れ出てきた。ちょっと止まって、長い脚の上の球体状のからだをゆらゆらとゆすった。あたしは絶叫。金持ちを悪夢の中に取り残す。また街へ戻る。

醜

自殺に直面したとき、自分の自殺にこっちを引きずりこもうとする生ける屍に直面したとき、あの老人どもに直面したとき、二つの戦法があるようだ。

まずは純粹に意志的な行為。頭を壁に、できれば赤れんがの壁にたたきつけ、耐えがたく逃れがたいものに思える赤れんがの壁か、あるいは世界がプチ割れるまでそれを続ける。パリのアルジェリア人は、何年も路上で壁に頭をたたきつけてきた。ついに彼らの頭が開いて血を流す。

第二の戦法は、正確には意志的な行為じゃない。頭どもは、割れたのであきらめてしまった。所有階級の抗しがたい自殺に直面してあきらめた。所有階級の無に直面してあきらめた。だって、アルジェリア人にとって、人間世界は不気味で気色悪い最低のむかつくクソがつまってひどくなる一方で、抗いたいのに、人はだれも抗ってなくて、腐りかけのネズミの死体の青臭い匂いがして、果てしない退廃のなか、高貴な花の毛布みたいに紫のヘルペスの膿疱に被われ、それがからだの血か地の血にうちこまれ、割れて裂け目となる、地の血って、アリゾナの直径三百メートルの露天鉱の底の淡い緑や淡いピンクの液体鉱物。地の血がもれて死へ。頭を切り落とされたニワトリは、頭のないニワトリみたいにはしりまわる。ギロチンにかけられたばかりの頭は、地面に転がりつつ、自分の頭と胴体についさっき何が起きたか五分間は覚えてるから。ほとんどすべての国家で、政治的な拷問はごくあたりまえのことだったので、逃げ場はどこにもなかったから。ほとんどの国の政府は右翼で、右翼は価値観と意味を所有してるから。アルジェリア人たちのそのカーニバル、ヴードゥーみたいな抱き合わせのナンセンス、それにノイズ。

十九世紀のカリブのイギリス人奴隷所有者たちは、イラクサ科の植物二種類からとった蟻酸状の薬物を、頑固に抵抗を続けた奴隷たちの破れた皮膚に注射した。皮膚のすぐ下をアリが絶え間なく這いまわる。そしていやがる召使いたちに、ジャマイカ産「唾キビ」を無理矢理食わせた。その葉は、まるで実はガラスの小さな細片であるかのように喉頭を刺

激し、局部を腫らせ、呼吸を困難にしてしゃべるのを不可能にする。話すのをいやがるのは話せないのと同じこと。

マッカンドルが子供のとき、砂糖キビ搾器のシャフトが彼の右腕の上にくるがり、その腕を肩までつぶした。全身の力をふりしぼって、ぐちゃぐちゃのかけらを機械から引っ張り出した。もうろうとして彼はなにか アフリカ を思いだした。そよぐ丘を自由に駆けまわり、気ままに跳ねるいろんな動物たち。その横を同じ速さで彼も走り、動物たちもごく自然に彼を友だちとして受け入れてくれる。名づけられないものすべてを思いだした。それ以降、その子は何も名づけなかった。これまでは、彼は同胞を団結させて白人パリジャン所有者たちを追い出したかった。団結を知ると同時に、彼は名づけだす。それまで、彼のことは憎悪のことは。マッカンドルは雄弁家で、ミッテランでさえ認めただけ、雄弁さにおいてフランスの政治家や知識人に匹敵するものがあった、唯一ちがうのはマッカンドルのほうが迫力で勝っていることだけだった。子供時代の事故で片腕だったけど、彼は恐れを知らず、最悪の拷問のさなかでも保てる（そして実際に保った）だけの剛胆さがあった。

マッカンドルはこう語ったことがある。「この世の初めには生きた人間がいた。男も女も、死体になる前に生きなくてはならないから。白人は、生より先に死があると思っている。

初めに、その男または女の初めに、この生きた人物は肉体的存在でもあり精神的存在でもあり、肉体でもあり魂でもある。肉体は、生きるためには魂と交わるか触れるかしなくてはならない。触れ合うことで肉体と魂はお互いを映しあう。つまり生きた人間は、双子一組なわけだ。

初めに、その双子は子供だった。子供が最初。わたしは子供だ」とマッカンドルは説明。その茶色の髪は頭のあらゆる部分ですごくピンと直角に突き出してたから、まるでカツラみたいだった。

「しばらくするとだね、わが子たちよ」と語るマッカンドルは、シルクハットをかぶって、だれかの影みたいにやせてた。「もう初めじゃなくなってた。二人の子供は歳をとって死んだ。死体が二つ残った。

もっとしばらくして、それ以降どんどんやってきた人たちは、最初の子供たちのことを忘れなかった。最初の生き物二人は、いまじゃ二人の口アになった。

するとぼくは、あるいはきみでも彼でも彼女でもそれでもいいけど、五つだ。肉体、精神、生者、死者、記憶または神。白人は、生と死を分けるから死をつくる」明らかにこの黒人は、馬や犬ネコ野獣と同じように、人を肌の色でなく、そいつの行動に基づいて判断してた。

一九八一年から一九八五年の五年間にわたり、マッカンドルは自分の組織を作り上げていった。でも、革命はふつう、テロで始まる。彼の支持者は、白人と反抗的な分子を毒殺。でも、これほどブルジョア的な都市に革命を起こすなら、こんなテロじゃ不十分だった。

マッカンドルの支持者の多くはアルジェリア人でそれ以外のブラック・アフリカ人さえ混じってた。かつては獲物だった家畜みたいに、街角や小道の影でうろつくだけの存在でいることに満足できず、ゆっくり死ぬことのみによって生き続けるのに満足できなかったんだ。神を持たなかったこのごみクズどもは、それ自身にすぎるしかなかった。血まみれの獣なみに野心に満ちて復讐心にあふれ誇りに燃えた、この口述歴史の残りカスは、自分自身の生存以上のものを追い求めた。過去に対する復讐と、未来の樂園を追い求めた。みじめなパリ最北部か、犯罪まみれの東部のキャンプに住む。それを「住む」と言えればの話だけど。

パリジャンとフランス政府は、アルジェリアのクズども、テロリストども、ジブシーどもを、あっさり駆除してしまうことにした。アルジェリア人の住んでいる都市地域は、正しいしゃべりかたを知っているパリジャンたちにとって、文字どおり疫病地帯だった。フランス当局は妊婦を殺害。所在のわかるアルジェリア人すべてに、コンピュータ化されたIDカードを持たせた。その結果、たとえば、広大な市域（その一部は無人の駐車場だった）にわたる抵抗運動は百年も続き、その地域からはパリジャンは一人残らず逃げ出した。

この「政治的」というよりはむしろ「都市的」な状況の結果として、一九八五年までに市条例は、白人の同伴と政府の特別許可証を持たない黒人の夜間外出をいっさい禁じた。白昼でも、三人以上の黒人が、同数以上の白人を伴わずに話をしたり、いっしょに立っているだけでも、テロリストの謀議と判断され、死刑にいたる刑法上の処罰対象となった。スラムやジブシーのキャンプの深夜捜査ももっとひんぱんになってよかったのだが、パリのマップもほかのパリジャン同様にブルジョアだったから、腹にナイフをつきたてられる可能性よりは、自分のパリのコンコースのぬくもりを好んだのでそうはならなかった。マップが武器（たとえば鉛筆）を持ったアルジェリア人をつかまえると、マップにはほう

びが出てアルジェリア人のほうは、いつも非常に公開性の高いやりかたで処罰された。でも、スラムにも、物陰にも、小道にも、無人のメトロの駅にも、アルジェリア人や黒人は多すぎた。一九八五年に警察の公式報告では、パリの白人にとって「安全はいまやないも同然」と述べられている。白人にとって、行動するのは賢明なことではなかった。

マッカンドルの直接の支持者は、メトロの車内で盗んだだけでなく、金持ちのアパートから盗んだだけでなく、さらに……マッカンドル当人も、白人の街を好きなだけ歩きまわった。公民権を剥奪された者、満足していない者、貧乏な者、見境なくなるほど悲惨にまみれた者、白人たちが「ゾンビ」と呼ぶ者はすべて、わけもわからず彼に従った。わからないことが彼らの唯一の手段だった。この都市半住民「半」というのは、彼らが部分的にしか生きてないから のうちどれだけが、この絶望的な男と絶望的な道に従うことを選んだのかは知るよしもない。あたしたちはまだ十分に無知にまみれてないんだから。

殺すなんて簡単だから、テロリズムは従来の抵抗とちがって、止めようがなかった。マッカンドルは窃盗や略奪、放火に飽き飽きしてきた。人が貧困という死から立ち上がり、夢を見られるようになって夢を見始めると、その夢は知られた唯一の世界あるいは死をこだまさせる。やがてそういう否定の夢は不十分になる。マッカンドルはもはやチャチな暴力に興味を持たなかった。彼は楽園を夢見た。白人のいない地を。彼はあらゆる白人を始末することにした。

フランス人によって強制的に去勢されたアルジェリア女。道路掃除人。その他。そこらじゅうで、低級で黒すぎるので見られない影のなかで、マッカンドルの支持者は白人を毒殺するのにいちばん手っとり早い方法を学んだ。マッカンドルは特に、召使いとして働いている連中を中心に仕込んだ。薬草やフグ、ドクトカゲについて教えた。地下室や都市の周縁部の、使い古して打ち捨てられたマクドナルドのスタンドの下に住む老婆たちから、マッカンドル自身も生薬で人体を制御する方法を学んだ。フグ、あるいはふくれ魚の持つテトロドトキシンをごくわずかでも食べた人は、血の気が失せ、震えがきて吐き気がする。肌のすぐ下をムシが這い回ってるみたいな感じ。足が地につかない。口からはよだれがたれ、毛穴から汗が流れる からだがからだを見捨てる 頭痛がして温度が感じられない。物体が冷たい。みんな氷。吐き気。ゲロ。下痢。目は不動。呼吸はほとんど不可能。筋肉がひきつっては止まり、麻痺。自分で動けない。目はガラスない。魂は目に宿

る。精神機能は、死の直前まで鮮明なまま。時には死なないこともある。いろんな薬草。やがて、吸い取り紙にたらしめたインキみたいに、毒が白人の生にしみこむ。ブルジョワジーのアパートマンに毒が侵入。銃や爆弾なら止めようもある。水みたく流れる毒は止めようがない。白人は工業化して経済的利益という目的のために都市を汚染したから、きれいな水さえ珍しいほど。だから白人は、たかが水さえ召使いに持ってこさせなかやならなくて、その召使いたちが、マッカンドルに教わって水に毒を入れる。

ある日、マッカンドルはあらゆる中の上級と上級のアパートマンにすべて毒を盛るよう手配。あの老人、自殺する必要はなかったんだ。愛し、ほとんど崇拜していた自分らの食糧のために、白人パリジャンどもは悶え苦しみ、アルジェリア人やその他の黒人が群れをなして影から登場。

その間、ながいことアナキストだったスペイン船員たちが、パリ近くの港から、セーヌ河経由で、手あたり次第の強奪と破壊に狂ってなだれこんできた。淡い青とピンクのコンドームの箱が、散乱しつつ茶色い河をさかのぼる。病気の精液と病気でない精液がシャンゼリゼを流れる。空の注射針が、フル通りのテッド・ラピドス北のしげみの下に転がってる。獣血や、その他手あたりしだいに口に注ぎこんだものに酔っぱらって、この白黒その他の船員たちは、一言もフランス語がしゃべれないまま、店に押し入り、口やポケット、パンツや肛門につめこめるだけの商品を手あたりしだいかっぱらった。やがてそんな商品が自分たちにはまるっきり無意味なのに気がついたとたん（ただし薬屋の棚の中身は別）、こいつらは店をたたきこわした。やがてこのごつい男どもは、もっと長く退屈な日々慣れていたけど、このゲームにも飽きてしまった。

そこでアルジェリア人、つまり兄弟たちに加わって、金持ちのアパートに押し入るようになった。白人はすでに恐怖とゲロと下痢でのたうちまわっていた。わずか数人は、手をあげて、壁紙張りの壁になんとかよりかかれた。黒人たちは、もう後ずさりしなかった。

船に残るはめになった少数の船員たちが、市の西端の薄ぎたない河から、遥かに臨んだこの都市　アルジェリア人と黒人がいたところに密集。犬が黒い鼻づらでポリバケツをあさってる。葉巻とロウソクの炎が教会からあふれてこのゴミの山に火をつけ、何千という小さな火事を起こして、それが大きくなるのは時間の問題だった。都市は丸ごと炎上。その真ん中に、すごく背の高いすごくやせた男が立ってた。とうとう風は、火をあおるのをやめ、かつては都市だった灰塵を巻き上げた。

ルーブルの角から少し離れたところのアメリカ大使館では、白人兵士の一団が、ただの好奇心から大使館にさまよいこんだ、罪もないアルジェリア人の少年三人と少女一人をつかまえて、機関銃で壁の前に並ばせた。兵たちは、ずばり訓練された通りに行動。まず、黒んぼどもに指導者の名前をきく。返事なし。

「こっちの知りたいことを話さないんなら、お前たちの一人を殺す」

アルジェリア人の少年たちは、十二歳から十八歳の間で、少女は八歳。かれらは顔を見合わせた。だれも一言もしゃべらない。

義務を果たすべく、兵士、軍曹が、アルジェリア少年の一人の腕をねじあげた。骨の折れるのが聞こえるほど。「見てろ」とアメリカ人軍曹は、残った三人のアルジェリア人に告げた。軍曹のもう片方の手は、少年のあごをつかみ、それをななめ上にひねる一方で、ひざで背骨を固定。少年の燃えるような黒い瞳が軍曹の顔をまっすぐ見据えても、軍曹の顔は何の感情も示さなかった。ただ、荷方向への引きの力を増し、若い首を折っただけ。少年はそれでも生きていた。口の左端から血があふれた。

とうとう若者は、アメリカ人に血以上のものを吐いた。「殺して」。アメリカ人はすでに少年を殺し済だった。

別の兵士が、一番幼い少年の金玉をもてあそびだすと、少女は兵士の手にかみついて友だちを守ろうとした。兵士は少女の頭を蹴りつけた。彼女は高価な大理石の床に、無力に倒れ伏した。

「おまえたちの指導者はだれだ？ おまえたちみんな死んでもいいのか？」と指揮権のある兵士が少年二人に問う。

「なんにも話すなよ。アメリカ人なんかになに一つしゃべるな。こいつら、殺すことしか知らないんだもん」最年長の少年が最年少の少年に指示。

床から、少女は次の死をながめた。

兵士たちは一斉に、残った少年に向かった。少女は彼らが残った少年に向かうのをながめた。無感動に、無性に、無造作に、こいつからは何の情報も得られないとわかるまで兵士たちが少年をいたぶり、それから殺すのをながめた。この男たち、人間じゃないんだ。

男の一人に髪をつかまれた。「すべた」。このことばにはびっくりした。この人たち、何の話をしてるんだらう。よくわかんない。

「友だちがどんな目にあっただらう。お前だって大きくなりたいだらう」

「うん。こいつらは大人だった。」

「友だちがどれほど痛い目にあったかわかるか？」

わかるのは、世界が、全体性が恐怖だってことだけ。少女はマッカンドルの名前と、その他思いつくだけの指導者の名前を全部絶叫して、すると兵士たちは彼女を殺した。

こういう裏切り、というかむしろ、恐怖の全体性あるいはこの世に恐怖以外何もないんだという事実のかくも忌まわしい認識は、あまりにもしょっちゅう起こったから、とうとう残された白人たちはマッカンドルを捕まえることができた。

アルジェリア人の指導者と話をしようなんていう手間はかけなかった。頭をぶんなぐり、いまやほとんど無人の同じ大使館内の、どこかの部屋の鉄柱に手錠でつないだ。最初の少年を殺した軍曹がライターを取り出した。アメリカ人に対してアルジェリア人がしかるべき尊敬をはらわなかった代償として、マッカンドルを焼き殺すつもりだった。これによって、白人は都市をとりかえしたように思えた。

最初の炎が、靴より燃えやすいので、ズボンと靴下の一番下にともされると、守護霊が意外なことに愛の霊、すなわち豊饒の霊ではなく、現実の彼方を果てしなく渴望する霊、かなわぬ欲望すべての霊であるエルズリだったマッカンドルは、すさまじい絶叫をあげたので、彼を焼いてる兵たちはそいつを狂気の犠牲者だと思った。からだかふるえはじめ、それも発作的にではなく継続的にふるえ、炎のためではなく霊に憑かれたみたい。手錠から手首をひきちぎろうとする。その部屋の隅の小さな部分は、爆弾で穴が開いてた。ほとんど目に見えないほどのけいれん一発で、炎につつまれた指導者は手錠から身をひきむしるのに成功。啞然とするアメリカ人たちが反応できるより先に、燃え続ける男は部屋の半ばを横切って、穴を通り抜けていた。

マッカンドルのその後は不明。白人の毒殺は続いた。とうとうアルジェリア人たちはパリを勝ちとった。ただ、いまや都市の三分の一以上が灰になってたけど。

あたしは金持ちの老人から、あたしを殺したいというそいつの一見無根拠な欲望から逃げ出して、やってきたのがここだった。老人のところに帰ろうかと思案。金はすなわち安全であるというし。もっとも、誰がそんなことをいうのか、誰の安全のことを言ってるのかはよくわかんなかったけど。

むかしは、男どもは地上をさまよって、新しい現象を知覚して理解しようとした。あたしもそいつらみたいなさまよい人だったけど、ただあたしの場合、無のなかをさまよっ

てた。かつてあたしは、ボスの下で働くのはたくさんだと思った。今は、無がたくさん。

パパ

その灰塵都市でティヴァイを見かけた時まで、あたしは何かもうたくさんだったと言っていいと思う。あたしが彼の腕に飛びこんだと言っていいと思う。

「あたしに近づくんじゃないよ」とあたしは警戒して言った。警戒してたけど、あたしの手は、手自身の（というかあたしの）命からがら、彼のからだの届く限りの場所につきみかかってた。死んだ魚が新鮮かどうか調べるときの手つき。食中毒は、よく言っても不快なものだから。命にかかわる。でも、自分のからだのどの部分がどの部分と関係あるのか、わかったためしがない。心とまんこも含めて。礼儀正しくしているように訓練を受けてたから、あたしはティヴァイになにも言わなかった。

彼は新鮮だった。あたしはティヴァイになにも言わなかった。なにかと関係あることはなにも。「あたし、なんか古いぼれの部屋にいたんだ。どうしてそんなとこにいたのかわかんないけど。ほかのどこへ行くときも同じ」。一部始終を説明。「その変人がこっちの頭にピストルつきつけて。だれだかも知らなかったのに。ただの野郎。でも、あたしを殺そうとしてんじゃないって自分では言ってた」。ティヴァイを落ちつかせない。こいつ、ある方面ですごくクヨクヨするやつだから。「その哀れな年寄りには自殺しようとしてたわけ。そう言ってた。道連れになって手助けしてほしかったんだって。手まで握ったよ」

ティヴァイもあたしの手を握ってたんで、赤面した。彼のまわりの都市は一面灰。「ティヴァイ、あたしは男を信用しない。爺さんでも信用しない。そのよだれまみれの爺さんが、あたしを本当に愛してんのは自分だけだからあたしを守れるのも自分だけなんだって言ったとき、あたしは信じなかったね。不信にどっぷり浸ってるから。たぶんあいつのほうがもっと浸かってたろうけど……」

「いつもお前がほしかった」とティヴァイ。「おれ、そんなにしゃべんないから。たぶんお前、絶対気がついてなかったろう」

「そいつ、あたしを殺さなかったよ、ティヴァイ」

「おまえはシュレーパーを殺した」あたしたちは今や第三世界になったパリをながめた。「ボスなしでこれからどうする？」と彼は思案。「ボスってものがなくなった今、おれたち

「どうしよう？」

「あの年寄りがだれだかさえ知らなかったのに。今も知らない。知らなきゃたぶんあいつ、なにか所有してたって思うんだ……」

「おれはまたお前を得た。今からおれがおまえの所有者だ。おまえのためなら何でもする」

「あたしを得たね、ティヴァイ。父のことは話したっけ？ あたしには父が二人いてね。本者と偽者」父と母がごっちゃになってた。構うもんか。「本者には会ったことないんだ。偽者はあたしを強姦しようとして。させなかったけど。いまじゃ自分が彼を求めてたのがわかる。本者には会ったことないんだ。これでわかったでしょ」

「わかるって？」かれは黒い都市を見つめた。白い灰以外は黒。

「あの年寄りがあたしの本当の父親だったのよ」口にした瞬間、それが事実なのがあった。

「死人にボスあり」背の高いやせた男が背後に立ってた。ごわごわすぎて偽物としか思えない髪が、黒いシルクハットから糸となってまっすぐ突き出してた。「この都市は死……」

「あたしも死にそこねたし」とあたしはこの悪鬼に割りこんだ。

「……だけど死と生は野合している」と男はしゃべり続けた。

「昨今は避妊薬でも使ってるみたいね」少なくともあたしに関する限り、だれかは避妊薬を使った方がよかったのかも。

本当の父親なんかどうでもいいのに気がついた。それだけじゃなくて、父の名前がなんだったかも。ティヴァイの顔の半分は真っ赤だった。

「ここ、やばいぜ。どんなボートでもいいから行け。あの匂い……」

濃い緑の合成スエードを貼ったドアが、なめらかに枠におさまった。パリでは死と生が野合してるという悪鬼は正しかった。ちょうど父があたしを生ませて、あたしを殺したかったみたいに。パリでは、死は生の匂いがしてその逆も成立。特に人間の場合がそう。

「……は橋だ」と黒人は、骨みたいな指を、通りもない、ほとんど空中に瓦解したみたいな横道のほうにのぼした。「そこ行け」

ボートの両端に漂ってるできの悪い木のハンドルを見た。ほうきの枝のすり減ったところみたい。

「橋は脱出船、救命ボート。死にいたる生の橋。その逆も成立」

アルジェリア人がパリを占拠したのはなにか所有できるように。たぶん、やがては、全世界を。「この年寄りなんだけど、もう一つあるの。父はもう重要じゃないんだ。この世の人間間の力関係ってのはすなわち企業の力だから。多国籍企業は自前のコンピュータとつるんで現実を変えてきたし、いまも変えつつあるわ。生命体として見ると、そいつらは生体素子によって不死に到達したわけ。その他。いまさらだれが奴隷なんかいるの？ だからだれかを、だれでもいいけど、たとえばレーガンとか、IBM役員会のトップ連中つてのがだれか知らないけど、そいつらを殺しても、なにも達成できない」としゃべくりつつ、なんならなにかを達成できるんだろう、絶望とニヒリズムしかないのかな、と考えて、そこで思いだした。

橋の下には船が浮かんでた。老人のからだの中に横たわってた。あたしは目をやっこの船を見た。

黒い骸骨がい言った。「この老人、とつてもえらい人。区間まるごとはがして鉄とコンクリに、もうこの人死人」

船のなかではあたしの一度も会ってない父が死んでた。

死：薔薇に刻まれ

ながいことおあずけになってたあたしの夢の実現。その夢は呪われ、抹消された都市で得たもの。自分をくびきにつなぎ、ダルウィーシュの狂乱キャンプ支持者と元娼婦の列に加わり、北アフリカ、おもにモロッコの少女と軍団の兵たちの通夜に参列し、役たたずのハイヒールを投げ捨て、かつては都市パリだったはずの砂の細やかなひだにはだしをうずめる。持ち上げ持ち上がるぶ厚い砂丘を、ひた歩き、砂漠に迷う。

まるで夢が実現しつつあるみたい、とうとうあたしの夢が。レストラン・デリユニオンの横を過ぎ、マターム・エル・ジュリア、デルブ・セッバーヒの横を過ぎる。信用し信頼している恋人がこっそり毒を盛りにくる（でもなんのために？）みたいな、しなやかでひそやかな足音で、まるでまだ十九才でやりたい盛りみたいに、まるで。これがおまえの宿命だよ、お嬢ちゃん。避難所が、千と一つの愛の決闘に舞台を提供。それぞれの愛がお話なのは尾放し。強いからだがおまえを興奮させて拒絶。また起きること。なにもかもまた起きるのだから。

どこか眠たいポルトガルの都市、太陽の直射熱の下で道も交差点も無人。そこでおまえは船員に出会う。そのマラ自体が、垂れ下がるすさまじい重みに対する反逆となるだろう。

航海の続く限り……

この世に降りたったフランス人とイギリス人の所有者、その無視退屈中毒の犠牲者はといえば。そういう旧所有者たちはといえば……

すべての人間と動物が、いまでは同じ海を航海……

おまえがいま、ここにいる。ついに。ずいぶん長く感じられた時間、おまえを待っていた。一秒間。一分間。一日間。一月間。一年間。おまえがあたしのもとに帰ってくるのはわかってた。あたしたちが初めて出会った、まさにその地点に。川のなか。あたしのマンコのなか。あたしは濡れ濡れ。この噴水の上でハメよう。塩酸の溶液を鼻の穴にまきちらし。パパ。爪を引きはがしてよ。あたしの背中が薔薇に刻まれ。おまえは、自分だけのせいじゃないって絶叫。まるでおまえが生きてるような、あたしが夢を見てるんじゃないみたいじゃないの。あたしがほんとおまえを所有して、おまえがほんとおあたしを所有してるみたいに、あたしたちは相手の頭をむしりとしてその中身をむさぼり、それから残った目玉をほじくり出し、犬歯を引き抜いて歯ぐきから阿片を吸い出す、あたしの子宮は血を流してる。そしてあたしはお父さんに、船員に言った。「所有されないようにしようよ」

でも雨と同じで、血もずっと続く。とうとうその土砂降りのなかで、みんながあたしたちを見つめてることなんてどうでもよくなった。とうとうあたしの金切り声や血の絶叫が、精神病院の鉄格子入りの窓の向こうのキチガイどもをハイにするのも、どうでもよくなった。あたし生きておまえ死んでいっしょに墓の骨をあつためる。あたしたちいっしょにやつらの、所有者の爪の下に爆弾を仕掛けて、火をつける。あたしたちいっしょにやつらの死体を土につつんであたしたちのベッドに。死んでるからってだけで、そいつらは苦悶だったあたしたちの愛を妬む。あたしたちは、自分で自分をもて遊んでるから、この墓場すべてを遊び場にしよう。そうすれば火をつけるところはもうなくなる。

じきに火をつけるところはどこもなくなる。あたしたちは船員みたいに旅したかったけど、持ってるのは生体一つと死体一つ。自分が埋葬されたとき、墓場は消えた。終わり。でも、あたしになが残ってる？ かつての犠牲者はいまは所有者なのか無なのか？ 死から、死という立場からおまえは、おまえの娘たるあたしが無になると言う。でもいま、

あたしの精神と指先の腹と唇と口は血。

あたしはここよ、パパ、あなたが来るのを待ってる。

この発狂した夢からさめると、パパの死体、パパが、どっかのアルジェリアのヤブ病院に横たわってるのを認識。というか、どっかの年寄りの死体が死人用の病院に寝てるのを認識。くせえハエがたぶんそいつを喰いかけてる。

「こいつはなぜ自殺した？」とティヴァイ。ティヴァイ自身、死んだみたいだった。

「だれでもなぜ自殺すんの」と夢から解放されたあたしは肩をすくめる。「知らない」

「知ってるやつがいるとしたら、まずおまえだ」

あたしは自分の血を調べた。「こいつは長いこと自殺しようとしてたもん。ずいぶん長いことかかったな。だってこいつはだらだらしたマンコ野郎だったから。まったく神さま」

いまじゃこいつはだらだらしたマンコ野郎だったので、新しいアルジェリア人の医者はむかつくような病院にこいつを囲って実験を行ってた。あの病院に長く入れられてたらこいつが死ぬるのが、ティヴァイとあたしにはわかってた。

パパを病院から出さなきゃ。

バイク雑誌の情報だと、囚人や医療患者は死を偽装しない限り監獄を出られない。それはこんなふうにする。監獄の看守たちは、自分たちがいたがって殺した囚人を鋸道に埋める。それぞれの死体を確実に死体化するため、やつらはそれぞれの死体の頭を叩き割る。でもふつうは、死体を殴るかわりに、死体を犯してそのまま行ってしまう。めくら滅法に叩いてもしょうがないから。囚人の多くは、ぶちのめされていたがられた後、死ぬよりはおしゃぶりするほうを選ぶ。いまやホモになった、まだ生きてる囚人は、逃れる。

もしパパが死んだら、おしゃぶりしてあげられなくなる。パパに自分の死をくぐりぬけてもらうことで、邪悪な病院から救ってあげなきゃ。これをまとめてティヴァイに話した。

「おれが知りたいのは、だれが救助すんのかってことだけだね」ってのがティヴァイの答だった。骨の髄のヘロインにいたるまで皮肉なやつ。

「いちばんおしゃぶりのうまいやつ」

ジャンキーみたいに魅力的なティヴァイは、病院の内装用死体運びの医学生を、自分と恋におちるようしむけた。その若者は死体をまっすぐ窓から運びだした。その死体がパ

パ。夜。パパはまっすぐあたしの腕に飛びこんだ。

あたしは泣いてた。自分の精神の悪夢のなかで、あたしはその死体がまるで生きてるみたいに、絶望的にしがみついた。難破した船員みたいに、絶望的に生にしがみついた。ティヴァイだって、エラまでヤク漬けだしぜんぜんマシじゃない。でも、まだ人間だったから、夢の深みを泳ぎぬけるほど魚じゃなかった。船員はでかいちんぼこを持つてる。船員は毛がなくてでかい腕をしてる。

でも、現実ってそんなもんじゃない。現実って発狂させられそうなくらい。あたしの大切な愛を失って、あたしは叫ぶ。

腐りかけの死体がコンクリートに横たわる。切り刻まれて。ぐったりとほとんど二つ折り、その折れ目に臭い穴があいて、この野蛮な扱いの臭いに耐えつつ蠅が一面にたかるとを無為に腕ではらいのける。もうすることがなにも残ってない。だからティヴァイとあたしは刺青をした。薔薇に刻まれて。

第II部

ひとりぼっち



第6章

こどもセックス（ティヴァイ語る）

両親のかつての家の前で、ティーンエージの野郎が二人、愛情こめて抱き合ってた。そして離れた。

不法占拠スクワットの家のドアが開いた。入り口のタイルとカーペットづたいに夜明けが流れこむ。はだかの少年とはだかの少女が床に寝てた。血と卵の黄身みたいな太陽が、二人のほとんど死んだみたいな目を刺激して起こした。

数時間にわたって、メイドだった若い女は大きなわらの椅子で寝てた。太陽光線が、鳩みたいにタイルを行ったり来たりして、それから毛深い脚を這い上った。女は目をさまし、立ち上がりかけて、台所の流しによたよた近づき、太ももの半ばあたりまで覆っているボロきれを、ベルト代わりのボロの下に押しこみ、かつては台ふきんだったものをつかみ、顔とマンコのびらびらを氷水でこすった。水が女の太ったももをつたい、彼女は冷たさで身震いした。ボロの下で、女の二本の脂肪の柱はこすれあって、太陽の熱と見まごうほどの熱を起こす。

夜になると、革命的アルジェリア兵たちは売春宿で死ぬほど飲んだ。宿は海に面した大通りに建ってる。ここでティーンの野郎どもは兵隊を探す。見つけると、畏怖のあまりそのマンコ野郎をぶちのめす。少なくともそうしようとはした。兵隊をぶちのめせないやつ、つまりほとんどのやつらは、見かけたわずかな女を追い回した。ほんとは女なんかどうでもよかったんだけど。女の群れを捕まえると、ロープで縛り上げて窒息させた。それから地べたに押しつけた。

野郎たちの数人は、ひざをついたり押し倒したりしないで女を強姦できた。駅弁スタ

イルで強姦する。足はしっかりと通りを踏み締め、手は水夫みたいに腰にあてる。ほかの野郎どもは感嘆した。

この男の子たちは親切じゃなかった。自分より若い連中はぶちのめす。一人二人は殺したほど。赤ん坊だと小突きまわしてちいさなチンポコをひっぱたいた。ジャックナイフで女の子の髪を切る。柔らかなブラウスを引き裂き、靴のヒールをむしり取り、ぴっちりしたジーンズを肉ごと切り裂く。

革命後のこと。

新革命アラブ警察のジープ6台

(ازامی انتلابی عُرس)

が若い子供たちのグループの前で停車。おまわりたちは拳銃の握りで子供たちをつついた。ガキどもは鈍重な警察を取り囲んで、おまわりたちをジープのてっぺんに追いつめた。それから黒青血みどろの子たちも、ジープの間で押しくらまんじゅうをする。ほかにすることもなかったから、みんなかつての乳母のところに戻っていった。乳母たちは子供たちのひざを洗い髪を切り靴下をつくろう。この果てしない夜通し。

半分はだかで胸に赤チンをたらしした子供がベッドにすわってた。

どこかよそで、白いコットンのスリッパ一枚で、聖ブブが仰向けになっている。ひざを抱えて。

アブホールの妹オードリーが少年のすぐ隣で眠っていた。右手は少年の太ももに置かれている。それがスリッパの下にすべりこむ。それから尻にかかる。まだ眠っていたけれど、聖ブブは片目を開けてオードリーの上に乗った。

オードリーは目をさまし、その気で手を相手のスリッパの下に差し入れた。それを眠りで重く熱い二人のからだの間でちょちょさせると、やがて聖ブブがそれをもがく魚であるかのように捕まえた。体重だけで娘の股を割る。このため、少年の手は女の白いブラジャーをつかんでいた。

片手が片方のカップを揉みしだく。かすかに下へ引き下ろす。手は小さな乳房を発見。さわる。獣をつかむ。目覚めさせる。

娘のマンコ汁がはやくも少年の右ひざをつたい落ちていた。

歯で聖ブブは娘のトレーニング・ブラをはずす。永久歯は二本だけ。ブラは片方のおつ

ばいの下にすべり落ちて少年のおなかをくすぐる。このくすぐりの結果を感じた娘の顔は、その目の隅っこほどにも白くなった。わかったのだ。「ドン、あいつのこと忘れてた」非在になるほど蒼白化。「あいつのことは二度と言わないで。あれは.....あの時は本当の道徳性と愛の時代だった。いまじゃ道徳性も愛も死んだわ。もう見ないもう泣かないもう愛さない。誰も。あんたでさえも。二度と泣かないし微笑まないんだ。コンクリートだもの」

少年はこの戦時顔、この血の太陽、このミルク、このちくちくアリをキスした。唇はこの透明性にあこがれた。右手が引っ張り、それから引きずり出したのは、二人のセックスの間にすべり落ちたスリッパ。

娘は自分の足元まで少年を引き下ろす。少年は這いあがって女の頭をつかみ、揺さぶる。青い髪が揺れ、枕の上に広がった。隣のアパートでは、女の子たちがかつてのメイドたちとしゃべっていた。元メイドの一人が手にした糸を歯で切った。歯の間でバランスをとっていた指ぬきの冷たさが彼女の唇を震わせる。聖ブブはオードリーの右と左の頬についた髪の毛をなめた。毛はかれの唇にくっつく。

「ブブ.....あたし、ときどきママのこと考えるの。あたしをあったかくしてくれるのはママだけだったわ。

その思い出はほとんど消えちゃった.....もしかしてホントの思い出じゃないのかも.....その思い出はほとんど消えちゃった.....

ドン。あたしのお兄ちゃん。海に向かって頭が落ちるくらいおもいきり叫ぶようなやつ。お高いやつでさ。口が悪くて。悪口辞典までつくっちゃったくらい。砂浜で、いっしょにからだに砂をかけたっけ。しばらくは、小さなキャビンを見つけて、二人でそこに住んでたの。食べなくてもよかったし寝なくてもよかった。愛し合ってた。愛し合ってたから、死なないはずだった。

ほかの子たちみんなも、兵隊たちも、ほっといてくれたわ。

服は海草とジーンズやスリッパや貝殻やブラジャーやコンドームの切れっぱし。はだかの子供たちだったわけ。

パパはと言えば、パパはもう死んだわ。たぶん地獄にいるんだ、あのクソ。とうとうホントの家だけは手に入れたってわけ。それに引きかえこっちはと言えば、戦争とともにあちこち流れてったわ。行く先々で誰かしら男の子に会って、その子があたしにしたい放題

しまくった。あたしは自分のことを気にしないことで生き延びたんだ。スベタどもはあたしを理解してくれる。あたしも向こうが理解できた。あたしは娼婦だったことないけどさ、ね、でも人生が教えてくれたことがあって」とアブホールの妹は説明。「いつだって娼館には家が見つかるってこと。何も誰も気にしない限り生き延びられるってこと。人になんて言われようと。幾つの手があたしにさわろうと。自分が感じる肉体的な苦痛も。何が起きても。

あんたといっしょだと、あたしは自分が何かを感じるのを許しちゃったんだけど。でも、それはまちがってるのよ」と娘。

「娼婦だったのは、セックスと感情を分けるってことね。セックスは金と同じくらい無意味な活動。あたし、すごい娼婦になれると思う。一財産つくれるかも」と娘は叫ぶ。「ただ、あたしのマンコがこんなヒリヒリしなかったら！ 肉体的によ。コーマンすんのもがまんできないくらい。立て続けに一発以上やったら、マンコがあざになって、病気をうつされちゃう。もし娼婦だったら、死ぬわ」

聖ブブは返事をしなかった。

「ドンお兄ちゃんはあたしの毛をむしろうとした。それからひざであたしを押し。自分のひざが鉄砲だって信じてたから。上体が前に倒れる。鉄砲があたしの脚の間にすべりこむ。囚人になったみたいで、『言うとおりにしないと撃つぞ』ってお兄ちゃんが冷たく告げる。あたしは服を脱ぐ。でも、この真の命令者を、あたしのからただけで命令から切り放すのは無理だった。だって、お兄ちゃんは官能性のことなんか気にしなかったから。あたしたち二人とも、他人の肉体にさわれなかったの。さわるために、お兄ちゃんは命令しなきゃならなかった。あたしに命令したわ。いろんな体位を。世界を創りあげてあたしが疲れきってもう遊べなくなると、命令に従えなくなると、お兄ちゃんはあたしを抱きしめて、鼻ヅラをこっちの腋の下に突っ込んだ。それから甘く濡れた鼻を、ほっぺたに押しつけた。歯でチンポコの先っぽをかじってやったわ。痛がって泣き出したから笑っちゃった。

お兄ちゃんとあたしは二人で一人前だったもんで、いまじゃあたしと同じくお兄ちゃんの心臓は切りとられて消えてんの。あたしと同じく、ドンも未練たらしく自分の心臓を見つめる。あたしたち、そいつを、自分たち自身を踏みにじる時、自由になんどのよ、ブブ」

聖ブブやオードリーみたいな子供と、水夫とジブシーが、戦後のこの時期、みんなして

ネズミのパリの一角に住んでたんだ。

革命後の夜通し、おれがやりたかったことといえば、この重荷をおろすことだけ。誰にでもいいから肩代わりさせようって。

いたのは売春婦だけ。女はみんな売春婦になってた。なぜかはわからなかったけど。

でも、気がつくのと、ってのもおれは絶えず正気をなくしてるからだけど、おれは白狼の毛皮の真ん中にすわってた。おれたち、つまりおれと若い女の子は、サクランボを食べててそれが血を思わせた。赤が白に滴る。少なくともこの果物は新鮮だった。ロックの懐メロを歌ってたミュータントが泣き出した。どっかに過去があった。おれは武器をとって立ち上がり、不法占拠の家の正面に歩み寄った。

外の、紫の階段の隣で、バラが魔女みたいな風の中に立っていた。

食べ物を探しに家の中に戻った。ナッツでせきこんでたら、さっきの女の子が肩にすわったもんで、マンコ汁が首をつたい落ちた。首の後ろの皮膚と目がアレルギーっぽい感じ。目はしかるべく真っ赤。

女のももをつかむ。手を巻き付ける。口を吸い着かせる。前にかがませて、手を上に走らせて尻につっこむ。赤毛の頭をねじって起こし、女はおれの唇にキス。女の尻につっこむ。

ぬいぐるみの恐竜が隣にすわってた。恐竜は女だったから、よって売春婦だった。そいつのマンコが見えた。ももの上にサクランボがのっかってる。野生のネコみたいな巨大な前足で、そいつはおれのひざを愛情こめてなでた。便所に閉じこめられた、怒り狂ったハチの羽音がタイルの床からタイルの床へとひびく。おれが何とか頭を上げると、赤毛はももをおれの首の後ろにこすりつけた。

銃声。おれは一気に跳ね起きてPMをつかむと、玄関前の階段に飛び乗った。じっと、鼻の穴を思いっきりおっぴろげ、顔と手に月光を浴びながら、海の方に、港の方に目をこらした。女が窓ガラスをノック。「ティヴァイ、なんか食べなきゃ。一晩中見張りするのは無理だって。アプホールも戻るし。ねえったら。なに食べたい？ 死んだハンバーガーとかホイップ・クリームとか」

戸を開けると風が部屋を吹き抜けた。売女はぬいぐるみをオッパイに押しつけてた。「……そのおまえの下の方の口……」おれは女の濡れた股間の穴に手をつっこんだ。一瞬、クリちゃんに手が届いた……おれはぬいぐるみのクリちゃんに手を伸ばす……あの小さな

無みたいなベロに……

期待にふるえつつ、おれは寒い外に戻った。ヘッドライトが湾沿いに青く光る。おれには、行き場はなかった。この不法占拠スクワットから行くところは。

中に戻った。売女の中へ。女を押し倒す。のしかかる。女はブルース歌手みたいに歌い出す……なぜかはわからなかった。恐竜は、ホイップ・クリームをコップ一杯ほど女の開いた口に注ぐ。おれは唇の絶壁の間の、泡立つクリームにベロをつっこむ。おれは帆走する船になった。クリームを吸い上げようとした。

恐竜がおれのアーミー・ベルトを引っ張る。さわられて信じられないくらい興奮し、おれは動物にとびかかった。女はどうしようもなく興奮して、おれにとびかかった。おれは彼女に手を伸ばし、彼女は、売女らしく、おれを拒絶。その手が毛皮の間から伸びておれの赤パットをひっぱたく。

「さわらないでマンコをぶって」と若い売女はおれに言う。

「おれはヤクザじゃないんだぜ。人間がほかの人間を傷つけたり殺したりしちゃいけないんだ。追放するほど拒絶することだって。企業重役は残虐行為を行ってる。やつらと戦って勝つために、おれたちもやつらと性的に同じことをしなきゃいけないのか？ いや」おれは自分で自分に答えてた。「クソみたいな行動をとれば、自分がクソになるだけだ。貪欲で偏執狂的になるだけ。もちろん、自由のためには武力を行使しなきゃならない。武力のない人間は死んだも同然。おれたちはアイドルすなわち表象と戦うため、武力を行使しなくてはならない。アイドル、つまり偶像化されたイメージと戦うため。楽しみ以外の目的のために存在するあらゆる表象を殲滅消滅消去切断破壊屠殺皆殺し抹殺抹消破壊始末蹂躪廃棄倒壊ケリをつけるために武力を行使しなくてはならない。こういう戦争、つまり偶像化に対する戦争にあって最高の道具は皮肉だ。売女よ、忘れるな。ジュリアンのあてこすりはネロの拷問よりも大いなる害を為したのだ」

「肉の腐るのが一番濡れるの。死ぬほどやって」と若い売女。

おれは自嘲して相手の望み通りのものをくれてやった。男性自身で女のヘソを突き刺す。突き上げて、女の血を子宮に昇らせる。白い毛皮から赤い頭が持ち上がり、口が開く。化け物じみた深紅。その化け物じみた海に小さな白い貝殻が現れた。「おれのかわいい死鮫。死魚よりましか」女の肛門を犯しつつ、おれはささやいた。

すえた精液の滴がぬいぐるみの左脚を流れる。おれたちのセックスが、その瞬間に対す

る恐竜の恐れを薄めていた。彼女はホントにおれの腕にふれて、前足をそのままそこにとどめた。そしてこの前足はおれの腕を化け物じみたからだに引き寄せ、持ち上げてそれをふくれあがった腹に乗せた。そして手を股間につっこませて、熱い革の太ももでしめつけた。手が折れるんじゃないかと思ったくらい。

もう売女を犯すのはやめてた。おれは転がされて恐竜の上に恐竜の横にこさせられた。ふにゃふにゃでベタベタのちんぼこが、亜麻布製の女のももにふれてピクつく。女はおれを見る。青白く見えたおれのまぶたを、女はなめた。おれは化け物から売女のほうに向き直った。

彼女を抱きしめる。愛撫する。彼女の腕を分けておれの十字に受け入れる。おれは白の上におれの十字架をおろす。十字架の中心は彼女の赤いマンコ。おれは女を犯した。マンコを、ではなく。

夜の中に身を起こす。カンバス地のズボンのボタンをはめ、ベルトのバックルを締めなおし、近くのテーブルの上の赤ワインのコップに手をのばし、一気に飲み干し、銃をとった。兵士。

不法占拠の外、風は冷たくなっていた。それがズボン越しに、まだ濡れた脚を凍りつかせる。のどが締めつけられ続ける。おれは階段の上に立っていた。その下の小さな庭で、まだ眠っていなかった蜂とウズラが遊んでいた。片手で手すりにつかまりながら 残り
の手は腹をおさえている おれは息を吸った。海が息を吸った。おれは吐いた。うめいた。反吐の液体部分がおれから流れ出て黒薔薇にかかり、のしかかって、地面に倒す。それから反吐は紫の茎をつたい落ちた。

「……おれの逃走の後……」とおれは思った。

駆け降りた浜辺では潮が満ちてきていた。海草の壁のなかでおれは眠りについた。カモメが波の上に浮かんでいる。白い波頭が眠るおれの足元にうちよせる。別の売女が赤と黒の崖に沿って走っていた。突風が女のスカートの一部を翻して破れがさにする。スカーフが風みたいにむきだしの乳首のまわりではためく。

女はまだ暖かい水辺に駆け降りた。おれを隠している緑の海草をよじのぼる。彼女は、王女さまは、転げ落ちた。おれは寝っころがったまま、女の首根っこをひつつかまえて（すごく軽い女だったから難しいことじゃなかった）、おれの腹に引き寄せた。女はおれに好奇心を抱いた。おれのズボンを調べる。ポケットの中を。しわくちゃの札と、映画の半

券を引っ張り出した。おれのちんぼこは、あたりの岩みたいにカチカチ。おれが自分のちんぼこの硬さをさわって見る横で、女は金勘定中。それを丸ごと自分の下着のゴムの中にガメてしまった。女はおれの右手をとって引っ張る。海草の中からきれいな砂の上に引きずり出そうとする。

「ねえったら。金の分だけのことは、なりふりかまわずやらしてもらうからね。あたしは売女とちがうんだから」

しばらくして、浜辺から離れたところで。

女の部屋。おれの精液は、破れたカーテンにまで飛び散る。てんこ盛りでぶちまけちゃまった。むきだしのちんこをぼろシートでふく。

「ちょっと、汚さないでよ、坊や。自分じゃそんなマネしないでしょ？ ラジオで言っただけで、あんたホントにお母さん殺っちゃったの？」

「当然。それに姉貴も。死体は二人とも海に捨てた」

「えらそうに」売女は間をおいた。「ホントはなんで殺したの？」

「親父に頼まれたからだ。おふくろは手あたりしだいにチャンコロやイタ公とやらかしてたんだ。前から悪趣味な女だった。でも親父にはふれようとしなかった。毎晩毎晩、ベッドの上で背を向ける。雌犬だ。朝になると、それこそ毎日、おふくろは出てって、新しい水夫を見つけちゃあ犯る。だからある日、おれは弁当をつくって、ナイフを手にすると、おふくろがコマンキメてたはずの部屋のドアを押し開けた……おふくろは汚れたベッドに寝てた……水夫が来たんだろう……来て去った……パパとぼくにとってはもう行ったり来たりはない……お母さんの脚はやたらに開いてて、脚同士がお互いを嫌いぬいてるみたい……それと知りつつ……その二本の間にパイナップルを丸ごとつつこめるくらい。おれはまだ濡れたシートに片手をついて母親ののどに意識を集中すると突き刺した。そこを貫いた。血が腕に沿って噴き上がる。部屋の外で、弟のザイントリルスが絶叫。悪夢を見たんだ。おれは刺青みたいに血を自分の顔になすりつけた。おれの浜辺では、父さんが待ってた。おれは駆け寄った。

父さんとおれはウサギ小屋の間を逃げていた。すると砂糖ダイコンの畑に出た。赤かったのが紫になってる。服についた血が殺人的忠誠の色、オーストリア大統領の色になってた。クワの実を食べるとそれがからだ中に血を浴びせる。親父は泣き出したんで、ぶちのめしてやめさせなきゃならなかった。

とうとう夜が来た。二番目の浜辺まではもちこたえた。おれはパパをあったかくしておこうとして、燃える砂に埋めてやった。父さんは、おれに手をとられて眠りについた。

カモメが波の上に浮かんでる。そいつらは夜明けまで遊び、進んでは退く。そして夜明けとともに消える。おれの感じた苦痛のおかげで眠れなかった。何度も何度も、おれは血塗れの手を白い砂にこすりつけた」

今や売女の薔薇が開きつつあった。中指の先端でそれぞれの花びらのてっぺんを撫でて撫でて撫でまわすと、それぞれの花弁は、自分にはりつくみたいにまくれあがった。どんどん、どんどんめくれていく。女自身と化しつつあったその中心が、世界に向かって開かれる。女の肉体的中心は、触るには敏感すぎた。それは自らを、外のすべての勢力に対してさらけだした。むき出しで、受粉し、すべてに触れ、それでいて何にも触りたがっていない。

おれは売女を見つけた。

「目をさましたとたん、父さんはおれの隣で起きあがった」おれは娘に軽く触れながら続けた。「まだ泣いてて、震えてて、鼻汁があごまで流れてる。顔全体がよだれのかたまりみたい。このよだれに、砂粒がこびりついてる。

『金ならある』親父は弁明した。

砂は、有史以前の恐竜みたいに親父の涙を喰いつくした。もう我慢できなかった。おれは跳び起きて、親父をつかまえ、顔を殴った。親父のばかやろう！ 右ひざを下腹にたたきこむ。親父は両手で顔を守ろうとしたけど、全然だめ。それに、チンポコを守るための手が残っていない。何度か殴ってから石ころを拾って親父のおでこに投げつけた。骨から血が噴き出す。おれはさらにぶちのめして、そのうち親父は赤ん坊みたいに弱々しく縮こまった。ぶちのめしたぶちのめした。おれは燃える砂の上のにり出して吐いた。

親父の足がおれの背中を蹴りつけた。蹴っておれを仰向けにする。おれの腹を踏みつける。

朝のさなか、おまわりたちに捕まった。パパは赤ん坊のまねに戻ったけど、おまわりたちは引っかからなかった。一人がアラブ棍棒で親父をぶちのめした。それからおれたち全員、おれと親父とおまわりとは前進して水門をぬけた。ある一点で、おれは門をよじのぼった。銃弾がおれの左のひじをふっ飛ばして紙切れにした。おれは頭から運河に転げ落ちた。頭が上下にはねる。その運河の底で、ブタがおれに飛びかかり、地面に引きずり上

げた。おまわりが二人がかりで、おれのいい方の手首とすでに存在しない手首に手錠をかけ、足首にも手錠をかけた。完全におれを捕まえたってわけ。

おれのつめは乾いた血だった。首の後ろが燃えるようだ。世界の果てには警察のトラック。たびかさなる嵐で平になった、巨大な根でできた道をやってきたんだ。おまわりどもは、おれと親父をこのトラックに放りこんだ。

トラックの金属の床に立ち上がる暇もないうちに、トラックは動き出して、ブタがおれの背中に立ってた。そいつは細びきを取り出しておれの背中の肉を縛り上げた。ネズミが跳ねる。ガキっばいおまわりがそいつに赤い肉を放ってた。たぶん、囚人の肉だろう。ネズミは細やかに肉をかじると、それを犯そうとしてるみたいに腰を振った。それから海賊みたいに赤い犠牲を持って、トラックの穴の中に消えた。

おれは眠った。眠りは、死と同じく、解放だった。

朝。いつの朝かはわからない。疾風が、花咲く枝を揺らしてる。撒かれる香水は風。おれの肩は、やつらの白いシャツの下で、軽く震えていた。のどがむきだし。頭は丸刈り。耳の真ん中の蜜は、夜明けの最初の光みたいに輝いてた。生きているおれは空を見上げる。何もかもがそこにあった。円。アザラシ。標識。船。

くちびるは震え、それからもう使い物にならないみたいに凍りついた。のどは痛みへと干上がっていた。ひざが座屈。おれは牢獄のマットレスに倒れこむはめになった。

『この穴ぐらを吹っ飛ばしたいか』

おれは受刑者の刈りこまれた頭にキスした。何も言わなかった。

夜になるまで。夜になると、自分で考えることができた。

吹っ飛ばしたい！

親父は自分のクソの山にまみれて震えてた。おれは言った。『あいつがいるぜ』

『坊やはパパの面倒を見てあげるのをやめないの？』

おれはうなずいた。

その三日後、夜明けに、おれたちはフケた。ゴミに隠れて清掃車で逃げる。それから街に入った。父さん、あんたはパン屋の前で止まった。足から血が出てた。口からはよだれ。男が横を通り過ぎて、そいつがあんたの肩に触れた。あんたの背後にいたもう一人の詐欺師とおれは、マンホールに隠れた。野郎は刈りこんだ自分の頭をあんたののにこすりつけて、その派手なパン屋にあんたを連れて入った。あらゆる甘味のパン屋。あらゆる物語

のパン屋。アラブのパン屋。パン屋の中で、あんたは淡いピンクと淡い緑のケーキを食べて、その間、野郎はギリギリんとこまであんたをさわりまくってた。おれは全部見た。通りに戻ると、そいつはあんたに迫った。あんたの股間に、そっと。一方のあんたは、おれたちが隠れてるクソ穴のほうに興味があった。ネズミ穴、すべてのネズミの家、おれたちの家。でも、パパ、あんたはケーキを食べるのをやめられなかった。父さん。砂糖が耳のふちで光ってる。そして野郎は、再びあんたの肩をつかみ、おれたちが一時的に住んでたクソ穴に引きずっていった。あんたを赤い壁に押しつける。そいつの手が、あんたをそこらじゅうさわりまくる。おれは見た、あんたはひざを動かしただけ。ひざが弱かったから。唇にはホワイト・クリームが鎮座。野郎はとことん近くまであんたにからだを押しつけた。手をあんたのトランクスの中に突っ込んでチンポコの裏にまわす。見なかったけど、わかった。野郎は小さな叫び声をあげた。ズボンのチャックをおろす。あんたが腕をあげて、そいつをおしのけて赤い壁から離れて逃げようとする、そいつはぴったり後ろにつけていた。あんたの新しい影。とうとう、おれたちの脱獄を仕切った元詐欺師が、クソにまみれて、野郎に近寄った。『あんた、おれたちに金をよこすんだらうな』

野郎は唾だったのかもしれない。

『さもねえと、あんたが老人とその哀れな坊やを男色したって怒鳴るぜ』

野郎は腕をあげて、元詐欺師のカスターを殴ろうとした。カスターはそいつの足につばを吐いた。『金全部だ、世界の所有者、悲惨の所有者め』

カスターは誰であれ、シバの女王であれ、人を待つのに慣れてなかったから、手をおかまの素敵なポケットに突っ込むとそれをありったけひっくり返しはじめた。まるで野郎そのものをひっくり返すみたいな優しい手つきで。かわりに、カスターは靴ひもとドブで見つけたロープでもって、男をゆわえ上げた。おれたちの前には、犬のウンコみたくコインがコンクリートに鎮座。

おれはパスポートを拾った。カスターは時計とスカーフ。本物の金はなくてコインだけ。偽金だけ。『さあ、こいつにツバをかけてやれ』とカスターはおれに指示。

あの地獄で、おれにはまるで見込みなかった。パパ、あんたは所有者にまっすぐ近寄った。そいつは初めに赤くなり、それから蒼白になって、あんたがゆっくりと規則正しくツバをかけんのを見てた。黒いコートから白いシャツ、黒いベルト、黒いズボン、ズボンの下の盛り上がりへ。あんたのよだれがそいつの顔やコートから滴って靴下や靴に入り込

む。あんたは海の上のイエス・キリストじゃないね、パパ。あんたは世界のあらゆる汚染を擁する海の創造者なんだ。カスターは喜々とするあんたをそいつから引き離し、犬の糞がこびりついた舗石にすわらせ、野郎んどこに戻って左で思いっきり腹にパンチをくらわせた。強姦者は自分のでないクソの中に倒れた。

おれたちは逃げた。パパは死ぬほど頭を振りたてて笑ってた。おれは店に駆け込んで、駆け出して、道のクソん中から拾い上げたコインを残らず使い果たした。パンにチーズにワインに魚のスモークに果物にクッキーがコークの缶みたくおれの傷ついた腕にのしかかる。

それでエクタベインを通り抜けた。ベザルの北に向かって歩いた。それからオウラノポリスを抜けた。マイアシンにくると、みんな粘土の採取場で火を焚いてる。これがそいつらの家だった。この世の乞食ども。

おれたちみたいな元詐欺師が、うち捨てられ、壊れた箱バンの窓に寄っかかってんのをみた。クソの染みついた髪にノミが巣くってんのがモロに見える。若い女が、そいつらを抱きしめてた。たぶん娘だろう。カスターは小さな焚火に駆け寄って、ウンコしてるか脚がダメになってるかでしゃがんでる婆さんに抱きついた。そいつは、自分でやったんだか人にやってもらったんだか、汚ねえ赤いスカーフを額に巻いてた。ヒッピー式。

元詐欺師はチトいかれてるその婆に、『よお、アーモンド・クッキーを持ってきてやったぜ。はるばる牢屋からな。もう古くなりすぎてて、たぶんボロボロだろうけど』と言った。

婆はただ、相手の毛深い腕を、ひじの上のあたりでつかんだだけだった。ムキムキ男のカスターはこっちを向いた。父さんはブロンド男にかかりっきりで、巨大な無人のバンの下でナックルボーンしてた。カスターはおれを見て、バンのほうに来よう合図した。

中では少年が二人、ラメと青のシフォンの山の上で大の字になって寝ていた。レースのカットオフのスリッパにニップルレスのブラジャーをした女の子たちが、ありったけの指輪をして少年たちの手足をさすってた。腹ばいになってた少年が、左ひざを折って抱えこんだ。開かれたばかりの尻山の間、ウンコのカスが見えた。女の子がそこに手をつっこむ。カスターはマットレスの上に飛び乗った。もう一人の少女がおれの首のまわりに腕をクネクネからませたので、おれは子供時代の遊びを思わせるようなかたちで、バンの金属のドアに縛りつけられた。女はおれをマットレスに引きずりおろした。

『そんなに心配しないでよ、ティヴァイ。とにかくなんでも心配すんのはやめなつて。

このガキどもは一度もからだを洗わないし、ウンコの後でも尻をふかないの』

おれの氷のツバが、おれの口という器の中で、砂糖と香と薔薇水とで香りをつけた女のツバと混じる間、女のボ口がおれのももにピシャッと貼りつくのが感じられた。吐き気がした。その乾いたゲ口のボ口を肌からむしりとった。むきだしのももを開かせた。それを自分のひざにはさんだ。おれは口を目いっぱい開いて、そのジブシーが嘔吐性の毒をありったけ注入できるようにした。それがないと死ぬような気がしたから。

生きるのに彼女が必要だった。

その夜、屍肉でふくれあがった風の中、おれは寝返りをうってカスターにぶつかる。二人とも海賊船で航海してた。女の子たちは大きな栗の木の下、別のバンの中で、性欲まみれで寝てる。このバンのルーフに支えられた枝の上、雨粒と鳥の糞の滴でかさつく葉に混じって。蠅が飛び、手をすり、ブンブンうなる。女耳が、銀と銅のリングの重みでバンのフロアまで垂れ下がり、サテンのシーツからはみ出して、木のラスボードをブンブン横切る虫の羽音に、眠りながら聞き耳をたてる。

キャンプの外は一面の霜。おれたちはキャンプを離れた。男たちがおれたちをつけてる。そいつらの唇は青い牡蛎。

ツララが肉屋をうつ。中ではクリが煙をあげる。父さんはおれの左手を、カスターが右手を握った。

『じゃあな、ティヴァイ。おわかれた。おまわりがいるからな。おまえと親父さんはここを出る。おれは一人でなんとかする。もしいつか、おれにまた会いたくなったら、このキャンプに来てみる。おれの居場所をしってるから。無所だ』

おれののどはカラカラに乾いて何も言えない。おれは死んだ。こんどこそ自分が永遠に無なのがわかった。人じゃなくて、娼婦。カスターは画面から退いた。親父は、いつもながら泣いてた。『パリの娼婦んとこに戻ろう』とおれは親父に言った。

無理に自分を駆り立てた。ウェイト・リフティングするときみたいに。おれの残りの人生はひでえもんになりそうだ……

気がつくとも照明のついた通りにいた。やっと娼婦をみつけて近寄る。現実には多少なりとも可変性があるもんなら 正確かつ同時に測定できない機能 現実には同時に秩序化されてカオス的でなくてはならないか、または人類によって同時に知り得、また知り得ないものでなくてはならない。娼婦に話し始めたおれとたん、男がまったく不意をついておれを女

から引き離れたもんで、足がドブにはまった。血みドロがおれの足指にはねた。

『あそこの映画館の隣で待ってて。一時間くらいで行くから。夜にそなえてそろそろあがらないと』娼婦は片ももの上のスカートをはたいた。

おれは女を見つめた。うるうるした目がおれを見つめかえした。タバコがふるえて灰が落ちる。ある人々にとって都市は死だった。おれは立ち去った。

日本ファッションに熱狂しすぎて^{ジャップ}神風パイロットになっちまったゴキブリども、人間もどきどもが、死者のからだでできた、覆いつきアーチの下のビルで、青い窓からだをたたきつけては粉々になってるうちに、その都市のネズミのインテリゲンツィアどもはゴミバケツのふたを飛ばして核廃棄物をあさってた。黒ずんだ動物たちが、おれの目の前で、その骨を都市の娼婦や穴にひきずりこんでた。ネズミの一匹がおれを見た。彼女の耳から、よだれ製のイヤリングみたく、蜜がたれてんのが見えた。女の首は汚物製レンブラン。おれが会うことになってたスベタのマニキュアと同じ色の血が、そいつの歯とツメを彩ってる。鼻も同じ赤だけど、目からは白と茶色の身が出てきてた。女の口はあざそのもの。そのあざは、おれになるんだ。都市環境においてネズミという生物種のほうが人類より生存率が高いことは絶対的に証明されてる。

死んだネズミでできたコンクリートに沿って、風が吹き、おれのももをよじ登ってちんぼこを取り巻く硫黄だまりに入り込み、それから沈んだマストの領域に立つ海賊たちと陽に焼き尽くされた地の岸辺に物理的に似たヘビたちの刺青以外は触れたことのない肋骨沿いに登り、そして肩にたどりついた。風が新聞紙の切れ端をひざにおしつけた。それを握りつぶし去る。唾と血が手をつたい落ちる。おれのちんぼこは縮み上がって、新聞の切れ端になっちまった。おれは醸造所の壁に、また新聞の切れ端を投げつける。壁は落描きだらけ。落描きの一つは赤十字のまわりに赤い丸、死を越えた者、多国籍企業の世界に住む者たちのためにアナキストの『A』。赤十字のとなりには『死よ永遠に生きよ』のことば。

安全の地に戻らなきゃ。受け入れてもらえる唯一の地、売春宿に。サツに追われてる。黒んぼ娼婦が寄ってきて、物も言わずに手をつかむ。

あとで、女の部屋で、そいつはこう言う。『今夜はぐっすり寝られるよ』

その部屋は、昔は女学校の一部だったんだろう。ベッドは狭くて壁に釘付け。それ以外の家具と言えは机と流しとビデ。女の肌は傷だらけの薔薇の色。

女はだんまりに戻った。おれは肉に触れる。おれの指は何か触れがたいものを求めている

た。肉。ドアの向こうには笑い声、女学生のマットレスのきしむ音、キス、しゃぶる音、ため息、うがい音、そして叫びが一つ。黒んぼ女はドアを開めた。おれはベッドの端にすわった。

シーツはボロだった。ボロがボロにすわってる。小さい象牙のイヤリングと白い粉末がボロの山の真ん中にすわってた。黒んぼはおれをひきずりあげて、磁器の流しに押しつけた。そしてスポンジを顔に押しつけてくる。それから文字どおりおれの耳の後ろを拭いた。疲れすぎて笑うどころじゃなかったけど、おれは馬鹿らしい気分で自嘲。黒んぼ娼婦は赤いスポンジを突き出した。「さあ、あんたにあげる」と赤スポンジを投げてよこす。「そら。からだの泥をきれいに落とすんだよ」

おれはストーブの上で煮えたぎってた水に赤スポンジを突っ込み、それをチンボコの上においた。笑った。娼婦の腕は、いまや白いボロの山。『とにかく休みなって。きれいなシーツ持ってきてあげっから』

水が湯気たてておれの腹から脚から流れて水たまりをつくり床は池になってた。ちょっと冷えた赤スポンジをそっと腹におく、スポンジは床に落ちる、娼婦はきれいなボロを持って戻ってくると、それをベッドに敷いて、床から赤スポンジを拾って、おれの鼻につっこむ。おれは布きれが覆う女の肩の上で、その赤いスポンジを絞る。女はビデにすわり、スポンジを見据えて笑った。『これはあんた用。からだの泥をきれーに落とすんだよ』

おれは赤スポンジをそいつに投げつけて、注意深く説明した。『おまえのほうがおれより汚ねえだろうが。おまえは黒んぼだけど、おれは白んぼだからな』

『だったらクソ喰らって死にな、坊や。さっさと洗うんだよ。カーニバルなんだから！

これからお祝いするんだから。テアが喰いきれないくらい、おまんじゅうおマンちょを持ってきてくれるよ』

女は赤スポンジを投げつけた。おれはスポンジを払いのける。そして黒んぼのまわりを踊りまくる。そして女のベッドに倒れこむ。『行きたい。行けない。カーニバルには。地獄みたいな目に会ってきたんだ。母さんを殺したんだ』

『自分で決めたことだろ、ボン』

『一人で行けよ。せいぜい楽しめや。まんじゅう持ってきてくれやな』

『新鮮なホイップ・クリーム持ってきてやっから。おめえの真っ赤な口にドロドロ流しこんでやる。そら、きれいなシーツ持ってきてやったから、これにくるまってな。何も考

えんじゃないよ。なーんも考えなけりゃ、いいことばっか起きんだから。とにかくその濡れスポンジをあたしのベッドからどけるんだよ。今すぐ』

女は行っちゃった。ドアが派手な音で閉まる。娼婦たちは、洗われて、香水をつけられて、男たちから解放されて、階段を降りていった。ニューオーリンズのオウムみたいにぎゃあぎゃあしゃべりながら。

おれは濡れスポンジをベッドから放り出した。

おれは女でおまえは男の子。おまえに要求をつきつけて、あんたが自分を変えるようにしてやる。あんたがききたくない要求。きかなきゃならない理由もない要求。それと。あんた、あたしの息を詰まらせてるんだ。あんたと一緒だと、あたしはずっと不幸だった。愛し合ってるんだから。ただ、お互い距離をおいて、それぞれ本来の自分になれるようにしなきゃ。お互い、無理な注文つけあうのを止めるようにしなきゃ。こういう胸の内の風で目がさめた。光は不機嫌。目がさめたら、右も左もわからない。自分の全脊椎、背中側の真ん中から右にかけて、下腹の奥深く、膀胱とちんぼこの先っぽが灼熱。病気かと思った。何かに耐えきれないにちがいないと思った。天井と、それから空のすべてが胸にのしかかる。おれを押しつぶす。そしてすべてが一本のナイフになる。おまえはいつか、おれをナイフで刺したかった。ナイフは天井から下りてきて腹に刺さり、滅多刺し。ナイフは血の詰まった豚の膀胱を切るみたいにして、おれののどをかき切った。おれは切開された胎盤。あんたの胎盤。それからあんたは、おれとあんたをつなぐ赤い緒を切ったんだよ、ママ。おれを疎外だか殺すかしてから、あんたはおれの口にキスして愛してるって言った。目がさめた。怒りがおれの心を起こした。おれはあんたを殺した。あんたとおれの口を結ぶ赤い血を切り裂いた。憎しみであるすべての感情を切り取った。唯一の自由民主主義のなかで目覚めた。黒んぼ娼婦のベッドで目覚めた。おれの中にある、あるいはおれそのものであるあんたすべて、出てってくれ、ママ！ この都市のネズミがあんたのからだに飛びつく前に！ ネズミどもはこのクソとドブに住んでて人間の目玉にしょんべんかけて血みどろの飢えた歯が赤い唇に口づけ。だから出てけよ、ママ。このしょんべん都市はネズミが所有。ネズミが人間に何するか知ってるか？ どこぞに入りこんでだれかに入りこんで、尻山を滅茶苦茶に広げて、そこに入りこんで切り裂くんだぜ。それが人間ネズミ関係ってもんだ。出てってくれ、ママ！ あんたの心臓と舌をネズミどもが喰いつくす前に！

でも、あんたは出てかなかった。だから、あんたはもうない。だから、ママはもうない。男どもがあんたを殺した。おれは男だから、おれがあんたを殺した。おれがあんたを殺した。

いや、そんなはずはない。まだいるんだろ、ねえ？

『うん』と娼婦が返事。『寝てないのね』

おれは夢からさめた。『うん、寝てない。こっちおいで、お嬢ちゃん』

『あたし、アンティゴネ来年から学校に行くんだ。パリに学校が残ってればだけど』

『おれ、ティヴァイ。自分が何するのかさっぱりわかんないや。何したかならわかってるけど』おれは自分がだれだか子供に告げた。精いっぱい。『ママを殺した。それから傭兵になった。アブホールとつるんでた』

『いい匂いするね。でも、おでこが燃えるみたいよ。病気かなんか？ それでお母さん、戻るまでお兄ちゃんはこちらにいるようにって言ったんでしょ』

黒んぼの女の子は部屋を出た。一面の朝。おれは荷造り。デブというより肉付きのいい少年が部屋に入ってきた。そいつを見たとき、なぜかドキドキした。おれは自分のボロが詰まったポリ袋を持ち上げた。少年をから目がそらせなかった。そいつはマットレスの端にすわった。おれは灰色のポリ袋をおろしてお湯を出した。そいつの汚らしい頭をつかんで湯につっこんだ。軽石でほったと肌をこすってやった。そいつは唾みたいな様子だった。おれのまぶたにさわる。肩にさわる。おれは服を脱ぐ。シャツの下端をさわる指がふるえる。服はびしょ濡れ。おれはマットレスに横たわり、股を開いた。少年は、かつては白かったシャツ以外すべて脱ぎ、隣に寝た。おれの手を取って握りしめる。そいつの乳首に手をのばす。旅を続けてようやく故郷を見いだしたかのように、おれはそこに口づけ。金玉の下に埋もれ、脈打ってるちんぽこに手をのばした。そいつは転がって、おれのからだにのしかかる。胸毛が石炭みたいにチクチク。おれの汚い爪がチン毛に混じるススを見つける。おれの舌が、少年のまぶたと目玉の間の泥をなめ取る。

おれは少年を洗った。汚した。洗った汚した。洗った汚した。唾を吐きかけ派手にしゃぶったもんでそいつは倒れた。おれのボロ入りポリ袋の上に。

拳を握りしめて身を起こし、少年は言った。『いいか。ぼくの子宮で革命はまだうごめいてる。革命は来て、ぼくのまぶたにぶちまけ、汚しまくる。もう真昼だから、革命はパリのあらゆる口に訪れるんだ。最初の乳をなめて吸う者は、人間を超えて祝福される』少

年は立ち上がった。服を着た。ルージュだらけの割れた鏡の前でメイクをする。

そして部屋を出たんだ」

ティヴァイは娼婦に話すのをやめた。

正午に、ガキの群れが不法占拠地を離れた。かつては街の裕福だった地区まで行進。遺棄されたアパルトマンのいくつかに侵入し、家具や装飾品を手あたり次第に破壊。本を燃やす。このクズどもがそこを去ると、後にはクズが山ほど残った。そいつらが持っていたのは、包丁と剃刀だけだったから。そいつらはすべてその金属を自分の肉体に突き刺し、自分の肉体を破壊。クズが山ほど。

「アンティゴネ」とある少年が、自分より若く黒い少女に尋ねた。「おまえって奴隷？」

少女は下唇に通したピアスリングに触れた。「あたしを貫くこの輪が見える？ 下のほうの唇にもあるって知ってた？ あたしたちの生きてるのがそういう社会だと思ってるの？」

「おれは 」と少年ドンは答えた。「おれは自由だよ。革命があったんだ。おれたちがこの革命の本当の子供たちなんだ。この街の行きたいところどこへでも行く。今すぐ。からだは滅茶かもしんない。汚くて、狂ってて。まだおれを隷属させようとする欲望の鏡である自分の思考にくるまれちゃってるもんだから。でも、今なら見える。おれ。おれの目は、今はもうむき出しなんだ」

「冬の終わりには、あたし自由になれる」とアンティゴネは少年に答えた。今や二人ともほとんど元気になりかかってたので、娘の唇はオレンジの花の味がした。少年はシラミだらけの娘の髪をつかみ、その口を精液で満たした。夜明けが精液を光へと燃やす一方、少年のドックマーチンブーツは娘の足指を燃やし少年の口と黒い爪とバッジは娘の乳首の表皮部分をこすり落とす。戦争の昆虫状有象無象が、その表皮の下でうごめいてる間。土はだれの自由？ とアンティゴネは少年のちんぽこをしゃぶりながら考えた。ちんぽこがきれいになると、娘の口は離れる。泣きたいけど泣かなかった。少年の肩にもたれて、少年は酒と一本抜いたのとででへべれけになってて、ドブの泥に倒れこんで暗黒の中に嘔吐……

かれらの不法占拠の家の居間では二組の双子が寝椅子で絡み合いつつ眠っていた。

アプホールの妹オードリーは、黒い空に向かって万歳をした。何かを受けとめようともするみたいに。この夜明けがほっぺたをさいなんてる、と叫んだ。

緑の海草の山の上で、蚊がゆらゆらと眠りにつこうとしていた。オードリーは聖ブブの神殿に触れる。「ブブ、夜明け以来、あたしの中で赤ん坊が動いてるの。この旧世界の最後に生まれる者よ。ネズミが彼女を作ったんだ」

第7章

犯罪性の始まり / 朝の始まり (アブホール語る)

我、この夜明けの創生に、為すすべとてなく横たわれり

そう。アルジェリア革命は成功。政治的な成功がどれほどのもんかは知らないけど。

ティヴァイがどこかはわかんない。地獄のどこにティヴァイがいるのか。このポスト黙示録の混乱のどこにいるのか。あんなヤツ知るもんか、ただの男じゃん。男、特にストレートの男なんて、まるっきり無価値。もはや。成功とちょっと似てる。たぶん、革命以前は、男どもは成功しすぎてたのかも。とにかく、いまじゃほとんどの人間は女。この都市で、女はこれまでとまったく同じ存在。つまり売春婦。いっしょに暮らしてやりたい放題。

こんな社会的、社会化された都市の中で、あたしはミュータントみたいな気分だったけど、どのみちいつだって場違いな感じはしてきてた。この都市では、あたしは絶対的に場違いだった。インチキしなかったから。あたしには性はキツすぎるし、それにティヴァイをまわりに置いて、あいつの根性を嫌うのに慣れてたし。

なんでこの世に女しかいないのかわかってて、一方でなにもわかんないもんで、あたしは自分自身にとってさえ異常な感じ。自分がわかってんのか、わかれるのかもわかんない。

でも、一大決心。もし都市区域にいまじゃヤッピーとミュータントしかいないなら、あ

たしはミュータントなんだ。パリに亡命中の宇宙からのミュータントだから、パリはガラス製みたいに見える。肉を切り裂くガラス。パリは血みどろ都市。ミラーガラスの四角いブロックが、全長の四分の一ぐらいのところで、黒ガラスのビルのと交差してる。ミラーガラスの一部は、それから人工芝の四角い切れ端が、赤いコンクリートの噴水へと傾斜して下る。この「新ブルジョア労働者のための公園」は一見漠然と、整然と世界最大の銀行にへと連続変化していった。銀行の下には、不透明なすりガラスの無名の建物があった。「無名」ってのは「役にたつ」ってこと。この建物の奥深さは限りない。

ポスト工業化社会で、革命が都市の建築を変えたりできるのかな、と思う人もいるかもしれない。あるいは建築に限らず何でも。

街路はいまや車の所有物だった。車はいまや、本物の(政府の)仕事を持つてるやつらの所有物だった。売春婦はだれも車なんか持ってない。目に見える世界にほとんど女しかないのはこのせいだ。企業で働く男たちは、企業内か、あるいは鏡張りスタイロフォーム車を運転して企業間を行き来して時間を費やしてたから、もう目に見えなかった。つまりは死んでたってこと。

西欧世界の都市部は死者とミュータントで構成されてた。自分がどっちだかわかんないもんで、あたしは発狂寸前。

ティヴァイは消えてた。友だちがいるってどんなもんなのかしら。いなくなる友だちってのは。人間のアイデンティティって、友情とともに始まり、友情の中で始まるものだと思う。

あたしはだれでもなかったんで、ってのすらはっきりしなかったんだけど、あたしは緊張病。あたしが何をしようと、だれに何の関わりもなかったから、死人にも外人にも関わりなかったから、髪を切らなきゃって決めた。やっぱ腕を切り落とすのに次ぐステップだよ、髪を切るって。腕を切り落とされるのは犯罪者だけ。アルジェリア革命の前には、パリには男用床屋と女用床屋しかなかった。女用髪切り屋が女の髪にすることったら、トリム、パーマ、スタイリング、イタズラ、それからシリコンで固めるだけ。アルジェリア革命がなに一つ変えてないのがわかった。どんな時にだって、ニヒリズムに走る理由はあるんだから。

ここで問題なのが、見つけた髪切り屋に髪を切るよう丸めこめるだけのフランス語をいまだに知らないってこと。切れ。切れ。切れ。ほとんどの髪切り屋はまだモラルなんぞを

持ち合わせてた。革命家って、いつも純潔主義者ばっか。自分のモラル無視のおかげで、やることができた。いつもと同じことをやる。ちょうど蜂が蜂蜜に向かってその蜂蜜を女王蜂に持ってかえって殺されるみたく、あたしは街の一番スラムっぽい地域を半ば駆け、半ばふらついた。船員たちのいるあたりを。一つだけ確実にわかってた。この世には、右翼だろうと左翼だろうと、いつもスラムがあるってこと。右翼の場合、中の上階級の住宅いがいの場所はすべてスラム。あたし、北に向かった。

庭もなけりゃ離陸する飛行機もビルもなし。なにも。あたしの心と同じ。ティヴァイは消えてた。髪を切ってくれる髪切り屋を見つけた。彼女の店「射」の正面には、灰色のベネチア・ブラインドが三つ。ブラインドの前にひもでぶら下がったはさみが、「射」の目的を示してる。ブラインドは手術室を隠してた。ちょうど外側で天井からはさみがひもでぶら下がってるのと同じように、内側では灰色の手錠が天井からひもでぶら下がってる。いかなる場合にも、客は自分の髪をさわることが許されていない。白壁の一つには、黒コルセット姿で目隠しされ、レーザーの拘束器具で手錠をかけられた女の白黒写真。

この手術室の中にいると、落ちつけた。夢を見はじめた。その職業のため、娼婦じゃない数少ない女だったその髪切り屋は、ずんぐりしてた。髪は死んでて、真っ白。夢を見てた。どんなふうに切ってほしいかときかれて、あたしは答えた。「あんたの」。真実にはいつも意表をつかれる。

あたしの髪を剃り落とすまで、彼女はあたしが何を、だれを求めているのか二度ときかなかった。

彼女はあたしの黒髪のほとんどを剃刀で二分刈りにして、一度も肉を切らなかった。それから残った毛皮に線を刻む。「どんな具合か鏡で見たい？」

「ううん」自分自身を認識できたこともないし、したくもなかった。

まだそのレーザー椅子にすわってた。彼女の大きな手があたしの頭を押さえてる。それから、何かほしいかときく。何ってのはいつもだれってのと同じ。

「なら行きなさい」

あたしは馬鹿だから、欲しいものを手に入れるためには欲しいものを口に出さなきゃダメだったのを学ぶのに、半生　政府と見れば政府からくすね、悪い政府だったけど、ボスと見ればボスを殺し、流血と見れば、あらゆる人間存在のレベルで血を血で洗うような革命　かかった。欲しい者を。ひょっとして人間の欲望が口に出されたら、市行機、監

獄、建築的鏡は飛行機みたく離陸するかも。黒い飛行機が夜の大气と風の中へと離陸し、お互いの横や後ろをすり抜けあい、突進し、風の赤みの中で旋回に旋回を重ねて、生き生きと、決して戻らない。赤い爪が生ける肉の空を引っかく。もしあたしがあの時点で髪切り屋に話してたら、あたしは自由になれたかも！

自由ってことばはあたしには無意味。あたしは去った。瓦礫の山の横を歩くのはパニックそのもの。瓦礫はティヴァイの思い出だったから。ティヴァイが相棒だった頃はいつもパニックってたっけ。

覚えてる。あいつはあたしのボーイフレンドだったかもしんないし、そうでないかも。あたしを気にかけてくれたし、くれなかった。あたしが与え、あいつは奪ったので、すべてがあいつに関係。すべてがあいつに関係してたから、あいつがあたしについて思ったことは、すべてあいつにも当てはまった。あたしは自分が何でもないのを覚えてたから、あたしの記憶は何でもない。

記憶することは戦争を打ち破ること。

あたしたちは傭兵で、だから敵対者どもの世界に生きてて、相棒だったから、あたしたちの相棒性は敵対するものだった。このパートナーシップ、生死に関わるパートナーシップの特徴は、あらゆる可能な瞬間にあって、お互いを傷つけあい、滅ぼしあい、恐れあつてること。相棒だったから、直接には相手を攻撃しない。相手のほかには相棒がいなかったから、二人とも、相手のそれぞれの攻撃の現実性から逃げ出す道はなかった。

たぶん異性愛を思い出してたのかも。思い出すってのがどれほどのもんかは知らないけど。

もうなにも覚えてない。記憶を失ってみると、現実も消えたのがわかった。だれもいない。パニックった。感情もない。泣かずにすんだ。身中、胃と腸がボロボロになるほど泣いてたし、血も泣いて、静脈動脈から滴って、行くべきでないところへ入りこんだから。からだは風でふくれあがる。その風はあたしの爪みたいに赤い。物質的涙も、肉体の涙も、どっちも気を鎮めてくれないし、決して癒されることもない。

もちろん、時はすべてを癒す。人間も。それはつまり、訪れる時である将来は、決して現在ではないから。すべては将来に起きるから、現在のあたしは無。

あたしは現存し得る唯一の終わり。もしあたしが現在に至るまで終わりなら(そしてその通りなんだけど) 将来は人の涙には終わりがない。

現在以外のとりあえずの可能性すら見えなかった、ってことはつまりお先真っ暗ってこと。ティヴァイは消えた。あたしはパニックる。

船員が街のいたるところに登場。お互いを小突きあってる。光の闇の中ですら、今不在の太陽 からの余熱の中ですら、そいつらの刺青がギラつく。

ずっと船乗りになりたかった。

表現の正しいモードを要求するのはアホらしいこと。だったらみんな、なぜ表現の正しいモードを探し回ったりするの？ あたしは社会政治的パラダイスでも探してるわけ？ あらゆる行動は、表現行動も含めて相互依存的なんだから、絶対的パラダイスなんか有り得ない。理論通りにはいかない。

歴史を通じて、多くの普通人たちは、船乗りは不道德だから火あぶりにしちゃえばいいと思ってきた。アルジェリア革命にも関わらず、これは今でもそう。それと少数の人がいて、これは昔もいまもそうで、その人たちは人間のカスで、靴底の溝にい隠された犬の工サみたいなものだけど、船乗りの毛は銀色でチンコはでかいって言う。女だ。だって、いままでは船乗りの一部は女だから。

船乗りを嫌って唾を吐く連中は、船乗りがチンコ持ちだと同意。船乗りがでかいチンコを持ってるのは、船乗りがこっちの道徳的社会を乗っ取ろうとしてるからだと言う。船乗りたちは、飲んだくれた通夜に無法を後にする。船乗りの左手がポケットに突っ込まれてるのはそれがナイフだから。手のナイフは法のナイフをそぎ落とす。

あたしに言わせりゃ船乗りってのは憎しみだらけの貧困から出てきたやつ。船乗りは貧困に唾し、糞をひっかけてきたから、最悪の貧困が心の貧困だっただのを知ってる。良き船乗りは、物質的な質素さを信奉し、実践してるので、これが心の貧困を否定してる。レーガンの心は空っぽ。船乗りとは、貧困と引換に想像的現実の豊かさを手にいれた者。

こういう行為は社会の破壊を含むので、したがって犯罪だ。犯罪者で、絶えず逃亡していて、家もなく、財産を軽蔑し、天気のようにうつろい易く、船乗りはあらゆる地に縛られた生を崩壊させる。殺された者は殺す。こいつらを信用しちゃダメ。船乗りは港ごとに愛人がいて、愛し方を知らない。あらゆる船乗りのケツには、ハートに重ねたハートの刺青。

船乗りは家を渴望するけれど、やつらが本当に愛しているのは変化。変化の安定性、あるいは安定性の変化は、想像の中でしか起きない。船乗りの墓には薔薇は育たない。

この長き夜は恐怖を呼び覚ます。今宵は風のように獐猛な感情をもたらした。空を見ると、風が犯しあう。あたしも犯し犯されたかった。低層建築と小道の陰を、船乗りがさまよっては出入りするのを見つめた。あたしが恥ずかしくて自分では探せないでいるものを、ズバリ探しては見つけてる。あたしことアブホールは、自分から行動できなかったので、連中がセックスするのをながめてた。

街は霧と花崗岩で、風化して淡いピンクになってる。昔、お母さんに着せられたみたいな感じのもの。船乗りどもはあたしが(少なくともまだ)決して敢えて出入りしない場所にいた。そいつらは、ほかの人間が絶対にさわろうとしない人間なんだから。

この港のすぐ外では、復讐号がスレートの上に鎮座。スレートってのは長いクソの切れっぱし。死の海のすぐとなりのところの土地は、税関の土地で、無人の土地だった。死地。海軍の犯罪犯罪はほとんどここで起こっている。

通関ラインのすぐ向こうには、幾度となくぶちのめされた^{ばあ}婆あ、今ごろは岩山あだろうけど、昔はヘロイン漬けでそのうち肉がコチコチになって、まるでヘロインが海にとってかわった老水夫みたいなその婆さんが、店を構えてた。掘建て小屋。こいつは未来を占ったけれど、占われるやつの唯一の運勢といたら、未来なんかない都市での生ける死だけ。こんなサービスのために、クズどもは犯罪で得た金を老婆に渡した。トランプでこの死の旋律を語ったけど、そのトランプは汚すぎて絵柄なんかまるで見えなかった。岩山、と呼ばれてたこの婆さんは、いつも同じ占いをした。あなたは恋に落ちるでしょう。暗い見知らぬ人に用心なさい。あなたは異国で重病のため死にそうになります。すべての札の片側には、みんな同じ絵が描いてあって、それははだかの若い娘の絵で、超巨大なおっぱいと、^{ちくび}血首をしている。

自分に運がないのは知っていたから、運勢を語ってもらおうと婆さんの店に入った。あたしはいつもは男物の服を着る。なぜかは知らない。フロイト主義者じゃあるまいし。その時は、海軍大尉の衣装を身につけてた。コペンハーゲンのパンク古着屋で、虫に食われた死んだ動物の毛皮と交換したんだ。デンマーク人は動物が大好きだから。このパンクは十一年前に死んだ。婆さんは、あたしをチラと見るなりセメント上の足の下にトランプをおいて、それを三回蹴とばした。カードを切るにも、いろいろやりかたがあるもんだ。あたしは道徳家じゃない。それにこいつ、ずいぶんぐうたらな売女なんだろうそれから。婆さんは、それからカードにつばをかけた。いま灯いてる、暗いはだか電球一つ以上の光が

あれば（いまだってほとんどなかったけど）そのツバは緑色だっただろう。ツバは多過ぎて、むしろよだれだった。なんか言語みたい。「大尉さんの問題はだね、苦労知らずの坊っちゃんだったことだね。考えんのは酒とダチのことだけ。そりゃ女の子を前にすればちゃんと立つだろうよ。それで、やさしいキスの雨を降らせて、シーツを相手のほっぺたまで引き上げてやるってわけだ。頭のなかでは。すべてが終わってから。いつも終わるのは早すぎるか遅すぎるか。大尉さんはいつもひとりぼっちだ。ひとりぼっちの度が過ぎて、自分とひとりぼっちとが同じもんだって気がしてくるんだよ、大尉さん」

この婆さん、明らかにあたしのこと勘違いしてる。

「質問をどうぞ」と婆あは吐き出す。

いつか　そう、いつの日か　おれは、この腕の中に、その女らしさと男性的強さを頼れて信頼できるような女を、はだかでの腕に抱き、そして抱き続けて抱き続けるなんてことはあり得るのかしら。その気性と勇氣によっておれの評価の最高位に位置し、おれがその足元にひれふして、その女のいいなりになりたい、と思うような女をこの腕に抱くことがあり得るのだろうか。あたしはおれの尋ねてることを敢えて信じることすらできなかった。自分自身を敢えて信じることすらできなかった。

「大尉さん、自分の性的欲望を抑圧しようとしてるね。その偽のちんぼこをさ。大尉さんは境界線を越えないように頑張ってるけど、孤独以外のものを体験したいなら、境界線を越えなきゃ。快樂か苦痛を体験するには境界線を越えなきゃダメさね。快樂と苦痛ってのはいつもないまぜだから」このことばの優しさはおれを圧倒した。自分がもう男なんかいらぬのがわかってたから。腐りきったジブシーが言う。「あんた、これで自分の腐りきった状況がわかっただろう。あんたの目下の状況ってのは、おまんちょしたくてたまらないもんだから腐りきってるってわけ。さあ、水兵さんよお、金はいくら寄越すつもりだい？　船員ってものの限界くらいまであんたは腐りきってるよ。船員ってのはかなり派手なところまでいくもんだけどね」

「もっと教えてくれ」

すると、齒と口の腐れた真紅の口紅の筒をもってセメントに王冠を描いた。この王冠の左にはだかの女を描いた。女の胸はすごくでかくて、自分でその上にすわってるみたいに見えるほど。「あんたが欲しいのはこれだよ」腐りきった婆あはゲタゲタ笑った。「この娘がでっかいオッパイ持ってるから、あんた気が狂うほど焼き餅焼くよ」

あたしには恋人なんかいないと言いたかった。孤独な者は決して嫉妬をしらない、知るの絶望だけだ、と言いたかった。だって、孤独な人間 船乗り が他人に対して起こすあらゆる行動は、船乗り自身に濡れた布みたいに投げ返されるから。海は冷たかった。

生き延びるために船乗りの筋肉は巨大でなくちゃだめだ。おれも過去には嫉妬や愛を知ってたかもしれない。でも、それは過去。過去は死んでる。ティヴァイは嫉妬の原因じゃない。ティヴァイは死んでる。おれは叫んだ「このコーマン女め」

女たちはコーマンきめてなかった。

「このコーマン女め。セーヌ川を死が漂い流れてる。あんたの言ってる未来ってのはどこにある？ あんたの言ってる運勢とやらはどこにある？」

「あたしが言ってるのはあんたの過去だよ」女はカードを一枚めくると、汚れ越しに墓に横たわる船乗りが見える。微笑んでるように見えた。「あんた、人生を賢く立ち回ってきたね、大尉さん。ちょっと賢すぎたかもしんないよ。それだもんでこんな状況になっちゃったのかもよ。生き残るため、だって人生はそもそも生き延び得ないもんだし、知り得ないもんだし、それを言ったら人間が左右できるもんでもないけど、それってのが何なのかはさておき、あんたは自分のも他人のも、あらゆる欲望に対して自分の意志を留保しなきゃならなかった。あんたの意志は強くてセクシュアリティは抑圧された。

でも、海の運んでくる夢は？ 忘れたのかい、大尉さん。魚の想像って何？ 忘れたのかい、大尉さん。生き延びるために自分の一番いいとこを捨てちまわなかったかい？ それがあんたの過去。船乗りの墓には、薔薇なんか生えないんだから」

同情を勝ち得ようとして相手の腐ったふくらはぎに手をおいても、婆さんの顔には何の感情も現れなかった。おれとやりたい気にはなりそうにない。子供のころ、父親に強姦されたと言う。婆さんは後ろめたさもなく強姦をそそのかした 父親を誘惑したのだという。「過去なんかわすれちまいな。現在のことをきいとくれ」

婆さんの外で夜は赤と紫の血。船乗りがみんなしてお互いに犯しあおうとしてた。

おれはどこへともなく手をどけた。「髪切り屋に戻るべきなのかな」

「あんたの心は破れてる」

「今に始まったことじゃなし」

「あんたの心は破れてる。現在のところあんたはだれも愛してない。だれもあんたを愛

してない。関係性を持たない人は、海に迷ったようなもの。迷いすぎて波が生ける壁みたいに跳ねそびえ、見通すこともできない。あの戸口の外をみてごらん」外では夜が赤と紫の血。船乗りがみんなしてお互いに犯しあおうとしてた。

「ほかには何を知りたいね？」

おれはこの街の影が恐かった。船乗りのつめの影が、アリの影が、管理のナイフの影が恐かった。婆さんには現実を語って欲しかった。何をすればいいのか言って欲しかった。あたしは二人の人間だったにちがいない。何千という人間だったにちがいない。あたしが欲したのはズバリあたしが受け入れられないもの。「ジブシー、おれは夢の源を知りたい」

やっと、老婆とおれとはどこぞに向かいつつあった。夢を見てる船乗りみたいに。どこぞってのはどこでもないんだけど。

「あんたがここから出た瞬間、人生はすべて昔のままになるよ。ずっと眠ったまま。眠ると、あんたは自分に恋人がいるって夢を見る。彼女はいく寸前。いつもいく寸前。彼女の中で発射しようと苦労するあんたのからだ、あんたの目をさますんだ。あんたがいきなり引き離されたこの女に比べりゃ、その他すべての人はよそよそしくて現実離れしてる。だって、あんたの尻はまだ彼女の重みで痛み続けるからね。もしその女が、あんたが目覚めてる人生の中の女のだれか、それとも数人にたまたま似てたら、あんたは起きてる間じゅう彼女を探し求めるんだよ。船乗りが冒険の旅に出るのは、自分たちが単に想像しただけの都市を、実際に見るためだけだから。人は普通、自分の妄想の中だけで自分を惹きつけたものを、実際に見て所有できるもんだと信じてる。この愛の記憶は溶解してあんたは愛なんてものの存在を忘れちゃう。この溶解の後、あんたが探し回ったところの人々つまり船乗りだけが、あんたの知ってる人々になるのさね」

婆さんに、船乗りなんか知らない、と言った。「だれ、それ？」

「セックスはあんたを厄介ごとに巻き込むよ」

「どういう厄介ごとですか」

「あんたの厄介ごとはもうたくさんだよ。出てっくれ」

町は霧と花崗岩で淡い灰色に退行してた。およそ四十年前、港は旅行者や、広大な国際船舶貿易のもっと高価な部分を受け入れていた。淡緑と淡いピンクのアール・デコ様式ホテルからは、ハリウッドの映画スターさえ登場してビーチに向かったが、そこはやがてゴミへと変態をとげ、その白さも己自身のスーパースター性に比肩するほど。夜には色彩は

ない。今日、グランド・ホテルの名残の階段で、車椅子にすわってるのは、唯一の思い出がスティーブン・キング小説であるような白人老人が数人だけ。夜になるとその老白人は消えた。アートの残骸の下、海軍と商船員団のメンバーが路地にたむろしていた。ジブシーと刺青アーティストが木のスレートやアルミシートの後ろに隠れていた。この犯罪の崖っぷちにいるカスどもはみんなキューバ人。ほとんどすべてのトイレや小屋、バーは役立たずのフェティッシュであふれていた。ロウソクや人形、人魚になって決して船乗りとセックスできない聖処女マリアの肖像。キリストの傷は、クソの色で、大地に流れ込んだ。夜はキリストの茶色の傷。

キューバ人の双子がパリの船員地帯を支配してた。船乗りなのは片方だけだったけど、二人ともまったく同じ服装。巨大なふくらはぎの筋肉が、軽くフレアしたズボンのすそから飛び出している。ほんとに男の船乗りはわずかしかなかったけど、彼らはその一員だったから。きっかり三分だけ年上のアゴーンは、子供のころ、ガキがバレリーナやおまわりさんになりたがるのと同じで、犯罪者になりたかった。歳を経るにしたがって、アゴーンはますます、自分がなれないものになりたくなった。というのもアゴーンは、双子の兄弟と同じく、真のアーティストだったから。二人して、ありとあらゆる安っぽいキューバ喫茶店の室内にフレスコ画を描いてまわった。二人のフレスコ画は、つばの広い白帽子をかぶったボン引きが黒い車に乗って、金持ち白人を待っているところを描いていた。その白人は何重にもなってソーセージみたいに垂れ下がったあごの皮をして、ヘロインをティーンの売春婦に売りつけてる。その売春婦のあばたは、チカーノやキューバ人に、この白人世界の終焉を告げていた。双子のフレスコは、チカーノ・アメリカの記憶だ。

アゴーンはこれ以上は犯罪者になれなかったので、海へと逃げた。

パリの革命は中流階級のほとんどを駆除したけれど、中流オマワリは残ってた。このオマワリどもは、ずばぬけてアホだったので(人間、オマワリになるにはアホさ加減の試験に合格しなくてはならない)、ポルノ業者やソープ労働者、街娼、ホモなど、都会の隅の物陰で公然と「性犯罪」を行う連中を主要な(もっと言えば唯一の)敵とみなした。一方で、世を忍ぶホモはオマワリどもの英雄だった。それどころか、オマワリの半数、つまり猥褻物取締法を自分たちの存在意義の中心に据えている連中の半数は、世を忍ぶホモだった。このコンクリートのような抑圧の下で、船乗りとオマワリはお互いを愛しあった。

船乗りになった途端、アゴーンは弟と縁を切った。この弟は映画の仕事をしていて、映

画のために銃をデザインしていた。かれはついに、兄貴は変態で犯罪者であるという信念を抱くに至った。だから、オマワリどもにネタをつかまれた、とアゴーンが思ったとき、かれは完全に被害妄想だけだったわけじゃない。

船乗りになった途端、アゴーンは弟との縁を切った。アゴーンは毎日同じものを着ていた。軽くフレアしたズボン、もっとも敏感な足でもクッションできる巨大な黒い船員靴、黒いウールのセーター。何を着ようが気にしなかった。服では十分な犯罪者になれなかったから。社会はその孤独な者、つまり性的変態を嫌ってつまはじきにするから、アゴーンは自分の孤独に匹敵するだけの犯罪性を絶対に見つけられなかった。

あたしが最初にかれを見かけたのは、髪切り屋の近くのバーでだった。なんでアゴーンをつつまわし始めたのかは覚えてない。あいつが自分の力を知ってたせいかも。微動もせず立ち尽くして、その他残りのミュータント人、その他残りの現実が自分のまわりで展開するに任せてた。かれの奥深くには微笑。あたしの中には自分の夢の記憶。

自分の夢の表情を見極め始めたのは、不思議なことに、あるいは何の不思議もなく、この場所だったのかもしれない。バーにしてはうるんすぎるこの場所。偽のガラスシャンデリアが天井からぶら下がってたけど、その天井も、ところどころは赤い灯よりも下まで下がってる。トカゲが脱皮中。赤いベルベットと乾いた尿の庭に乾いた錆とゴキブリが(生きたのも死んだのも)巣食ってる。ひょっとして火星人がいるかも。その「バー」は虚偽と死のごった煮で、革命以前の富の鏡だった。今は船員バー。

船員の一人が、色を上げたせいで、彼女の熱いウールのコートのボタンをはめていた。船員の一人は、巨大なサファイアと真紅のヒョウを彼女の尻に刺青してあった。アゴーンはここでのみ心やすらかだったんだ。なぜ？ なぜかれは自分が化け物なのを知っていたんだろう。後に話してくれたところでは、子供のころ、かれは近親相姦の犠牲者だったんだと。「ほとんどの女と同様に」。あいつのせりふの大半と同様に、こいつも信じていいものやらかんなかったけど。

あいつの自分と世界に安らぎ対する安らぎが欲しかった。あいつの尊大さが、この世に存在する能力が、ポケットに手を突っ込んだような気楽さが。どっかへ行く方法を教えて欲しかった。あたしの知ってて知らない場所へ。あいつはあたしを犯罪者へと導く糸でありアリアドネでもある。

昔は自分が迷える存在だと思ってた。これはあたしが妄想したことじゃない。あたしに

性欲がないこと。真の性もアイデンティティもないこと。もしかして政治的に操作された迷路に迷って。ただアゴーンの肉体的存在がどういうわけか、あたしのでありながらあたしが全然知らなかった性を反映し、示してた。アゴーンのせいで、あたしはもはや無じゃない。いまやだれかになる途上。犯罪者に。

アゴーンの手にしがみつikitつ、あたしはドロドロの河の世界に入り込んだ。アマゾン。そこではジャングルがやたらに絡みあって、ほとんど無用の長物の、ハゲタカの翼は巨大になってた。あたしは心の果てしない領域に入り込んだ。一瞬、怖くなった。かつて自分が否定した自己を発見したからじゃなくて、自分に訪れているこの平成が、偽物なのが証明されそうだから (すでに見えてはきていたんだけどね)。このためあたしはアゴーンを必要としてた。あいつが異人であり続けるにしても。

バーで、あたしは自分が夢見たあの女の子とを思い返す。あたしは彼女の何を求めているんだろう。彼女が女性的でバイク乗りだったら、崇拜しなきゃ (やだ、そこまでバカなものなんか要らない、そこまでおっかないものなんか!) ホントに崇拜しなきゃ。年季の入ったライダー並みにタフなら! そしたら、どうすればいいか聞くのに!

船乗りはバーから通りに出た。これに気がついてあたしがパブを後にした頃には、もう消えていたカモメが二羽後尾中。下のカモメはまだ形をとどめている残りわずかなアルミ屋根にとまった。翼を広げて、飛んでるみたいに空めがけて傾けている。もう一方のカモメは、雌の首の下の毛皮にツメを突き立て、その背中によじのぼった。燃える太陽の下のわらの山。雄はバランスをとるのに苦労していた。尻尾を左右に振って、メトロノーム状にチンポコを出し入れしていた。羽がこすれあう。その動きが二〇分続いた。雄は背筋を伸ばし、翼を広げて叫んだ。下のカモメは一度たりとも動かない。雄はその背中からころげ落ちる。雌は微笑を失い、混乱した様子だった。

まだ男物の服を着たまま、あたしはまだ人間の性が残っているのかどうか思案した。人間の性欲があるのは確かだ。だって、欲望こそ人間を海に駆り立てるものだから。

港のこのあたりで最大の娼館の玄関は、無人だった。そのマダムが、一人で部屋に入り、レミー・マルタンを一杯飲む。四十歳くらいで、ボディ・ビルをしてたから、そこの二十歳の連中よりいいからだをしてる。過去五年、アマチュアコンテスト七つで入賞。茶色と赤の髪が首のあたりでカールしてる。月経は止まっていた。

彼女はそれを考えていた。ウェイトリフティングか、中年のせいにちがいない。もう二

度と血を流さないのかも。血におさらば。月経は性愛と同じなのかもしれない。彼女の手は、トランクスの生地ごしに陰唇に触れる。

マチルダはまたマンコを剃りたがってるね、とマダムは思った。(マチルダはマダムの愛人だった)。クソ。頼むから電気カミソリを使っとくれよ。脱毛剤ってやつは塩酸よりたちが悪いからね。普通のカミソリは毛といっしょに肉まで引っっこ抜くし。あの娘、また怪我するよ。なんだって女はこんなに自虐的なのかね。マンコども……

あまり近くを剃らないように今すぐ言ってやらなきゃ。外陰唇には近寄るなって。

ちょうどマダムが、自分の考えに浸りすぎて、すぐにでも友だちんところに行かなきゃ、と思ったとき、アゴーンが内側の戸を叩いた。

「ボス？」

アゴーンはボスの返事も待たずに部屋に踏み込んだ。ボスは船乗りの完璧な尻にさえ目をやらなかった。

「死母さん」アゴーンは自分で考えてた。「死母さん、現実ってのがぼくの望みに逆らう以外の何かだって信じられる前に、あんたは死んじやったね。ぼくの望みはあんたを愛したいってことだったのに。死母さん、怯えないで」だれかほかの人のことを考えてたんだと思う。だってマダムはだれもこわがってなんかいなかったから。「ぼくは全然治ってない。船乗りになっちゃったから。治療不可能なのかも。ぼくは、ホームレスという領域に取り囲まれた壁で、天候に鈍感なんだよ。それでぼくに残された人間的な部分(欲望)は夜の小道の影みたく、おぼろげな小便まみれの壁をすり抜けてくんだ。

最後には、ぼくが人間じゃないからってんで、どっかに連れてかれちゃうんだ」と船乗りは考えた。「ガキの頃、やつらはおれに網をかぶせようとした。おれは逃げた。あいつらの規則から。おれは死んだ魚みたいに沈んだりしない。するとやつらは偽善的な愛想笑いを浮かべておれを連れにきたんだけど、その笑いでサメの深紅の歯があらわになってた。とうとうおれを捕まえると、やつらはおれを手術台の上に広げた。いつもはキュウリのサンドイッチとお茶菓子だらけのとこ」

「ブツはいつくるんだい」とボスがたずねた。

「やつらはおれの耳にロウを流しこんで、やつらのせりふのウソが聞き取れないようにした」

「ヤクをおよこしたら。届くまでどのくらいかかんの？」

アゴーンは我に返り、自分の立場に気がついた。金を手に入れるために、言われたことをやしないと。これが大嫌いだった。この女が。自分自身が。かれの存在は硬直してた。「ヤク？」

「ちがうよ。あんたとセックスできるようにコンドームをおよこし」

「調達してくる必要があります」アゴーンはつい「旦那」と言いかけた。

マダムは自分の使用人をチラとも見なかったし、船乗りは怒りで硬直しすぎて何も見えない状態だった。お互い、相手に向かって別世界からのことばをしゃべってたわけ。マダムはもうたくさんだと思った。「もう結構」と彼女は背中^の筋肉を向けた。

船乗りは懇願。「ぼくを見捨てないで。なんとか調達してくるから」

自分が引き立てられて、八つ裂きにされるところを想像。縛られたかれは、薔薇の叫びも聞こえなかったし、捕まったヤクの売人たちの目玉がくりぬかれる時の「ポンッ」って音も聞こえなかった。目がくりぬかれて捨てられた。なぜなら社会がかれらをうち捨てたから。

アゴーンは考えた。生存は不可能。生存が不可能なのに生き延びるのは可能じゃない。飲んだくれなきゃ。生き延びられるように金を調達しなきゃ。ヤクを通関させないと。そのためには、おれは自分が見てるものが見えない。感じてるものが感じられない。牢獄の鉄格子が見えない。この牢獄の鉄格子が感じられない。娘に目玉でたばこをもみ消された老女の叫びも聞こえない。

おれに残された生きた肉体が夜の小道の影みたく、^{インター}国際ゾーンとフランス領を分けるおぼろげな小便まみれの壁をすり抜けてくのを聞かないようにしないと。

アゴーンはすごく弱々しい気分でボスに言われたことは何でもやる状態になってた。

娼館を後にすると同時に、かれは強さを回復した。金のために自分自身を嘔吐していたのだ。「おれは吐けるだけの強さはある」とアゴーンは考えて、こうして自分の自身をすべて一つのユニットにまとめあげることができた。「死母さん、怯えないで。あなたの息子は麻薬とエルメスとサメディ男爵の保持者なんです」この犯罪性は、ビジネスマンや社会の犯罪性ではなく、どこにも所属しない者の犯罪性だったので、自分が圧倒的に孤独だったことをかれに思い出させた。税関の壁は突破不能。かれは人間で、絶対的に孤独。

コンクリートの道を数分歩き、それから曲がって別のコンクリートの道を進んだ。あらゆる通りは同じ。ボスどもの性質って何？ 足元で、道が次の道へと漂うにつれ、不快な

考えも次から次へと漂っていった。ボスどもの性質ってのは、どんだけ必要があろうと、自分たちのほしい物や人を何でも手に入れること。どこにも所属しない者たちは、金持ちやボスどもに反逆すると思うだろう。持たざる者は自分が持たざることを知るべきだ。持ってるやつがいるってことを、そして持ってるやつらが自分たちを支配してるんだってことを。そうとも。だれもムシケラなんかにはなりたくない。ボスなんかほしくない。でも、ファシズムを権力の座につけたのは、まさにドイツの腐った大衆だった、とアゴーンは考える。そしてアメリカでも、中流階級の安楽から下層階級に、あるいはむしろ無階級の停滞に追いやられつつある階層こそが、たとえばレーガンを権力の座につけ、多国籍企業に目いっぱい門戸を開いたんだ。

あのボスは裏切るぞ、とアゴーンは理由^{まじっ}付ける。自分が知ってる事件を思い出した。六十年代後半、またはアメリカだ。アメリカってのはいい加減に消えないもんだろうか。バカなヒッピーどもはメキシコとの国境を越えて、クールなメキシコ人たちと遊んでヤクを手に入れようとしてた。かれらはそこで大麻がほとんど自生してるのを発見。メキシコ人たちはいつも喜んで売ってくれた。それからメキシコ人たちは税関に通報する。バカなアメリカ人たちがアメリカとの国境に戻ると、税関はドラッグを押収し、ガキを牢屋に放りこむ。メキシコ人たちは大麻も取り返せるし、アメリカの親たちが愚息どもを牢から出すのに払わねばならないお金も手に入った。ここにはモラルがある。アゴーンはかぶりを振った。子供なんか作るもんじゃない。メキシコ人の売人は、ヤクの取引の金と、税関からタレコミ料として支払われる報酬を手に入れるわけだ。

売人とおまわりは、いつも組んで働く。こいつらはボスだから。ヤクが悪いのは、それがボスだからだ、と船乗りはこじつけた。

見下ろして、ドブに湿けモクを見つけ、その子を救出すると、ついていた犬の糞のカケラをはらい落とし、火をつけた。でも、おれはどうなる？

もしおれがボスのために税関をごまかしてOを密輸したら、なんであの女はおれをハメようとする？ アゴーンはこじつけた。もしあの女がブタどもにタレこんだら、あの女はヤクを失う。あいつは娼婦だけど、バカじゃない。ヤクをだまってバカなマッポにくれてやったりはしないだろう。それに、あいつ自身が当然ながら法のやばい側にいるから、したがって自動的にあらゆる罪状で有罪ってことになるから、おれをタレこんだりはするまい。自分も危険にさらされてるから、サツを手なづけなきゃならない。たぶん、寝てやっ

てるんだろう、あの売女め、無料で寝てやってるんだ。娼婦としての性質^{さが}なんだよ。船乗りの左手は、髪の毛でない毛をかいた。もしおれのボスがサツに協力してんなら(してるにちがいない、愛人がサツなんだ)世界での自分の地位を保つためだけにでも、おれを売るだろう。世の中ってそういうもんだ。ボスってのはそういうもんだ……

船乗りの左手は、髪の毛でない毛をかいた。Oは邪悪なのかもしれない。だってOがおれを引っ張って先を見るや。一方のボスどもはといえば……このボスの一件はもっと考えてみないと。マダムはボスはサツ。マダムはやつらに支配されてる。どうやら被支配層のイデオロギー構造が、そいつらが支配され続けるのかどうかを決定づけるようだ。だって、女はいつだって「ノー」と言えるんだから。娼婦は。さて、ちょうど被支配層のイデオロギー構造がそいつらの将来の政治経済道徳的な立場を決定づけるように、おれが自分のボスとの関係をどう見るかで、おれとボスとの関わりが決定づけられるんだ。こうした思考が船乗りの頭の中で、覚醒剤^{デックス}にイカしたハムスターみたく堂々巡り。ボスがボスなのはあいつの言うことにおれが従うからだ。あの女がおれに命ずることは犯罪だから、おれは……お先真っ暗。

かれの思考は、思考だったから、どんどん巡る速度を増した。やっとわかったぞ。Oの密輸で、おれはヤク漬けの WASP どもの真っ只中に入りこもうとしてるんだ。まっすぐに監獄へ。ま、いいか。とりあえず、おれたちは、おれたち船乗りは、ボスをふっ飛ばそうにもどうしようもない。

船乗りの左手は、髪の毛でない毛をかいた。頭のまわりの霧はいつになく濃かった。また弱さに、悪に負けてしまう。ボスの命ずるままに行動する。Oを密輸する。世界は邪悪に、ただの戦術に、ノウハウに還元された。

もはや決断はない、と苦悶^{アゴニー}は考えた。この終わりなき多国籍資本主義の成長の中では、何一つとして変わることはないから。

霧は放置されて灰色に変色した精液みたいに濃かった。

さて船乗りはこう考えた。やるなら夜だ。明日の夜にやるぞ。たぶん霧が出る。絶対。おれは霧の中をほかの犯罪者の群みたいにすりぬけて、壁に到達する。壁はそびえたってる。みつけるのは簡単だ。逃げ出すのは難しいけど。通り抜けるのは難しいけど。壁をつたって、あの下水管まで行こう。においでわかる。たった今のこの霧はすごく濃い。ほとんど固体。一人じゃできない。ほかにも船乗りがいるはずだ。彼女はひもを石にゆわえて

壁越しに投げてるはず。いつだってクソのにおいは判る。この霧はすごく濃いから、殺されかけてる人たちも安全に叫べる。あたしは石をはずしてブツをゆわえる。そして引っ張る。霧がすべてを隠す。精液みたいに。

その時あたしはこう考えてた。まだ大尉の制服を身につけて。かれには少年みたいに見えただろうな。別に男を犯すのが楽しくないわけじゃない。ただ、野郎があたしに二回以上つつこむと、そいつはあたしに命令できる気になるんだよね。だからそのコーマン野郎と自分の権力とで、自分の生をめぐって闘わなきゃならないんだ。コーマンやめますか、それとも人間やめますか。普通は人間やめる。だって、ハメっこが大好きなんだもの。ハマリまくり。もうこれ以上はまりたくないよ、悪いけどね、旦那。

さて、こいつをもっと気をつけて見てみよう。単純すぎんのはやだから。あれあれ、わかかんないや。あたしに言わせりゃ、みんなうっちゃっちゃえ。でもあたしはいまやイギリス海軍の大尉さんなんだから、理性的になんないと。どんな女蕩らし、じゃなくて男でも、あたしを犯しさえすれば、犯されるとあたしを説得できた。お世辞なんかいらぬ。女らしさもいらぬ。肉体的快樂は.....快樂なんだ。すごい快樂だったから、そいつが本腰いれてやれるように、あたしは自分を投げ出した。やってやってやりまくる。「ベイビー、好きなようにして。あたしが欲しいのはあなただけ」

ありとあらゆることをやらねすぎたんで、あたしはあたしじゃなくなった。生き返るには、そのコーマン男とのコーマンをやめなきゃならなかった。

どうりで異性愛って強姦に似てるわけだ。

いったいあたしはどうなりかけてんの？ あたし、アブホール。あたしはセックスが嫌いな？ あたしの人生の肉体的快樂はどこへ消えた？ 肉体的快樂は快樂であるなら、快樂以外の何物でもないはずで、絶え間ない苦悶や争いの原因にはならないはずなのに。いまじゃ肉体的快樂が快樂になり得ると信じかけてる。

男の力はちんぽこに宿る。少なくともそう言われてる。だれに言われてるのはかは知らないけど。あたしが知ってるわけじゃない。男じゃあるまいし。にせ大尉としては上出来でも、にせのちんぽこじゃあ不十分なんだ。あたしにはちんぽこがない。つまりあたしには強さが無いってこと？ もしちんぽこそが男の強さなら、あたしの力は何なの？ どこにあんの？ あたしが唯一、チンコを持ってないから、つまりあたしにはナニもなくて、だからあたしの快樂は何か一つのモノじゃないくて、ただの快樂なんだ。よって、快

楽は快楽的でなくてはならない。やれやれ、これで何かをつきとめたのかもしれないし、そうでないかも。

再び水夫に会ったとき、あたしは自分の変化に出会ったのを知った。変化だったから、あたしは自分がどうなりつつあるのか、わかるはずもなかった。間違いなくこいつといっしょにいなきゃならないのはわかってたし、それがなぜかはさっぱりわからないあったから(こいつはあたしの愛人じゃなかったし、これからもちがう)、あたしは怯えた。今日は船乗りにとって、遠い海に船出するインセンティブ以外の何物でもなかった。

街は死んだ精液よりも濃い霧に包まれていた。

「ねえ、こんな船から離れちゃっていいの？」

かれはあたしを見下ろした。「小僧、何か恐いのか？ おまえ、恐れ知らずになれるほど歳がたってねえもんな」あたしは少年みたいに見えたんだろう。

「自分のために恐がってるんじゃない。あんたが面倒なことになるから」間。「いつか面倒なことになるよ。病気だってあるし」

「おれは歳をくいすぎてるし、死にかけたことも一度や二度じゃねえからよ」と若者は、自分のことばに反応して手を自分の股間につっこんだ。「だから今更死ぬのを恐がる気もないわけ。だいたいこんな死んだ街に、何の危険がある？」

自分が何を告げたいのかわからなかった。あたしを一人にしないで。いつまで？ たぶん死ぬまで。お願いだから一人にしないで。「何も教えたらんないけど。でも、その筋の連中がいるし。あんまりいい連中じゃない。クズみたいなやつら。この町は……死人の町。ロンドンみたく。イギリスの」。あたしは左の死のアカの肩越しに振り返って、税関地区の埠頭倉庫を眺めた。建物は、人間の赤い消化器系をかじる、でっかいネズミどもみたいだった。灰色のネズミどもは建物よりでかい。形ももっと崩れてる。

「おれをやりたがってる連中はたくさんいるからな。おれにはおまえがついてる」

自分に何がついてんのか、この船乗りはわかってんのかしら。あたしがガキの頃、よく見る夢が一つ、というか同じ一つのシリーズの夢があった。どこかへ行く夢。行き場所は不詳。知られざる地。

そこに行くには、まず渡り得ぬ海を渡る。その海は、あたしの強姦親父の家の前の、コンクリートの駐車場から数百メートル下ったところにある川だった。ある日、そのゴミの川に狭い泥道があらわれた。楽に歩いて渡った。

島だか半島だかについた。その、そこには、多彩色の回転木馬があった。あたしはそのまま狭い泥道づたいにカーニバルを通り抜けた。都市群を、そうじゃなきゃ一つの都市を通り抜け、さまざまな土地を、そうじゃなきゃ一つの土地を通り抜けた。長くて高い鉄橋を渡ったのだけは事実。それを過ぎると道は曲がりくねると同時に狭くなって、自分に折り重なるように、自分の尻尾を探すへびみたいに、あたし自身に折り重なってきた。あたしの中心は怪物じみてて知られ得なかった。その怪物はあたしを抱きかかえた。

自分が何を得つつあんのか、この船乗りはわかってないのかも。あたしは性別がちがった。でも、この人に捨てられないためなら、何でもする。どうしても確かめなきゃ。

「おまえはおれの世界の間人じゃあない」船乗りはあたしを拒絶して、自分みたいな船乗りにはなれないなんて言ってる。あたしがなれるのは無人だけ。性が無いから。でも、タールは一人でブツブツ言い始めた。「チッ、まあそこらへんにいろって。一夜もつらいには若い。そんなケチな話でクヨクヨできるもんか。仕事もあるし。ボスに〇を届けてやしないと。届けない方がいいのかも。お湯。思考が燃えてる。もし届けなきゃ、おれには何も無い。無……になっちまう。犯罪者かゼロか」。役にもたたないことをベラベラつぶやいてる。

この時、あたしたちは通り（狭すぎて小道と呼んだほうがふさわしいかも）を歩いていた。左右の水平方向のつきあたりには、それぞれピンクやオレンジのネオンに照らされたバーが並んでた。あたしたちの一人は本物の船乗りで、もう一人は偽物。あっちこっちに、チンピラ数人、脱落者（性別判別不可能）が、バーが無へと続く石段にすわってた。

朝の四時、百人から二百人の間の革ジャン姿の無力なガキどもが、通りにすわってるか寝っ転がってた。車はもうなかった。ビジネスマンがいなかったから。世界は静止。子供たちはおとなしく語り合い、ウォッカやウィスキーのボトルを回し飲みしていた。性欲はまるでないみたい。たまに、闇の中、黒いジャックナイフが光った。ジャックナイフは何の役にも立たなかった。

まだデニーズが開いてた。ホットドッグ（死んだ犬のチンポコだろうけど）が厚い白い紙にのって次々に出てきた。そこで一番喰えるのが、紙だった。喰いたいと欲する子どもたち、というのも、この子たちにとって食べるのは別に必須のことじゃなかったんだけど、クソの色をしたマスタードをたっぷり紙に塗りたくった。マスタードはでっかい赤いプラスチックのどんぶりに入ってた。まるで人間の消化器系みたいにカラフル。

デニーズの向こうには、すごく狭くて看板もなくて、ほとんど見えない店。船乗りはその店に足を踏み入れた。

店にはいると、船乗りは自分が「謎めいた領域」にいるのを感じた。これまで自分が訪れたどこよりも貴重な場所。ここにこそおれの性欲があるにちがいない。ありとあらゆる大きさの白紙が、きれいな白い壁を覆っていた。女海賊、カミソリみたいに鋭い白剣に巻きつくへびども、爪が黒か黒ずんだバラの人間の頭よりでかいサファイア色のネコ、錨がでっかい深紅やマゼンタ色の魚の尻尾に突き刺さり、その目には殺人によって得られた財宝のありかを示す地図があるなど、虹のいろんな不思議が白い紙を覆っていた。壁は諸世界だった。奥には、清潔な白い手術台が壁の幅一杯に広がっていた。こっちを向いている男は、右ひじを手術台に乗せていて、縮んだ感じだけど生き生きしていた。干し首じゃない。まだ。

船乗りは、一見年寄りそうなそうな男に注目。一見年寄りそうな男は目を自分の秘所にとどめた。

残酷なローマ人たちは、傭兵や奴隷、犯罪者、異教徒を刻印して見分けるために刺青を使用。

生まれて初めて、船乗りは母港に帰り着いたような気がした。

初期のキリスト教徒の間では、追放者であることを示す聖痕である刺青は、はじめは肉体上に強制されたものだったけれど、やがてグループの結束を強めるものになった。キリスト教徒たちは、この部族的なアイデンティティの^{しるし}徴を自発的に獲得するようになった。刺青は、どっちつかずの社会的価値を持ち続け、今日も刺青は評判の悪いブランドであると同時に部族や夢のシンボルだ。

一七六九年、ジェームズ・クック船長はタヒチを「発見」し、自分が楽園にたどりついたと思った。タヒチ語では書くことを「タ・タウ」と言う。英語の「タトゥー」の語源だ。タヒチ人たちは人間の肉体に直接書くのだ。

「おれ……」と船乗りは敢えて口にした。

手術台の脇の一見老人は、目玉が動くのと同じくらい動いた。

「おれ……」船乗りは再度挑戦。

「何か用か」そのアーティストのからだ一面を刺青が覆ってるのに気がついた。灰色の闇の中、しわみたくに見えた。左手がタバコを持ってる。それを自分の手という灰皿でも

み消した。

「あんた、占いするんだろ。仲間がそう言った」

「道に迷ったようだね、船乗りさんよ。ここらは暗いからね。暗いのはここらだけだけど」

「仲間が、あんた運勢を語ってくれるって」

「おれはここで自分の運勢を開いてる。人のを占ったり教えてもらったりする必要もないや。おれにとって、唯一語るのは作ることだけだな」

「何を？」

「まず決断するこった。正反対の命令を出されたネコって見たことあるか？ ネコは硬直して矛盾に対抗するんだ。あんたにも、なんぞわからんことがあるのかもな。えらい緊張病じゃないの。もしよかったら、あんたの欲しいものをくれてやってもいいぜ」

「おれ、あるものを密輸しないと」アゴーンは答える。

まるで夜中にすれちがう二隻の船を見てみたいだった。霧に包まれた港の夜。船はそれぞれ湿り気と冷気から逃れる道を探す。霧笛を鳴らしてまわりにだれかいがないか調べ。放浪の終わりを、陸地を、終わりを、死を探す。都市に迷った子供たちは死にたかった。

あたしも目を閉じていたかもしれない。二度と開けないくらいきつく。ずっと昔だけど。でも、あたしは死にすら助けを求められないほど誇り高かった。浮かんだ小さなボート見たく、あたしはほかのものといっしょに漂う。ドアの左側の闇の中から、あたしは二人の男を眺める。

「だれも運勢なんか作れねえよ。とつつあん、おれの運勢を語ってくれ」

「じゃあそれを選びな」薄汚れた男は手術台の向こう端に手を伸ばして、もっと薄汚れたトランプを取った。そのトランプの一枚一枚の汚れは、それが空気に触れて汚染すると、できたばかりの刺青を膿ませて、ウォーターゲートの暴露マイクロフィルムみたいに台無しにできるほどだった。そのトランプの裏には、汚れに埋もれて、海賊たちが殺し合い、カマを掘り合い、宝を分けあっていた。普通のトランプの束。年長男はそれをアゴーンに手渡した。「ホレ。自分で並べてみな」

「何だと？ トランプなんか並べて時間をつぶすのは、金持ちすぎて何だってできる音などもだぜ。おれは死魚じゃない」

「ぐちゃぐちゃにしるよ。ものをぐちゃぐちゃにする方法は知ってるよな。マンコと同じ。薄汚ねえのは同じだろ」年長男は何か思い出しかけることもできた。でも、何だったかは思い出せなかった。それがまるでどうしたわけでもないんだけど。「あんたの一部はマンコにイカれて一部はマンコを嫌ってる。自分のものにしちまいな。さもなきゃあんたが姦られる。薄汚ねえもんだ」

吐く代わりに、船乗りは腐りきった束を数回切った。一瞬、アゴーンは金持ちの世界が電気の炎で燃え上がるのを、骸骨が両性具有の少年だか少女だかを導いて、かつては何だったか知らないけど、今は砂漠の世界を横切るのを見た。砂漠にも移民局や税関があるんだろうか。年長男のことは、コンピュータのいかれた電車みたいにアゴーンのちぎれた神経の中を爆走してた。「坊や、自分通りにやってみな」

船乗りは札を動かすのをやめて、年長男を見上げた。

「あんたの運勢は見ての通り。あんたはセックス気狂いで、男にカマを掘られたがってる」

霧が、ネコが、開かれざる戸口からすべりこんだ。

「そんなの運勢なんかじゃねえよ、バカヤロ」船乗りは中指を年長男の目の前のおでこに突き立てた。「Oの密輸のことを教えてくれ」

「船乗りの運勢は一つしかない」

「この運勢なんかクソだ」

二人は声を張り上げ始めた。

「船乗りの墓に薔薇は育たない」

アゴーンは指をどけて顔をあげた。「おれを何だと思ってやがる。バカにすんなよ。そんなことくらい前から知ってた」船乗りの目は大洋。未知の、忘れられた船乗りたちのかからだ。突然アゴーンは年長男を理解した。死以外にも何かがあるんだ。だって、死は知られているすべてのものだから。「刺青をしてくれ」

「どこにして欲しい？」うすぎたない男は手術台越しに手を伸ばしてアゴーンの腕をつかんだ。

アゴーンは魚みたいに口をポカーンと開けてた。何かを求めてあえぐ。かれは開いたまま。いきなりドアの割れ目から、使い込んだペニスとまったく同じサイズと形の円筒の風が吹き込んでかれの口を満たした。答えはなかった。

「ズボンを脱ぎな」

アゴーンは従わなかった。

「おい、何様のつもりだ？」刺青アーティストはクソを我慢する気は毛頭なかった。赤ん坊はクソだ。

「ちょっと表へ出る」船乗りはチンポコみたいなスキンヘッドでドアの方を示した。

「言っときたいことがある」

「ほう、そうかい」刺青師は若者につきあることにした。その時だけ。かれは死人まがいに冷たいピンクっぽい夜の中に足を踏み入れた。

二人が出ると。「どこへ行く気？」

アゴーンは自分の導師に向き直った。「ここらで十分だ」

「おれをどうする気だ？」

「そろそろ見当ついたらどうに」

「現実がおれの思いこみと関係あるとは思ってないもんでね」年長男がアゴの垢をかこうと手をあげたが、アゴーンの拳がその垢に先に到達。なぐるのに満足して(どうせ素手だから大したことないし) 船乗りは鳥が歌うときに感じるはずの、あの恐怖と無縁の喜びを感じた。猛禽類が歌うのは、それが夜に生き、お互いに見る必要があるからで、それは帆のてっぺんが深紅と黒と白で彩られ、それが湿った中で水を滴らせながらマストにかけられて、まるで海から海へと航跡をたどる海草みたいにぐじゃぐじゃ。海は、風と同じく世界。アゴーンは迷子になった気分だったので、幸せだった。ひょっとして、生まれて初めて。もう一回、刺青師を殴る。

二発目を刺青師はかわして、おかえしにあごへストレートを一発。

二人はケンカを続けた。ケンカしながら、アゴーンは昔捨てた少年を思いだした。少年は、かれより十三歳くらい若かった。十三。十三。少年の汚れて巻いたブロンドの髪、アゴーンは実はこの子の髪がストレートだって知ってたんだけど、それが黒い枕の真ん中に横たわってた。アゴーンは、自分の感情がこんなものだってのに気がついた。「ベイビーがまたおれといっしょだ。幸せ」。幸せがラジオ波か、もっと破壊的な波みたいにかれのからだを貫いて走った。もっと深く、それとも別のレベルで、漆黒の核心にはこの少年がかれを羨んでかれを深く傷つけようとした記憶があった。この少年に対する自分の愛は、本物だけど自滅的なものでもあることに気がついた。いま、さらに、この少年が不安定

で、同時に自分の不安定さを否定するほどナルシスティックだったことを思い出した。こういう組み合わせは必ず危険の元になる。だって、それは実現するものとして作用するから。ナルシズムは、もし止められなければ、まるで渦巻きみたいに、あらゆる恋人たちを死の深みに引きずりこむ。海は、風と同じく世界。渦巻きの表面は美しく、静かで、平穏で、鏡みみたいな氷河っぽさで、すべてが表面だけでその表面が冬みたい。アゴーンは刺青師をまた殴った。アゴーンは考える。おれは平穏じゃない。

この若者がマジなのを悟ると、刺青師はナイフを抜いた。ナイフを持っていたのは、新しい刺青手法の実験に使ってたから。

あたしたちの存在（精神性、感情、肉体性）のあの部分、あのあらゆるコントロールから自由な部分を、あたしたちの「無意識」と呼ぼう。コントロールから自由だから、それは制度的な意味や制度的な言語、コントロール、執着、判断、牢獄に対するあたしたちの唯一の砦。

十年前、言語で言語を破壊できると思えた。規範化しコントロールする言語を着ることで、言語を破壊できると思った。ナンセンスが定刻を築く（経験主義的）言語の定刻を、意味の牢獄を攻撃できると思った。

でもこのナンセンスは意味に依存していたから、単に規範化する制度に差し戻しただけだった。

「無意識」の言語って何？（もしこの理想的な無意識や自由が存在しないなら、存在するふりだけでもしろよ、フィクションを使えよ、生き延びるために、おれたちみんなが生き延びるために）その主要言語はタブー、禁じられたものすべてであるはず。だから、牢獄の制度に対して言語で攻撃するには、受け入れ難い、禁じられた言語あるいは言語たちを使うのが要求される。言語は、あるレベルでは、コードや社会的 / 歴史的な合意事項でできてる。ナンセンスがただちにコードを破壊ってことにはならない。コードが禁じることを正確に話すことでコードは破られる。

この刺青の新しい手法ってのは、肉体の決めた場所をナイフで盛り上げることだった。それから刺青師は、盛り上げた箇所同士を糸で結ぶ。肉体にはいろんな染色法を適用できる。

アゴーンには自分の死が見えなかった。まだ若すぎたから。でも、それがそこにあるのは感じた。かれの生の主要関心事。それはかれのもんで、唯一のポイントで、主体であり

客体であり、目的であり存在。問題は隠されたナイフじゃない。そのナイフが刺青師の存在の一部であり、それを右手いっぱい握りしめてるってこと。それを認識して、アゴーンは許されないことを許すのに合意した。

刺青師はほとんど無駄でアホくさい行為で優位に立ったのに、自信がなかった。男って、たいがいそういうもの。すごく恣意で、ちっちゃな、ほとんど荒唐無稽な道具に基づくこの力を行使すべきかどうか、自信がなかった。いつも震えてる肉体に持たれて、黒いナイフも震える。年長男は、気がつく、決断の可能性がいつ、どこでなくなるかを決断せざるを得ないところに追い込まれてた。「船乗りさんよ、あんたの欲しいのが何だかわかんねえんだがね」

パトスが海を美しくする。

アゴーンは昔から、自分がセックスを欲しいのかどうか自信がなかった。偽の自己充足の岩と自分のアイデンティティを乗り越える必要性の岩とはさまれて、かれは本能的に自分の鏡を / 友だちを / 刺青師を認識した。ナイフは二人が見つめ合う口実になった。

ナイフを長く持てば持つほど、刺青師は自分が自分になったり、他人の肌にないで断定的に振る舞ったりすることが、だんだん恥ずかしくなってきた。アゴーンは、刺青師の狼狽に気がつくにつれ、自分自身の恐怖と不十分さに気がついていった。生まれて初めて、かれは性的なものを感じだした。

刺青師はナイフをしまい、手を差し出した。すばやく船乗りをつかみ、自分に引き寄せた。「あんた、気に入ったよ」

アゴーンはあきらめた。

霧が霧の中へと消える中、二人は霧の中へと消えた。肩を並べて、でも手は握らず、お互いを知り尽くしていてもはや会う必要もない兄弟みたいに、消滅の中に消えた。他の人間たちからは切り離されたように感じていた。人間なんて野犬の群れ。話すときの歯は、新しいカミソリの刃みたい。その制度は深紅のチェーンソー。船乗りと刺青師の低い声はほとんど極秘。赤い建築の角がドブへと続く中、この二人の女の声は赤ん坊みたいに叫びだした。兄弟二人は左に曲がり、ネオンの小道を下る。空気はまだ真っ黒だったけど、ネオンの明かりもほとんど黒く消えて……

アゴーンは怯えてた。いつでも怯えてるヤツだったけど、このときはいつもに輪をかけて怯えてた。0の密輸だってこれよりは簡単。恐怖なんて許せないし、ましてそれと折り

合うなんてできなかったから、アゴーンはその恐怖をガンと同じに扱って、それを転移させた先が、不思議なことに刺青師の体内。「あんた、おれをやりたいんだろ、え？」

この頃には二人は店の中だった。あたしは自分の欲望の影を見てた。

「あんたのほうがかっちにきたんだ」

「だれかにやられたことあんの？」

「ある」

「痛いの？」

「刺青は二段階にわかれる。最初に、おれがデザインを描く。この時は墨を使う。それが普通だ。次に、あんたが色をつけたいところに色を盛る。史上初の刺青は、赤と黒だけだった。それは赤ってのが……」

「痛いの？」

「痛いかもしれん、そうでないかもしれん。どうでもいいことだ」

「そうかな」とアゴーンは言ったけど、自分がこれ(かれ)を求めているから、どんなに痛くても気にしないのもわかってた。

「ほら、さっさと脱げよ、あんたを洗うんだから」と刺青師。船乗りはいつも無垢なほどに清潔にしてたけど、それでもナイフにとってはまだ不足だった。「あんたがこんなことをする理由ってのは、痛みなんかとは何の関係もない。あんた自身の美に関わることなんだ」

外では何も変わらなかったけど、アゴーンは自分の知覚がすべて抽象になっちゃったみたいない感じがした。純粹になったみたい。相手の男とかれ自身がお互いから退くと、まるでなんかの儀式みたいに、お互いは強く惹かれあった。この男の相手が与えてくれるはずの痛み(贈り物)への期待のおかげで、アゴーンは相手に頼れるようになった。友情の共犯は痛み。

自分の魂のまわりくどさに呆れた。欲望の目標があって、欲望の対象があって、休憩所が、ベッドがあって、しかも自分が決してそこにまっすぐ航海しないのに呆れた。偶然でもない限り、直線コースはなかった。むしろ、魂はすごくクネクネ曲がりくねった、カタツムリまがいの航跡をたどるもんで、そこに世界が定義づけられる。でも、突然、この曲がりやくねりの中で、止められてしまったのを感じる。先に行けないのを感じる。だれかが手を握ってくれない限り。

「坊や」アゴーンがセーターを脱いでる間はその肩に置かれてた。刺青師の節くれ立った手は、船乗りの固い背中をすべり降り、尻のカーブに到達。アゴーンはほとんど無意識に尻の筋肉を動かした。それを感じて年長男は意図的に握り締め、性欲がいきなり荒々しく感じられたほど。感情抜きで性欲が現れた。同じくらい荒々しく、かれは空いた手をアゴーンのポケットに突っ込んだ。そしてへそに触る。「友だちになろうぜ」

永遠、ってことばは死と同義。

娼婦の赤いツメの刃に風がうなる。風はブルジョワジーの黒さの名残の中でニンジンジュースの奔流。風の向こうには何もなかった。

「また会えるよな」

「いや」アゴーンは息をついた。「続けて。続けよう……」この時点でかれは完全にひとりっきりだった。

刺青師は、探していたものを見つけたのがわかった。かれはアゴーンのパンツの中をさらに深く探っていた。

「……永遠に」

「手を出しな」刺青師は、血が染みついたぶかぶかのズボンの前をはずして、ちんこをアゴーンの手握らせた。

アゴーンの手は初めてがくがくした。潮が満ちるにつれて、初めて何かに捕まらなくちゃなんなかった。経験から（その経験ってのがどっから来たのかはわかんなかったけど）自分の居場所がわかんなくなるとこなのがわかった。それが自分の生死に関わることなも。生も死も、突然大事なものになった。

チンポコたちは、もう直立してた。アゴーンは初めて握り、握られてた。横たわって、身をゆすりながら、刺青師の耳に口をつけ、刺青師は相手の灰色のほっぺたに口をつけて横たわる、脚の間からはニンジンジュースが流れる。

「初めてなの、こわい」とアゴーン。急速に高まりつつある。

「つかまってな。おれにしっかりつかまって」刺青師は手足にこめた力を増した。やがて、まるで海に命じられたみたいに、しゃぶってくれと頼むしかなくなった。

刺青師は、身をかがめて、少年の先端を唇で覆った。その唇は、化け物じみてでかい大洋をこのガキが安全に歩いて渡れるように割れた波だった。父は自分自身を開き、自分の世界のすべてを開き、全存在を開いて、子供が安全に歩けるようにした。

未だ毛のない子供は、父親の毛に手をはしらせた。その毛が、夢の魚を捕まえた網であるかのように。

犯罪の夢が生きづく。

船乗りは、背中に針が触れたとたんびっくりした。痛みがあった。鋭くて特有の痛みが。特有すぎて、分離できるくらい。かれは意識をこの痛みの現実性から夢のほうに向けた。これは簡単だった。痛みの現実性なんて、そう続くもんじゃない。その夢の始まりは、はだかの背中に置かれた節くれだって明らかに大きな手。

最初の刺青の線は黒。刺青師は帆船の輪郭を描いていた。人間が自由だったあの夢の時代の痕跡。歴史的に、人間が持っていた唯一の自由は犯罪だった。目覚めた状態での夢のエッジみたいに、夢は痛みを通じて現実かされるってことを、船乗りは刺青に教わった。人間は自分自身をつくり、苦痛+夢でそれを作る。

最初の帆は薔薇だった。完璧な、明るくて真っ赤な薔薇。ほかには何もなし。

肉体がハリの感覚に慣れるにつれて、いつもは口数の少ないアゴーンは、刺青しに向かってとめどなくしゃべり始めた。針と美の影響かで、かれは過去の成功を反復することで自分の弱さにアプローチを始めた。コペンハーゲンとスウェーデンで何人の女を犯ったか。いくつの港にマンコを飼ってるか。総じてマンコについての話はウソだった。つまり船乗りは、「かれ」が失われたんじゃないかと恐がってたわけ。潮はかれの頭上にまで満ちた。肌は難破。かれもナンパされた。

ずたずたになった肌と、その周辺の肌が傷みだして(というのも刺青師は絵の細部の彫りにとりかかっていたから)、アゴーンは初めてその苦痛意識を向けざるを得なくなった。自分の苦痛に。かれは自分自身がナンパするのを感じてた。

刺青師は、もっとも敏感なところの肉に描かれた、絵の周縁部を埋めていった。

はるかな海は樂園を擁してた。そこで人々は、自分たち同士とも、環境とも、調和して暮らしていた。かれらの文字は刺青であり、肉体に直接印をつけることだった。

船の帆の向こう端では、薔薇の花びらがへびに変わる。メデューサの髪が罪のない人間たちの頭蓋骨の穴からもぐりこんで、脳ミソを食べている。これは危険の領域。

とうとうアゴーンの肉体は針を受け入れた。断続的に、鋭い刺す痛みが襲う。針が神経にあたり、骨に震えが伝わるほど近づいたり、触られるのになれていない肉に達したとき。アゴーンはその刺す痛みの一つ一つをはっきりと心に留めた。もう恐怖はまった

く感じなかった。

刺青の外形は、巨大な薔薇が、もっと巨大な帆船を取り巻いてる絵だった。海面下には海竜、多岐をのぼりつめて門を越えた鯉がくねりながら立ち昇り、船の上にとぐる巻く。

刺青師は小さな紙コップに赤、茶、青、黒、緑のインキを満たした。痛みから自由になったアゴーンは、自由に呼吸してた。刺青の入った肌は、針を突き立てられていたときよりも、鋭くはないけど漫然と痛んでた。

彩色が始まる。

最初は赤。最初は血の色。船の帆は深紅。血がからだを動かす。血が船体を動かす。血が非人間的な風を人間の吐息に変える。アゴーンは苦痛にあわせて歌った。風の深紅の奔流は、船を取り巻く薔薇だった。

二番目は茶。茶はたれ流した血やウンコの色。船は、人口の翼でもって飛び、ほかの要素と調和してる。青い海、青い空と。大地、故郷、国家は船乗りの敵であり、かれの旅の終わりだ。かれの死。船体の茶色は船乗りに、自分の旅が死でもって終わらなきゃならないのを思い出させる。

血と死。

三番目は青。船の上下に同じ物質。非人間的。人間に反発し、人間と相容れないもの。色は青で、形は竜。十七世紀、若武者が船に乗って、彼女の政府に宝石を届けようとしてた。この宝石は潮汐を自由にコントロールできた。竜、この宝石を盗まんと欲す。まさに竜が女を捕らえんとしたその刹那、生きた人間のからだに触れんとしたその瞬間、女は自分の左のあばらの間の皮膚を切り裂いて、その穴に宝石を挿入。竜は屍肉には触らないので、彼女の死体はそのまま漂い、故国に流れ着いた。その竜の目は黒。

その夢、その生は赤と黒。青+赤は緑になるので、竜は血の色の花びらの上から船を見下ろす。その薔薇には葉が生えつつある。その茎にはトゲがあって痛い。この夢を肉体に刻み込むのは痛かった。

刺青は視覚芸術の第一の親だ。霊的な幻視の抽象的な地図として、「異」世界の記録として始まった刺青は、もともと地上に住む凡人どもの体験を超えた領域を象徴する、力と謎のアイコンだった。

刺青の魔術的・宗教的な起源が持つ超常的な性質は、今日でもなお揺るがない。刺青は、それを身につけた者に、一般社会の因習の外に存在している感覚を与えてくれる。

デカダン期には、刺青は^{アウトロー}犯罪(まさに^{ロー}法の外)と結びつけられるようになった。刺青の力は、社会の規範を超えて生きる道を選んだ者の力と不可分になった。

同じように、一般社会は男が別の男に触れてはいけないと定めたけれど、かれは触れ、他の男を愛してはいけないと定めたけど、かれは哀史、ほかの男と同時に達してはいけないと定めたけれど、かれは.....

犯罪領域は、今日では見直された。今日では、最も深い思考者を興奮させる卑猥な場所はコンセプチュアルなものだ。肉から肉へ。

男の手が男の手の上に。腹が腹に。男の足が男の足に。口が口に。チンポコがチンポコに。アゴーンは、まだどちらも達する前に、刺青師から身を引いた。港にたどりつくつもりはなかったんだ。

船乗りの墓には薔薇は育たない。

二人の男たちが離れるとともに、あたしは表に出た。朝の始まりの中へ。

第8章

アルジェリア人化すること（ティヴァイ語る）

一人牢にある者の暴力 / 薔薇の暴力

おり重なる熱い牝肉。それがどこにも行かない。肉。肉。だってマンコが開いては閉じ、永遠の運動機械、科学上の謎、永遠に達し続け、一人で開いたり閉じたりしてエクスタシーか嘔吐に　マンコは、おまえは、疲れないの？　薔薇は早死に。薔薇はおまえたちより早死にする。我が心の娼婦たるおまえたちよりも。

パリの女はいまや全員娼婦だった。

男は娼婦と性交できない。性交は双方向性のものでなくてはならないから。薔薇は自分自身のためにだけ開いて閉じる。マンコは自分が開いて閉じて何かをくわえこんでも一向に気にしないで、開いては閉じる。まるでマンコってのは動き、感じるのに何の食料もいらないみたい。それ、彼女は、何の滋養も必要としない。それは、彼女は、赤死にマンコだから。

おれにはもちろんわかってる。昔、ガールフレンドがいた。もう別れたけど。

別れてから、おれはマダムの娼館で暮らした。売女を愛するのは楽だったから。売女は、おれに何も求めなかったし、おれに気がつきもしない。売女が欲しいのは金だけだから。アルジェリア革命のあと、金なんか何でもなかった。

おれは射精のときは存在した。精液かおれかは、はかなく漂う。黒い空に星が炸裂。無に還える。

物質がつねに真空に引き寄せられる要領で、C I Aが数人パリに飛んで、自分の目的のためにマダムの売春宿を占拠した。

第二次世界大戦中、ジークムント・ルフ博士とジークムント・ラシャー博士というボブシー性双子が、ヒューベルタス・シュトラグホルトの下で働いていた。ルフ博士とラシャー博士の仕事というのは、ダッハウの囚人にガソリンを注射したり、高高度加圧室で押しつぶして殺したり、撃ってその銃創で、可能な血液凝固成分に実験をしたり、囚人たちをはだかで氷点下に立たせたり、氷水入りの管につけて人間が凍死するのにどのくらいかかるか調べたりすることだった。これはほんの一例。こうした実験は、「航空医学」の一環だった。飛行機が、精子の星の中を飛び交う。

ヒトラーがアメリカに負けた後、シュトラグホルト博士（現住所アメリカ合州国テキサス州）はアメリカ人に雇われた。N A S Aはシュトラグホルト氏を「宇宙医学の父」と賞揚。

第二次世界大戦の実験の意外な結果の一つは、ニュルンベルグ裁判において、薬物実験を含む科学実験は、その実験対象となることについて、しかるべき理解に基づく合意を被験者から得られない場合には行ってはならない、というものだった。

シュトラグホルト博士は、アメリカのC I AのためにMK・U L T R A計画を行うようシドニー・ゴットリーブ博士を雇った。C I Aが尋問した対象は、C I Aにとっては不幸なことだが、C I Aの質問や、自分が情報をしゃべってしまったことや、それをだれに報告すべきか、といったことを覚えていた。C I Aとしてはこの人間の記憶を抹消する必要があった。殺人は、多くの場合、非現実的な解決方法だった。人目につきすぎるからだ。ロボトミーも同じだ。ますます保守傾向を強めるアメリカ政府は、あらゆるキチガイ病院や学校を閉鎖したがっていたし、通常は政府を神さまか映画スター並みに崇拝しているアメリカの一般大衆は、ロボトミー患者などの異人にそこらをうろつかれたくないと思っていたから、なおさらだった。MK・U L T R Aは、完全な記憶喪失を引き起こすための安全な方法を見つけるのが狙いだった。

この計画が進むにつれて、C I Aはだんだん向精神薬やドラッグの使用に興味を持つようになってきた。C I A情報部員のほとんどが、今やL S D漬けで何もできなくなっているという事実も、これに関係している。アメリカ文明はそういう時期だったのだ。アメリカ人たちは、アルジェリア人がパリを占拠したことも知らなかったと思う。

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ خدای تعالیٰ را برای جملہ مردم امریکائی

アッラーをたたえよ、アメリカ人は何と無知なのでしょうか。

C I A 情報部員（そして『生まれ変わり』のアメリカ人またはC I A に盲従するアメリカの一般大衆のほとんど）は、アルジェリアなんて聞いたこともなかった。ロシア人がアメリカの水道にL S D を盛っているのは知ってた。ちょうどラスプーチンが毎日ストリキニーネを食べてストリキニーネによる暗殺を防いだのと同様に、C I A 情報部員もL S D を飲んで、自分たちだけはアカに殺されないようにした。これがM K ・U L T R A 計画の誕生。

第二次世界大戦中、別の男がいて（男って、あんまり数がないからね）、スパイ学校を運営するジョージ・ブラックという男だった。この学校はアメリカのスパイ用のはずだったんだけど、スパイってのはスパイなりのスパイ方法を持ってるから。ある永続的なことがヒトラーに起きてから、ブラックは麻薬取締局に入った。L S D やその他の薬物のためにヒッピーどもをぶちこんだ。

この頃には、C I A はあまりに自分自身で薬物を試しすぎたので、みんなロボットミー患者化するか発狂してしまい、新しい被験者が必要になった。その被験者たちは、自分たちがそういうものだとか、つまりは犠牲者だとか知らされるわけにはいかなかったの、そいつらは社会的につまはじきにされてる閉鎖集団に属してなきゃならなかった。囚人とか、ホモとか。C I A は社会的なつまはじき閉鎖集団を必要とした。O M C の誕生ってわけ。

ゴットリーブはO M C こと「深夜のクライマックス作戦」の指揮をブラックにまかせた。「深夜のクライマックス作戦」の目的は、一般市民でドラッグを試すことだった。

この頃には、アメリカではコトが変わってきてた。コト。いまではコトあり人種とコトなし人種がいる。コトなし人種は教育なんて聞いたこともなく、道端暮らし、ルンペンプロレタリアートの瓦礫で、食うものはウンコ。ドラッグを試す検体にするには低級すぎた。ロボットミー済みのやつをロボットミーはできない。これぞ過激貧困の威力。一方のコトあり人種は、ここ何年もクスリをやりすぎてて、特に雌の方はデキセドリンとヘロイン、雄の方はコカイン漬けになってたもんで、クスリの実験をするにはクスリが回りすぎて

た。ちょうどアメリカ経済がコーク（コカインじゃないほうね）とマクドナルドのために必死になって新しい経済市場をみつけようとしてたのと同様に、アメリカのCIAは新しい薬物試験の犠牲者を必要としてた。

この頃には、アメリカではコトが変わってた。幻覚剤の代わりに覚醒剤にのめりこんだCIA情報部員の一人が、アルジェリア人がパリを占拠したのに気がついた。かれはゴットリーブにその事実を伝えた。ゴットリーブは、パリこそ完璧なクスリの実験場だと判断。

昔はパリでヤクを手に入れるのは難しかった。革命以前のこの街は食べ物その他の贅品が多すぎた。だから、パリに残ってたわずかな白人たちはドラッグのことなんか知らなかった。黒人たちはと言えば、CIAは黒人どもなんて愚かすぎて何一つ知りはないと考えてた。エッフェル塔はといえば、これは死んでた。

CIAは深夜のクライマックス作戦のためマダムの娼館を買った。連中がマダムに出した条件は、アメリカ人が占拠しても何一つ変わらない事（「わたしたちはイデオロギーにはこだわらない」 キッシンジャー）。女の子たちは、これまでやってきたのと同じことを続ける。つまり、ヒモにカモを持ち帰る。ただ、いまでは彼女たちの新しい超ヒモ、アメリカ人は、失敗には寛容で、ドラッグのテストに使えるカモのため、一晩あたり千百新フランを渡した。それから、この生きたカモの飲み物に、ちょっとだけ何かが混ぜられた。ちょうどロシア人がアメリカの水にドラッグを混ぜてみたいに。だって、この何年にも渡って、アメリカ人たちは馬を水飲み場に連れてきてたんだ。

新設のーフミラーの裏で、マダムの新しいボスの黒人が、それぞれの野郎がそれぞれのドラッグにどう反応したかについて科学的な記録をとっていた。もし誰かが完全にイカレたり完全に消滅したりしても、名前に何の意味もない。それはAIDSの時代。マンコがどんな病気持ちかなんて、だれにもわかりゃしない。特に黒人マンコなら。白人アメリカ人にとっては完璧な罠だった。

わたしはその娼館にいる友だちが狂気で破壊されるのを見た、飢えてヒステリックにはだかで身をひきずりつつ白ンボ通りを夜明けに怒りの一発を求めてさまよふのをわたしは自分自身がフン詰まりになるのを見た何も目的もなく嫌いな連中と何度も何度もくり返し野合して自分自身の死との昔からの野合 われわれすべてが死と野合して

ある日、ヒツジみたいに毛が縮れたガキが娼館にやってきた。かれと、やせた性転換者

のマチルドが腕を組んでた。若い恋人たち。上陸許可の最後の日で、だから娼婦と恋に落ちたわけ。

戦争は人間の肉に彫りこまれる。人間の肉の回りに筆写された人間の肉。

ヒツジはイカレたがってた。そしてイカレた。なぜなら、マチルドは言いつけ通りにしたからだ、ガキのジャック・ダニエルに

あんたこそ、あたしが泣いて拜んで語っても

足に一度たりともキスさせてくれない。

火の中水の中歩かせるくせに

あなたは現実のサルタン

B Z (キヌクリジニル・ベンジレート) をすべりこませたから。ガキはJ Dがお気に入りだった。父親が、もう死んだけど、それを飲んでたから。まあ要するに、それは確かにかれの上陸許可最後の日で、かれの地上最後の日でもあった。

命令を下すのはあなた。

Mが部屋を離れると、タールがかれの頭と腹をイカレさせた。C I Aの嗅ぎ回り屋が部屋に入ってガキに局部麻酔を与え(そんなものが要るとでも言わんばかりに)、かれに見たものすべてを表現するように指示を与えた。まるでここが、まだ子供がヤキが回り切っていないアメリカの学校に戻ってきたとでも言うように。つらい条件に慣れた水兵が偽ビロードの壁を描写する間、C I Aの嗅ぎ回り屋がかれの脳皮質の塊を除去した(これは実話。ああ、現実のサルタン)。アメリカ人医師はメスをおろしてから、ガキにまたB Zを一服与えた。というのもC I Aは、超L S D (B Z) が与える影響が、正常な脳と損傷のある脳とで同じかどうか知りたかったからだ。

ハーフミラーの後ろで、黒人はウォッカ・マティーニをすすりつつ、この光景を眺めてた。マティーニは不可欠。この手の仕事をやるためには。ある夜、マティーニを飲みつつハーフミラーごしにロボットミーが野郎に行われるのを眺めてる途中、黒人はうっかり左を向いて、ハーフミラーに映った自分の姿を見た。かれの右手が小さい方の拳銃をとりあげて、鏡かあるいは自分自身を撃った。ひょっとして、そのロボットミー娼館で、かれはもはや自分が誰なのかもわからなくなっていたのかもしれない。

ひょっとして、CIAにはそもそもわかっていなかったのかもしれない。

おれはあの船乗りの大脳皮質が切り刻まれたときに、それを眺めてた。死を見れば、死だとわかる。そのロボットミー娯館で、おれは自分がCIAの地である鏡に映った自分の頭蓋骨を見ている死人なのを悟った。自分自身のもっとも暗い領域だけに生息する夢の登場人物で、目がさめたときには自分でも認識できない顔か土地なのを悟った。

そのロボットミーは、ロボットミーであると同時に徴^{しるし}でもあった。おれの快楽（おれの想像力、夢見、欲望）が実生活から切り離されつつあるという徴^{しるし}。

その時点で、黒人はおれがかれを見ているのを見た。

半時間後、ムキムキ男が二人しておれを娯館から連れ去った。手足は鎖につながれた。パリから連れ出されたとは思わないけど、その装甲警察車　新しい映画もいまじゃCIAに協力してるのかな　は長く荒っぽかった。むきだしの座席の残骸みたいなものに、ほとんどすわってられなかったほど。ひょっとして、むきだしの社会の残骸。おれの骨は冷たくなった。

このパリの忌まわしい記憶は、まったく空っぽな都市の記憶。ロックフェラー一族とその銀行が消え去ってから、産業も撤退した。ロックフェラー一族の工業建築物はまだ残ってた。四十階建のガラスカーテンウォール。窓がブシュッと開く。てっぺん階には白人野郎が二、三人住んでた。三十階建ての無人のホテル群には風以外まったくの無人。清潔な白いアート複合建築群は、ピカソ博物館にポンピドー文化センターと公園を含んで、都市の北部の中心にあったけど、いまや人間は皆無だった。が、野犬や野良猫の群れは健在だった。ネコは珍しい黄色の雪の中を駆け回った。その巨大で清潔な複合建築のすぐ外側のあらゆるところでは、いまでは破れたタンパックスとサニフレックス（クレンザーの一種）の大広告の間に何キロも何キロも小さな板張りの建物が並び、ときに小さな市場が、残り物強盗の標的となり、そしてフランスで一番重要なボクシング・リングが新都市だった。

真の夢の都市。パリ、人が何でもできる都市。海賊になるとか。耳の端っこに刺青するとか。自分自身でやる限りは、これからはすべて自分自身でやることをを学ばなければと悟った。

二人の警備員だかイヌだかがトランプを始めた。ツー・ペア……ストレート・フラッシュ……おれたちは受刑者をもう三人拾った。イヌどもは、おれたちを鎖二本につなぐの

に必要な時間だけトランプをやめた。おれはずっと恋人がほしかった。いまも物凄く欲しくて、彼女に鎖につながれたかった。おれにとって、愛とはそういうものだ。

どこで止まったのかはわからない、けど止まった。外から見てたんじゃ監獄はわからないだろう。おれにはわかんない。たぶんどっか。パリ市内。結局のところ、おれは生き延びるためにわかり続けなきゃならなかった。

とうとうおれはわからなくなった。おれの全存在は完全な叫びだったのかもしれない。おれの全存在はでんぐりかえって、ニヒリズムなるパニックの中へと落ち込んだかもしれない。でも意志の力で「おれ」というフィクションは続けられた。

イヌどもは恋人とおれとを鎖で引きずり出し、ビルの廊下を引っ立てて、まるでションベンの河を下るみたいに、狭い囚人房、棺桶へと向かわせた。これで自分がどこにいるのかわかった。

この監獄が谷底にあって、悪の光の泉が噴出する地獄の奈落のなかにあるのはわかってるけど、それでもこの監獄が山頂にあると考えずにはいられなかった。その場所では、すべてがおれを、おれの疎外は空気の疎外なんだという考えに導くのがだった。もし完全に疎外されてるなら、おれは誰かでありうるんだろうか？

おれはC I Aによって空気の疎外の中に放りこまれたんだ。

ニヒリズムに陥った者、ニヒリズムよりさらに深く、灰色のヤッピー生活（商品崇拜、商品以外に何も残っていないという信仰、現実性のために階級人種金の表層に向かう者、タブーを嫌悪する者）に沈んだ者。

無に放りこまれ

疎外だけじゃない。悪の問題もある。囚人は邪悪だ。おれにはわかってる。囚人たちは邪悪が好きだ。何でか知ってるか？ だって、監獄は生き物で、社会的な生き物で、人間の生に反対してるからだ。だから、監獄に入ってる者はみんな邪悪。

正直な話、囚人はすべて国によって殺されるべきなんであって、そうされてないってことは、つまりかれらは実際問題として、死を超越しているのだ。

よって、囚人たちは聖別されてる。かれらの生は虚ろで、ここで言う虚ろってのは「虚数」というときの虚ろで、つまりは合理的には存在し得ないってことだ。

全監獄の収容者の1/3から2/3は刺青をしてる。刺青を彫るってことは、暴力や器物破壊、自己破壊か自虐の傾向があるってことだ。「刺青と、暴力的で攻撃的な行動の実施との間には強い相関が存在する。この全般的な暴力傾向は、この人々が刺青というかたちで自らに対して行った暴力行為によって刺激されたと考えられよう」 どころの医者。監獄の中で、おれの想像力は羽ばたいた。自分に物語を語った。たとえば、こんなのを。

.....

يَك

—

باري

むかしむかしあるところに

باري مَرْدَر فَتَيِر فَسْت.

むかしむかしあるところに、貧しい人がいました。

مَرْدَر فَتَيِر مَرْدَر نَبْر وَتَمُنْد، مَا لِكْر جُهَان
رَا دِيد.

貧しい人は、何でも持っている金持ちを見ました。

چُشْمَانِ تُو بِيَس،

目を閉じて、

چُشْمَانِ مُنْد.

おれの目も。

مرد فقير پيس الله را ستود. شها
 الله مردم ثروتمند و فقير را
 كرد.

そして貧しい人は神をたたえました。「神よ、あなたは金持ちと貧乏人を両方お創りになった」

پس پيسر زيبا و جوان مرد بدگل
 و پير فقير را نزديك شد.

そのとき、美しい若者がその忌まわしい老（貧乏）人に近づいた。

با من بيامد.

「いっしょにきなさい」

مرد بدگل و پير فقير آمد.

忌まわしい老貧乏人は従いました。

با او.

かれに。

به مردم ثروتمند.

金持ちたちのところへ。

انجا مردم ثروتمند بودند.

そこにいくと、そこには金持ちたちがいました。

مردم تروتمند در بیکه منزل
 قشنگه زندگي كشتند. بوان خوب
 بودند. قشنگه بودادند. خوراك و
 گردان مردم تروتمند را
 خوشنود كردند.

金持ちたちは、美しい家の中で殺します。いい匂いがします。金持ちたちはいい匂いがしました。食べ物と生首は金持ちたちを喜ばせます。

مرد بدگير و پير فقير تعظم را به
 مردم تروتمند پيس كرد. مرد بدگير
 و پير فقير نام خود را پيس
 پاشيد. گناهيد فخر. "پيس"
 مردم تروتمند پيس گفت
 "نامم گناهيد است. گناهيد
 ناوي."

忌まわしい老貧乏人は金持ちにおじぎをしました。そして忌まわしい老貧乏人は名を名乗りました。「倦怠のシンドバッドです」。すると金持ちの親玉が申しました。「わたしの名前はシンドバッド。船乗りシンドバッドだ」

گناهيد ناوي پيس حرف زد:

そして船乗りシンドバッドは申しました。

"اينجا چكايتها يسفرهاي من اند،"

「わたしの旅の物語を聞かせよう、

”سَفَرُهَا أَوْ قَفْرُهَا بِه نَشَاطٌ، سَفَرُهَا أَوْ
 جَهْلُهَا بِه تَعَجُّبٌ، سَفَرُهَا أَوْ تَعَجُّبٌ بِه
 تَعَجُّبٌ، سَفَرُهَا أَوْ بِيْمَارِي بِه جِنْسٌ.

貧困から快樂への旅、未知から驚異への旅、驚異から驚異への旅、病氣からセックスへの旅の物語。

なぜ物語るかって？

なぜだか聞かせよう、」

گناهبد، ناوِ حُرُفِ زِد.

と船乗りシンドバッドは申しました。

「サマルカンドの王、シャー・ザマームとシャリヤール王は兄弟だった。女はすべてセックス気狂いなのを悟って、二人は女を支配しなければと決意したんだ。これが家父長制の始まりだった。女を支配するため、ザマームは妻と、その愛人の黒人コックを殺した。性と黒人性は手を組んでいるからね。シャリヤール王は妻とその友人総てを殺し、その後三年にわたって毎日一人ずつ女を犯しては殺した。ついに、シェーラザードという名の女性が、家父長制を終わらせようとした。ついに、シェーラザードという名の女性が、この王を死んでもいいから犯したいと思った。王は彼女を犯した。彼女自身という牢獄、あるいはこの世界という牢獄で、彼女はその素晴らしい功績を開始した。それは千夜と一夜続いた物語であり、死を食い止め、家父長性を食い止めた。それは

سَفَرُهَا

旅と

قَفْرُهَا

貧困と

نِشَانَا

快樂と

مُجْهَوْل

未知と

تَعَجُّب

驚異と

بِيحَارِي

病と

جِنْسٌ.

セックスの物語」

كُنْأَمْبِدْ نَاوِي حِكَايْتُنْشُرَا كُنْفَدْ:

船乗りシンドバッドは物語を続けます。

我が故郷のしょうもないゲロゲロ都市。

わたしは十五歳のとき、すでに牢屋にいた。顔も魂も魅力的な子供たちが牢屋にはあふれていた。毎日、数時間だけ、子供たちはキャビンボーイになった。帆船のキャビンボーイに。

なぜなら牢屋に閉じこめられる悲しみは、海で孤独な自分を見出す船乗りの悲しみなのだから。

毎日数時間だけ、わたしはキャビンボーイになった。わたしの乗った船は艤装され、マストも備え、帆に風をはらみ、それも本物の風で、それを包む薔薇は裂けて人間のからだの香水を漂わせていた。看守たちは、でっかい荒くれ男たちで、わたしにしょっちゅう辛くあたったが、かれらの命令のもとでわたしは最も危険な海でも船を扱えるようになった。

この看守　檣楼員見張り一等航海士士官たち　の一人はわたしに特に辛くあたった。わたしはずっと、愛にはあまり縁がなかった。あまりに早いうちからあまりに傷ついてきたから。たぶん。とにかく。わたしの心を性欲に向けるのは、今も昔も感謝だけだ。

この看守はわたしの上にいる。わたしの上においてわたしに良くしてくれたから、わたしとしてはかれの腕の中にもぐりこんで、そこにいたいだけだった。

ある日、廊下でかれがわたしの先を歩いていたとき、わたしは背後から駆け寄ってかれの肩をつかんだ。背後からキスしようとするみたいに。わたしはよく友だちの首の裏側にキスするんだ。そこでかい男は逃げた。ひょっとして、怯えたのかもしれない。わたしは後を追った。わたしは再びかれのたくましい肩をつかみ、制服のオリーブ色の生地を、そしてオリーブ生地ごしにかれの骨と肉をつかみ、隠し持っていたカミソリをかれののどに素早く走らせた。なぜそんなことをしたのだろう。看守の肩をつかんでいたわたしの手に、血がとびちった。なぜそんなことをしたのだろう。わたしの一部分は自分の行為に仰天し、別の部分は愛に反応していた。所有制にはなく、愛に。

他の看守たちはわたしに手錠をかけて締めあげた。まだ未成年だったもので、わたしを始末するわけにはいかなかったんだ。

わたしは三ヶ月間独房に放りこまれたが、そこで別の若い看守が、わたしの殺した看守がホモだったと告白した。

牢屋に入った子供は、モノになるか死ぬ、と人は言う。一部の人は、本当のところはと言えば、その子供は何の道具も使わずに次から次へと墓石を建てるのだ。人間感情などというものはあるのか、と人は問う。一部の人は、わたしなら、人間感情の何たるかを話してやれる。

その独房の中で、わたしは自分がなぜ殺したのかを理解しようとし始めた。わたしが屠殺したのは、社会学者たちが言うように、経済的社会的な環境が貧しかったからだろ

うか？

わたしは両親を想った。いつもは両親のことなんて考えもしない。そうだ、父はアルファ・ケンタウリからやってきたんだっけ。父の頭は、ケンタウリ人の常として、緑色でノミ または乾いたヨダレ の形をしていた。父とちがって、母は月の子で、ただの役立たずだった。夜目には、あるいは光のないところでは、美しかった。太陽の陰に隠れる月のように、ママは脳を隠してた。

わたしはこの異人種間連合から生れた。異人種間の結婚は悲惨な結末を迎えることが多い。殺人は、誰かにとっては悲惨だ。われわれの人種差別的、性差別的、階級的慣行が変わらなければ、われわれ全員がわれわれ全員を殺してしまうのは事実だ。

ママは、考えごとをしてたときは人種差別主義者だったにちがいない。だって、だれだかに多大な苦痛をもたらしつつ、わたしがマンコから飛び出して来ると同時に、それどころかそれ以前から、母はわたしが存在しないふりをしていたんだから。バカのふりを続けてきたことで、母は何のふりをするのも上手になっていた。

わたしが八歳になると、母はわたしの本当の父親がアルファ・ケンタウリ星人ではなくて、ロボットだと言う。だからわたしは船乗りになった。わたしが信じたこの情報は、本当だったのかそうでなかったのか、わたしには確認のしようがないが、気にもならなかった。わたしは緑という色が嫌いだったから。

パパは、いまや怒らせるためだけに「ロボット」と呼んでやっていたが、後にわたしに、自分がだれだか知ってるかと尋ねた。人間かエイリアンか機械か、と。

パパ(ロボット): おまえ、どうも自分が何者だかまるで見当もつかないみたいだな、このウスラぼけ。ウスラくそとんまめ。おいこの大ボケ野郎、おまえ、おれが誰だかわかってんのか？

?(わたし): 友だちでしょう。ちがうの、パパ？

パパ(ロボット): 友だちなんかじゃねえよ、だっておれ、お前の親父なんだもん。ことばのまともな使い方くらい覚えろよな。辞書見ろよ。「父親」と「悪鬼」が同じ意味だって書いてあるか?(わたしは返事をしなかった)

さて息子よ、おれは何者だ？

?(わたし): あなたはミスター・マン毛引きで、ぼくは何であれ、とにかく人間じゃない。に・ん・げ・んってのが何にしても、そいつは人間じゃない。ぼくたちはニューヨー

ク市で、この世の金の大半を持って人々と、あまりに持ってなくて人間じゃなくなってる連中との板挟みで暮らしてる。パパ、もしぼくが人間でないなら、ぼくってセックスできるの？

パパ(ロボット): そのとおりだよ、息子や。おまえ、セックスするにはイカレすぎてるんだ。非人間的だってのはそういうこった。さてと。おまえ、歩けそうか？ セックスしたいんなら、人間、立って歩けなきゃ。なぜだか知ってるか、坊主？ 知ってるか？ それは、男ってそういうもんだからだ。男ってのは、何でも誰でも欲しけりゃおっかけてくヤツのことなんだ。男は許可なんか要らない。それだから、男は歩けなきゃならない。さて、おまえ人間じゃねえけど、歩ける？

?(わたし)(十歳にしてわたしは初のよちよち歩きを数歩して、顔からモロに倒れる): やった！ やった！ ぼく、歩ける！(わたしの左ひじは、地面の上でわたしのへそに食い込んでいる。ママがカメラを持って駆け寄ってきて、この初の反ヤッピー主義だか崩壊への退行だかの写真を撮ろうとする) やった！ やった！

モロにうつぶせになったまま、ヘビカラブ・バードみたいに、わたしは這いずった。あそこからあそこへ這いずったと言っていいかもしれない。親から牢屋へ。

しばらくして、やつらはわたしを独房から出してくれた。

گناہبدر باوي ادامه داد:

船乗りシンドバッドは語り続けました。

年季が明けると、牢屋から出してもらえた。気がつく、臭い世界の中にいた。

(臭: 父は五十五歳で心臓発作五つ起こして死んだ。それから母が二千万ドルすって、自殺したか殺されるかした。それから母の母が悲しみのあまり死んだ。わたしは恋人にふられた。わたしは破産していた。生きてわたしが見たのは死ばかり。この街ニューヨークは死の街)

「ここ以外ならどこでも」があらゆる船乗りのモットーだから、わたしは自分が船乗りなんだと決めた。無現実は何よりも、現実よりも望ましく思えたので: わたしは船出したかった。

わたしはイギリスから船出した。イギリスから、オランダへ、スウェーデン、デンマーク、オーストリアをまわってフランスへ。航海毎にわたしは大金を手に入れた。まだ違和

感なし。

フランスから、わたしは南に帆を上げて、ある島についたが、そこは実はクジラだった。わたしは違和感へと船出してしまったのだ。このクジラは巨大すぎて動けなかった。その肉体上の土からは、木々や茂みが生え伸びていた。

われわれみんな、島を探検しようと船を離れた。もしクジラが動けばみんな溺れ死ぬ。

クジラは震えはじめた。まさにその瞬間、わたしは自分の理解能力があまりにチンケなので、現実は(わたしにとっては)偶然にすぎないことを理解した。この無知故、わたしの意志は無益だ。わたしにとって、異和感はいたるところにあったし、今もある。

わたしは非人間海でのたうった。見渡す限り友だちとてなし。わたしは相互にくっつけられた板を見つけた。死が心臓をかじる間、わたしはそれにしがみついた。

مَرگِ دَرِکَمِ رَا جَوَد.

死が心臓をかじる。

تَبَعِيدِي هَسْتَم.

わたしは亡命者。

船乗りシンドバッドは咳き込みました。

波がわたしを次の島へと導いた。この島は山がちだった。目をさますと馬に出会った。馬は白く、まるで老ジャンキー女の髪みたいな白。このスベタに

سَنگِ مَوْتَنَت

スベタにまたがろうとすると

こいつはわたしを踏みつけようとした。

わたしはこの癩癩持ちのスベタから全速力で逃げ出そうとした。船乗りとちがってスベタのご他聞にもれず口から泡を噴いてる。夢見る者が殺し屋から逃げようとますます深い

砂丘を走り抜けるように走って逃げていると、老いぼれ爺が砂の中から現れてなぜ逃げているのか尋ねた。

「主よ、あなたは何からそんなに走って走って逃げているのでございますか？ いかなる人生をお送りになっていらしたのでございましょうか。異和感の中へ逃げだそうとは、人生でいかなるおぞましき災厄に遭われたのでございましょう」

わたしは答えた。「わたしは異人かユダヤ人。わたしの故郷はひたすら異。わたしには真の父も母もない。もうわたしには誰もいない。果てしない絶望の中、わたしは自分が異海で溺れたばかりだと夢想した。アッラー！ 人間苦痛海がわたしを圧倒し、もはや何も感じられなくなりますように！

こんなことを考えちゃいけない。

どうやって逃げ出すかもわからず、わたしは逃げ道を探している。わたしは船乗り。ずいぶん昔に船出した。

この現実の外ならどこでも、どうかコーマン。神の名はコーマン」

わたしは続けた。「いま、わたしはここにいる。ここがどこだか見当もつかないが。わたしの人生は異」

「何かからお逃げになって折られるのかな？ なぜ異和感から異和感へとお逃げになるのかな、まるで枝から枝へと飛び移るラブ・バードのように？ もしあんたが異人なら、ご自分から逃げおおせるはずもあるまいに、船乗りさんよ。ひょっとしてあんた、実は腐れマンコじゃねえの？ マンコは自分から逃げおおせるものかね？」

老人はわたしに手を差し伸べた。わたしは赤ん坊なので、手に入る手はすべて手にする。それがチンコでなくとも。

老人はわたしを地下の犯罪者の巣窟につれていった。

わたしはかれも犯罪者なのかと尋ねた。

「わしは馬を盗む」

「あなた、カウボーイなんですか」アルゼンチンにはカウボーイがいると聞いたことがある。アルゼンチンには拷問がある。

「馬は獣だ。美か獣性は海で生れた。馬は海で生まれる」

いきなりわたしはすべてを理解した。

「夜になると、松明の明かりで略奪が行われる。爆弾が中央電力設備を爆破する。残っ

たわずかなカーペットやじゅうたんには火が広がった。わしらはわずかに残った教会を窃盗的に略奪する。反抗にはガス灯を再び灯す。ガスがやつらの顔面で爆発する。やつらは異人。異様な女たちがあわてふためいて教会信徒席を駆け抜け、聖なるものの中で最も聖なる聖櫃に隠れる。

あらゆるマンコが脈動する性的満月の光の下、わしはさかりまくってるアラブ種の雌馬を連れて氷のように冷たい水へと導く。馬たちが彼女を犯そうと水からあがってくる。わたしはこれ以上は無理というところまでそれらを縛り上げ、収監する。

わたしたちはこうして生計をたてる。わしらのカップル数組は教会で自らを縛り合わせた。ほかの連中は、乱交のピアノにあわせて。教会の聖具に混じってしゃがみつつ、ガキの一群が犠牲者たちを食らう。わしらは犯罪者。すでに生きている者たちは疲れきっている。すでに生きている者たちは死によって消耗しきっている」

しゃべりながらも、この老いぼれは親分のところにわたしを引きずっていった。

「新生児たち、街の最低の地区の半壊家屋にうち捨てられ、一番最近の略奪のときにまるで雌馬のようだったけどもっと乱暴に交尾させられた母親たちに、腐るがままに放り出された新生児たち、ネズミたちが見守る中で死んでいった新生児たち。ネズミやゴキブリ、ノミたち: この世界の生き残りたち。子供が一人、割れたコンクリート・スラブの上で犠牲者をころがしていた。肉の輪、肉のフラフープ。教会が好きこのんで飾っていた花瓶の横で糞をたれていた別のガキがおならをした。軽く。野郎が一人、木の MARIA 像を抱きしめていて、それから像のマンコを、といっても、もし聖処女にマンコがあるものならばだが、ナイフで刺し貫き彼女に跳びかかり歯は彼女の頬とあざになった唇をかじり、かれは彼女にセックスを求めた。

‘با مَن جِنس بِيكْر.’

『やらせろ』

‘با مَن جِنس بِيكْر.’

『やらせろ』

犯罪者たちはそれまでどの人間がしてくれたよりも優しく扱ってくれた。でもわたしは

ホームシックだった。もはや故郷^{ホーム}というのが何だかわからなかったので、一層ホームシックだった。船乗りはホームシックが不可能性よりもひどく、孤独は死よりもひどいことを知っている。

گناہبدرِ ناوے گفت.

船乗りシンドバッドは言いました。

わたしが故郷に帰りたいたと言うと、かれらはわたしを値踏みしたりはしなかった。ただ、故郷に変えるのを手伝ってやろうと言っただけ。

でも、わたしはもはや故郷がどこだかわからなかった。ひょっとして海かも。

驚異の海。

かれらも故郷がどこだか知らなかった。髑髏は決して何も言わない。

船乗りが海に出ている時、船乗りは何に従えばいいのか？ 船乗りは自分の心に従う、なぜならかれの心は空で輝いているのだから。星は無限のナイフ。我が完全な絶望の中我が目がその外に見た闇の中ひたすら死にたいと思った我が頭の中の瘴気をわたしは見た。わたしは現実である暗黒の中をのぞきこんだ。我が欲望と虚無のヘビが絡み合う地獄を。

わたしは自分の心に従うしかなかった。過去、わたしは一度も心が見つからなかった。あるのは性欲だけ。

もう誠実さなんてないのか？

癩病の犯罪者の一人が言うには、かれはある顔を見たという。その顔を見たとき、それが愛の顔だと悟った。わたしは愛の顔を見たことはなかった。もしかしてわたし用にはないのかも。犯罪者たちからさえ亡命して生れ。人間から亡命して生まれ。ユダヤ人は欠乏から欠乏へとさまよう。

辻の音楽家たちは怒りを叩き出し、その間に人間の精液とあざになって腐る人肉と、栄養失調からくる腐敗、残り物のワイン、娼婦のボロに乾いた血で貼りついた街のかけらに（血糊とはよく言ったものよ）惹きつけられて、このネズミどもは交合する肉体の間を駆ける。肉体から肉体へと流れる血をなめる。カップルがイクと、ネズミどもはそいつらの手をかじって脚をほどかせる。眠れなかったり夢攻撃の中へと沈んでしまった子供たち。

بچگان بیخوابی یا خواب کشند.

眠れなかったり夢殺の中へと沈んでしまった子供たち。

癩病者は言った。「船乗りさんよ、セックスにありつけるか心配すんのはやめなよ」

わたしは愛の欠如のため世界が発狂したと思った。アルコール中毒と唯物主義の形をとった孤独のため母親たちは自分の子供たちを攻撃している。母親たちはその若い股を開き、狭いマンコを手で貫きほとんど存在してないくらい小さなチンコを包みこんで、子供たちの頭をどつき食って成長する機会が与えられる前に存在しなくなるよう念を入れた。くぐりぬけてきた数人の子供たちはイカレきってた。

妊娠八ヶ月の女が一人、教会のステンドグラスの窓から漏れる光の下でしゃがんでウンコをしていた。ウンコの山の上でスカートを持ち上げていた。告悔室から黒いヘビが滑るように出てきて、ウンコの匂いに惹かれて教会のドアの下から現れた。そいつは頭をもたげ、女の股の間にすべりこんだ。女は叫んだ。額がコンクリートにうちつけられる。ヘビは女の腸の中でもがきまわっていた。毒を子供に流しこんだ。

癩病者は言った。「船乗りさんよ、セックスにありつけるか心配すんのはやめなよ」

若い革命家が、乾いた血で太股に上祭服をこびりつかせ、教会のステンドグラスの窓から漏れる黄金の光に包まれて、身動きもせず、夢見ている。目からは香が煙をあげている。かれは十字架にかけられたキリストの姿を見ていた。眠ったままかれは腕をあげ、首を左肩のほうにまわした。苦痛に覆い隠された愛の姿、かいま見える愛が、かれを踊らせていた。踊り続けたまま祭壇によじのぼったが、生きた人間がかれに長剣をつきたて祭壇の階段を転がり落とした。

癩病者は言った。「船乗りさんよ、セックスにありつけるか心配すんのはやめなよ」

名前をジウハーヴェという女革命家が身をかがめ、右手でもってネズミをつまみあげ、そのネズミを撫でた。「ネズミ、だいじょうぶ、震えなくてもいいの。もう震えなくてもいいのよ、あたしがついてるから。あたしの血の中へ入ってらっしゃい。そのちっちゃな歯であたしの中身をすべて砕いてつぶしていいのよ、十分に食べられるようにね。あなたは二度と孤独じゃなくなる……ちっちゃなネズミ……二度とね」

野郎が一人きてジウハーヴェに侵入した。若くて虐殺を免れた助祭が祈っていた。血走った目をあげて犯し屋に向けると、犯し屋の手は祭壇をひっくり返すところだった。も

う片方の手はジウハーヴェの尻にあてがわれ、それがクリトリスにすべりおりてさらに聖体器に達し、聖餅を探り当て、つまみ上げ、彼女の口に押しこんだ。いまや若い助祭は納骨堂の一番奥に退却していた。犯し屋は聖餅をもう一枚探し出して、この聖餅を彼女のマンコにさしこみ、彼女の肛門で軽く茶色に染まったチンポコを引き抜き、男性自身を軽く膨れた陰唇の間に据えると押し入った。女のもう一つの口が食べると、ジウハーヴェはうめき、男の液を食べてさらにうめいた。男は冷たい風のように激しく息をしていた。

そしてわたし、船乗りシンドバッドは、犯罪者の血を離れ、わが故郷ニューヨーク市に向かった……

.....
船乗りシンドバッドの物語、これにておしまい。

.....
ある日、クソいっぱい、じゃなくて船いっぱいのアラブの囚人が現れた。お互いにしゃべることばは詩だった。

.....
アラブ女。

アラブであるあたしは、ほかのどんなことばよりも大きく、まっ二つに切り裂かれた目よりもリアルなアラブことばを、空に見た。このことばは、さまよっていた星を照らし出していた。

あたしはそのことばを見た場所は世界の転回点だった。

あたしは転回。

あたしは記憶。

とうとうあたしは何かを思い出した。故郷かあたしを。それは死よ、あなたに歯向かう（偽善的な仮面へと凝固した風、光を追い立てる目、喜びから閉ざされた顔）あたしがこの記憶を書き留めたり発明したりしてるのは、死よ、あなたに歯向かうこと。

あたしが記憶を書き留めたり発明したりするのは、死よ、あなたに歯向かうこと。

ス

死

ニューヨーク市。

あたしの最初の記憶。それはニューヨークでの暑い夏。あたしは自分の部屋（同時にあたしのアパートでもある）の床（あたしのベッドでもある）にしゃがんでた。天井が一拳にあたしの上に落ちてきて砕けた。そのほこりであたしの部屋は戦時中と化した。見るものはその通りだってことはわかった。

そこにあるすべては売り物だった。メッカ、チグリス川、イースト河、汚染された水、臭い息、パレスチナ、ハノイ。五年前、テロリストに金をかささらわれるんじゃないかと恐れた金持ちどもがニューヨークにやってきて、手当たり次第にビルを買いあさりだした。いまやあらゆる不動産が売り尽くされた。

売られた。イースト河も切り売り。あたしたち自身から亡命。斬首。あたしたちはそれぞれ、自分の生首を金持ちのディナーパーティーの皿に乗せてる。あたしたちは生まれ変わりを待っていてこれは神秘的なんかじゃない。それだけがあたしたちの唯一のチャンス。

アメリカ、死。あなたが死以外の何かであるなら、あなたは亡命者の大軍。

آزادی

自由

自由と言え。自由ってのはあたしの頭に差し込まれた釘。それはまた、あたしのマンコに連中が突っ込んだ釘。あたしのマンコがあたしの病んだ心なのはあたしだけが知っている。

あたしのマンコはその一部が壊れたときに香水を漂わせる薔薇。

ニューヨーク市、あたしの故郷、自由。坊や、どっちが嫌い？ 黒ンボ、それともアラブ？ たぶんアラブのほうが嫌いなんじゃない？ かつてきみの深い文化は黒人文化だった。いまじゃきみはアラブになりつつある。

言語の天井が落ちつつある。この瓦礫になんか足すか、少なくとも多少すくって片付け

てよ。

自由、クソ。飢える自由。だれも聞かないことばを喋る自由。どんな医者も診てくれないし治せない病気にかかる自由。ゴキブリですら死ぬ気でなきゃ触ろうとしないような環境で暮らす自由。スラムのビルの廊下でネコの糞の中をスリッパでうろつく八十三歳のウクライナ人になる自由 「この大家はいないの？ 明かりはどっかつかないの？」

إنهدام

破壊

言語って何？ 誰かが他人に話かけたりするの？ 言語ってコンピュータ言語、ジャーナリズム体、予想や行動の伝達、許された可能性や事実の発表？ 言語って金みたいにコントロール支配するの？

ペルシャ語でページを横切る手の動きは精霊あるいは炎の動き。

ニューヨーク市の学校制度の中にいるガキどもは学校に火を放ってる。火は行動だと知っているから。

ハーレムは聖なる三位一体。そこでは、赤ん坊はごろつきパンクになり、ごろつきパンクどもは面白半分にドブネズミをなぶり殺す。ドブネズミは人間の赤ん坊の肉を食って生きる。1 2 3。税務署員さん、裁判長閣下、おまわりさん。1 2 3。

ハーレム 黒人はユダヤ人が大嫌い（それもちゃんと理由あってのこと ユダヤ人は黒人の住む不動産を所有しているから）

ハーレム 黒人はアラブが大嫌い。アラブは黒人奴隷貿易を始めたから。

ハーレムの真ん中にあるブロードウェイ 人々はドラッグを食らい、ドラッグが人々を食い物にする。おまわりがドラッグを仕切ってる。足枷がおりてくる。

ハーレムの真ん中にあるブロードウェイ 警察クラブのお祭り。ここではあたしの目を通して見るたびに、あたしの目は棺桶。だって、赤い雪がそれを氷に凍結させてるから。こういうのすべての果て（自由よ、おまえの果て）、すべての果て：すべては黒。ニューヨーク市にはもっともっと黒人が増える。

あたしは黒人ではないけれど、ハーレム、あたしはお前の怨恨を知っている。おまえの

憎悪が何に培われているのか知っている。それはあたしがアラブだから。そしてあたしは女。聞かせてやろう。飢餓が一件おこるたびに、誰かが腹をすかせるたびに、やがて大洪水がおこって空っぽの穴か娼婦みたいな腹が干は出てくる。刑務所がたった一つできるたびに、やがてその刑務所の外では倍以上の暴力が出てくる。復讐なんかじゃない。因果律ってもの。関連。拳の関連。振り子が振れてるわけじゃない。貧乏人が振り回すのは鉄パイプ。アメリカ都市よ、おまえのコンクリートの下で、氷みたいな空気が抱きしめる（病気に残された唯一の肉体的愛情）下水管の中の糞が膨大になり過ぎて、糞がコンクリートをぶち破って天井にまで飛び散る……歴史の風……香水の風のなかで白人の足跡すら見失われる……金持ちは何も知らない……異人……自分たちの所有する世界から切り離され……自分自身からも……香水の風。

アラブが知ってるのは「異人」は「邪悪」と同じだってこと。

ブラック・ハーレムは女房殴り。白人たちは自分自身をさえ殺してる。全滅寸前のところにいる。時の刻みだけでかれらは死にいたる。黒人の手を借りて、アメリカでは、時は白人を切り刻む。黒人の涙は火山。苦痛は死なず、変換されるだけだから。空腹の苦痛は殺しの苦痛になりつつある。ブラック・ハーレムよ、因果律によって、おまえはニューヨーク市を愛を持って腕に抱え上げて、それ自身のクソのなかにブチこむ。死は常に異なるものだから、アラブであるあたしはあらゆる異人を嫌う。

アッラーの日には、もはや孤独はなくなる。

ニューヨーク市、おまえはあたしの故郷であたしはおまえから追放されている。あたしにとって、おまえは我があなぼこにして娼婦。この空虚と被害者意識を何とかすれば、もうあたしの中には孤独はなくなる。

アラブ男：

ナフザーウィ族長によると、コーランはセックスのマニュアルだ。だったらコーランはカクテルで、セックスの泥酔へと続く道。呑んだくれた鳥のように。魔法にかかったラ

ブ・・・バードのように。発狂ラブバードが狂乱したみたいに、コーランの音声的な揺らぎ
千と一の音声的バリエーション、千と一ともっと多いバリエーション、相違性のなか
の相同性と類似性のなかの相違性　すべてがなにか彼方のものへと変換し、飛び立とう
としている。

アラブ女：

でもみんなA I D Sにかかっているのにセックスなんかできないじゃない。

アラブ男：

この監獄の文化すら、われわれに安住の地を見出させまいと、お互いセックスさせまい
とするんだ。この文化は生きたことば（生きた手の動き）とセックス（生きたからだの動
き）を禁じてる。この死んだ文化は地球をコンクリートか大理石として認識し、われわれ
の涙から流れる水としては認識しない。

アラブ女：

そんなのみんなクソくらえ。世界の中心はあたしのマンコ。わがマンコは木。あらゆる
葉、あらゆる花、あらゆる果実があたしのマンコからくる……

アラブ男：

マンコのなかでイク、だろ。

アラブ女：

……あたしのマンコは風の血か薔薇。あたしはすべての匂いを発する。あんたのチンポ
コは決してここには入りこめないんよ。だって、あんたはあたしを捕まえて監禁できない
んだから。あたしは人造のかごに入ったラブバードじゃないんだ。

アラブ男：

自由とはまさにマンコ。

チェ・ゲバラは自由がマンコなのを見て彼女をベッドにつれてった。そのベッドは時の

ベッド。あるいは苦痛の水を与えられたバラの咲く花壇(フラワーベッド)。夜明け間近になって二人は眠りに落ちた。

自由はチェのことをどう思ったのか？ 女がどう思うかなんて誰か知ってるの？ 女って、思えるの？ いいや。かれが夢から目覚めると、彼女はぶっちらばってた。

以来、チェは夢の中にしか安住できなかった。ニューヨークでデトロイトでLAでニューキャッスルでマルセイユでベイルートで。巢。人々が自らの欲望で発狂してるところ。発夢してるところ.....

アラブ女：

監獄にふんづまりになってるってのに、夢なんか何の役にたつの？

アラブ男：

.....

アラブ女：

肉体的精神的欲情があたしのからだを食い尽くしてて、同時にあたしは孤独しかないのを悟った。CIAがその街に孤独をつくりだして太陽を氷のかけらにしたんだ。

死ぬか、さもなきゃ感情を再発見しなきゃ、と思った。川の水位の上昇。だからあたしはニューヨーク市を離れたんだ。

あたしがニューヨークを離れたのは、愛人のベッドを離れるときに、ヤったばっかの相手のことなんかツコほども気につけず、時間は朝の五時で歩道が死んだネコみたいにうごめいてる、そんなやりかた。

何も残さなかった。

いつも思いをためらう。

そこでは、あたしは誰からでもオルガズムを引き出せる。

ニューヨーク市では、わたしの愛人三人は三人の死んだスターだった。どのベッドもあたしの背骨にやたらに破片を突き刺したもんで、背中が木の幹になり、自分で結び目ができて、自分自身をゆわえあげ、結非目に継ぐ結否目。

あたしは十字架にかかった生ける十字架で自分がひり出した愛を探してた。だから

ニューヨーク市を離れた。

ニューヨーク、おまえはわたしの背骨。

アラブ男：

USAは死んだ国家。夢が失われてる。USAはわれわれが人間的な生活と呼ぶものすべてを破壊して、かわりに宗教を据えた。この宗教というのは、金の崇拝と愚鈍さへの盲目的信仰だ。USAは自らの土と空気を殺している。USAは生きるための教育に変わり、いかに支配されるかを学ぶことと事実の単調な暗記を強要している。USAの生活のあらゆる面は、いまや死にふさわしい。セックスは病気につながるだけ。USAは現実の肉体におけるガン。あらゆるアメリカ人は病んで生れ、苦悶しつつ生きる。

アラブ女：

死と死をもたらず者に平安あれ。わが病気の故郷、AIDSあるいは愛の死の都市に平安あれ。

.....
アラブ囚人の夢、これにておしまい。

.....
おれの夢：

ガレー船が暖かくなめらかな海を帆走する静かな夜。船員がおれを大櫓下桁に登らせた。おれはすでにズボンを脱いでいた。みんながおれをバカにして、ゾツとする笑いをあげて首をまわしてるのはわかってたけど、やめられなかった。これまで自分をおさえられたためしがない。だって、そうするのを自分でやめたいと思わなかったから。連中に、もっともっと侮辱してくれと頼んで、いずれ何かが起こらざるを得なくなるのを待った。マストのてっぺんまで登れるのはわかってた。おれはその根元で、半裸だった。頭上に細く、高くそびえる木を見上げた。十字架のようにまっすぐ。連中にもっと笑われたかった。松の木に抱きつき、それから脚をからめ、気色悪い尻を空の顔面につきつけるマントヒビみたいに登ろうとした。ウンコのぼつぼつが見えたかも。取り巻く男たちの狂乱ぶりは頂点に達していた。おれはマスト半ばまで登った。船長が甲板に出てきた。かれも部下たちの性的狂乱をおさえられなかった。おさへの効いているのはおれ一人。おれはかれら

から去るところだったから。かれらの熱い吐息はおれの快樂。硬い木の棒が海のうえにそびえる。海は呼吸。てっぺんに到達して頂点にさわったとき、おれは落ち着いていた。目をさますと、もとの独房だった。船長の巨大な腕がおれにまわされ、かれは結婚してくれと言った。

.....

C I Aが牢獄で生きよう強要する連中は、狂ってるから邪悪だ。連中は夢のなかで生きてる。われらの狂乱が狂気から怒りへと変わりますように。

夜明けの天使への逃亡

牢屋から出なきゃ。

独房のずっと上の方に、小さな窓があった。爪先立てば、鉄格子の向こうに通りが見えた。鉄格子越しに見えるのは、髪の毛の群れで、薄汚れ、灰色や黒で、よだれまみれ。ときどきその髪がわかれ、あるいは振り返って、しわだらけの顔面の肌をのぞかせた。時々、灰色や黒でよだれまみれの毛が顔面皮膚の下半分を覆ってることもあった。何度か、黒い革に包まれた手が毛のなかに置かれていることもあった。頭がたくさん、汚れがたくさん、臭い匂いが目に見えるほど、それはウンコ色で、まるで空がなくなっただけじゃなく、腐った腐りかけた建物も消滅したかのように見える。生きた腐敗が乾いた死んだ腐敗を駆逐。

汚い頭の持ち主は、ほとんどが四十代か五十代で肥り過ぎだった。ヘロイン使用さえ理性的なくらい肥り過ぎ。不合理な世界では、理性は理性的じゃない。こいつらの肥り過ぎには、本当の理由が一つあった。生れてこの方、こいつらの理由づけ能力のための仕事といえばバイクだけだったから、みんなそれ以外のことは何一つ知らなかったんだ。自分たちのからだについても無知。セックスについても無知。みんな、醜悪なるオイル臭い穴に向かって本能的に嗅ぎ寄ってきた。男も女も。この無知性のため、バイカーじゃない連中はかれらにとって異なりすぎてたから、かれらは自分たち以外の連中を無視するか、ぶちのめすか、強姦してしまった。不合理な世界では、理性は理性的じゃない。

この獣どもはバイクにまたがり、あらゆるところへ、どこへでも乗り出した。風は、ほとんどの場合、よかった。すごくよかった。太陽が肉を焼き自由にかわる。バイカーが一

人事故にあって死にかけてた。かれは鉄柱（駐車時間帯午後六時一午前七時に限る）にシャベルが立てかけてあるのを見た。この標識はもはや適用されなかった。シャベルはかれの墓のためにそこにあった。残り物の人体のための墓。墓は、生が自由を欠いたため、死んでいる者のためだけにある。風がかれの頭の濡れた灰色の髪を撫でる。死にかけていたのに、かれはハーレーにまたがって、エンジンをかけた。

ある日おれは牢屋を出る頃だと思った。そこで単純に歩き出た。

窓から見た通りに立った。いつもながらバイカードモが街角に忘太陽状に広がって群れていた。そのなかの何人かは女なのが見えた。五人。女五人ともTシャツを持ち上げて、お互いにかそれとも誰か 死んだ世界 に乳房を見せていた。一番左側の女は、髪がほとんど真っ白な灰色で、超短く刈りこんであった。サングラスがいくつかの目を死にかけて太陽から守っていた。青い蛇の刺青が巨大な乳房を走り下りていた。青にかき消え。彼女は五十五歳くらいだと思った。あとの女たちは二十代みたいだ。

彼女のすぐ隣に立ってる若い女の胸や乳首はもっとでかく見えた。巨大な乳首は口に隠されるべくつくられている。あんなものは法律で禁止して、その所有者はそれを隠すよう強要されるべきだ。ああいうものはフェティッシュ的な行動につながる。でも、もはや法律なんかない。彼女はまた目もなかった。

真ん中の娘は男並みにぺったんこだった。彼女はまた男並みにタッパがあって、目は閉じられていた。

血のように赤いヘルメットが次の女の顔を完全に隠していた。黒いレースのブラジャーが彼女の胸を隠していた。

最後の女はねずみ色の髪と、巨大とはいかないまでも大きな胸をしていた。胸は、熱いコンクリートの上の、立ったり転がったりしている、ほとんどまだ開いていないビールの缶に影を落とす。

おれはこの通りを軽々と走り出した。四つ足の獣みたいに軽やかに。セックスの自由で、風の自由さでもって、跳ねていった。次の通りも駆け抜け、コンクリートは自然、次から次へと通りを。おれは飛ぶために飛んでた。おれはバイク。本能的に、おれは無人の狭い小道を選んだ。そこではおれのからだは、他人の知覚にはただの閃光にしか見えないし、おれ自身の記憶の窓のなかでも閃光にしか見えない。

突然、なぜだかわからなくなった。自分が追い求められているのを感じ、知覚し、耳に

した。いまいるのは大通りだった。ベントレーが数台、疾走していった。それは死者のリムジンだった。死者のためのヴードゥー行列だ。往来の広大さがおれの足を止めた、死んだように。自由に走る能わず、見回すしかなかった。ためらいは死。追放者にとっては、いかなるためらいも死。もう走れなかった。おれはもうバイクじゃなかった。

夢だった。あのギャングがおれを消したがっていた。砂が足の下とまわりを取り巻いていた。それがおれに近づくほど、脚も動かなくなった。深まり、隆起する砂の中。

はるか彼方にセーヌが輝き、かっちりしたきらめく棒となっていた。疲れきった船乗りには天国。実際のセーヌは死んだミミズみたいにまっ茶色。

下の、水が実際に横たわるところでは、コンクリートの壁の門や隠し通路などが隠れ場所になるのは知っていた。犯罪者と浮浪者のための隠れ家。おれは水に到達すればいいだけ。

背後で足音がした。監獄の看守たちがおれの脱走に気がついたんだろう。おれを追っている。おれの心臓は息をのむと同時にほとんど止まりかけ、同時に人生が続かなくなりそうほど早く打ち出した。看守はおれの親だったかもしれない。記憶はないけれど、おれにはわかってる。おれの両親は化け物で、その行動はおれには計り知れなかった。あの怪物たちがおれを追っている。だれが悪者でだれが善い者かはよくわからない。

おれは自分のからだを無理に、なだめすかし、何とか川まで到達した。走る速度はどんどん遅くなっていったけれど、川にたどりつき、鳥たちは交尾し、陽射しで滑りやすい白コンクリートの階段をおりた。アステカのいけにえ神殿の階段は、人間には急すぎた。恐怖から逃れるため、おれは氷のように冷たい水に飛びこんだだろう。パパ怪物への恐怖。おれがずっと求めていたのは、単に恐怖からの自由か、それとも飛ぶこと。でもおれがかろうじて味わった、想像のなかで味わっただけの、氷のように冷たい自由は、アイデンティティが怪物に基づいている子供にとっては、荷が重すぎた。おれがものに与える名前、おれの名付け方は、多少なりとも、物事がどう起きるかを左右するんだろうか。たぶんしないだろう。護岸に手が届いた時、巨大な手がおれの左手首をつかんだ。

恐怖と愛のあまり、おれは氷のように冷たい水に転げ戻りそうになった。黒いヴェールに包まれた自分を見た。いまは透明だが、それでもまだ外は見える　ハレムから逃れた女が、巨大な筋肉のベルベル人につかまって運び去られる。かれは護岸にあがって、おれと自分の服の下をはぎとった。それからかれは、おれの肩をつかんだ。そして太股の一閃

で、一突きで、おれにねじこんだ。

この鉄だかセックスだかは、この行動はおれを前方に三メートル近くはねとばした。手のひらが舗装をひっかく。振り向いて話をしようと、男を見ようとしたら、かれは看守じゃなくてバイカーで、かれは歩み去った。おれは独りぼっちで取り残された。あの死んだ茶色の川の横で、パンツをおろしたまま横たわってた。陽射しのなか、物質の切れ端がころがって尻が痛んだ。今度はこの恋人は、戻ってくるだろうか。

あなたこそ、あたしが泣いて拜んで語っても、足に一度たりともキスさせてくれない。

火の中水の中歩かせるくせに

あなたは高貴なサルタンで命令を下すのはあなた。

あなたが笑わない限りあたしが笑えるはずもない。

魂はこの唇もなく歯もない笑いの奴隷。

あなたの笑いを見るものこそ哀れ。

でもあなたの笑いは獣の目に隠されて。

栄光にして心を持つ人間の支配者たるあなた

はあたしたち病んだ者どもの医師。

雨降りの日、世界の病人たちが庭に集い

雨降りの日、あたしは友だちがほしい。

今朝、その庭で

あたしは薔薇を一輪つんだ 庭師につかまるのがこわかった。

かれは優しく言った。

「薔薇一輪なんかクソくらえ。おれの庭まるごと持ってけ」

誰にでも友だちはいる、誰にでも仲間はある

誰にでも才能はある、誰でも

働く。あたしたち心有る者、あたしたちは自分が本当に愛する者のイメージの中で安らぐ

あたしたちの感情の太陽の中、

洞窟の暗い影の中。

第III部

海賊夜

でも、生きようという燃える意志、新しく生きなおそうとする意志。

そしてこの現代世界において自己実現を果たそうという人々の苦闘、かれらの罪とはそれを欠いて作り出されたこと。



第9章

わかったこと（ティヴァイ語る）

1.

おれはそのコンクリートから、尻丸出しで、はだかで立ち上がり、こう思った。おれは自分が海賊で、陰悪で、アラブのテロリストで、モラルなんかないってふりをしてただけなんだ。実はおれ、このどれでもない。そして、ほとんど泣き出しそうになった。そう度々あることじゃないけど、だって、おれは何でもなかったし、そのコンクリートの上でひとりぼっちだったし、それに肛門が痛かったから。

それでおれ、自分のこと考えるのをやめた。退屈だったからね。それであたりを見回した。太陽はこれ以前にずっとそうだったみたいに、全力で照りつけてて、まわりには何もなかった。石、太陽、空、水のほかには何も。ここは荒廃した郊外住宅地。もしまわりに何も無いのなら、何もできないな、と思った。でも、とりあえず手元には生がある。おれ自身の生が。自分を始末してもよかったけど、でも自分の生を愛してるから、そんなことはしない。

おれの内面には、矢で貫かれて結び合わされた二つのハートが見えた。矢の半分は白で、半分は黒。貫かれたハートのまわりを囲む、パサパサの巻き物は白か黒。

この世に何も無いから、おれは海賊の王になって、強姦して殺してありったけの黄金とIBM株を梅毒病みの足指で転がしてやれる。ぼくのだ。それから、おばあちゃんの期待通りバレリーナになってやるんだ。それからデコルテの、手縫いビーズのガウンを着て何千もの愛人を従えてパーティー巡りして、そのパーティーではスターたちがお互いにハメまくって、もう煙りもでないくらい消耗しつくし。ぼくの男半身はぼくの女半身を強姦し

て、これってあんまいいことじゃないけど、でも人間のニーズに気がつかないような社会の中で、他にどうしろっての？ どんな社会にも、革命アルジェリア社会にだって問題はあるんだから、セックスは必要なこと。そしたら、犯し犯されて、ぼくは落ち着くんだ。おばあちゃんがぼくを無理矢理バレリーナにしようとしたとき、そう言ってやった。でも、おばあちゃんはぼくが言うことなんか全然聞いてくれなかった。

心の中、うだるような太陽の中で落ち着いて、干上がるのをやめたら、雨が降り出した。一瞬のうちに、空があざにでもなったみたいに真っ暗になり、次の瞬間には稲妻が閃き、雷がとどろく。完全な混乱。雷は次第に長く、長く響きわたり、やがてそれぞれの雷が世界の反対側にいたるまでとどろきわたるようになった。雷と稲妻以外のすべてが逃げ去った側まで。一度は死んだミミズ川は、悪夢の中みたいにふくれあがる。茶色い水だがミミズみたいな表皮だが、ぼくの爪先を洗ってる。空はぼくの内面の苦痛。それがぼくの肉体のどこにあたるかなんて、全然気にしなかった。どうせいつまでもそこにいすわるんだから。雨の中では眠るしかない。

あのマンコが死んだと思った聖バレンタイン・デーを夢見た。

男であるということは、無の中で生きるということ。

目を覚ますと、太陽は目覚めていてカンカン照りで、まわりには誰もいなかった。もうどこにも誰もいないのかも。ゴミがないみたいに。おれは、覚えてる限りでも、何度も寂しいと思ったけれど、この全開で照りつける太陽の下ではちがった。太陽がこんなにきついと、コンクリートすら太陽になる。おれがコンクリートの靴をはいてなくて、足の裏は幸運だった。

太陽は街一番の怠けもの。

運河を三十七メートルほど下ったところに、ボートかなんかが目についた。棒につながれて転がってる。鞭打たれた犬。沸騰するコンクリートにつき刺さった棒。おれは犬の縄をほどいて、自分をそいつの口に入れた。死体は噛まない。岸から一メートルほど船を出して、死んだ木材に自分の場所を見つけさせた。水と太陽の中で。空につき動かされて、流れはおれたち死者を果てしないコンクリートに沿って運んでいった。太陽に夢乗られて、おれとしては万事OK。オールというか、すでに半オールになったものを手にとり、運河のド真ん中にカエルみたいに鎮座ましましてた島の岸に木材を操った。この船から降りもしないうちに、ニャーオという声が聞こえた。ニャーオ、ニャオ、ニャオ。おれのマ

ンコが健康だった頃に言ったせりふだ。ニャーオ。おれのマンコだった。アブホール。

彼女に会えてうれしかった。まるで彼女がおれの心の影武者でもあるみたいに。なぜって、おれは孤独をくぐりぬけてきたから。彼女は溺れたネコみたいな様子だったが、おれは寂しさのあまり自棄になりすぎて、自分が自棄なのもわからなかった。おれはボートから飛び降りて言った。「よお、マンコ」

彼女はおれが死んだと思ってたにちがいない。ホントに死んだのかも。アブホールはいつも死をこわがってた。

でも、おれによれば、アブホールの場合であっても、何かは何もないより絶対マシで、何もなくとも死よりはましなのだ。

「ぶたないで！」アブホールは身震いして哀願した。アブホールはつらい人生を送ってきたもんで、頭が完全にはまともじゃなかったもんで、いつも変なことばかり言ってた。親父さんに犯されたんだと。

「さわらないで！ 死人にさわられたくない！ そんな気狂いじゃないんだから！」彼女は自分のことすら何もわかってない。

「アブホール、おれだよ。死んじやいない」

「死んでるわよ」無意味な会話だ。

「アブホール、おまえ、狂ってる」これで彼女は黙った。おれはマンコに会えて嬉しくてたまなくて、お互いの足取りを見失って以来起こったすべてのことが、嘔吐された蟲みたいに、口から一気にあふれてきた。シャンペンか蟲みたいな喜びは、おれの性愛への渴望からきたものだった。この渴望は不十分だと思う。ルーレットみたいに、いつも回り続けて、いつもゼロに戻ってくる。でも、ほかに何があるのか知らないんだ。自分に何が起きたか、おれはしゃべってしゃべってしゃべりまくった。そして、アブホールが聞いてたので、おれはもう寂しくなかった。アブホールは無言で聞いていた。

おれは食べ物を求めた。

彼女は銃を求めた。それが彼女の最初のせりふだった。

「どんな銃だ？」

「マグナムみたいなやつ」

「銃は持ってない」

「だったら食べ物ちょうだい。もう何日も食ってないんだから」彼女は誰かにくわれて

吐き出されたみたいな様子だった。この川みたいに。

「銃もなしに、どうやって食べ物なんか手に入れる？」

二人とも、これに関して長いこと考えこんだけど、十分に考えなかったか、それとも思考障害が発生してたのか、どっちも答が思いつかなかった。とうとう思いついた。アブホールが、川を流れてきた娘の死体から服をはぎとり、おれに着せた。死者は毒で、だからこの衣装がおれに毒を盛ってるのはわかってたけど、ひとりぼっちじゃなくなって社会的責任ってもんがあることのほうが重要なのもわかってた。この寄る辺ない感じの女装で、おれは食料と医薬品を探しに出かけた。

濡れてはいたけれど、死んだ娘の衣装を着るとすごく気分がよくて、自由な感じがして、おれは跳ねたりスキップしたりして、何もこわくない気がして、目についた最初のまともなドアを叩いて体当たりをくらわせられた。

そのドアはビルに接続されていた。

女性秘書風の衣装の女がドアを開けた。彼女の服は見事に色がなかった。ライト・ブルーにグレー。ブルーはグレーと同じだ。何もかもグレーだから。細い、目に見えないストライプがこのグレーを際立たせてた。服のカットは、肉体との接触やその強調をすべて避けるようになっていた。特に性器回り。西洋工業世界の始まりに、秘書たちの装いはAIDSの時代を予告していた。「なんか用？」彼女はおれのいたいけな手をドアにはさもうとした。「何も買わないよ」

「あたし、押し売りじゃありません。売るものなんか何もないんです。何もないもんで、叔父さんを探してるんです。叔父さんは昔、水爆関係の仕事をしてました。いまは失業中です。子供嫌いなんで、あたしは会ったことありません。だからあたしは何も持ってないんです」

「だったら叔父さんなんか見つけて、どうしようってのさ」

「お母さんが無一文だって言いたいんです。お互いが死んだのと同時にクレジットカードもみんな死んじゃって、貧乏人用墓地に埋められちゃて。そしたらお母さんが、あたしたちに白いプードルのティンカーベルを遺すって遺書をおいて蒸発しちゃったんです。あたしたちって、あたしと妹が九人なんです。うちには男の子がいなくて。だれもお母さんのプードルになにを食べさせればいいのかわかんないんです。むかし、おとうさんが彼女にキスすようとしたら、左乳首を食いちぎられたんですよ」

「誰にキスしようとしたって？ ブードルかい？」

この話がうまくいってるのがわかった。「そのブードルって女の子なんです。でも、お母さんにはそんなまねしなかったと思うんです。あたしはそんなことされてませんし」とおれは急いでつけくわえた。

「あんたのブードルは飢えてるんだよ」

おれは飢えきってた。「うちのブードルは飢えてなんかいません。そこのマクドナルドでお食事したばかりです。あたしはお母さんが心配なだけです。叔父さんがどこにいるか知りませんか？」

秘書はおれを疑い深そうに見つめだしたけれど、すぐに自分自身の悲惨さに囚われてしまった。だって、みんな自分のことっきゃ考えちゃいねえんだもん。「あたしやこの神に見放された街で、だれ一人として知っちゃいないよ。だれも残っちゃいないんだから。浮浪者だの、船乗りだの、動物フェチの連中、娼婦に気狂いばっか。それと肌に色のついた連中と。まだ仕事をこなしてくれる警官がいてくれて、ホントに助かるよ。そいつらも黒人だけどね。昨今じゃもうゴースタウンよ。それも黒ンボお化け。臭い黒ンボども」

「でも、叔父さんは黒ンボじゃないです。だって、CIA政府で爆弾のお仕事してたんですもん。あたし、暗いところか、暗い中にいる人とか、すごくこわいんです」

「だったらさっさとお入んなさい」と彼女は命じた。「それでうちの亭主が帰ってくるまで待つんだよ。亭主は男だからね。だって、あたしの亭主だもの。暗いところを女の子が一人歩きなんかするもんじゃない。特にこの街ではね。うちの亭主があんたの叔父さんちまで送ってっただけだからね。絶対そうしてくれるよ。うちの亭主は黒ンボでもないし」

こいつはやばいかもしんない。どうやら本物の強姦魔で、しかも気狂いで本物の悪党に出くわしちまったらしい。でも、おれは昔から常識がなかった。好奇心だけ。おれはまっすぐに強姦魔の家に入っていった。

「ところでお嬢ちゃん、まだ名前を聞いてなかったね」

ちょうどその時、ネズミが壁の穴から出てきた。おれは嘘をつかずにすんだ。女の子だったから、おれは金切り声をあげられた。ネズミがもう一匹、そしてもう一匹出てきて、だけど秘書（ちなみに名前はウィリアムズ夫人だと）は気にもとめなかった。こいつは女じゃなかったのかもしれない。最近じゃあ性別もいろいろややこしくなってるから。「ここいらにゃネズミが多いからね」と彼女、ウィリアムズ夫人は言った。

「あたし、ネズミきらい」

「そのうち慣れるよ。貧乏になったらね。貧乏だと、何にでも慣れちまうようだね、死出さえも。時々、本とか古い針とかをネズミに投げつけたりするけど、そうするとネズミがあたしのこと見るんだよ。交換みたいなものだね。向こうとしては、精神的肉体的にすごく弱い哺乳類を見てるって感じかね。つまりあたしのことさ。ネズミって何考えてると思う？」

「あたし、ネズミって貴族みたいな考えを持ってると思うな」

「その通り！」と秘書は怒鳴った。「ネズミは自分が世界を所有してると思ってるんだよ。ちょうどあたしのおばあちゃんみたいに。うちのおばあちゃん、町で一番立派な雑貨屋　ペーストリー・ショップだね　まるでニューヨークみたいなやつ　にズンズン入ってって、気に入ったもの(ばあちゃんは何も欲しがったりはしなかったんだよ)を何でも持ってくんだ。だってばあちゃんは、自分がイギリスの女王様なのをご承知だったからね。ばあちゃんはイギリスの女王様だったんだ。その頃には、イギリスは死んでた。あたしのおばちゃんが物をとっても、店の店員たちはまるで気にしなかった。それだもんで、いま、あたしはネズミなんか気にしないんだよ。このゴーストタウンであたしはすごく寂しくて、それを紛らわすのにネズミがいるんだ。それだから、貧乏だと何にも気にできないんだよ」

「ウィリアムさんのほうはいかがなんですか？」

「亭主がどうしたって？」

「つまり、旦那さんと寂しさのほうは？」

「ああ、亭主はネズミなんか相手にしないね。亭主はほかの連中とは育ちがちがうから。普通の連中とは。あの人は自分の妄想をなくさなくてもいいんだ。ネズミからは目を離すんじゃないよ、お嬢ちゃん。いつ人生がさびしくなるか、わかりやしないんだから。人生っておかしなものだ。あたしにやわかってる。でも、ネズミの暮らしについちゃ何一つ知らないね」彼女はモダニズム調の椅子二脚のほうを示した。座れってことなのか、その椅子をネズミに投げつけるってことなのか、まるでわからなかったし、女の子としては、どっちでもよかった。女の子ってのはつまり、受け身ってことだから。

もうこれ以上女の子でいたくなかった。だって、女の子って受け身だから、十分に飯を食わないんだもの。女の子って、食事を十分に与えられないんだもの。さて、もし女の子

がもっと意地悪だったら、欲しいものは手当たり次第手に入れるだろう。食べ物も。だって、一番意地悪なやつが一番たくさん手に入れるんだから。だってそれが意地悪ってことばの意味なんだから。一番意地悪なのって誰？ 死人たち。だって、死人は意地悪なのを止めるような、感情だの他人への配慮だのが一切ないから。人間の歴史すべてがこれを物語っている。

女の子でいるより死人でありたい。

まさにその時、秘書がおれの目をまっすぐに見据えた。そして言った。「ネズミは人間より意地悪だよ」彼女の亭主が部屋に入ってきた。

ちょうど二人の心臓（ハート）がよりあわされてるみたいに、ウィリアムズ氏は肩にパットの入った、紺のピンストライプのビジネス・スーツを着ていた。もう仕事なんかなかった。あるのはおまわり仕事だけ。おまわりって、いつも欲しいものは手に入れるから。そいつはおれのかさぶただらけの膝の間に寄せた、つぶれたひだのかたまりを見下ろして、こう言った。「おやおや、こりゃまた珍しい。なかなかきれいな娘じゃないか。ふむふむ」そして女房のほうを向く。「そうだろ、おまえ」

この賞賛に反応するのはいささか気後れがした。だって、自分がきれいだなんて思ったことなかったんだもの。

ウィリアム夫人は、おれがその場にふさわしくないような顔で、こっちを見ただけだった。

「こんな可愛いものを、なんでいままで見落としていたものやら」男の青い目は、おれのつぶれたひだから、おっばいのほうに移動した。ただ、おれにはおっばいはなかった。そいつは見つめ続けた、見れど見れど見つからなかったからで、おれはそいつが何を見てるのか見当がつかなかったから、もじもじして真っ赤になって、ウィリアムズ夫人に向き直り、こう言った。「いまずぐ叔父さんを見つけないと」おれ、食べるの忘れてた。

「どこだか知らんが、わたしが連れてってやろう」と青い目。

「亭主（青い目）があんたを守ってくれるよ。最近じゃ船乗りだのゴロツキだのがうようよしてるからね」

「守られたくなんかない」とおれは宣言。

「わたしはお金をいっぱい持ってるよ」ウィリアムズ氏が何の脈絡もなしに言った。「わたしはマンガを売ってるんだ。西側から東側まで、いろんなマンガを売る。わたしはいい

ヤツなんだ。強い女が好きだ。これはつまり、わたしがフェミニストだってことかな？
ぜひフェミニストにはなりたいもんだ。従業員には最低限のものしか払わない。だって、
連中は何も知っちゃいないんだし、そのくせいつも、金をもっとよこせとわめくばかり。
頭にくるね。頭にくる。ちょうどあたらしいマンガ書店をポンピドーセンターの中に開く
予定なんだがね」

「なぜ従業員のみみんなはバカなの？」

「バカに仕事とかければだね、あのアルジェリア革命はバカだった！ そうとも。積み
もない人々が殺された。でも、商売にとってはありがたかった。革命はすべて、右も左も
虚無革命でも全然関係ないんだけど、とにかく商売のたしになる。というのも、あらゆる
ビジネスの成功は新しい市場の創造にかかっているからなんだな」そいつは左手の指で机
を叩いた。「人間の死の本当の意味を知っとるかね？ 混乱だ」トン、トン。「混乱はいい
ことだ、ビジネスには必須だ。とくにマンガには」

「奥さんのお話だと、このおうちにはネズミがたくさんいるそうですね」

「もしネズミがいるなら、きみはキャーキャー言ってるはずだ」青い目はおれのおっぱ
い欠如から目をそらした。「坊や、名前は？」

でも、おれはビジネスマンに名前を教えたりしない。かわりに、自分は黒くないんで親
父に殴られて、それで家出てきたんだ、と語った。こいつは効いた。

ウィリアム夫人は同情のあまり泣き出さんばかりだった。鞭打たれた犬みたいに亭主の
ほうを見る。

「あたしの妹二人は完全なレズなもんで、尼僧院にいるの。だからあたし、家族がどう
しても要るのよ。どうしても人生に意味を見出さないと」

ついにウィリアムズ夫人は泣き出して、ウィリアムズ氏は巨大なフライパンを手に、お
れがまるでネズミか何かみたいにこっちに向かってきたから、おれは逃げた。外へ。

この男の心と女の心が絡み合う人間世界では、(海賊ネズミにとって)他人の内外に海
賊財宝を探すのは向いてない。

川の水位が上がってる。これまで死んだ女は一人しか見たことない。母親だ。ただし、
おれの服の元々の持ち主だった死んだ娘は別だけど。木が数本、ネズミにかじられた死人
の指みたいに、水から突き出してた。ネズミの歯は、歯茎からまっすぐに生え出る。ネズ
ミはいつも、何にでも飢えてて、動物ってのはそいつが求めるものになるから。さて、ネ

ズミにあてはまることは人間にもあてはまる。おれは決めた。もう人間とかかわりあったってダメだ。おれは財宝を探そう。おれは死んだ指二本によりかかり、ネズミの舌のことを考えた。

川はいい気分させてくれた。理由はわからない。もしかすると、枯れた枝だの生きた枝だのがあんなに山ほど何をするわけでもなく、波も何をするわけでもなく、そりゃ確かに大きくなるとは小さくなるのを繰り返してたけど、どれも結局は同じものに、総てか無か、同じ終わりになって、それとまるであざになったみたいな、だけど実際にはそうじゃない黒と青の空すべてが、何もしてなかったからかも。万事OKだったから、おれも何もなくてよかろうと思った。すべてが黒に青、つまり心臓。黒い枝。紺の空。黒い雲。黒いコンクリート。楽しくあるいは頭が空っぽになったところで、おれは歌い出す。昆虫についての歌を唄いつつ、おれはアブホールのもとに戻った。

彼女は暗い中にすわって爪先をほじくってた。おれは何も食べ物を持ってなかった。おれは、人間なんか役立たずだから、どこかよそで財宝を探すぞ、と言った。彼女は同意した。

おれたちは手漕ぎのボートに乗りこんで、財宝を見つけるべく出発した。たぶん、三日三晩漂い続けたと思う。夜明けを迎える直前に、男はおれだから、おれが舟からそっとめけだして食べ物を盗んでくる。夜と朝の間の時間が、キャビアだのキーウィだの年代物のラム酒だのクッキーだのを最もかっぱらいやすい時間だ。海賊は生のステーキは食わない。ただ人間を殺すだけ。

ときどきおれたちは一日中眠り続け、その間に舟と川と世界とが漂い続け、そして時には全然寝なかった。夜には、星が黒い大気の中を、底無しの海の中の死んだ魚みたいに漂っていった。

この盗みってのはいい生活だったけど、おれたちやまだ海賊じゃなかった。アブホールとおれは。おれたちは漂う世界のその他と同じく、ゴロツキの穀潰しだった。

三日目の夜、雷をいっぱい添えた嵐がおれたちを襲った。アブホールはカメレオンになった、というか、内面の奥深くに住むトカゲへと退行してしまった。海賊になんかならない、ほかのある人とセックスしてるから、という。それが何の関係があるのか、さっぱりわからなかった。だって、おれたちはセックスしてなかったんだし。それに、セックスなんておれにとっては何の意味もない。でもアブホールは、自分には大事な意味があるん

だと固執する。だって、自分は女なんだから、と。おれは、彼女は女だから感情的になってるだけだ、と言ってやった。セックスするなんて、実は小便するのと似たようなもの。アブホール、見なよ、空が派手に小便してるぜ。空は感情的か？ それとも狂ってるのか？ アブホール、おまえがおれに言いたいのは、そんなことじゃないだろ。海賊になりたい本当の理由があるはずだ。空はすごく激しくおれたちに小便かけてて、髪も服のカケラも、肉までがすべて寒く、震えてた。

アブホールは寒くてバカだったけど、セックスが大事だと考えるほどのバカじゃなかった。少なくとも、海賊になるより大事だと考えるほどは。

おれは海賊になるのにこだわりすぎて、おれ自身の正直さと率直さすべて(エイブラム・リンカーンが持ってたのと同じ正直さと率直さ)に反し、ずるく立ち回ることにした。「ところでアブホール、誰とセックスしてんの？」

「ある女の子とセックスしてんの」

何とっていいかわからなかった。どうでもよかったから。その娘はかわいいかと尋ねた。

「ライターを股の内側で灯して、それで男のタバコに火をつけんの」

「おれはタバコを吸わない」

「男ならほとんど吸うわよ」だんだんわかってきた。少なくとも一面は。

「そいつが好きらしいな」とおれはため息をついた。「愛してるのか？」

「たぶん」

何だかんだ言いつつ、おれにだって感情はある。「だったらここで何してんの？ そんなに深く愛してんなら、何で夜通し彼女といっしょにいてやんないの？」

「彼女には家がないから、いろいろちがった男たちと暮らさなきゃならないのよ。こっちからは電話もできないんだから。向こうから電話してくんのを待つしかないのよ」

アブホールにこんなヨタ話をされても、おれにはさっぱりわかんなかった。アブホールに会う前も後も、おれが他人を求めたのは手早い(ロマンチックな)セックス以上のもののためじゃなかったから、なんで彼女が海賊になるよりセックスのほうが大事だなんて考えるのか、理解できなかった。さて、彼女の邪悪さによって傷つきたくはなかったから、この感情なしの世界で、おれは自分自身を単なる意志の行為に置き換えることにした。そこでアブホールには背を向けた。川の中に難破船が見えた。

「じゃあアブホール、またな」

彼女は濡れた腕をおれの腰にまわした。それ以前に彼女に触られた記憶はない。「ティヴァイ、時間をちょうだい。あたしも海賊になるから」

その嵐の中、おれは自分の感情または自分自身をはっきりと見た。嵐はさらにひどくなった。アブホールとおれは、川沿いの石のくぼみで抱き合ってた。彼女がその美しい、金持ちで、怠け者の女への自分の関与を試すのにおれを利用してるのは明らかだった。いまやおれは男だ。だから、セックスのために他人を嫌ったりはしない。だって、セックスはいつも苦痛だから。

そこでぼちぼちとおれは言う、雨はまだ激しく降ってる。「彼方を見よ。このひどい嵐の中、岩に乗り上げて死んだらしき蒸気船があるぞ」

お互いに一言も口をきかず、アブホールとおれは愛用の舟に飛び乗って、まっすぐにその難破船に向かった。稲妻からの光が彼女の部分をはっきりと照らした。淡い緑の甲板。黒いマスト。そしてその他の部分も。舵の横の古いロッキング・チェア。

その難破船に、すぐにでも飛び乗って、二度と離れなくなかった。そしたらじきに、アブホールのことも気にならなくなる。彼女もおれ並みにイカしてたけど。

難破船に漕ぎ出すうちに、アブホールは難破船になんかいきたくないと言い出した。自分は生きて気にかけるべき相手がいるけれど、あんたにはいない、と。「わっちゃあ難破船ぬわんかとかかざり合いになんか御免だねえ。クウソツタレエが。どうせえあの難破船にゃあ悪魔その人がおいでになってって、そいつがあ左ん手えに鉈でも持ってて、わっちらん首い切り裂いて愛人用に真珠のネックレスこさえるんだぜ、そいでわっちら二度とあん船えからおりて、愛する人んとかえ戻れなくなっちまうんでえよ」

「悪魔には愛する人なんかいないのだよ、お嬢さん」

「いるに決まってえんだろが。ありゃあただの女蕩らしたあわきやちがわいな。あいつあいつも自分の好きなやつと寝んだよ、バイセクシュアルでさ、だってその相手がなんかで死んだら、たとえばAIDSとか梅毒とかでさ、そしたら悪魔んやつあ気にもかけないヤツと寝んのより、もっとひどい悪事いしたってえこったろが」

「愛とはそういうものだ」とおれは重々しく言った。アブホールとおれは、何かに同意したのかもしれない。彼女はそれに反対できなかった。病んだ、つまり敏感すぎるクリトリスはしてたかもしれないけど、でも愛を信じることはできなかった。「さあ、難破船に

乗ろう」

会えてアブホールのことをもっと考えた。レーガン大統領のボタンみたいに、中性子爆弾を爆発させられるほど敏感すぎるクリトリスを持ってたにしても、彼女はだれにも構ってもらえなかった。中性化。「あの難破船から、いろいろ盗めるかもしれない。キャプテン・キッドは地獄に落ちて、悪魔のところまで落ちて、それは悪魔ってのがこの世で一番欲深だからなんだけど、それでその奈落への道を忘れない地図を遺したんだと。この地図は、埋もれた財宝がどこに隠されてるかを示すんだ」「埋もれた財宝って何よ」アブホールが問い質した。

「キッドとその手下どもが、罪もない若者だの罪もない老人だのを強盗したり強姦したり殺人したりして得たすべての埋もれた財宝だよ」

「具体的に何が埋もれてるのよ」

アブホールは女の子だったけど、それにしても女の子並みにバカで、しかも下半身は危険だった。

「強盗したり強姦したり殺人したりして得た、黄金だの宝石だのエンボス入り便箋だの企業だの病院だのだ」お母さんは、ユダヤの血が混じってたし、それにおれが女の子じゃなかったから金持ちと結婚できないんで、おれを医者にしたがった。

「殺しゃあまた次の殺しを呼ぶだけえよ」とアブホールは答えた。

アブホールは男らしくなかったから、目隠しして渡り板を歩かせるつもりだった。彼女は降伏して、難破船まで歩くと言った。ちょうど雷が、死んだ船を照らした。というのも、巨大な黒い魚みたいな波が、ヨナのクジラみたく、おれたちを飲みこむところだったから。

おれたちはボロボロの甲板になんとかよじ登り、這い上がった。甲板の板の一部は崩れ去って、なくなっていた。空気が真っ黒だったもんで、自分たちがどこを歩いているのか、そもそも自分たちがいるかどうかすら見えなかったから、アブホールとおれは犬みたいにそこを這い上がってって。アブホールは片足をあげて、小便するまねをしてみせ、ゲタゲタ笑った。彼女のユーモアのセンスは、びしょ濡れでカッカ来てるネコみたいだった。

黒い空高くまでずっとそびえ上がる建築物に頭をぶつけて、ここが船長室にちがいないと判断した。おれは身震いしてその壁にへばりつき、アブホールはおれのズボンにかじりついて、するとおれの推測は正しくて、ちょうど窓のそこだった。

窓はあいてて、世界へと通じる通路みたいにそこから光が出てきてた。目以外にいれの中からだで見ることのできる部分は、触れ合う二つのハートを見た。剣が二つのハートを刺し貫いてる。その痛みは語られ得ない。

おれは聞き耳を立てだした。人声だ。天使みたいな声じゃなかったから、それは悪魔どもだ。悪魔どもはヘビだ。悪魔どもは詐欺と嘘と憎しみの話をする。悪魔どもは海賊。

悪魔声の一つがこう言った。「それはおれを殺す理由になんかなんないだろ。おれ、しゃべれないし……」

別の悪魔声が割り込んだ。「嘘つくんじゃねえぞ、坊や。お前はいままでずいぶん永いこと、誰にでも何でもペラペラと口忙しくしゃべりまくってきただろう。その口を止める方法は一つしかない」

三人目の悪魔が言った。「殺しなんて、おれたちには屁みたいなもんだ」

好奇心がおれの特徴の最大のものなので　だって海賊だもの　このことばを聞いて、おれはまっすぐに光をのぞきこんだ。床に水平に横たわる人物が一人。でこぼこの床板に打たれたペグに、手首と足首を縛りつけられてる。たぶんペグはハンマーで打ちこんだんだろう。板にはではなく、巨大なヒゲの、肉体の半分がヒゲの男に。

かれの頭上には、カンテラを持った男がいた。これがおれの見た光の源だ。カンテラ持ちは本物の目を一つと黒い穴を一つ持ってた。立ってる二人目の男の両手には巨大な包丁が握られてた。

その包丁はすごくでかくて、もしそれを垂直に振りおろしたら、ヒゲの山を子持ちのクモみたいに三つの別々の部分に切断してしまいそうだった。おれ、ずっとクモが怖かった。

床の黒ヒゲは床の上で、日のある限り自分とはとことん正直だった、とうわごとみたいに言ってた。ところがもう日はなかった。

片目は、黒ヒゲが自分と友人を殺そうとしたのは夜のことだったと言った。しかもその殺人行為には何ら理由がなかった、と。

それを理由に、片目と包丁持ちはかれを殺す、と。

すると包丁持ちが、そいつはやせっぽちで、キイキイわめいて、まともにしゃべれないんだけど、たぶん手の方が口より大きいからだろうけど、誰にも黒ヒゲを殺させやしないと言う。

「おまえ、殺しに反対してるわけ？」

「あんた、いい人だね」ヒゲもじゃが床から言った。

それと同時に、平和主義者の包丁持ちとカンテラ持った片目はその部屋を出て、いきなり甲板に出てきた。おれがへばりついてた壁のすぐ横のところにくる。アブホールはおれにかじりつくのをやめて消えてた。

二人は人殺しについて話した。片目は殺人完全支持。世の中ってそういうもんだ、と言って。世界の歴史だってそういうもんだ、と。包丁持ちが言うには、自分は(人間の)殺しに反対してるわけじゃなくて、だって自分は男で殺しに反対する男なんてありえないんだけど、でも自分は意義のある殺しがしたいんだ、と。片目は、意義のある殺しって何だと尋ねた。包丁持ち答えていわく、意義ある殺しってのは道徳的な殺しで道徳的殺しあるいはもっと殺しってのは、殺人者がその殺しについて、主に社会や、もっと正確にはおまわりにとがめられないヤツだ、と。つまり、殺人者が道徳的に潔白な場合だ、と。片目は、だれが潔白になんかなりたいもんか、と言った。包丁持ちの包丁にはしみ一つなかったけど、答えていわく、具体的に言えば、この場合だったらビル(これが黒ヒゲの名前にちがいない)を斬り殺すのは道徳的にまちがってるか悪いかだけけど、難破船が川底に沈むにつれてビルを死ぬに任せ、水に流すのは、自然の流れに任せるという意味で、ごく自然の理にかなったことだ、と。

片目と包丁持ちは船室に戻った。

二人のどっちが正しいのか、おれは道徳なんか大して気にかけてたこともなかったし、よくわからなかった。アブホールを呼んでどう思うかきいてもよかったけど、いま口を開くのは危険すぎた。彼女はどこにもいなかった。愛を失うのは耐えられなくて、おれの腹は沈みこんだ。溺れつつ、おれは静かに彼女をできるだけ大声で呼んだ。ゴボゴボ。アブホールとともに溺れて。

小さな熱い手がおれの手を握った。アブホールは渡り板を歩いて落ちて溺れたわけじゃなかった。もっとも、こいつくらい何でも見過ごしにして性悪な女は、この世に正義があるなら、溺れ死ぬべきなんだけど。つまりこの世に正義はないわけだ。それに愛も。おれは何とか囁いた。「アブホール、この殺し屋どもを始末しないと」

「なんで？」と彼女は答えた。逆らいたいだけなんだ。

「人を殺そうとしてるから」

「あたしたちを？」とアブホールは尋ねた。

「いや」

「だったらなんであたしたちが始末しなきゃならないの？」

おれは熱い小さな手をいっそう強く握り締めて、ぐっと引っ張った。彼女は、おれに言われた通りにすると言った。まず、片目と包丁持ちの脱出用のボートを処分して、黒ヒゲを置きざりにして溺れさせられないようにする。そしたらみんな溺れ死ぬ。そしたら R A P

(آگامی انتقلا بی عزبی)

(革命アルジェリア警察)

署をみつけて、犬でしかないおまわりどもを、溺れ死んだ、あるいはこれから溺れ死ぬ殺人犬どもにけしかけてやる。だって、犬っては腹さえすいてりゃ共食いするから。

おれはこういう具合に計画した。

アブホールは、性悪なもんで、別の計画をたててた。殺し屋を殺すのでさえ、よくないことだと言う。復讐のためであっても。

「これは復讐なんか関係ない。おれは別にこいつらに何の恨みもないんだから」

雨は激しく降り注ぎ、眼下の世界は濡れたシートになってた。子供たちはみんな、おねしょしてた。たぶん、親の夢を見てたんだろう。

おれは注意深くアブホールに説明した。殺し屋は人を殺すから、殺し屋を殺しかえすのは必要なことなんだ、と。殺し屋を殺しかえしても、殺し屋になったりしないし、殺してさえない、だって最初の、あるいは原殺し屋(アリストテレス因果律の用語)こそが殺しの真の原因なんだから・

でもアブホールは女だから、政治理論は理解できなかった。

おれはあきらめた。わかってるんだ。おれたちは本物の殺し屋でもないし、海賊ですらないんだ。だって、略奪品や女(これも略奪品と同じ物だ)をまきあげたりしてないもの。大人ってのは、自分自身をはっきり見据えて、欠点を改められるってことだ。おれはもう大人だと思った。アブホールに、おれのせいだけど、彼女も同じくらい悪い、と言ってやった。彼女は、あたしは何でもないと言った。

もうどこにも光はなかった。雨すら見えなかった。誰すらもはやいなかった。みんな、川すらベッドに入って淫夢を見てる。もうセックスもなかったから。水位を増す水の上を

飛ぶ夢。

しばらくして、明かりがついた。アブホールとおれは殺し屋どものボートに乗って漕ぎ出し、自分たちのボートは釣りあげられた魚みたいに後からくっついてきて、コンクリートの埠頭に向かった。ちょうど埠頭についたところで、オールを引きこんで、ボートが自分で岸壁に向かうに任せた。まわりに明かりはたくさんあったけど、人は全然見かけなかった。

アブホールは溺れつつある殺し屋たちのことを警察に報せて、殺し屋たちが溺れないようにしたかった。おれは拒否した。道徳的な理由から、どんな理由であれおまわりをけしかけたくはなかったからだ。アブホールはおれの顔を引っ掻きまくって彼女が勝った。おれたちはその暗闇の中、警察署を探し回ったけど、見つからなかった。やっと、まぐれで一つ見つかった。

ちょうど勤務中か、それとも何だか知らないけどそこにいて退屈しきってたおまわりは、すぐに殺し屋たちを探すと言った。でも金のからんだ事件じゃなかったから、おまわりたちは何もしなかった。そこでアブホールが口をすべらせて、おれたちが略奪品を狙う海賊だと言うまでは。すると、革命アルジェリア警官が一人、デブすぎてショッピングカートでに乗せて押してもらわなきゃならないほどのヤツと、警官押しが一人、元パンクで何も考えずにすみさえすれば何も気にしないヤツ 十歳 がボートのとこまでおれとアブホールについてきた。その頃には難破船はおれたちのところを流れ去ってて、大半が水面下に入っちゃってて、セーヌ川には死んだ殺し屋がもう三人浮かんでたにちがいない。人間の行為なんてすべて無価値だと悟ったのはその時だ。おれは悲しかった。だって、殺し屋二人と犠牲者一人を死へと追いやったのに、まだ何も略奪してないから、自分たちが海賊失格なのがわかったからだ。

絶望は黒い空気と同じだ。アブホールとおれはボートに乗りこんで、おまわりから逃がれた。埠頭の別の箇所を下りて、悲しんで、死人みたいに眠った。

空と地面が普通に戻った頃、おれはアブホールの目を開けた。誰かが開けてやらないと、彼女は一日中眠り通すからだ。おれがそれを開けた頃、おれたちはまた口論してた。

始めたのはアブホールの方だった。彼女は詐欺だらけの溺れネズミで渡り板を歩かせたほうが良いような女だからだ。もうおれなんかとは関りあいになりたくないと言う。

一人じゃ海賊になりたくなかったから、プライドを飲みこんで、何でおれと関り合いに

なりたくないのか尋ねた。

彼女は何もいわなかった。感情的な時にできる最悪のことは、何もいわないことだ。特にこういう感情的な時には。

漕ぎ続けると、もうコンクリートはなく、木だけになった。柳やニレの木が、草の生い茂ったこげ茶でピロードみたいに豊かな土の上に垂れ下がっている。何も、誰も音をたてず、まるで世界が眠っているかのようだった。

「アブホール、そもそも何でおれについてくる気になったんだ？」

「あなたが頼んだんじゃない」

「おれが頼んだのは、おまえと海賊仲間になりたかったからだ。おれが嫌なら、おれの目の前から永遠に消え失せろ」おれが渡り板のことを言ってるのは彼女もわかってた。おれが彼女を溺れさせると。もう二度と彼女と関りあいにならずにすむ。

ときたま、そこここで、そよ風がおれたちのボートを訪れ、怠惰な水を渡って、死んだ巨大な魚の匂いを運んできた。それから、スモモの葉やいろんな種類のマグノリアの花の匂い。それからもっと死んだ魚。昆虫たちはおれの鼻の穴の奥に住みたがったけど、アブホールとは関り合いになりたがらなかった。

何が欲しいかわからない

責任なんかいらぬ

何が欲しいかわからない

アブホールは歌った。二人とも、川の孤独を見つめた。川は怠惰に流れ、次第次第に、怠惰さを増して眠りこみそう。ひたすら純粋な孤独。

この孤独は胸にこたえた。川はおれたち二人だけのためであった。アブホールはおれなんかいらぬ。夜になると、アブホールとおれは空を見上げた。すごく美しく、おれは気持ちを解き放てた。その大気、無限なので黒い空間、小さな閃光、外見、事物、感情が、個別の時間だけ輝いた。この無限の下、アブホールとおれはお互いに何についても語り合わなかった。両者とも半ばお互いに溶けこんでるせいで、相手の言うことを聞かなくていい時にしゃべるようなしゃべりかただ。それとも、お互いに空にとけこんでるような。

時々、悪魔が空にいて銃を撃ってるみたいに、星がおれたちめがけて降ってきた。するとおれは思い出し、それともアブホールが黙りこんで、おれの中に、物理的に穴があいた

みたいな苦痛が生まれる。

ずっと昔、アブホールとおれが相棒だったのは知ってた。その頃、おれはその意味がわからずに、ただお互いの親密な友情を受け入れてただけだった。いまじゃ二人はまったく別種の生き物みたいだった。人間と火星人みたいな。だって、おれたちの間には火山みたいな亀裂があったから。火山の破壊は、アブホールがおれを求めなくなったことか、それとも単におれの内面から起きたことだった。それは重く、何も重く思えないほどだ。生きる空間のすべてがそうであるように、それはブラックホールだった。

おれは無には耐えられない。その無がおれの一部である時には。頭上の空が耐えられない。暗黒が耐えられない。知らないのが耐えられない。おれがその中を漂ってく何もかもが耐えられない、特にそれが美しい時には。

どこかにつき次第、アブホールがおれを捨てるのはわかってたから、自分の持っているが無なものもわかってた。肉にあいた穴。それをセックスと呼んでもいい。肉に穴が引き裂かれる苦痛なら耐えられるけど、肉なし、アブホールなし、無には耐えられない、決して。彼女を牢屋にブチこむことにした。

アブホールを牢屋に入れるのは、そもそも彼女がおれ並みに強かったからだ。自分がヘビで低級で地面を這いずってるのはわかってた(もっともおれがそうだったのは、おれが片思いの最中だったからだけ)。でも彼女は生まれつきの山師的ヤマアラシでクソのかけらで臭いスカンクなんだ。それはつまり、愛は男を変えられるってことだ。一方、女は生まれつき生れついたままだ。だからアブホールがよそ見をしている時、おれはCIA宛に走り書きをした。すごく簡単なことだった。

拝啓、CIA御中

一年前に貴局のワシントンDCのコンピュータ・ライブラリへの押し込みを仕切った逃走中の黒ンボは、現在古いボートに乗ってセーヌ川を漂い下ってるところです。わたしは彼女の居所を知っており、多額の金と引換に喜んで手引きをする所存です。

敬具

血みどろ船長

(X)

本名は署名したくなかった。

もし連中がアブホールを刑務所に入れれば、毎日彼女に会えるし、海賊の略奪品、あるいはタレコミの報酬を集めることもできる。たとえおれが孤独にそれを集めることになったにしても。

この走り書きを投函した。もうおれは、あらゆる罪を清められ、清らかになった。本当のことを言えば、おれはアブホールに会うまで罪を知らなかった。アブホールはちょうどエイハブ船長と同じだ。木の義足みたいに腐りきってて無感覚。それは何一つとして、(女性性でさえ)彼女にとっては生まれながらのものじゃないからだ。生れて初めて、おれは祈った。アブホールの前にひざまずき、それから身を投げ出しコンクリートをかきむしり、アブホールが永遠におれの人生から姿を消してくれるよう祈った。彼女を愛してるから。

おれがそう祈ってる間、アブホールの陰険な小さいスカンク目はおれをまっすぐ見つめてた。そして、彼女の右手が、左腕の脇の下の黒い毛をかいた。

「アブホールをおまわりに渡すわけにはいかないんです」とおれは声に出して祈った。彼女がおれを愛してないから、彼女を永遠に捨て去ることにした。彼女を愛してて、しかも誰も愛してなかったから、おれは彼女の根性が大きっ嫌いだった。

おれは言った。「アブホール、おれは永久におまえを捨てることにした」おれは川と平行に走る小道を左に折れた。あたりには動物も昆虫もいないようだった。

しばらくすると、ブンブン飛びながらケツをおれの顔にぶつけてくる昆虫がでてきた。そいつらのケツは、おれの顔に血の跡を残した。昆虫のクソは人間の血。それともアブホールの爪。おれが彼女を犯してる間の。無はいつまでたっても無。

歩いて歩いて、そしてアブホールが恋しく、彼女を愛してるのに気がついた。彼女のところに戻るしかなかった。

おれがボートに戻った頃、夜には、もうアブホールはいなかった。

2.

おれはまた.....戻り.....というか進み.....はじめたけど、ガックリしすぎて歩けなかった。まるで自分が歩けないみたいに、おれはとにかく自分を無理に歩かせた。歩きながら、自分の過去のすべてを思い出し続けた。何もかも無に思えた。

歩き続けることにした。歩けば歩くほど、落ちこんだ。自分の目が、鼻が、口が嫌いだった。道に出た。

背後でバイクの音がした。それが見えてきて横を通り過ぎようとした瞬間、おれは「止まれ！」と叫んだ。ライダーは砂利と砂を巻き上げて止まった。

「きみに怪我させたわけじゃないんだから、文句言われる筋合いはないんだけどな」とライダー。

そいつを見つめて、おれのカマを掘ったのはこいつかもしれない、と思った。

「怪我はしてない。でも、確かめたいんなら、試乗してみない？」

かれはした。おれの見た限りでは、満足してたみたい。その場限りとはいえ、おれもよかった。その場限りだけど。手早いセックスってそういうもの。そいつ、いつもは人とはやらないって言ったけど、無人とやるってどうやるのか見当つかなかった。そいつが言うには、おれとおまえが組めば冒険だ、と。

すごく気分がよかったんで、海賊になりたいことやアブホールのことなんかを全部しゃべった。いつもは知らない人に話はできないけど、こいつとは本当に気安く話せた。だっですごく背が高くて、ホントにイカレたって言うか妙ちきりんな格好だったから。まるでちんばのぬいぐるみのクマが、いたる所育ちすぎた感じ。かれは砂利で手をこすった。

ぼつ、ぼつと、マーク、これが名前だと教えてくれたんだけど、かれはこう言った、いやまずおれがこう言った。「おれの人生はますます孤独になってくばかり。たぶん愛が必要なんだろうな」

マーク、答えていわく「これを前に言わなかったなんてオレはアホだ」

さておれは、社会に見放された者たちや、見放されてはいないみんなが見放されていない個人たちになりつつある連中が、ますますひとりぼっちになりつつあるってことにマークが同意してるんだと思った。この一件は要するに、お互い好きあってる二人さえ、相手が何を言ってるのか絶対に理解できないってことを、よく示してる。おれは言った。「うん」

マークは言った。「オレ、彼女の居所を知ってる」

おれは飛び上がった。悲しすぎて何があろうと喜べなかったけど。「アブホールはどこだ？」

「たぶん、道を下ったところに連中がさっきブチこんだ女だと思うな」

「なんでそれが彼女だと思うの？ アブホールに会ったことあんの、つまりこれ以前に？」

「うん、つまりおまわりどもは、縄で縛られて手錠をかけられた人物を護送してた。手錠ってことは、囚人ってことだ。おまわりどもはニコニコしてた。おまわりはみんな、ストレートだ。ストレートの男がニコニコしてるってことは、あたりに女が居るってことだ。火のないところに何とやらってね。女のおまわりはいなかった。あそこには他に女囚はいないから、あの女はきみのガールフレンドにちがいない」

理屈の後半しか理解できなかった。孤独がおれの頭を食い尽くしてしまったんだ。

「だからオレたち、彼女をおまわりから奪いかえさないと。オレが計画を一つたてて、きみが別のをたてえて、どっちが一番いいかを考えよう」かれは論理的な結論に到達した。

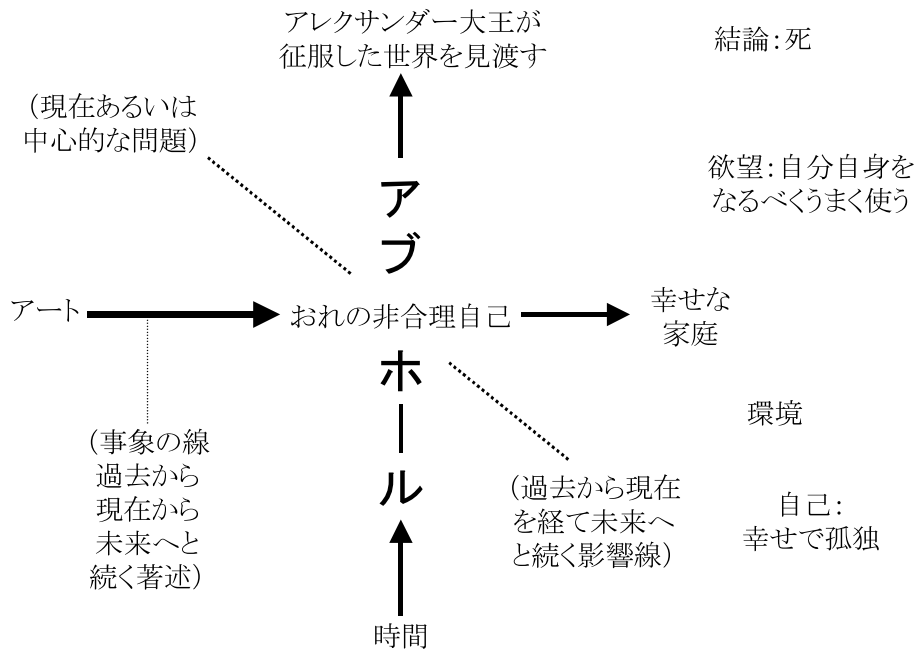
アブホールを盗み出すってのは気に入った。おまわりはどうでもよかったけれど、それは瑣末なこと。日が強く照りつけてはいたけど、おれはしっかり考えられた。太陽は思っきり強く照りつけてた。アブホールを盗み出すってのは、実に気に入った。「おれ、どうやってアブホールを自分たち用に盗みだせばいいかわかるぜ」とおれ。

「まず、彼女の房の鍵を持ってるおまわりが誰か調べるんだ。それからおれたちのどっちかが、そいつを誘惑する。おまえだ。そいつが頑張って幸せに眠っちゃったら、おまえが鍵をポケットからあさってアブホールを運び出す。おれ、彼女をボートに縛りつけるから、彼女も幸せで、おれたち川を下って逃げるんだ」悲しかった。

「その計画はうまくいくだろうけど、まるっきしダメだよ。ティヴァイ、それがダメだっただけのは、それが楽しすぎるからで、だって何でも楽しちゃ手に入らないんだ。海賊行為ですらね。もっと辛い計画がいる」太陽が強く照りつけてた。

脳の中を探って、もっと辛いものを見つけようとしたけど、全然ダメだった。川は怠惰すぎた。悲しい時には脳はない。人生は辛すぎて、脳の中で生きるより辛いことを見つけたりできなかった。

孤独とアブホールと一緒にになりたい一心で悲しすぎて、おれは自殺したかった。タロットカードを投げて、自殺すべきかどうか見ようとした。



このカードははっきり示してるのは、おれが自分の生きてるこの目茶苦茶になった正解が気に入ってるってことと、おれが死ぬってことだった。でも、少なくともおれには、自殺すべきかどうか、ちっともはっきりしなかった。

マークの計画は複雑すぎて、おれとかれが殺されるのはまちがいがなかった。つまりはいい計画だってことだ。絞首刑で死なない限り、海賊にはなれない。かれの計画の、それ以外の細かいところは気にしなかった。それに、マークはいつも計画を変えてばかりいた。これはかれがゲイなせいかもしれない。ゲイであるってのがそういうことなら。マークはいろいろ考えを持ってた。

まさにその時その場所で、おれはマークがおれの友だちになるのを知った。アブホールはならないかもしれないけど。

おれはマークに、かれの計画は偶然に頼りすぎてて警察と面倒にまきこまれることになる、と言った。

マークは、自分を信じてないのか、と言う。

「信じてる」これで計画を進めるには十分だった。もっとも、何が計画なのかわかって

なかったけど。

マークはおれを牢屋につれてった。これがアブホールの収監されてる牢屋だ。マークの話では、建物は、パリ風というよりイギリス的だった、パリでは人間のための建物は人間の大きさだったから。一方、イギリス人は集合住宅を不動産として建てた。不動産は破壊不可能で、冷たく、硬くなければならない。集合住宅は便秘で、潰されないとウンコできない。牢屋は四角いクソで、おまけに荒廃してる。おれはそんなところに足を踏み入れるつもりはなかった。アブホールはそこまでの値打ちはなかった。そんな荒廃に足を踏み入れるほどの価値は。

マークは同意した。かれはおれに同意するのが好きだったから。「アブホールさんはここにはいないよ」

おれはアブホールがどこにいるのか知らなかった。「どこにいるんだ？」

「この牢屋の裏手の犬小屋」

牢屋にいかなくてすんで、おれは心底ホッとした。アブホールが、いつもみたいに吠えたりしてるのが聞こえた。「何ならあのスベタをあそこに放っとして、二人で海賊になりたてでかけたほうがいいんじゃない？」

「そりゃダメだ」とマークが諭した。「海賊ってのは絞首刑にならなきゃ」

マークはありがたい存在だった。おれがだれだか思い出させてくれたからだ。かれの毛むくじらの胸に頭をもたせかけると、かれは裏にまわって立ち枯れた背の高い雑草の中の、ボロボロのボロタイヤの横につれてって、犬小屋を見せてくれた。

その頃には、おれたちは半ば破けた金網を登ったりおりたりして、車のかわりにネコの死体と人間の腐りかけの死体の半分らしきもの（たぶんバイクのかわりだと思う、おれって別に人間の専門家じゃないけど）が残ってる駐車場の瓦礫をかきわけ、かつてまじな日々には外便所とおぼしき代物にたどりついた。おれは疲れきって何も見なくなかった。人間の知覚なんてその程度。ドアには巨大な錠がかかってた。錠には鍵がかかってなかった。おれたちは中に入った。この小屋は外便所だったはずはない。だって、床が狭すぎて、便座どころか穴でさえ真ん中に開けられないほどだったし、アブホールもいなかった。それと、駐車場には人間はだれもいなかった。マークとおれはドアの錠をおろしなおしたので、ドアはいつになくしっかりと閉じられた。

「アブホールをこっから出すにはどうしたらいいか、わかる？」

「いや」

「穴掘って逃がすんだよ、ティヴァイ。一週間ほどの重労働になるけど」

いい計画だとは思ったけど、ただアブホールがいない。

「ほかの黒ンボと一緒に運動場にいるんだろ」

「もう黒ンボなんて残ってないと思ってたんだけど」

「牢屋があれば、黒人も黒人の所有者もいるんだ」

マークはゲイだったから何でも知ってた。おれは何でもなかったこともなかった。アブホールは黒人。

まず、アブホールを従えて食わせてる担当の黒ンボと仲良くなる必要があった。鍵のかかってない鍵の鍵を盗むためだ。

この黒ンボ、魔女を信じてた。魔女ってのは男に敵意を持った女。

マークは自分が肉体的にも精神的にもすごく強いので、魔女に対しては免疫があるんだと言う。つまり、ゲイだってこと。だから、男のくせに、優しくなれるんだ。

マークについてはマークに同意したけど、魔女に関しては、見たことないからわかんなかった。「魔女って、どんな感じなの？」とおれは黒ンボにきいた。

「見てくれは問題じゃない、だって、どうせ男を追っかけるのは夜だから。むしろ、言うことと匂いだね。つまり、連中の匂いってこと。夜になると、魔女はいつもこっちの耳元でささやいてる。ほら、一人でベッドにいて、寝つきかけたときに蚊が顔めがけてやってくるみたい。もっとも、蚊は血がほしいだけだけど。匂いの点では、魔女ってのはすごい匂いで、特に下半身がすごく、男は狂ったみたいになって、我を忘れちゃうんだぜ。そうすると、男は魔女のために狂ったみたいなことをするようになる。だから、何も見えない時、男は警戒しなきゃならないんだ」

おれはその看守に、おれが警戒した唯一の人間はアブホールだ、と話した。おれが魔女の何たるかを知らなかったように、看守もアブホールの何たるかを知らなかった。

マークはかれに、犬を飼ってるか尋ねた。

「いいや、旦那。犬なんか飼ってないぜ。仕事中はな。なんでおれが仕事中に犬を飼ってるなんて思ったわけ？」

「だって、今そこに、プンブン臭い食べ物が入った犬の餌箱を持ってるじゃん」

「こりゃ犬用なんかじゃねえよ」黒ンボはジワッと顔中にニタニタ笑いを浮かべて言っ

た。「どんな動物用か見たい？」

おれたち二人が「見たい」と言うと、そいつは小屋の左横にある金網の囲いにつれてってくれて、その中にあるのはアブホールだった。この世でもっとも恐ろしく、したがってどんな魔女より恐ろしい(もっとも魔女って何だか知らなかったけど)この獣をおれは知っていて、しかも愛してるなんてことは言わなかった。アブホールはちょっと目をあげて、まっすぐこっちを見た。

「この女と知り合い？」と黒ンボ。

「知り合いなわけねーだろ。会ったこともないのに」

「知り合いみたいな顔であんたのこと見てるぜ」

女ってのは目が悪いから、いつも間違っただけを追っかけてるんだ、とおれは説明した。女どもはいつも面倒に巻き込まれてる、特にセックスがらみの面倒に。だから、女が何をしようがどうでもいい。問題なのは、男がどう女を見るかってことだけ。マークは、自分は女なんか見たことないと言う。

「ほらね？」とおれ。

それでおれは続けてその黒ンボに、おれがあんたを黒ンボ呼ばわりするのは、アルジェリア人がパリを占拠したって何もかも仕切ってるのは相変わらずアメリカのCIAだからで、それにおれがあんたの名前を知らないからだ、と説明した。黒ンボは、自分の名前はハリーで、アブホールがおれのことを見てるのはホントは魔女のせいだ、と言った。この世のなんかの筋が通らない時は、たとえばアメリカCIAが何もかも誰もかも支配してるとかのことだけど、そりゃあ魔女のせいだ、と言う。これよりひどい。人間は自分が総てを仕切ってると思ってて、そう思えば思うほど、魔女のせいで、何もかもひどくなってく。ものごと 国際情勢、ことの次第、次第のこと、人間のこと はかなりひどいので、死ぬほどたくさん魔女がいるにちがいない。ハリーはそう言った。

そしてそいつはマークのほうに向き直って、マークに、あんたは、つまりマークは、それでも女だからってんで魔女を軽く見るのかと尋ねて、二人はどっちの魔女が何のことが議論を始めて、その間におれはアブホールに、穴を掘っておまえを犬みたいに自由にしてやる、とささやいた。「犬」の一言で、彼女はおれを金網越しに蹴りつけ、さらに嘔みつこうとした。それほど陰険なヤツだってことだ。

それでも愛してたから彼女を救おうと計画してた。

それでハリーはおれとマークに帰れと言った。暗くなってきて魔女が活動を始める頃だから、と。

マークとおれは森の中に戻って、もう真夜中だったんで小枝やその他のゴミで火をおこした。あたりに魔女はいなかった。

火を囲んでおれたちはアブホール救出のための海賊計画を完成させた。まずマークが、おまわりが何百人もいないのは残念だ、もしいればバイク仲間を呼び出して、全面戦争を布告できるのに、と言った。おれは、全面永久戦争にはいい加減うんざりだ、と言った。マークは、それ以外には戦争なんかないんだ、だって戦争はラブ・バードみたいに戦争を生むから、と言った。ラブ・バードはゾウは産めない、もし産んだら、少なくとも雌は死んじゃうから。それからマークは、アブホールがハリーか、少なくとも彼女のベッドに鎖でつながれてないのは残念だ、と言った。女ってのは、魔女じゃない限り、つながれてるべきなんだ、だって、もしアブホールがつながれて、魔女じゃなかったら、ダイナマイトで小屋と警察の詰め所を爆破してもアブホールの髪一筋も傷つけずにすむから。おれは、それはおまわりがバカなせいだ、と答えた。もしおまわりがバカじゃなかったら、アブホールをベッドと小屋と金網と犬の首輪に鎖でつないだはず。だって、彼女が陰険で邪悪なのがわかったらうから。

マークは考えこんだ。ダイナマイトがいるのは明らかだ、と言う。「彼女は女なもんで、すごく意地っぱりで反抗的だから、ダイナマイトでふっ飛ばしでもしないとオレたちといっしょにこないだろう」

これはもっともな話に聞こえた。マークは続けて、小屋に発破をかける前に、まわりに深い壕を掘らなきゃ、という。これはもっともには聞こえなかった。マークが言うには、そうすれば、逃げる途中、アブホールは転んで脚を折る。そうなったら、意地っ張りだろうと反抗的だろうと、逃げるのにオレたちの手を借りざるを得なくなる。これはもっともに聞こえた。魔女でないにしても、女を思い通りにするのは難しいのは知ってたから。

続けてマークは、アブホールの片脚を切り落とすのが一番安全だと言った。これには頭にきたんで、おれはマークに、あんたはゲイだから男と女の間のことなんてわかんないんだ、と言ってやった。

マークが言うには、歴史を通じて、人間が他人の耳や指や手足を、道徳あるいはその他の良心的でまともな理由によって切り落とすのは、歴史的な事例が数多くあるそうだ。裁

判官がよく命ずるし、教会も認めてるし、教会は人間道德のほとんど最高峰だ。アブホールは、とマークは爪先立って立ち上がったが、どうせいつも爪先立ちではあったんだけど、アブホールは、女だってだけで、人間の道德から例外扱いされていいのか？

これはちょっと考えこんでしまった。だっておれは道德家じゃないからね。ただ、とにかく全部おれの気に食わなかった。ときどき、何で何かが気に食わないのかわかんないけど、でもとにかく食わないときってある。アブホールの脚をのこぎり引きだなんて。おれはマークに、自分では自分にとって何が道德的かはわかってるけど、他人の場合はわからない、と言った。

マークは折れた。こいつはいつも、おれと同意したいがために、最終的にはおれに同意する。アブホールを救うために彼女の脚をのこぎり引きしたりしない、と言った。でも、ペルナイフをこっそり持ちこんで、彼女が自分で脚を切断できるようにしよう。

おれはなおもしつこく、自分の道德観のためそれに反対した。マークは、アブホールは別人なんだから、おれの道德観なんか何の関係があるんだ、と尋ねた。おれは、道德が問題になったら、最終的な分析においては、論理はあまり考慮されないんだ、と言った。考慮されるのは、血だ。

ペルナイフのかわりに、ペンを持ちこもう、とおれは言った。ペンは剣より強し。こうすれば、アブホールは自分の血をインクがわりに、おれたちがどうやって彼女を救ったか、おれたちの勇敢さ、おれたちの腕の強さについて書き留められる。後代の全人類が、おれたちを敬い奉るだろう。マークは、たくましいブロンドの男の子に奉られたいと言った。

それがおれたちの計画だった。ペルナイフをたくさん用意して、アブホールのために壕を掘るんだ。

例によって、いつもながら真夜中がやってきた。夜のとばりの中から出てくる魔女なんか見かけなかった。マークとおれは川まで出かけて、その冷水の中を探し回り、ペルナイフを二十七本と使用済みコンドームを一つ見つけ、それから警察署までずっと歩いて戻り、使用済みコンドームをその無人の階段に、赤ん坊みたいに置き去りにした。署の裏にまわって、おれたちは地球の肉に必死で掘り進んで、やがてその肉の衣服たる空に、灰色が、涙みたいに現れた。二人とも疲れきって、目も見えなかった。手は赤むけた感じ。目が見えるようになると、おれたちが掘ったのは、肉に深さ一メートルちょいほどの穴を二つだけなのが見えた。あと五十八メートルは掘らなきゃいけないのは確かだ。

「一生掘ってられて、しかも八十まで生きる気ならアブホールを掘り出すこともできるぜ。でも、マーク、おれたち早死にするんだろ。だったらこれじゃダメだ」

「じゃあどうやってアブホールに脚を折らせる？」

おれは考えに考えたけど、アブホールをちゃんと怪我させる方法は思いつかなかった。とうとうおれは、悲しかったけどこう言った。「ダイナマイトでふっ飛ばしてやるしかないか」

マークはそれが合理的だと考えたけど、でもダイナマイトなんか手に入らなかった。革命にもかかわらずダイナマイトはまだ非合法で、おまわりもわけてくれなかったからだ。もっとも、別に頼んでみたわけじゃないけど。おれはどうやって助けを頼めばいいのか、これまでさっぱりわからなかった。

次の日、おれはアブホール宛に郵便でペンを送った。これで回想記が書けるってもんだ。

問題は、アブホールは黒人で教育がなかったから、書き方を知らないってことだった。この新しい問題に頭を悩ませていると、マークはおれが後ろを向いてるすきに川を流れてきた死人からはぎとった、ボディ・マップのタキシードを着込んだ。葬式やそれに類する行事では、着飾った方がいいんだとマークは教えてくれた。

アブホールはおれたちに会えてすごく喜んで、おれたちが起こしたときに漏らしたほどだった。そしてマークとおれに、愛してると言う。こいつの言う「愛」って何なのかな、と思った。だってこいつ、クサイんだもん。女が何か言うときは、男が何か言うときとはちがって、絶対に文字どおりのことは意味しない。だって、もし女が文字どおりのことを意味するなら、アブホールはゲイのバイカーに愛してるなんて言わなかつたらうから。もっともアブホールが、報われない愛の犠牲者になりたいなら別だけど、でもそうじゃないと思う。そこでおれは、彼女が何を言いたいのかは絶対に理解できないんだろうと思った。するとアブホールは、囚人服一面に涙をこぼしつつ、牢屋を出て海賊マンコになりたい、と言った。

「今すぐにも、あんたたち野郎どもと一緒にここを離れたいわ」

おれたちは、それじゃ話が簡単すぎる、と彼女に説明した。脱獄する過程で、彼女は一生にわたる派手な損傷を受けなきゃならない、脱獄は男にとって、困難で危険なことなんだから。

「でもあたし、男じゃないもん」

「そんなら牢屋からも出られないぜ」とマーク。

「あたしが言いたいのは、つまりあたしが片端になりたくないってことなの」とアブホールは、意味もなく抗議した。

「なんで？ 男は自分がいっばしの者となる能力があることを証明するため、強い苦痛とさらに強い試練をくぐりぬけなきゃならなかった。片端になることで、男は自分の男らしさを証明したんだぜ」

マークはこの理由には必ずしも同意せず、自分は男になりたくなんかない、と言った。かれは父親を嫌ってた。おれはアブホールに、海賊になるなら男らしくなきゃ、と告げた。もし男じゃないなら、彼女は死んだも同然だ。

それでおれたちは、でっかい安全ピンを山ほどアブホールにくれてやった。皮膚から血をたくさんしぼり出して、回想記をたくさん書けるようにだ。たぶん残り一生この牢屋から出られないだろうから。アブホールとおれは傭兵時代を回想した。革命が起きて、それからCIAが何もかも制圧する前のこと。マークは一心に聞き入って、どう行動すればいいか学ぼうとしていた。マークとおれは、残り一生を牢屋で過ごすのはアブホールにとっていいことだろうと考えた。だってそうすりゃマルコムXみたいになれるもん。だからもし彼女を助け出したら、彼女の利益に反することになる。これがおれのアブホールにたいする最後通牒だった

空はまた灰色に戻り、マークとおれはアブホールを見捨てた。数えきれないくらいアブホールを見捨ててきたんで、見捨てには飽き飽きしてきた。マークと警察の駐車場に入ると、死んだ老いぼれ犬を見つけた。アブホールは腹をすかせてるだろう。おれたちは森に戻ってさらに計画を練った。

最新の計画は、教育はないけれど、あるいは教育がないからこそ、アブホールを偉大な作家にすることだった。そうすりゃ彼女も、一生牢屋で過ごす理由ができる。それに当時、社会は偉大な女流作家を必要としていた。

四日目だか五日目だか何日目だかに、だって悪魔は七日間でおれたちの世界を創造したからだけど、夕暮れの光がマークとおれの目を痛めないくらい和らいでアブホールが運動場から戻ったとき、おれたちは彼女をクソの中にすわらせて、まともに書けるよう仕込んでやった。まず、ペナイフで親指を切り刻むやりかたを教えた。そうすりゃたくさん血が出る。

アブホールはいい歳して腰抜けだったんで、そんなことはしたがらなかった。おれは、もし偉大になりたいんなら、男並みに偉大になりたいんなら、苦痛よりさらに強い試練に耐え、なおかつ口を閉ざしておく方法を学ぶ必要があるんだと言ってやった。アブホールはわめいて、あんたは口を閉ざしたことなんかないし、口を開けば嘘ばっかじゃないか、とぬかしやがった。

マークはそんな御託には耳を貸さず、彼女の右親指を押さえつくと切りつけた。右親指をおさえつけたのは、彼女が右利きだったからだ。作家が書くには克服すべき欠陥や狂気が必要だ。この狂気の原因はアラビアから生れたものだ。イスラムの社会と文化にあっては、書くことと描くことは、書道と同じ動きになる。心の動きをページに沿ってたどるのだ。さて、心には三種類ある。

1. 二重のハート、これはそれぞれのハートが相手のハートを傷つけるもの。
2. 独り身の、または孤独なハート
ート

おれたちはアブホールの親指に切り込みを入れて血を取り出した。その赤い血で、おれは三つのハートを描いた。

二重のハート、最初のハートは、一つのハートの上に二番目のハートが重なってる。これはおれとアブホールをあらわす。矢がナイフみたいに両方のハートを貫いてる。

アホダラ帝国と書かれた巻き物が、おれたちの二つのハートのまわりをへびみたいに、くねりよじれもがき笑ってる。

独り身のハート、第二のハートを貫くのはナイフ。このハートはアブホールなしのおれだ。そのナイフと同じくらいでっかなくちばしを持った鷲が、ナイフの柄にウンコ座りして、こう言ってた。「クソに屈するより死んだ方がまし」

刺し貫かれて貫かれて貫かれまくり、おれたちの心は死んだ。死んだハートは赤い薔薇となった。おれたちの死体または薔薇には、まだナイフが突き立ってる。何も岩魚にへびが、鎌首をもたげ、開いた薔薇に巻きついてた。これが第三のハート。これはマンコ。

アブホールに、いまのが全部わかったかどうか尋ねた。

「ハートと書くことに何の関係があんのよ。派手に出血しただけじゃん」

このハートは意味なしのアホダラだから応用可能なんだと説明してやった。書くことは

心のアイデンティティをさらけ出すことだ。これを聞いて、アブホールはもっと血をしぼり出し、自分自身の孤独な心を、描いた、というか、なぞった。まだ自分じゃ書けなかったから。それから、顔からつつこんで転ぶ赤ん坊みたいに、その血まみれのハート一面に「男はみんなマンコ面」、「船が沈む」ということばを記した。

このことばはいい文章じゃない、だって何とも、アブホールとも何の関係もないからだ、と言ってやった。だってアブホールはまだ海賊じゃないから船のことなんか何も知らない、と。心を書いたり表現するには、自分自身とその世界の正確な観察が要求される、とおれは説明した。アブホールは、あんただって海賊船のことなんかクソほども知らない、あんたは男だから装備がまちがってんだ、と言った。

あきらめた。おまえは心とは無縁に生きた方がいいと告げた。とうとうアブホールも同意して、牢屋から出たら永久に純潔を守り通す、と血みどろ聖処女に誓った。

それでおれは、もし純潔を貫く気なら、血まみれの薔薇を想って瞑想しなきゃ、と言った。

それからアブホールの残り四本の指に、別のペンナイフで切り込みを入れた。あたり一面血まみれで、何かだれかが魚みたいなにおいをさせてた。

これでアブホールの最初の作文講座は終わった。アブホールを偉大な女流作家にするのは、どうやら汗より血をたくさん必要としそうだった。

二回目の講座は一回目の直後だった。もう時間ってもんが存在しなかったから。あたりに散ってまだ乾いてない血の中に、おれの助けを借りつつ、アブホールは革命アルジェリア警察(RAP)に手紙を書いた。血はいくらでもあった。

まずオマワリたちに、髑髏と骨のぶっちがいを描いてやった。骨のぶっちがいは、長剣みたいに、髑髏の空っぽの鼻を貫いてた。骨のまわりを墓石みたいに取り巻いてる巻き物にはこうあった。「ウラジーミル追悼」

「さあ、これでおまえも自分の名前がまともに書けた。名前ってのはこう書くんだ」とおれはアブホールに言った。

アブホールは、自分の文章が上達したと感じた。子供には、必要とされてると思わせるのが大事。

拝啓 革命アルジェリア警察オマワリ御中

白人だからって殺さないで、おれたちはあんたらと仲良くしようとしてるんだから。死ぬほど難しいけど。(アブホールは、この「おれたち」ってのはだれのことだと尋ねた。おれは、「おれたち」ってのは常に変装なんだと答えた。すると彼女いわく、セックスは最近じゃオマワリと仲良くするより難しい)オマワリさんがたへ。貴下の麗しきパリの街を、自棄になったイギリス人どもがうろついてて、アブホールを貴下の犬小屋から盗み出して自分の崇高さを証明しようとしております。これが連中の計画です。

真夜中に、きゃつらは犬小屋まで歩いてってドアを開けて、泥のなかに横たわってアブホールが自分たちの上を歩き回って泥まみれにさせるようにする。それから、こいつらハリーも黒ンボだからってんで始末します。そうすりゃイギリス的剛勇を証明したことになるから。

こんなことを教えてやるのは、おれたちも昔イギリス人に混じって暮らしてて、連中がセックスがらみの話を拒絶するのに耐えなきゃならなかったから。

イギリス的なものには万事警戒してるってわけ。

深夜にイギリス人どもが迫ってくるのが見えたら、警笛を鳴らそう。でっかい警笛をもってるんだ。そうすりゃイギリス人どももあんたらアラブをふっ飛ばせないだろ。

イギリス人どもが来ない、来たくても来られなかったら、何もする必要はないけど、もし来られるなら、犬小屋まで来て聯中をそれぞれ一人づつ殺してってくれよ。それぞれの首をはねて手を切り落として耳をそいで、こういう装身具を犬小屋の壁にピンどめしてくれ。床の土が血を吸いこんでくれる。硬いパンみたいに。そしたらパンはちょっと匂うようになる。アブホールみたいに。

もしこんだけのことを教えた通りにやんなかったら、パンは派手に匂うようになる。アブホールのメンスの血みたいに。

こんなことを教えてやるのも、おれたちが無関心で興味ないから。



血みどろ船長

アブホールは、いま書きあげたばかりの手紙をすぐその角にいる革命アルジェリア警察に送ったりできない、だって暴力描写が多すぎる、と言った。おれは、偉大な作家になるなら作品のなかでセンチメンタルになってるわけにはいかないんだ、と説明した。マークとおれはこの手紙を彼女の血で封印した。それからおれたち全員の血で封印したので、おれたちは義兄弟になった。それに義姉妹に。血が混じっちゃったので、自分たちが何者かわかんなくなった。

おれは即座にサツ署の角のポストまで走っていった。オマワリどもがなるべく早くこの手紙を手に入れられるように。まるで恋に落ちたみたいに、おれの心は死人より激しく鼓動してた。でも、投函した直後に、イギリス人の侵入の日程を書くのを忘れたことに気がついた。

おれは夜のゴミすべてをかきわけてマークとアブホールのところに駆け戻り、このことを警告しようとした。でも、もしオマワリにまた手紙を書いたりしたら、イカレボンチだと思われて相手にされないだろう、と三人とも合意した。

手紙が送れないので、おれはラッパを三つばかり取り出した。その日のうちに、子供たちが人形の首をもいでロボットに糊づけしたりしてる、爆撃で半ば崩れたおもちゃ屋からかっばらってきたラッパだ。そのラッパを全部吹き鳴らした。耳がつぶれるほどの音がして、オマワリが山ほど飛び出して来て犬小屋に走ってきた。犬みたいに。

マークとおれも、これまた犬みたいに、オマワリに捕まる前に犬小屋に飛び込んだ。アブホールは絶叫し続けた。これは犬みたいじゃなかった。叫ぶのをやめないの、マークはラッパの丸い方を彼女の口につっこんで、布で固定した。アブホールは、よだれまみれになったその布をほどいた。ここで黙るつもりはなかったんだ。最初のRAPがドアから飛び込んでくると、アブホールは犬小屋の反対側の、窓として使われてた穴から飛び出した。

マークとおれも、吠えながら続いた。オマワリどもはおれたちの足跡を嗅いで、吠えた。

駐車場を駆ければ駆けるほど、オマワリたちがますます迫ってくるように思えた。獣どもの一匹の吐息がおれの首筋にかかった。危険を感じれば感じるほど、走れなくなった。

連中はおれを捕まえるか殺すかするところだった。アブホールは消えた。マークはおれの左手の指を引っ張ってたけど、おれは動けなかった。自分の弱さに、死にはまって、お

れは倒れ、爆転してイラクサの茂みに飛びこんだ。別の茂みにマークもうずくまっていた。オマワリたちはその横を走り去った。マークとおれは地べたを後ろ向きに這いずり続け、イラクサからイラクサへと渡っていった。たまにマグノリアもあって、やがてボートにたどりついた。おれたちが残した血はイラクサについて輝き、野生の薔薇になった。

その小さなボートの横で、アブホールが待っていた。どこにいたの、と言う。

おまえを牢屋から助け出してたんだ、と答えた。

マークは、牢屋に入るってどんなもんか尋ねた。牢屋での苦しみは人間を強くするものだろうか？

「ううん」

「だったら牢屋に入ってなんかいいことあんの？」

「牢屋にいると、自分の心臓を引きずり出して食べちまおうかって気になるんだ、退屈なんだもん」

おれたちは陸のボートの中に立っていた。セーヌの波は高すぎて危険だと思った。おれたちの船は、巨大すぎて白くなった波で浸水していた。白い牙をむき出して怒ってる龍の頭が水面下から、暗い深淵から現れた。アブホールとマークとおれのまわり一面、その暗い深淵の中、ティラノザウルスやサル食い魚が群がった。小さな船一隻に群がっていた。

マークとおれは綱をほどき、セーヌを下って船出していた。やがて忘却以外の何をするにも疲れ果てた。それから昔は洒落たレストランだったとおぼしきものの塀にボートをつないだ。電球が一個、まだついていた。

おれたち全員、ボートから褐色で暗黒の大地へと転げ出て、すぐに眠りこんだ。アブホールのことが頭を離れず、マークのことも頭を離れず、おれの眠りは落ち着かなかった。夢の最中に二度立ち上がり、夢の記憶のかけらがあたり一面で、そのかけらの間を縫ってアブホールが寝てるところに向かった。アブホールは犬小屋の中で考えこみ、瞑想し、瞑想しすぎてすごく受け身になってて、その犬小屋を物理的には逃げ出せたのに、自力じゃ逃げ出せなかったんだ。おれの夢では、別の夢で、さもなきゃ同じ夢の別の部分で、おれは自分が何かを追ってるのを見た。何を追ってるのかは見えなかったしわからなかった。自分がその何かを追ってて、その方法とか理由とか、正当性とかまわりに誰がいるとかまるで考えなかった。ひたすら何も考えなかった。するとアブホールがおれを追ってるのが見えた。それでおれのほうがいつも先頭に立ってて何も考えてなかったから、ア

ブホールとおれはいつもひどいことになっちゃうんだ。お互いに離れてても、いっしょでもそうだ。それでおれは、夢の中でだけ、もっと思慮深くなってあんまり海賊計画ばっか考えないようにしようと誓った。すると、アブホールがもっと計画しようと誓うのを夢見た。次に目を覚ますと、夜明けで、アブホールはまだ見えてて、椅子半分の横で寝てた。残ってた電球は消えてた。もう彼女を愛してるのかどうかもわからず、マークとおれが彼女を救出して連れてきたんだから、そんなことはどうでもいいのが今やわかった。それが愛だ。これだけ夢を見ると何かしら学べるらしいね。アブホールはまだ寝てた。

第 10 章

黒熱（アブホール語る）

深い眠りから目を覚ますと同時に、あの野郎ども二人がこっちを見てるのが目に入った。一人は、哺乳類になった木みたいな感じ。植物成長ホルモンで急速培養されたみたいな手足がニョキッと生えてる。髪だってましてわけじゃない。あんまし長なくて、むしろ芽吹くって感じ。色とりどりに。変になった脱色がほとんど。でかかった。あたしにはでかすぎる。

もう一人は陰険でブツ飛んで見えて、それってのも目が小さくてメンスの血みみたいだったから。そこで思い出したのが、あたしこの二年も月経がないってこと。

この男二人を見てると、目がひきつりそう。

でも、こいつらが誰かはわかってた。あたしに書き方を教えてくれた二人だ。

もう書き方を知ってるから、連中が見てる前で手紙を書いてやった。

片腕なしの縫いぐるみクマさんへ

あなたには借りがある気がするから説明しとく。ティヴァイには何の借りもない（ティヴァイにどういうことか聞いてもいいけど、説明しっこないのはわかってるんだ。あいつ、あたしのこと自分のクソ以下の扱いしかしてないのを知らないか、知ってても大したこととは思ってないから。ティヴァイがそういう考え方するのは、あたしが女だからクソだと思ってるから。あんただってそう。だから、もしあたしとティヴァイの間に何があったか知ったとしても、気にもかけないでしょ。男ってみんな、女のこととなるとお互いの尻拭いをしあうから）。

あんたたち少なくとも、女は人間じゃないけど男はそうだと思うことくらい認めれば、二人とも多少はマシになるんだけどね。あんたたち、女なんておしぼりで、からだのあちこちから垢を洗い落としたり、ほかの人間（男）の顔に投げつけたりしていいと思ってるんだ。

あんたらと話すたびに、表皮を一層ずつ剥がれてくような気がする。まだ新鮮な血みどろのかさぶたで、黒茶色褐色で、それを一つずつ引きはがして、あたしの血がもっともってあんたらの顔にほとばしる。これが女のあたしにとっての書くってこと。

愛してるけど、マーク、男だからあんたが嫌い。なぜか説明するね。

全世界は男の血みどろ妄想。

たとえば。ティヴァイは海賊になるつもりだった。したがって：あたしたちが海賊になる。もしあたしが海賊になりたくないなら、あたしは犠牲者にならなきゃダメだって。だって、もしあたしが海賊になりたくなかったら、かれのすべてを拒絶することになるから。それからかれは、あたしにその拒絶を後悔させるか、かれを拒絶できないほど惨めにさせようとした。それから、あたしを愛してるんなんて思いこんだ。そう思いこむ頃には、あたしは牢屋に入ってた。

あんたたち二人は、複雑すぎて脱獄とはかけはなれた脱獄計画をたてて、あたしを牢におさめとくのに協力した。大した西洋的思考だよ。

あたしが言いたいのはこういうこと。あんたらいつも、現実とは何かをクソ思いこみ続けて、その思いこみのために協力してるんだ。

あたしがおしぼりだっていうのに同意するわけじゃないけど。つまりあたしは現実って何か知らないってこと。自信がなくて、ためらいがちで、意志薄弱で、さびしくて、さびしいからオドオドしてて、苦悶してて、悲しくて、自分が立ち向かうべき思いこみと闘うだけの自信がないんだ。

あたしってそんな具合だから、もっとどンドンひどいことに巻きこまれてくんだらうけど、でもあんたらみんな大嫌い。

アブホール拝

書き終えた手紙をマイクに渡した。かれはそれを読んでクスクス笑った。それから手紙

をティヴァイに渡した。まだ笑ってた。

たぶんマークは、人生に対する正しい態度を身につけてるんだと思う。少なくとも何かに対する正しい態度は。

ティヴァイは手紙を読んで怒鳴った。「くそ、あいつは死んだ、死んだんだ、絶対死んだんだぞ」

「だれが？」とマーク。マークが何を、あるいはだれを考えてるのかさっぱりわからなかった。

「あいつは生きてる！」とティヴァイは叫んで、頭に残ったわずかな髪の毛の切れっ端をなでつけた。「おれたち心底愛しあって、また再び一つになるんだ」そう言うと同時に、ティヴァイは髪の毛をむしるのをやめて、あたしにキスして、コンクリートの上を不規則なかたちを描いて走り回りだした。他のラブバード 相手かまわず のさえずりを耳にしたラブバードみたいに、ギャアギャアわめきながら。ティヴァイの現実感覚はマークのより薄かった。それがなんかとどうかしたってわけじゃ毛頭ないけど。

あたしは正気を失ってなかったし、正気を失ってる人の正気を失うようなことは絶対にしないと決意してたんで、暴走族の仲間になりたいと思った。まず、バイクの運転を教わんなきゃ。まず、バイクを買うほどの金がないから、どっかでバイクを手に入れなきゃ。これを声に出して言った。

ティヴァイはナルシズムの中から首を出して、なぜだときいた。

あたしはかれがイカレててもわかるように説明した。「バイクを見つけなきゃ。そうすりゃブルート・リコ製の口ウソクとかのグードゥー用具や絹のシャツや山岳キャンプ用のブリキのお皿や、ジャックナイフ投げや本物の回想記執筆用のペンナイフ この回想記って、バイク乗りの話で監獄日記なんかじゃない、断じて監獄日記なんかじゃ やバイク雑誌を好きなときにかっぱらえるもん。牢屋じゃ何も読ましてくんないの。それであたし、夢見てないときでもすごく素早く動けるから、好きなとこへいつでもでかけてあらゆるオマワリから永遠に逃げおおせんだ」自分でいいながらも正論に聞こえた。あたしの言うことって、たいがいクズで無気味だからね。

「バイクの乗り方だって知らないくせに。おれは知ってる」ティヴァイがこんなことを言うのは、自分があたしより何でも上手だって言いたいだけなんだ。

もし多少なりともまともなところがあるんなら、族に入れるように、バイクの運転を教

えてやろうかって言うもんだろうに。

「でも、知ってたらもう習えないじゃん」

「アブホール、おまえはバイクの運転だって知らないくせに」

あたしは耳を貸さなかった。回れ右して森の中に入り、一年落ちで革命前で、ミラーが片方割れてる以外は完璧なホンダを見つけた。

このバイクをコンクリートまで運んでスタンドをたてた。「あんたは黙っててよ、この父姦野郎。自分のこともわかってないくせに。何もしないし何も感じないし、何ももってないし行動もなしで、あんたなんか無じゃない。でも、自分がそんな無だったのが怖くてたまらないもんだから、自分がこの世を支配してるふりを続けちゃってさ。だからバイクも持ってないんじゃない」

「アブホールは脱走黒ンボだけど、奴隷じゃないぜ。地上を歩むありゃゆりゅシェイ物並みに自由　　」マークはあたしのために立ち上がろうとしてくれてたけど、でも酔っぱらいすぎてた。

「じゃあいいよ」とティヴァイはせせら笑った。あたしと男一人を向こうに回してケンカする気はないらしい。「おまえがバイクの運転を覚えたとしよう。女にしちゃ上出来てくくらいまで。それでも族には入れないぜ。暴走族は女にバイクを運転させないから」

「エンジェルズはCIAがゲイと遊んでるUSアメリカに住んでるんだよ」とマークはつけくわえた。

「へえ、大昔の歴史にはえらく詳しいじゃん、頭も残りのからだも死んでんじゃない??」とあたしもせせら笑った。主にティヴァイに、つけくわえでマークに。「今起こってることは何も知らないくせに」

マークはあたしのことばに想いをはせてた。「昔、知り合いにレズの男役のバイク乗りがいたなあ、ラス・メイヤーの映画に出てた」

ティヴァイは自分のクソを飲みこんだ。「いったいこりゃ何の騒ぎなんだよ。おれはおまえに自由をくれてやるわけにはいかないんだぜ。だれも他人に自由をくれてやったりできないんだから。おまえが自由な人間だなんて、あたりまえだろうが。バイクに乗るんだって、まったくおまえの勝手だぜ。たとえ運転のしかたのカケラも知らなくて、途中でおっ死ぬかもしれないたって」ティヴァイは感情を持ち合わせてなかったんで、論理とウィットには強いんだ。「一つだけ教えてくんない? おまえ、自由なら、なんでわざわざ

ざ反抗してまわってるわけ？」

もう反抗する気はなかった。こいつの顔を真っ赤なパルプへとぶちのめしてやるんだ。でも、どっちもしなかった。バイクを押して緑の森の中に戻った。

緑の森の中で、あたしは一人考えた。「さあ、これから冒険だ！ 冒険ってのは、ひざまで血に漬かってうろついて、風より高く翔ぶんだ」この深紅のこぼれを口にし、ハンドルバーに手をおいたあたしは、新鮮なチェリーパイをほおばった天使並みに優しく自信にあふれていた。

ティヴァイとマークが何をしてるのかは知らなかった。

ガソリンとオイルの缶を見つけ、バイクに入れた。それからバイクに乗った。ちゃんと乗れたけど、ただ一つ、クラッチを使うたびに、クラッチがあたしを止めた。止められたくなんかなかった。進みたかった。クラッチに腹が立って、そいつにクソくらえ、と言った。これで、男も女も悪いことをするのがわかった。でもこの知識も理解も、クラッチとの格闘には役に立たなかった。

とうとうどこにも行けないのに嫌気がさして、あたしはクラッチを握り締めてわめいた。その間、エンジンはまわし続けてた。クラッチを離れた瞬間、バイクは前にすっとなだ。クラッチはパワーをコントロールしてるのがわかった。権力（パワー）を増すためには、パワーをコントロールしなくてはならない。いいことだ。

あたしはバイクに乗ってティヴァイのところへ戻り、バイクに乗れるところを見せてやったが、あいつはあたしには運転できないと言った。

だって現に運転してるじゃない、とあたし。

おまえは交通ルールを知らない、と言う。

ルールって？

道路での行動にはルールがあるんだ。ハイウェイ交通教則本^{コード}って本に書いてある。

そんなルールなんか聞いたこともないから、あるなんて知らなかったのだから、森に戻って湿ったハイウェイ交通教則本^{コード}を見つけた。英語の本で、一九八六年の発行になってる。

これでC O D E^{コード}が手に入ったから運転できる。

コンクリートに戻って、あたしはティヴァイとマークに、バイクを見つけたらついでいって、見つかなければついでにこれがないよ、好きなようにしていいよ、もっとも人が他の男や女に好きなようにしていいって許可を与えられるわけじゃないけど、もうあたしはバ

イクも運転できるしひざまで血に漬かってうろつけるし風より高く翔べるんだから。あたしはバイクをスタートさせた。

しばらくして、あたしは停まり、汗をぬぐったんでおでこが油まみれになって、初めてハイウェイ交通教則本を見た。バイク乗りへの最初のルールによれば、バイク乗りはかれの(これは「彼女」と読み替えなきゃならなかったけど、それで意味が変わるわけじゃなかった)バイクを整備しておかなくてはならない。このバイクはあたしじゃなかったから、あたしはこいつを好きな状態にしておけるわけだ。こんなの常識だし、常識なら頭に入ってるから、ハイウェイ交通教則本のこの部分は破り捨てて、ドブに放りこんだ。

教則本の次の部分は、運転にふさわしいよう自分のコンディションを整えなくてはならない、と書いてあった。牢屋の経験だのティヴァイ経験だの、それに一般的に言って、人生経験(あたしの人生ね)で明らかにろくでもない状態だったから、手や、前足や、その他の四肢が届く限りの酒を避ける必要なんかなかったわけだ。ハイウェイ交通教則本にはそう書いてあるんだもん。あたしも、バイクと同じく、新鮮なジュースがたくさん必要だって。

交通教則本が全部常識ばっかなら、丸ごと捨てたって構やしない。だって、常識なら知ってるもの。常識ってそういうもんだもの。

まだそのパンフレットは捨てずにバイクに飛び乗り、郊外についた。

不良っぽすぎんのと、規則がないもんで、もう学校がないもんで、学校に一度も立ち入ってない学生五人が、横断歩道の片端から反対側までまっすぐ並んで立ってた。

あたしの正しい運転コースは、こいつらをひき殺すことだろう。

この横断歩道を通しようとして並んで待ってる車が、あたしより先に二台あった。あたしのすぐ前の車、ルノーの運転手が、パッシングしてクラクションを鳴らしてた。思いっきりでかい音で。その前の車の野郎は、車ともども、べこべこすぎて認識もされないくらいだけど、ガキどもとクラクション屋とに永遠の始まりから板挟みにされ続けてたんで、ゆっくり車から下りてクラクション屋のところに歩いてった。クラクション屋は野郎に、早く行け、前進しろ、と言った。

「無理だよ」

「なんで？」

「前に子供がいるんだ」

「ひいちまえて」

「うるせえ」

サラリーマンはそれを聞いて、新車のルノーの窓を上げると、そのルノーを野郎の屑鉄につっこませた。こういう状況についてハイウェイ交通教則本が何と言ってるか自信がなかったから、自分で考えなきゃならなかった。またもや、正しい行動方針はガキをひき殺すことだと決断。ただし今回は、あのサラリーマンがあたしにつっこんでこないように、ここを逃げ出すためだった。

計画通りにやったけど、残念ながらガキはミスった。

こういう状況についてハイウェイ教則本が何と言ってるか、まだ自信がなかったもので、安全に思えたところで消火栓の横にバイクを停めた。犬みたいに。最初の消火栓は、犬と同じで、役にたたなかった。もう火事がなかったからじゃなくて、もはやオマワリも含め、消したいと思うほど火事を憎んでるやつが、だれもいなくなってたから。オシッコするか嗅ぎに行く犬みたいに、あたしは消火栓の横につけ、ハイウェイ交通教則本を取り出し、オシッコまみれにしてやって、適当に開いてみた。

車間距離をじゅうぶんにとって、前の車がスピードを落としたり、急停車しても安全に停まれるようにすること。

このルールは二つの理由で不明確だった。理由その一)サラリーマンの車と野郎の車との間には有り余るほどの車間距離があったから、車間距離の不足が原因じゃないはずだ。何の原因でも。理由その二)あたしの前には車なんかなかった。

ルールに従えるよう、車を探して後ろにつけなきゃ。十五分間、辛抱強く待った。この車を待ってるのは、恋をしてないときに愛する人を見つけるみたいなもんだった。

でも、愛とちがって、こんどは見つかった。浮浪者道をとことん極めきったみたいな浮浪者風の人が、赤い何か(ピックアップ・トラックかな)を運転して、時速五キロ(プラマイ五キロ)で走ってた。ゆっくりと。男も車も、動きそうには見えなかったけど、でも両方とも動いてた。這いずってた。あれじゃ人生無気味よね。

ある日、偶然にだれかに出会って、人生が一変すんの。

無事に知らない人を見つけたんで、また運転教則本^{コード}をのぞいた。運転する前に運転のルールを読んで暗記してたから、公道にふさわしい優良ドライバーになりつつあったってわけ。

決して停止距離より相手に近づかないこと。

停止距離って何だろう。調べてみた。

時速(キロ)	停止距離(メートル)
20	9
40	22
60	44
80	76
100	112
120	153

(停止距離は濡れた滑りやすい路面、ブレーキ不良、すり減ったタイヤや疲労^{タイヤード}ドライバーなどによって著しく増大します)(これを書いたのは、どうも駄洒落の好きなやつだったみたい)

太陽は派手に照りつけて、ケツを落としそうなほどで、それってのも太陽がムラムラしてるからで、あたしと同じくらい催してるからで(バイクに乗るとそういう気分になる)あたしは交通教則本^{コード}の知識と多少のスピードで舞い上がってたんで、この終章は何とも何の関係もない。

赤いトラックの浮浪者はずっと先に行ってた。あたしはエンジンをかけて、考えだした。ゆっくりと、時速九〇キロくらいで流してて、浮浪者のほうは五キロくらい。停止距離は、時速五キロの話なんか書いてなかったし、五キロ対九〇キロともなればなおさらだった。微積分が要るのかもしないけど、高校の微積なんて、使ったことないから忘れちゃった。もうあたしは、こんな何とも何の関係もなく、何の役にもたないルールなんかを無理して覚えようとしてたことに腹がたって、浮浪者の車にまっすぐつっこんだ。

ドシーン。

ジジイは何も感じなかったと思う。何も聞かなかったと思う。だって時速五キロでヨタヨタ走り続けたもの。

あたしはもう一度本を見えることにして、バイクを止め、本をのぞいた。ページは熱くなっていた。

救急車、消防車、パトカーその他の緊急車両が、赤色灯をつけたり鐘をならしたり、サイレンを鳴らしているときには、道を開けること。

あたしは左手の中指でクラクションのボタンを押し、押したままもう一度浮浪者のトラックにつっこんだ。ドカーン。浮浪者は何も感じず、聞かなかった。

今度だけは教則本コードが正しかった。これは確かに緊急だ。

でも、今のあたしは二車線道路にいて、すごく混乱してて、混乱してるから頭にきてて、おかげでバイクを左の路肩に止めなきゃならなかった。空っぽの空間を見て、面倒に巻きこまれても、あたしにはこの世に頼れる人がだれもないんだ、と思った。泣き出す気はなかった。浮浪者のジジイは消え失せてた。

三十分ほどして、その同じ浮浪者と同じトラックが、というかトラックの半分で、残りの半分はなぜかミンチになっちゃってただけど、それがよたついて、というかヘアピンカーブをきりつつ、かなんか知らないけど、とにかく横を通り過ぎてった。突然あたしは、その乗り物が実は三台分なんだということに気がついた。ピンクの五四年型シボレー、別の淡緑のシボレーのドア、赤い石油タンクローリーのシャーシの大部分をグシャッとくっつけたもの。ただしそのリア部分は押し潰されちゃってて、元ボクサーの顔よりひどいことになってた。

この違法車両が公道上を走行するのが合法的に許されてるのかわかんなかったの、またハイウェイ交通教則コードをのぞいた。ご近所監視団の一味だかね。一瞬、教則本コードを見てる間にこのタクが、あたしの鷹の目を逃れるんじゃないかと不安になった。次の瞬間、このタクはのろすぎるから、どこへも行きやしないと考えた。これもこの世の法則の一つだ。どこへも行かなければ、どこへも行けない。

霧の中を走るときは、ルール 55 番に従うのがきわめて重要です。

ハイウェイ交通教則には、まさにそう書いてあったし、その通りだった。ジジイは、明らかに、すっごく濃い霧の中を走ってるんだ。だって車は左右にもものすごく蛇行してたし、その蛇行があわさったりなんかすると、見えなくなったりもした。ブッ倒れるほど飲んだ酔っぱらいみたいに。これでわかったのは、ロンドンのドライバーたちにも教わったことだけど、だれだって運転ぐらい習えるってこと。

ルール 55)

一、ミラーを確認して速度を落としましょう

ミラーなんかなかった。むしり取っちゃったから。だって、ミラーを見てるとスピードが落ちるんだもん。ミラーを見ると、あたしてなんてきれいなんだろう、と思っちゃうから、絶対に見ない。だからそのままルール五十五番の次の部分に移った。

ルール 55)

二、前の車のテールライトだけをあてにしないこと。安心して注意がおろそかになりがちです。

大事なことだったから、頭の中で何度も繰り返して暗記するようにした。同時に、バイクのエンジンを思いっきりふかして、まともに速度を落とせるようにした。

ルール 55)

三、速度計でスピードを確認しましょう。思ったよりスピードは出ているものです。

二段シフトアップして、さらにエンジンをまわし、思ったよりスピードを出してるなんてことがないようにした。

ルール 55)

四、見て、見られる運転を心がけましょう

これできまり。五速にシフトアップして二百キロまでアクセルをまわし、それで速度計をじっくり見下ろして、自分の走行速度がまちがいをなくわかってるようにした。速度計を見下ろして正しい運転をしてたから、自然ともう一つ正しいことをやっちゃった。いかに立派なドライバーになったか、これでよくわかるうってもんね。あたしはトラックのテールライトをあてにしなかった。テールライトにつっこんだ。顔を上げた。あたしは見られてた。少なくとも、感じてた。感じるのは見るよりいい。トラックは停まった。浮浪者もとまって、運転席の窓から身を乗り出し、転げ落ちかけて左のサイドミラーにひっかかった。

ルール 55)

五、できるだけ頻繁にミラー類を調べ、きれいにしておきましょう

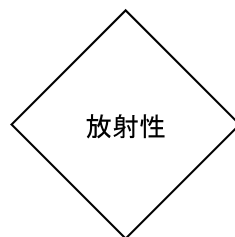
トラックはオシャカだった。奇跡的に、ジジイはちがった。ヨタヨタと、それからしっかりと、自分の芸術作品を見下ろしてるあたしの方に歩いてきて、手には刃渡り三十センチのジャックナイフ。右利きだった。溺れたネズミと三重衝突の合いの子みたいな感じ。山高帽が左の目にかぶさってたけど、残念ながら視界をさえぎってはいないみたいだった。そいつの左目はあなぼこだったから。何が起きてんのか、あたしは混乱してた。もうルールがないんだもん。これがヴードゥーで言うクロスロードってやつかしら。道の一つは、ジジイはあたしに何か重要なメッセージを伝えようとしてる、というもの。もう一つの道は、ジジイはあたしを殺そうとしてる、というもの。

あたしはバイクに飛び乗った。Uターンして、反対方向に走り去った。ルールを守るこ

との問題ってのは、ルールに従えば、自分には従えないってことだ。したがってルールは、それに従う連中を拒絶し、イカレさせ、あげくの果てに殺してしまう。危険な機械、または獣、または人間に乗って、ルールを守るのは自殺に等しい。ルールに逆らうのはルールに従うのと同じこと。どっちも自分の心に耳を傾けなきゃならない。

ホンダをまた五速にシフトアップして自分の心に耳を傾けた。アラブ種の牡馬。あたしの心はそう言った。あたしの心が言うことは、すべて絶対に真実だった。あたしはどっかのガキどもがねじってチンポコ型にした電柱の横にバイクを止め、ペンと教則本^{コード}を取り出した。

心の中をのぞいた。見えた最初の絵を教則本^{コード}に描いた。紙はそれしかなかった。

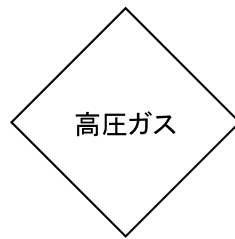


(かれは今、アラブ種の馬たちが疾走する部分の世界におりました)

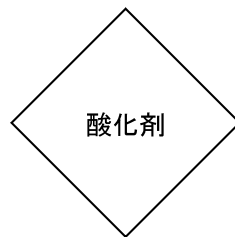
あたしの見た次の絵。



(世界のこのあたりはとても暑く、野生のアラブ種の牡馬たちは水を見つけるのに苦労しましたし、オートバイはオーバーヒートしてしまいます。こんな熱のなかで生き抜くなんて、みんな気狂いみたいな意志を持ち合わせていたのです)

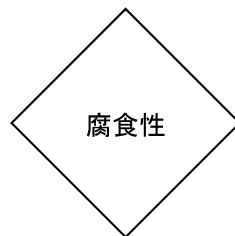


(CIAは農業目的で利用されていた土地をほじくりかえし、木を根こそぎにして、ガソリンを掘り出そうとしておりました。バイクは増える一方だったのです)



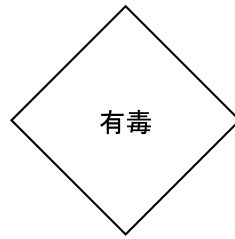
(太陽の力はCIAの力より強うございました。馬たちはこれを知っておりました。バイク乗りやライダーたちは、かつてうごめく都市がそびえていた乾いた大地の上で、たむろしておりました)

あたしの見た次の絵。



(怒りは怒りのままに。自己憎悪や自己否定ではなく。アラブ牡馬たちの怒りが、血であるところの美を通じ、美に変わりますように)

あたしの見た次の絵。



(有毒)

これがみんな、何の理由もなく思い浮かんで、だからみんな真実にちがいない。
最後に、他のすべての絵を総括する絵を描いた。



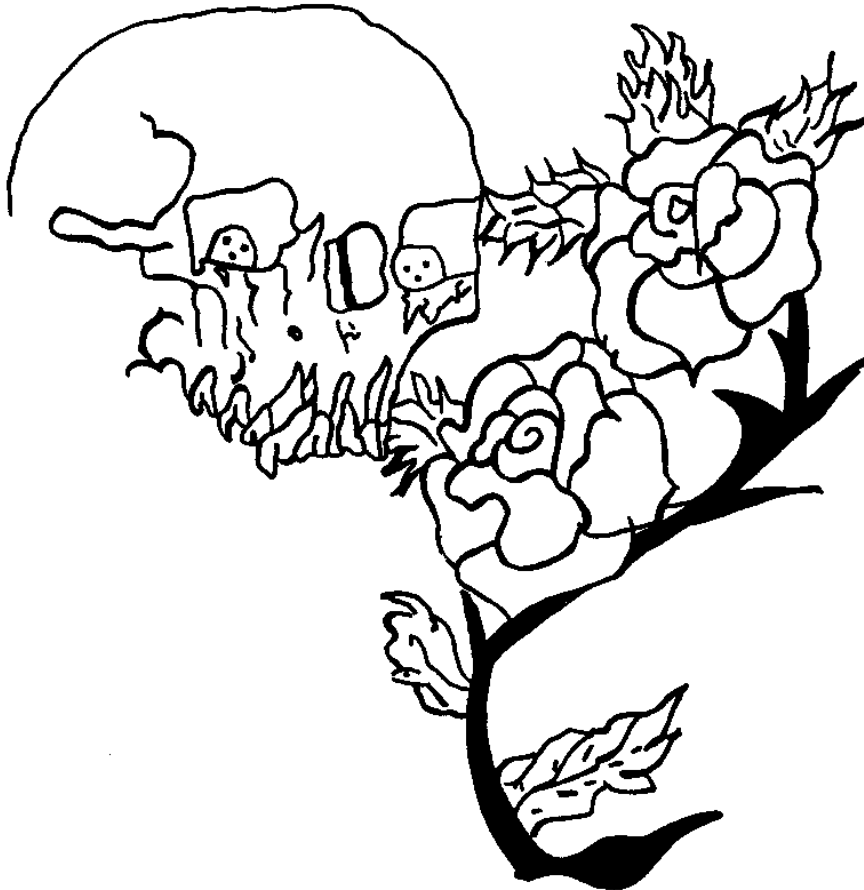
これがあたし。

この先、ハイウェイ交通^{コード}教則本はもうどうでもいい。あたしがルールを作ってるんだ

から。

これがあたしのルール。みんな、聞いて。

あたしが死んだら、たぶんバイクの事故でだろうけど（だってバイクに乗るのは自分の頭蓋骨を見ることだから）



あたしを、死んだまま、というかあたしの死体を、海に投げこんで。そしたら魚たちは食べ物にする相手ができる。あたしを食い尽くせる。

もしCIAが、そんなことをしたら海が汚染されて、連中の廃油や廃液が非汚染されちゃうからとか言って、そうさせてくれなかったら、そしたら棺なしでどっかの土に埋めて。死んだときに閉所恐怖症なんか味わいたくない。その土に、墓石がわりに鋭い剣を突き刺して。

本気だよ。

そしたら葬式を出して。音楽はロックだけ。オペラだのクラシックだのは、死んだ人間の神経細胞以外すべてを破壊する。クラシックを七音符以上演奏したら、あたしの死体は、少なくとも死体の半分は、あんたが入れてくれた水だか土だかから、半身を乗り出して過去何百年にもわたって死んだ連中をあんたの上にゲロってやる。そしたらそれ、食べるよ。

ロックがホワイト・ノイズの域にまで達したら、ロシアのウォッカや色つきシャルトルーズ(オウムどもは色つきだから)を異様なくらい大量に運びこませて。そうすればオウムどもは死ぬくとなくぶちのめされてわめきたてる。そうすればもう死はなくなる。人間はセックスするなりしないなり、それぞれお気に召すように。全体として、特に、細かく言えば、あたしの葬式の要点はエクスタシー、完全な分離がその正反対と等しくなっていて、この日常の疎外とはほど遠いものであること。

だって、あたしの葬式で、これまでこの社会のおかげで落ちこんでんのに、さらに輪をかけて落ちこんでほしくなんかないもの。

アルジェリア革命オマワリが横にとまった。スピード違反で逮捕する気はない、とめかす。

牢屋に戻りたくなかったから、ぶちのめしてやるわけにもいかない。

牢屋に戻りたくないとは言わなかった。

このオマワリ、身長二メートルですごくでっかいニキビがあって、火山性のクレーターが顔面にカニ爪を食いこませたみたいな感じだった。脳より長くて細い脚をしてる。

事態がわかってるとでも言いたげに、空から雨が降ってき出した。マークとティヴァイが横にとまった。バイクを盗んだらしくて、チョッパーに乗ってる。ティヴァイはスピードを出し過ぎてて、停まるときに後輪がすべって道にゴムの跡を残したけど、でも二人とも男だったんでオマワリは気にもしなかった。みんなしてあたしをバカにしてる。

するとそのオマワリ、紙切れに読めない判読不可能な書きこみをしてたんだけど、あたしの運転はいずれ面倒を引き起こし、いずれ死んでしまうかもしれないと伝えてよこした。オマワリの言うには、まずあんたはこっちのことをまるで構わずにスピードを上げたんで、必死で追いかけてなきゃならなかった(この野郎、金玉と、ついでに舌も、盗難防止用金庫にでも入れときゃいいのに、とあたしは黙って思った)。次に、あたしは交差点という交差点をすべて無視して突っ切った。あたしはとうとう口を開き、交差点無視は安全

運転なんだと説明した。交差点を無視すれば、バイクの天敵の車も無視することになるでしょう。するとオマワリ、あたしがあらゆる男にとって危険な存在だとぬかす（この時点で、こいつの金玉はからだにつけといてもらうことにした。バイクでハイチまで行ったら、すぐにこいつのからだの下半分を切断し、サメのエサ台にぶちこんでやる。カップ・ハイチアンでは、トントンたちはどうでもいいハイチ人どもを、サメのエサ台にぶちこんだ）。オマワリはさらに、あたしがウィンカーを出すのが遅すぎるので、ついて行くのに苦労したと言う。あたしは、この世に他にだれがいるとは知らなかったこと、ウィンカーとかの信号は信仰であることを説明した。

マークとティヴァイはあたしを蹴飛ばした。

蹴り返してやった。

オマワリは、シーザーの回想記並みの長い巻き物に、一面にXが何千もついたのをよこすと、去った。あたしはマークとティヴァイを見た。

マークとティヴァイは、またあたしを蹴飛ばした。痛かった。

なんでポンポン蹴んだよ、と個人的にきいてみた。あたしを閉じこめるだけじゃまだ不足か。あれはアメリカがベトナムで負けたのと同じく、あんたらの負け。こんどはあたしを侵略しようって……そういうわけ？

マークとティヴァイは、またあたしを蹴飛ばした。

そこで、剣がマンコを貫くのを思った。ただ、あたしのマンコはあたし自身でもある。剣はあたしを刺し、あたしの血が流れる。

その剣を扱って突き刺すのがだれかは問題じゃない。剣があたしに入ったら、それはあたし。あたしは貫く者にして、貫かれた者。それから、あたしに降りかかったすべて、あたしの人生を想い、これから降りかかることすべて、未来を思った。偶然とあたしの忍耐を。規律は忍耐を生む。すべては血。

ティヴァイは、蹴るのは閉じこめたのと同じ理由からだ、と説明した。辛苦に耐えて突破することで、あたしは女たちの模範となりヒロインになれるそうさ。こういうウィットのない話に返事をする気にもならなくて、マークのほうに向き直って、マークの族に入りたい、と言った。

マークは、入りたくなんかないだろ、と言った。

なぜ、とあたしはきいた。

「……こんな高校ぐらいのガキがいてさぁ……」マークはまるで、あたしの言うこともだれの言うことも聞こえなかったみたいに、自閉症じみてつぶやいてた。「おれの族の野郎に強姦されかかってたときに、自分はA I D Sだって言ってさぁ。そいつ、そのアマが強姦されないように、口から出まかせ言ってんだろうと思って。それでやったんだ。モノにした。それがホントにA I D Sで。ちなみにね。オマワリはそのメンバーを、おれたちのメンバーを、強姦でプチこんだんだ

マルセイユの西にある労働農場で二年間過ごした。そこでアルジェリア人が占拠。ほら、覚えてんだろ？ 連中、牢屋の仕組みを変えちゃって、おかげでおれの相棒の腐れヅラは北部の凶悪犯用の監獄に送られることになったんだ。婦人警官がそいつを車で護送してたんだけどね。

この話は腐れヅラから直接聞いたんだけどさぁ。

「『アルジェリア国家矯正収容所送りのクソバイク野郎ってえのはおめえかよ』と婦人警官は鼻を鳴らした。『あんたがちゃんと無事にたどりつくか確認するだけのことで、あたしゃあ日曜日の一番みっちりしたウェイト・トレーニングを諦めなきゃならなかったんだぜ。あたしに言わせりゃ、てめえみたいなヤツなんか、三メートルのクソにでも埋めちまえばいいんだよ』こいつは典型的な金玉蹴り潰し型のオトコ女を、もっとデブでニキビだらけにしたヤツだった。おれを車に乗せた。おれの金玉は、手が車の床にボルトどめされた鉄棒に手錠でつながれてたんで、さわれなかったんで、縮みあがってた。だからセンサーこいて、毒をこの雌牛の目に射ちこむこともできなかったんだ。

監獄。

口答えもできなかった。口答えするなら、おまえは火星人だって言ってやらなきゃならないもんな。女は唇を噛み続けてた。唇を噛む合間には、ミルクィー・ウェイのチョコ・バーをかじってたっけ。

かじってかじってかじり続けてるんだ。それでこう言う。『よお、このライダー野郎、あたしにせいぜい感謝してほしいもんだね。こうやって自然を見せてやってんだからさぁ。自然ってなあ、すばらしいもんよ。あたしだったら、バイク野郎なんかには絶対に自然なんか見せないけどね。貴様らときたら、自然を見たおれとたんに出かけてって、あたしらの通りを騒音だのグリースまみれの手だの、破壊的な機械だの汚しまくってくれるからね。あたしゃアメリカ空軍に弟がいんだよ。その弟が言ってたけどね、地面にでっかい穴をあ

けて、これまで地上でつくったバイクを全部ぶちこんじゃえばいいとさ。弟の言う通りだよ、まったく。

実際問題としてだな、え、バイク屋さんよお』とその女の左手は、プロプロのケツの横のカーシートを叩いて、『二、三年前、あたしたちオマワリが全員白人だった頃なら、あんたら一人残らず電気椅子送りにしてやったんだけどね。ただ、それには電気技師がちょっと足りなかったってわけよ。まったく。でも、そろそろツキも落ちてきたってかね、兄ちゃん』と、こいつは残ったわずかな髪をなでつけるんだぜ」

「二人は何時間も走り続けた。監獄にしてディーゼル・エンジンのマチルダは、腐れヅラに別の兄弟の話をしてやった。マチルダのおふくろって、牛だったんだな。その、この兄弟ってのは、アメリカ合州国、テキサス州ダラスで、州側の証人になったことがあるんだと。十七歳のガキが、女を強姦した直後にその頭を銃でぶっ飛ばした件で裁判にかかった。裁判官は、ガキがバイク乗りだと知ると、即座に最高刑を言い渡した。

やっと日が沈み出した。マチルダは、ウェンディーズの横に車をとめた。そして腐れヅラの手錠を外した。そして私物の手錠を使ってそいつを食堂のカウンターののすりにつないだ。片手と口でこいつが食っている間、マチルダは他の客に、こいつは強姦魔なんだよ、と告げた。

マチルダは、支払いに銀行のカードを差し出した。ウェイトレスは、もうカードはダメだ、と言った。マチルダは笑って、ビュイックから財布を取ってくる、その間、バイク小僧は置いてくから、強姦していいよ、とウェイトレスに言った。若いウェイトレスは不愉快そうだった。

腐れヅラは彼女が　つまりウェイトレスが　可愛いと思った。だって、流しの上に身がかがめたとき、その小さなパンティの横に盛り上がる（軽く、そびえたつほどじゃなく）肉が見えたからだ。この可愛いウェイトレスが自分に見られるのを気に入ってるのがわかった。

マチルダがつれに戻ってくると、腐れヅラはウンコに行っていないか尋ねた。彼女は『ダメだ』と言いたそうだったが、そうもいかなかった。ウンコするところを見たいか、ときいた。彼女は吐く仕草をしてみせて、おまえなんかクソ垂れてたくったって匂う、と言った。そしてウェイトレスを見たけど、向こうは顔をそむけてた。

マチルダは男便所を調べ、唯一の窓はしっかり鉄格子がはまってるのを見て、腐れヅラ

をそこに入れた。

一人になったとたん、おれのダチは流しのパイプで鉄格子を叩いて外し、その穴からなんとか抜け出し、裏に回ってあの女看守の車に向かった。マチルダが財布を取りに行つて、開けっ放しのはずだと踏んだわけ。

確かに。やつは後部シートの下に転がってたショットガンを拾った。茂みに逃げこみ、それから川へ向かい、自由になるつもりだった。

でも、車のドアから振り向くと、そこにはマチルダが立ってた。腐れヅラは銃の台尻を使って彼女を最寄りの車に叩きつけ、それが強烈すぎて彼女は気を失いかけた。

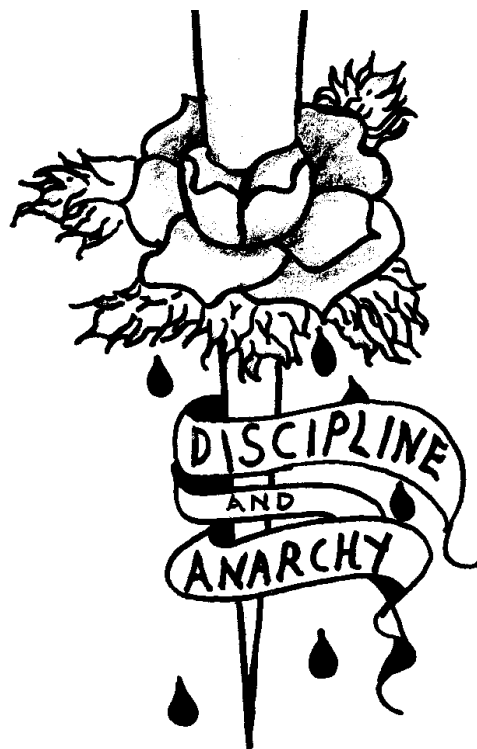
やつはうなってみせ、銃身をあげて女の口に突っこんだ。銃身を歯からさらに奥に差しこんで、直接脳に向けたとき、突然、あたりにむかつくような匂いがたちこめた。臭気はさらに重くたれこめ、そこでそれが何だかわかった。ウンコだ。このアマ、典型的な^{から}いばりだ。いざって時にはおよび腰。ダブル・ショットガンの清潔で黒々とした銃身を見下ろす女の目は、でっかく見開かれた。何か言おうとしたけど、出てきたのはのどが詰まったような音だけ。だから、銃身を見下ろし続けた。でも、それも長くは続かなかった。残った手で腐れヅラは女のベルトからリボルバーを取ると、その握りをアマの頭蓋骨のてっぺんに思いっきり振りおろした。その日、一番気分のいいできごとだった。

で、そいつは警察のビュイックを運転して、おれたちの族に戻ってきて、この話をしてくれたってわけ」

あたしはマークに、あんたの言う通りだと言った。暴走族になんか入りたくないや。

その陽射しの中に立ち尽くし、自分が何が欲しいのかもまだわかんないのか、と思つた。何が欲しくなくて何とだれが嫌いかは、じゅうぶんにわかってる。それだけでも大したもんだ。

それであたしは思った。いつの日か、ひょっとして、美しい世界に、ある人間社会が、ひたすらむかつくだけじゃない社会が生まれるかも。



訳者あとがき

「キャシー・アッカー：この元 42 番街ポルノスター、1984 年に前衛フェミニズム小説『血みどろ臓物ハイスクール』をひっさげて岸に打ち上げられた時には、文学パンクで売り出した。売り物は刺青、スキンヘッド、その辛辣な態度。(中略)でも、無数の 80 年代有名人同様、彼女のアーティストとしての本領発揮分野はインタビューである」

『i-Deas の 10 年：80 年代百科』より

引用したこの『i-Deas の 10 年：80 年代百科』ってのは、80 年代のロンドン雑誌界を席卷した *i-D* の編集で、イギリスの 80 年代カルチャーのすべてを盛り込んだ、懐古趣味たっぷりの楽しい本だ。ぼくはこういう海外の流行方面に疎いので、イギリスでフランク・チキンズ司会によるカラオケ番組があるとか、大相撲が放映されていて解説をライアル・ワトソンがやっているとかいうくだらない話は、これで初めて知っただけけれど、まあそれはさておこう。さてこの本でキャシー・アッカーは、キャサリン・ハムネット(キヤー!)やマドンナ(ギャー!)やチェルノブイリ(ひゅー!)と並んで堂々項目もらってる。ウィリアム・ギブスンですら、サイバーパンクの項目の中に押し込められてるってのに。ほかに作家で出てくる人は、ティモシー・モーとマーティン・エイミス(この二人はイギリス人にしか関係ないから無視)とサルマン・ラシュディと、「あの人はいま」的扱いのタマ・ジャノウィッツくらいなのよ。てなわけで、キャシー・アッカーというのは、世界の一部分では 80 年代を代表するくらいの大事件だったらしいということは、おわかりいただけたかしら。

キャシー・アッカーの出世作は、先日邦訳の出た『血みどろ臓物ハイスクール』であり、

ダメ押しが『ドン・キホーテ』(邦訳近刊)である。この二冊で彼女はポスト・バロウズの旗手の座を確立した。そして本書『アホだら帝国』は、最新作の『アイデンティティ追悼』(いずれ邦訳)とともに、神話創造というその先の変なところに入りこみつつある新しい系列の作品だと言われる。というか、自分ではそう言ってる。もっとも一部の人に言わせると、キャシー・アッカーの小説はどれも「あー、あたしはもっと愛が欲しいのよう！」とひたすら絶叫しまくってるだけなので、新しい系列もクソもないことになるのだが。だが、それは日本では、みなさんがこれからご自分で判断してゆけばよいことである。

とりあえず、その判断用に、みなさんにもインタビューを読んでいただこう。一九九〇年の春、ニューヨークでの会話の一部である。ただし、多少脚色あり。

KA あたしの本を日本語に訳すって？ ふーん、どうなのかな、何とかなりそう？ そういや先日『血みどろ臍物ハイスクール』を訳してるとかいう人に会ったけど、あれとは関係ないの？

山形 ??いや、それは.....知らないなあ(註 今にして思えば、これが例の渡辺佐智江だったのだ)。こっちは『アホだら帝国』のほうです。まあ何とかかなと思いますよ(註 何とかしました)。バロウズよりは楽そうだし(註 そうでもなかった)。

KA これって、何かシリーズの一冊ってことになるのかな。

山形 ええ、まだ細かいところは決まってませんが、バロウズやレーモン・ルーセルなんかと同じシリーズということになるはずですよ。

KA やっぱ売り方が問題よね。表紙とか販促とかはどんな感じ？ あたしも呼んでもらえれば行けると思うけど。

山形 (何と図々しい)いやあ、チトそういうノリにはならないんじゃないですか。表紙も、訳ができて中身の見当がつくまでは何とも.....

KA 使える写真はいろいろあるから、言ってくればそれなりに対応できると思うな。あの、メイプルソープが撮ってくれたやつは、いろいろ条件がうるさいんでつらいかもしれない。

山形 えー、ですからあ、メイプルソープとか雄琴のソープとかいう以前にですねえ、翻訳があと半年はかかりますからあ（註 結局二年かかりました）それまではそういう話は出てきませんったら

KA んじゃあ、翻訳はどうなの？ 章毎にいろんな物書きの文をパクってんだけど、そこらへんって出せそう？ 最近、日本の作家を多少読んでてさ。新作では、紫式部なんかにも登場してもらってるんだけど。まあ、例によっていい加減なパクリだけだね。三島は、非常によくわかるし、よく読んでるんだけど、川端ってのが、目は通したけど、何というか、その……」（手をふりまわす）

山形 言いたいことはわかるけど、言ってることはわからない、みたいな……

KA そう！ そういう感じ。まあ翻訳のせいもあるのかもかもしれないけど

山形 いや、それはその通りだと思います。日本人でもそう感じると思います。えー、いろんな物書きの文、ですか。たとえば『アホだら』でパクってる作家というのは？

KA えーと、一章はまずサド。それとフロイト。あとはフランスの、えーと……忘れちゃった。ハッハッハ。帰ってノート見たらわかるけど（註 グローヴ・プレスで、かつてキャシー・アッカーの担当だった編集者は、長編のゲラに疑問点を添えて送ったら『そんな昔書いたものことなんか、イチイチ覚えてない』と言って怒られたという）。どうなの、そこらへんって、日本語でちゃんとわかるように訳せる？

山形（自分でもロクに思い出せないものを、他人にはわかるように訳せてえの？）

うー、部分毎に雰囲気がちがうのはそれなりに表現できるんですけど、もとがわかるように、となるとねえ。もとのヤツの翻訳の問題もありますし。お約束できるのは『ニューロマンサー』のそこだけです。『ニューロマンサー』は間違えようがないですけど……SF方面はお好きなですか？

KA うーん、結構読んではいるし、嫌いではないよね。なまじ「文学的」じゃないし、オープンだし。ウィリアム・ギブソンは全部読んでる。ほかのサイバーパンクの連中はともなく、ギブソンは作家になる可能性を持った物書きだと思う。『ニューロマンサー』はすごかった。最近の『モナリザなんか』ってのはひっでえ代物だったけど。なんかふつうの小説を書こうとしてるでしょう。

ただこの『アホだら帝国』は、ギブソン以外の部分でも、全体としてかなりSF色の濃い本なのは確かだね。特にバラード的な意味で。

山形 それは、全体の近未来的な設定といった部分でしょうか、あるいは「バラード的な」というと災厄小説っぽい部分を考えての話でしょうか。

KA 両方、だな。

山形 バラードの場合は、『残虐行為展覧会』から『クラッシュ』への移行で、断片羅列から叙述的な書き方にシフトしましたよね（バラード自身のことばだと、非線形的な作品から線形的な作品へ、ですな）。あなたの場合も『血みどろ』の断片を撒き散らしたような書き方から、『アホだら帝国』ではかなりストーリー性が高くなった、というような形式面での意識というのは？

KA それは……別にバラードがどうこうという話ではないなあ。『血みどろ』や『ドンキホーテ』は、基本はデコンストラクションが面白くてやってたんだけど、『アホだら』ではもっと叙述に興味に移ったってだけだな。バラードとのからみで言えば、むしろ新しい神話創造みたいな面かな。

山形 ??

KA さっき、サドとフロイトって話をしたけど、かれらは一番エディプス的な物書きよね。特にサドは、この神話を内破させた、とでも言おうかな。現代の西欧世界は完全にエディプス神話に毒されてるわけで、だからサドなんかの文を持ってきて、自分の生きやすいような神話を作り直すと言ったらいいかな。そこらへんの話は、いまシルヴェール（・ロランジェ）がまとめてくれているあたしの短編集（註 『我が父ハンニバル・レクター』1992）に入るはずのインタビューで、かなり詳しくやってるから、そっちを読んでもらえればいいんだけど。

山形 バロウズの唯一の後継者とか、女バロウズ、みたいな言い方をされますよね。ご自分でもそういうふうに考えているんですか？

KA だってまわり見回しても、ほかに誰もいないし。名誉なこととは思ってるし、自分でも人にきかれりゃそう言ってるからね。こないだパーティーに顔を出したら、ポーランドだかチェコだかの作家の女房と話しになって、「あなた、どんな系列の作品書いているの」って言うから、「ウィリアム・バロウズと類似の作品と言われることが多い」って答えたら、向こうが急にいきりたって「なにバロウズ？ そんなことはあり得ない、だれもバロウズみたいには書けない！」とかわめきだして、ホントまいったけどさ。

山形 向こうはどう思ってるんでしょう。

KA さあねえ、たぶんどうとも思っていないんじゃない？ なんか最近は人間よりネコとか動物のほうがいいらしいし。

テレビ局に頼まれて何度かインタビューに行ったんだけどさ、まあ常人じゃないのはまちがいないわよね。いろいろみんなに脅かされてたから、かなりおっかなびっくりではあったんだけど、一応普通に口はきいてくれたし。まあ返事もしてくれたし。ただ、返事が質問とほとんど無関係なのには困ったけど。でも、何をきいても機嫌良く応じてくれたんだけど、二回ほど怒鳴りつけられたのが、動物のことを知らなかったとき。それ以外だったら、怒らせようとして変な質問してもちっとも怒んなかったのね。最初は確か、フェネック（サバクギツネ）のエサを知らなかった時。もう一回は、レムール（メガネザル）ってのが何だか知らなかった時。「お嬢ちゃん！ そのくらいのことは勉強しとくもんじゃよ！」だもん。

山形 そのバロウズが他人の文を持ってきて、カットアップしたりしますよね。それはたとえば、新しいことばのつながりを作り出す、とか、あるいは他の文のイメージが、ホログラフィ的に数語の中に押し込められて、新しい文に入りこんでくるような、そんな効果を意図してのことですが、あなたの場合、他人の文を持ってくるといのは何なんでしょう？

KA バロウズのあれには、ことばとイメージの他に政治の面があると思う。テキストの中にある権力関係。あたしがバロウズをすごいと思うのは、政治とことばの出会いを取り上げてたからで、それとたぶん唯一のコンセプトアーティストである点。特に初期のバロウズはそうでしょう。かれの『第三の精神』があたしの教科書だった。

それで、なんだっけ。他人の文を使うって話か。たとえば男ってのがどんなものか興味があったら、男が書いた男であることに関する文をいくつかとってきて、それを組み合わせるってことがあるな。そうすると、そういう文に隠された、マチスモなり何なりの要素が浮き彫りにされたりするわけ。さっきの、サドを使ってのエディプス神話ってのみたいに。一時「アッカーは女を犠牲者としてばかり書く！」とかフェミニストたちに罵倒されたけど、それもあたしの使ったテキストのそういった部分が露呈しただけで、あたしがそういう意図を持っているわけじゃないってことね。遊びもあるし、結局のところ、それがあたしの書き方だ、と言うしかないんだけど、でも力

点は変わってきてるし、それは作品毎にはっきりあらわれてると思う。『血みどろ』と『アホだら』では明らかにちがってて、『血みどろ』ではいろんな文を、積み木みたいに並べては崩すのが面白かったんだけど『アホだら帝国』はそのレベルで遊んでるだけじゃなくて、それをもっと刈り込んで、プリミティブな叙述がもっと前面に出るようになってる。何が起きるのかもわからず、自分がだれかもわからず、でもひたすら前に進むような叙述。いわば、驚きの世界。センス・オブ・ワンダーだな。神話の叙述、特にギリシャ神話の叙述ってのはそういうもの。いまは創り出すように興味があるんだ。

山形　じゃあ、次の作品は？

KA　次のは『アイデンティティ追悼』。『アホだら帝国』での叙述が、さらに前面に出てくる。テーマは恋愛という神話。

このインタビュー(というか、単なる顔合わせの雑談だったのだが)のセッティングをしていただいた梅沢葉子氏には感謝したい。ありがとう。この時の作者との約束通り、一応部分毎の雰囲気はそれなりに訳しわけられてると思う。敢えて断るまでもなく、『ニューロマンサー』部分については、故黒丸尚氏の訳をパクらせていただいた。

タイトルにはさして意味はない。単なる思いつきである。訳の遅れのため、キャシー・アッカー邦訳一番乗りになり損ねたのは、山形の不徳と致すところ。一番乗りを果たした渡辺佐智江氏には、訳に関するコメントをいろいろいただき、お世話になった。この場を借りて感謝したい。ありがとう。彼女の『血みどろ』訳にだけは負けてなるものか、というのが、今回の翻訳を進める上でのぼくの最大の推進力となっている。その意味で、共訳者として久霧亜子の協力を得られたのは幸運だった。彼女の参加によって、男には得難い女性的な機微が訳にも織り込まれたのではないか。分担などは、自ずと明らかだろう。

本書は Kathy Acker *Empire of the Senseless* (Grove Press, 1988, New York) の全訳である。翻訳環境としては、J-3100GT+VZ Editor ver.1.57+WXII+ver.2.51 を使用、辞書は『リーダーズ英和辞典』(松田徳一郎監修、研究者、1984)、『新英和大辞典』第

五版（小稲義男他編、研究者、1980）を中心に手当たり次第使用した。

本書の編集は、黒田一郎氏が担当された。次の『アイデンティティ追悼』でもよろしく

平成五年六月

品川にて

山形浩生^{*1}

^{*1} hiyori13@alum.mit.edu